

Linux From Scratch

Version 11.2-systemd

2022/09/01 公開

製作： Gerard Beekmans

編集総括： Bruce Dubbs

編集： Douglas R. Reno

編集： DJ Lucas

日本語訳： 松山 道夫

Linux From Scratch: Version 11.2-systemd: 2022/09/01 公開

：製作： Gerard Beekmans, 編集総括： Bruce Dubbs, 編集： Douglas R. Reno, 編集： DJ Lucas, 、 日本語訳： 松

山道夫

製作著作 © 1999-2022 Gerard Beekmans

Copyright © 1999-2022, Gerard Beekmans

All rights reserved.

本書は クリエイティブコモンズライセンス に従います。

本書のインストール手順のコマンドを抜き出したものは MIT ライセンス に従ってください。

Linux® は Linus Torvalds の登録商標です。

目次

序文	vii
i. はしがき	vii
ii. 対象読者	vii
iii. LFS が対象とする CPU アーキテクチャー	viii
iv. 必要な知識	viii
v. LFS と各種標準	ix
vi. 各パッケージを用いる理由	x
vii. 本書の表記	xv
viii. 本書の構成	xvi
ix. 正誤情報とセキュリティアドバイス	xvi
x. 日本語訳について	xvi
I. はじめに	1
1. はじめに	2
1.1. LFS をどうやって作るか	2
1.2. 前版からの変更点	2
1.3. 変更履歴	3
1.4. 変更履歴（日本語版）	6
1.5. 情報源	8
1.6. ヘルプ	8
2. ホストシステムの準備	10
2.1. はじめに	11
2.2. ホストシステム要件	11
2.3. 作業段階ごとの LFS 構築	13
2.4. 新しいパーティションの生成	14
2.5. ファイルシステムの生成	15
2.6. 変数 \$LFS の設定	16
2.7. 新しいパーティションのマウント	17
3. パッケージとパッチ	18
3.1. はじめに	18
3.2. 全パッケージ	20
3.3. 必要なパッチ	27
4. 準備作業の仕上げ	28
4.1. はじめに	28
4.2. LFS ファイルシステムの限定的なディレクトリレイアウトの生成	28
4.3. LFS ユーザーの追加	28
4.4. 環境設定	29
4.5. SBU 値について	31
4.6. テストスイートについて	31
III. LFS クロスチェーンと一時的ツールの構築	32
重要な準備事項	xxxiii
i. はじめに	xxxiii
ii. ツールチェーンの技術的情報	xxxiii
iii. 全般的なコンパイル手順	xxxvii
5. クロスツールチェーンの構築	39
5.1. はじめに	39
5.2. Binutils-2.39 - 1回め	40
5.3. GCC-12.2.0 - 1回め	42
5.4. Linux-5.19.2 API ヘッダー	44
5.5. Glibc-2.36	45
5.6. GCC-12.2.0 から取り出した libstdc++	48
6. クロスコンパイルによる一時的ツール	49
6.1. はじめに	49
6.2. M4-1.4.19	50
6.3. Ncurses-6.3	51
6.4. Bash-5.1.16	53
6.5. Coreutils-9.1	54
6.6. Diffutils-3.8	55

6.7. File-5.42	56
6.8. Findutils-4.9.0	57
6.9. Gawk-5.1.1	58
6.10. Grep-3.7	59
6.11. Gzip-1.12	60
6.12. Make-4.3	61
6.13. Patch-2.7.6	62
6.14. Sed-4.8	63
6.15. Tar-1.34	64
6.16. Xz-5.2.6	65
6.17. Binutils-2.39 - 2回め	66
6.18. GCC-12.2.0 - 2回め	67
7. chroot への移行と一時的ツールの追加ビルド	69
7.1. はじめに	69
7.2. 所有者の変更	69
7.3. 仮想カーネルファイルシステムの準備	69
7.4. Chroot 環境への移行	70
7.5. ディレクトリの生成	70
7.6. 重要なファイルとシンボリックリンクの生成	71
7.7. Gettext-0.21	74
7.8. Bison-3.8.2	75
7.9. Perl-5.36.0	76
7.10. Python-3.10.6	77
7.11. Texinfo-6.8	78
7.12. Util-linux-2.38.1	79
7.13. 一時的システムのクリーンアップと保存	80
IV. LFSシステムの構築	82
8. 基本的なソフトウェアのインストール	83
8.1. はじめに	83
8.2. パッケージ管理	83
8.3. Man-pages-5.13	88
8.4. Iana-Etc-20220812	89
8.5. Glibc-2.36	90
8.6. Zlib-1.2.12	97
8.7. Bzip2-1.0.8	98
8.8. Xz-5.2.6	100
8.9. Zstd-1.5.2	102
8.10. File-5.42	103
8.11. Readline-8.1.2	104
8.12. M4-1.4.19	105
8.13. Bc-6.0.1	106
8.14. Flex-2.6.4	107
8.15. Tcl-8.6.12	108
8.16. Expect-5.45.4	110
8.17. DejaGNU-1.6.3	111
8.18. Binutils-2.39	112
8.19. GMP-6.2.1	115
8.20. MPFR-4.1.0	117
8.21. MPC-1.2.1	118
8.22. Attr-2.5.1	119
8.23. Acl-2.3.1	120
8.24. Libcap-2.65	121
8.25. Shadow-4.12.2	122
8.26. GCC-12.2.0	126
8.27. Pkg-config-0.29.2	130
8.28. Ncurses-6.3	131
8.29. Sed-4.8	134
8.30. Psmisc-23.5	135
8.31. Gettext-0.21	136
8.32. Bison-3.8.2	138
8.33. Grep-3.7	139

8.34.	Bash-5.1.16	140
8.35.	Libtool-2.4.7	141
8.36.	GDBM-1.23	142
8.37.	Gperf-3.1	143
8.38.	Expat-2.4.8	144
8.39.	Inetutils-2.3	145
8.40.	Less-590	147
8.41.	Perl-5.36.0	148
8.42.	XML::Parser-2.46	150
8.43.	Intltool-0.51.0	151
8.44.	Autoconf-2.71	152
8.45.	Automake-1.16.5	153
8.46.	OpenSSL-3.0.5	154
8.47.	Kmod-30	156
8.48.	Elfutils-0.187 から取り出した libelf	158
8.49.	Libffi-3.4.2	159
8.50.	Python-3.10.6	160
8.51.	Wheel-0.37.1	162
8.52.	Ninja-1.11.0	163
8.53.	Meson-0.63.1	164
8.54.	Coreutils-9.1	165
8.55.	Check-0.15.2	169
8.56.	Diffutils-3.8	170
8.57.	Gawk-5.1.1	171
8.58.	Findutils-4.9.0	172
8.59.	Groff-1.22.4	173
8.60.	GRUB-2.06	175
8.61.	Gzip-1.12	177
8.62.	IPRoute2-5.19.0	178
8.63.	Kbd-2.5.1	180
8.64.	Libpipeline-1.5.6	182
8.65.	Make-4.3	183
8.66.	Patch-2.7.6	184
8.67.	Tar-1.34	185
8.68.	Texinfo-6.8	186
8.69.	Vim-9.0.0228	188
8.70.	MarkupSafe-2.1.1	191
8.71.	Jinja2-3.1.2	192
8.72.	Systemd-251	193
8.73.	D-Bus-1.14.0	197
8.74.	Man-DB-2.10.2	199
8.75.	Procps-ng-4.0.0	201
8.76.	Util-linux-2.38.1	203
8.77.	E2fsprogs-1.46.5	208
8.78.	デバッグシンボルについて	211
8.79.	ストリップ	211
8.80.	仕切り直し	213
9.	システム設定	214
9.1.	はじめに	214
9.2.	全般的なネットワークの設定	214
9.3.	デバイスとモジュールの扱いについて	217
9.4.	デバイスの管理	220
9.5.	システムクロックの設定	221
9.6.	Linux コンソールの設定	222
9.7.	システムロケールの設定	223
9.8.	/etc/inputrc ファイルの生成	224
9.9.	/etc/shells ファイルの生成	225
9.10.	Systemd の利用と設定	226
10.	LFS システムのブート設定	229
10.1.	はじめに	229
10.2.	/etc/fstab ファイルの生成	229

10.3. Linux-5.19.2	231
10.4. GRUB を用いたブートプロセスの設定	236
11. 作業終了	239
11.1. 作業終了	239
11.2. ユーザー登録	239
11.3. システムの再起動	239
11.4. 今度は何?	240
V. 付録	242
A. 略語と用語	243
B. 謝辞	245
C. パッケージの依存関係	247
D. LFS ライセンス	259
D.1. クリエイティブコモンズライセンス	259
D.2. MIT ライセンス (The MIT License)	262
項目別もくじ	263

序文

はしがき

私が Linux について学び始め理解するようになったのは 1998 年頃からです。Linux ディストリビューションのインストールを行ったのはその時が初めてです。そして即座に Linux 全般の考え方や原理について興味を抱くようになりました。

何かの作業を完成させるには多くの方法があるものです。同じことは Linux ディストリビューションについても言えます。この数年の間に数多くのディストリビューションが登場しました。あるものは今も存在し、あるものは他のものへと形を変え、そしてあるものは記憶の彼方へ追いやられたりもしました。それぞれが利用者の求めに応じて、さまざまに異なる形でシステムを実現してきたわけです。最終ゴールが同じものなのに、それを実現する方法はたくさんあるものです。したがって私は一つのディストリビューションにとらわれることが不要だと思い始めました。Linux が登場する以前であれば、オペレーティングシステムに何か問題があったとしても、他に選択肢はなくそのオペレーティングシステムで満足する以外にありませんでした。それはそういうものであって、好むと好まざるは関係がなかったのです。それが Linux になって ”選ぶ” という考え方が出てきました。何かが気に入らなかつたら、いくらでも変えたら良いし、そうすることがむしろ当たり前となつたのです。

数多くのディストリビューションを試してみましたが、これという 1 つに決定できるものはありませんでした。個々のディストリビューションは優れたもので、それぞれを見てみれば正しいものです。ただこれは正しいとか間違っているとかの問題ではなく、個人的な趣味の問題へと変化しています。こうしたさまざまな状況を通じて明らかになってきたのは、私にとって完璧なシステムは 1 つもないということです。そして私は自分自身の Linux を作り出して、自分の好みを満足させるものを目指しました。

本当に自分自身のシステムを作り出すため、私はすべてをソースコードからコンパイルすることを目指し、コンパイル済のバイナリパッケージは使わないことにしました。この「完璧な」Linux システムは、他のシステムが持つ弱点を克服し、逆にすべての強力さを合わせ持つものです。当初は気の遠くなる思いがしていましたが、そのアイデアは今も持ち続けています。

パッケージが相互に依存している状況やコンパイル時にエラーが発生するなどを順に整理していく中で、私はカスタムメイドの Linux を作り出したのです。この Linux は今日ある他の Linux と比べても、十分な機能を有し十分に扱いやすいものとなっています。これは私自身が作り出したものです。いろいろなものを自分で組み立てていくのは楽しいものです。さらに個々のソフトウェアまでも自分で作り出せれば、もっと楽しいものになるのでしょうか、それは次の目標とします。

私の求める目標や作業経験を他の Linux コミュニティの方々とも共有する中で、私の Linux への挑戦は絶えることなく続いていることを実感しています。このようなカスタムメイドの Linux システムを作り出せば、独自の仕様や要求を満たすことができるのももちろんですが、さらにはプログラマーやシステム管理者の Linux 知識を引き伸ばす絶好の機会となります。壮大なこの意欲こそが Linux From Scratch プロジェクト誕生の理由です。

Linux From Scratch ブックは関連プロジェクトの中心に位置するものです。皆さんご自身のシステムを構築するために必要な基礎的な手順を提供します。本書が示すのは正常動作するシステム作りのための雛形となる手順ですので、皆さんのが望んでいる形を作り出すために手順を変えていくことは自由です。それこそ、本プロジェクトの重要な特徴でもあります。そうしたとしても手順を踏み外すものではありません。我々は皆さんが旅に挑戦することを応援します。

あなたの LFS システム作りが素晴らしいひとときとなりますように。そしてあなた自身のシステムを持つ楽しみとなりますように。

--

Gerard Beekmans
gerard@linuxfromscratch.org

対象読者

本書を読む理由はさまざまにあると思いますが、よく挙がってくる質問として以下があります。「既にある Linux をダウンロードしてインストールすれば良いのに、どうして苦労してまで手作業で Linux を構築しようとするのか。」

本プロジェクトを提供する最大の理由は Linux システムがどのようにして動作しているのか、これを学ぶためのお手伝いをすることです。LFS システムを構築してみれば、さまざまなものが連携し依存しながら動作している様子を知ることができます。こうした経験をした人であれば Linux システムを自分の望む形に作りかえる手法も身につけることができます。

LFS の重要な利点として、他の Linux システムに依存することなく、システムをより適切に制御できる点が挙げられます。LFS システムではあなたが運転台に立って、システムのあらゆる側面への指示を下していきます。

さらに非常にコンパクトな Linux システムを作る方法も身につけられます。通常の Linux ディストリビューションを用いる場合、多くのプログラムをインストールすることになりますが、たいていのプログラムは使わないものですし、その内容もよく分からぬものです。それらのプログラムはハードウェアリソースを無駄に占有することになります。今日のハードドライブや CPU のことを考えたら、リソース消費は大したことはないと思うかもしれません。しかし問題がなくなったとしても、サイズの制限だけは気にかける必要があることでしょう。例えばブータブル CD、USB スティック、組み込みシステムなどのことを思い浮かべてください。そういうしたものに対して LFS は有用なものとなるでしょう。

カスタマイズした Linux システムを構築するもう一つの利点として、セキュリティがあります。ソースコードからコンパイルしてシステムを構築するということは、あらゆることを制御する権限を有することになり、セキュリティパッチは望みどおりに適用できます。他の人がセキュリティホールを修正しバイナリパッケージを提供するのを待つ必要がなくなるということです。他の人がパッチとバイナリパッケージを提供してくれたとしても、それが本当に正しく構築され、問題を解決してくれているかどうかは、調べてみなければ分からないわけですから。

Linux From Scratch の最終目標は、実用的で完全で、基盤となるシステムを構築することです。Linux システムを一から作り出すつもりの方は、本書から得られるものはないかもしれません。

LFS を構築する理由はさまざまですから、すべてを列記することはできません。学習こそ、理由を突き詰める最大最良の手段です。LFS 構築作業の経験を積むことによって、情報や知識を通じてもたらされる意義が十二分に理解できるはずです。

LFS が対象とする CPU アーキテクチャー

LFS が対象としている CPU アーキテクチャーは AMD/インテル x86 CPU (32ビット) と x86_64 CPU (64ビット) です。Power PC や ARM については、本書の手順を多少修正することで動作することが確認されています。これらの CPU を利用したシステムをビルトする場合は、この後に示す諸条件を満たす必要がありますが、まずはそのアーキテクチャーをターゲットとする、LFS システムそのものや Ubuntu、Red Hat/Fedora、SuSE などの Linux システムが必要です。ホストが 64 ビット AMD/インテルによるシステムであったとしても 32 ビットシステムは問題なくインストールできます。

LFS の構築において 64 ビットシステムを用いることは 32 ビットシステムを用いた場合に比べて大きな効果はありません。たとえば Core i7-4790 CPU 上において、4 コアを使って試しに LFS-9.1 をビルトしてみたところ、以下のような情報が得られました。

アーキテクチャー	ビルト時間	ビルトサイズ
32 ビット	239.9 分	3.6 GB
64 ビット	233.2 分	4.4 GB

ご存知かと思いますが、同一ハードウェア上にて 64 ビットによりビルトを行っても、32 ビットのときのビルトに比べて 3% 早くなるだけで 22% は大きなものになります。仮に LFS を使って LAMP サーバーやファイアーウォールを実現しようとする場合、32 ビット CPU を用いても十分機能するかもしれません。一方 BLFS にあるパッケージの中には、ビルト時や実行時に 4GB 以上の RAM を必要としているものもあります。このため LFS をデスクトップ環境に利用するなら、64 ビットシステムにおいてビルトすることをお勧めします。

LFS の手順に従って作り出す 64 ビットシステムは、「純粋な」64 ビットシステムと言えます。つまりそのシステムは 64 ビット実行モジュールのみをサポートするということです。「複数のライブラリ」によるシステムをビルトするのなら、多くのアプリケーションを二度ビルトしなければなりません。一度は 32 ビット用であり、一度は 64 ビット用です。本書ではこの点を直接サポートしていません。この理由は、素直な Linux ベースシステムを構築するという LFS の教育的な目的とは合致しないからです。LFS/BLFS 編集者の中に、マルチライブラリを行う LFS フォークを構築している方もいます。これは <https://www.linuxfromscratch.org/~thomas/multilib/index.html> からアクセスすることができます。ただしこれは応用的なトピックです。

必要な知識

LFS システムの構築作業は決して単純なものではありません。ある程度の Unix システム管理の知識が必要です。問題を解決したり、説明されているコマンドを正しく実行することが求められます。ファイルやディレクトリのコピー、それらの表示確認、カレントディレクトリの変更、といったことは最低でも知っているなければなりません。さらに Linux の各種ソフトウェアを使ったりインストールしたりする知識も必要です。

LFS ブックでは、最低でも そのようなスキルがあることを前提としていますので、数多くの LFS サポートフォーラムは、ひょっとすると役に立たないかもしれません。フォーラムにおいて基本的な知識を尋ねたとしたら、誰も回答してくれないのでしょう。そうするよりも LFS に取り掛かる前に以下のよう情報をよく読んでください。

LFS システムの構築作業に入る前に、以下を読むことをお勧めします。

- ・ ソフトウェア構築のハウツー (Software-Building-HOWTO) <http://www.tldp.org/HOWTO/Software-Building-HOWTO.html>

これは Linux 上において「一般的な」 Unix ソフトウェアを構築してインストールする方法を総合的に説明しています。だいぶ前に書かれたものですが、ソフトウェアのビルドとインストールを行うために必要となる基本的な方法が程よくまとめられています。

- ソースコードからのインストール入門ガイド (Beginner's Guide to Installing from Source) <http://moi.vonos.net/linux/beginners-installing-from-source/>

このガイドは、ソフトウェアをソースコードからビルドするために必要な基本的スキルや技術をほど良くまとめています。

LFS と各種標準

LFS の構成は出来る限り Linux の各種標準に従うようにしています。主な標準は以下のものです。

- POSIX.1-2008
- Filesystem Hierarchy Standard (FHS) Version 3.0
- Linux Standard Base (LSB) Version 5.0 (2015)

LSB はさらに以下の 4 つの標準から構成されます。コア (Core)、デスクトップ (Desktop)、ランタイム言語 (Runtime Languages)、画像処理 (Imaging) です。また一般的な要求事項に加えて、アーキテクチャーに固有の要求事項もあります。Gtk3 やグラフィックスという二項目に関しての試用も含んでいます。LFS では前節にて示したように、各アーキテクチャーに適合することを目指します。



注記

LSB の要求に対しては異論のある方も多いでしょう。LSB を定義するのは、私有ソフトウェア (proprietary software) をインストールした場合に、要求事項を満たしたシステム上にて問題なく動作することを目指すためです。LFS はソースコードから構築するシステムですから、どのパッケージを利用するかをユーザー自身が完全に制御できます。また LSB にて要求されているパッケージであっても、インストールしない選択をとることもできます。

LFS の構築にあたっては LSB に適合していることを確認するテスト (certifications tests) をクリアするように構築することも可能です。ただし LFS の範囲外にあるパッケージ類を追加しなければ実現できません。そのような追加パッケージ類については、おおむね BLFS にて導入手順を説明しています。

LFS 提供のパッケージで LSB 要求に従うもの

LSB コア:	Bash, Bc, Binutils, Coreutils, Diffutils, File, Findutils, Gawk, Grep, Gzip, M4, Man-DB, Ncurses, Procps, Psmisc, Sed, Shadow, Tar, Util-linux, Zlib
LSB デスクトップ:	なし
LSB ランタイム言語:	Perl, Python
LSB 画像処理:	なし
LSB Gtk3、LSB グラフィックス (試用):	なし

BLFS 提供のパッケージで LSB 要求に従うもの

LSB コア:	At, Batch (At の一部), Cpio, Ed, Fcrontab, LSB-Tools, NSPR, NSS, PAM, Pax, Sendmail (または Postfix または Exim), time
LSB デスクトップ:	Alsa, ATK, Cairo, Desktop-file-utils, Freetype, Fontconfig, Gdk-pixbuf, Glib2, GTK+2, Icon-naming-utils, Libjpeg-turbo, Libpng, Libtiff, Libxml2, MesaLib, Pango, Qt4, Xdg-utils, Xorg
LSB ランタイム言語:	Libxml2, Libxslt
LSB 画像処理:	CUPS, Cups-filters, Ghostscript, SANE
LSB Gtk3、LSB グラフィックス (試用):	GTK+3

LFS, BLFS で提供しないパッケージで LSB 要求に従うもの

LSB コア:	なし
---------	----

LSB デスクトップ:	Qt4 (Qt5 が提供されている)
LSB ランタイム言語:	なし
LSB 画像処理:	なし
LSB Gtk3、 LSB グラフィックス (試用):	なし

各パッケージを用いる理由

既に説明しているように LFS が目指すのは、完成した形での実用可能な基盤システムを構築することです。 LFS に含まれるパッケージ群は、パッケージの個々を構築していくために必要となるものばかりです。 そこからは最小限の基盤となるシステムを作り出します。 そしてユーザーの望みに応じて、より完璧なシステムへと拡張していくものとなります。 LFS は極小システムを意味するわけではありません。 厳密には必要なないパッケージであっても、重要なものとして含んでいるものもあります。 以下に示す一覧は、本書内の各パッケージの採用根拠について説明するものです。

- **Acl**
このパッケージはアクセス制御リスト (Access Control Lists) を管理するツールを提供します。 これはファイルやディレクトリに対して、きめ細かく様々なアクセス権限を定義するために利用されます。
- **Attr**
このパッケージはファイルシステムオブジェクト上の拡張属性を管理するプログラムを提供します。
- **Autoconf**
このパッケージは、以下に示すようなシェルスクリプトを生成するプログラムを提供します。 つまり開発者が意図しているテンプレートに基づいて、ソースコードを自動的に設定する (configure する) ためのシェルスクリプトです。 特定のパッケージのビルド方法に変更があった場合は、パッケージ再構築を行うことになるため、その場合に本パッケージが必要となります。
- **Automake**
このパッケージは、テンプレートとなるファイルから Makefile を生成するためのプログラムを提供します。 特定のパッケージのビルド方法に変更があった場合は、パッケージ再構築を行うことになるため、その場合に本パッケージが必要となります。
- **Bash**
このパッケージは、システムとのインターフェースを実現する Bourne シェルを提供し、LSB コア要件を満たします。 他のシェルを選ばずにこれを選ぶのは、一般的に多用されていることと、基本的なシェル関数においての拡張性が高いからです。
- **Bc**
このパッケージは、任意精度 (arbitrary precision) の演算処理言語を提供します。 Linux カーネルの構築に必要となります。
- **Binutils**
このパッケージは、リンカー、アセンブラーのような、オブジェクトファイルを取り扱うプログラムを提供します。 各プログラムは LFS における他のパッケージをコンパイルするために必要となり、さらに LFS にて示される以外のパッケージでも必要となります。
- **Bison**
このパッケージは yacc (Yet Another Compiler Compiler) の GNU バージョンを提供します。 LFS において利用するプログラムの中に、これを必要とするものがあります。
- **Bzip2**
このパッケージは、ファイルの圧縮、伸張 (解凍) を行うプログラムを提供します。 これは LFS パッケージの多くを伸張 (解凍) するために必要です。
- **Check**
このパッケージは、他のプログラムに対するテストハーネス (test harness) を提供します。
- **Coreutils**
このパッケージは、ファイルやディレクトリを参照あるいは操作するための基本的なプログラムを数多く提供します。 各プログラムはコマンドラインからの実行によりファイル制御を行うために必要です。 また LFS におけるパッケージのインストールに必要となります。

- D-Bus

このパッケージはメッセージバスシステムを実装しています。これはアプリケーション間での通信手段を容易にするものです。

- DejaGNU

このパッケージは、他のプログラムをテストするフレームワークを提供します。

- Diffutils

このパッケージは、ファイルやディレクトリ間の差異を表示するプログラムを提供します。各プログラムはパッチを生成するために利用されます。したがってパッケージのビルド時に利用されることがあります。

- E2fsprogs

このパッケージは ext2, ext3, ext4 の各ファイルシステムを取り扱うユーティリティを提供します。各ファイルシステムは Linux がサポートする一般的なものであり、十分なテストが実施されているものです。

- Expat

このパッケージは比較的小規模の XML 解析ライブラリを提供します。XML-Parser Perl モジュールがこれを必要とします。

- Expect

このパッケージは、スクリプトで作られた対話型プログラムを通じて、他のプログラムとのやりとりを行うプログラムを提供します。通常は他のパッケージをテストするために利用します。

- File

このパッケージは、指定されたファイルの種類を判別するユーティリティプログラムを提供します。他のパッケージのビルドスクリプト内にてこれを必要とするものもあります。

- Findutils

このパッケージは、ファイルシステム上のファイルを検索するプログラムを提供します。これは他のパッケージにて、ビルド時のスクリプトにおいて利用されています。

- Flex

このパッケージは、テキスト内の特定パターンの認識プログラムを生成するユーティリティを提供します。これは lex (字句解析; lexical analyzer) プログラムの GNU 版です。LFS 内の他のパッケージの中にこれを必要としているものがあります。

- Gawk

このパッケージはテキストファイルを操作するプログラムを提供します。プログラムは GNU 版の awk (Aho-Weinberg-Kernighan) です。これは他のパッケージにて、ビルド時のスクリプトにおいて利用されています。

- GCC

これは GNU コンパイラーコレクションパッケージです。C コンパイラーと C++ コンパイラーを含みます。また LFS ではビルドしないコンパイラも含まれています。

- GDBM

このパッケージは GNU データベースマネージャライブラリを提供します。LFS が扱う Man-DB パッケージがこれを利用しています。

- Gettext

このパッケージは、各種パッケージが国際化を行うために利用するユーティリティやライブラリを提供します。

- Glibc

このパッケージは C ライブラリです。Linux 上のプログラムはこれがなければ動作させることができません。

- GMP

このパッケージは数値演算ライブラリを提供するもので、任意精度演算 (arbitrary precision arithmetic) についての有用な関数を含みます。これは GCC をビルドするために必要です。

- Gperf

このパッケージは、キーセットから完全なハッシュ関数を生成するプログラムを提供します。Eudev がこれを必要としています。

- Grep

このパッケージはファイル内を検索するプログラムを提供します。これは他のパッケージにて、ビルド時のスクリプトにおいて利用されています。

- Groff

このパッケージは、テキストを処理し整形するプログラムをいくつか提供します。重要なもののプログラムとして man ページを生成するものを含みます。

- GRUB

これは Grand Unified Boot Loader です。ブートローダーとして利用可能なものの中でも、これが最も柔軟性に富むものです。

- Gzip

このパッケージは、ファイルの圧縮と伸張（解凍）を行うプログラムを提供します。LFSにおいて、パッケージを伸張（解凍）するために必要です。

- Iana-etc

このパッケージは、ネットワークサービスやプロトコルに関するデータを提供します。ネットワーク機能を適切に有効なものとするために、これが必要です。

- Inetutils

このパッケージは、ネットワーク管理を行う基本的なプログラム類を提供します。

- Intltool

本パッケージはソースファイルから翻訳対象となる文字列を抽出するツールを提供します。

- IProute2

このパッケージは、IPv4、IPv6 による基本的な、あるいは拡張したネットワーク制御を行うプログラムを提供します。IPv6への対応があることから、よく使われてきたネットワークツールパッケージ（net-tools）に変わって採用されました。

- Jinja2

このパッケージは、テキストテンプレート処理を行う Python モジュールです。Systemd のビルドに必要となります。

- Kbd

このパッケージは、米国以外のキーボードに対してのキーテーブルファイルやキーボードユーティリティを提供します。また端末上のフォントも提供します。

- Kmod

このパッケージは Linux カーネルモジュールを管理するために必要なプログラムを提供します。

- Less

このパッケージはテキストファイルを表示する機能を提供するものであり、表示中にスクロールを可能とします。また Man-DB において man ページを表示する際にも利用されます。

- Libcap

このパッケージは Linux カーネルにて利用される POSIX 1003.1e 機能へのユーザー空間からのインターフェースを実装します。

- Libelf

elfutils プロジェクトでは、ELF ファイルや DWARF データに対するライブラリやツールを提供しています。他のパッケージに対して各種ユーティリティーは有用なものです。ライブラリは Linux カーネルのビルドに必要であり、デフォルトの（最も効果的な）カーネル設定にて利用されます。

- Libffi

このパッケージは、さまざまな呼出規約（calling conventions）に対しての、移植性に優れた高レベルプログラミングインターフェースを提供します。プログラムをコンパイルするその時点においては、関数に対してどのような引数が与えられるかが分からぬ場合があります。例えばインタープリターの場合、特定の関数を呼び出す際の引数の数や型は、実行時に指定されます。libffi はそういうプログラムであっても、インターパリタープログラムからコンパイルコードへのブリッジを提供します。

- Libpipeline

Libpipeline パッケージは、サブプロセスのパイプラインを柔軟にかつ容易に操作するライブラリを提供します。これは Man-DB パッケージが必要としています。

- Libtool

このパッケージは GNU の汎用的なライブラリに対してのサポートスクリプトを提供します。これは、複雑な共有ライブラリの取り扱いを単純なものとし、移植性に優れた一貫した方法を提供します。LFS パッケージのテストスイートにおいて必要となります。

- Linux Kernel

このパッケージは”オペレーティングシステム”であり GNU/Linux 環境における Linux です。

- M4

このパッケージは汎用的なテキストマクロプロセッサーであり、他のプログラムを構築するツールとして利用することができます。

- Make

このパッケージは、パッケージ構築を指示するプログラムを提供します。LFS におけるパッケージでは、ほぼすべてにおいて必要となります。

- MarkupSafe

このパッケージは、HTML/XHTML/XML 内の文字列を安全に処理するための Python モジュールです。Jinja2 がこのパッケージを必要としています。

- Man-DB

このパッケージは man ページを検索し表示するプログラムを提供します。man パッケージではなく本パッケージを採用しているのは、その方が国際化機能が優れているためです。このパッケージは man プログラムを提供しています。

- Man-pages

このパッケージは Linux の基本的な man ページを提供します。

- Meson

このパッケージは、ソフトウェアを自動的にビルドするソフトウェアツールを提供します。Meson が目指すのは、ソフトウェア開発者がビルドシステムの設定にかける時間を、できるだけ減らすことにあります。これは Systemd のビルドに必要であり、また BLFS における多くのパッケージにも必要です。

- MPC

このパッケージは複素数演算のための関数を提供します。GCC パッケージがこれを必要としています。

- MPFR

このパッケージは倍精度演算 (multiple precision) の関数を提供します。GCC パッケージがこれを必要としています。

- Ninja

このパッケージは、処理速度を重視した軽量なビルドシステムを提供します。高レベルなビルドシステムが生成したファイルを入力として、ビルド実行をできるだけ高速に行うように設計されています。このパッケージは Meson が必要としています。

- Ncurses

このパッケージは、端末に依存せず文字キャラクターを取り扱うライブラリを提供します。メニュー表示時のカーソル制御を実現する際に利用されます。LFS の他のパッケージでは、たいていはこれを必要としています。

- OpenSSL

このパッケージは暗号化に関する管理ツールやライブラリを提供します。Linux カーネルや他のパッケージに対して、暗号化機能を提供するものとして有用です。

- Patch

このパッケージは、パッチ ファイルの適用により、特定のファイルを修正したり新規生成したりするためのプログラムを提供します。パッチファイルは diff プログラムにより生成されます。LFS パッケージの中には、構築時にこれを必要とするものがあります。

- Perl

このパッケージは、ランタイムに利用されるインタープリター言語 PERL を提供します。LFS の他のパッケージでは、インストール時やテストスイートの実行時にこれを必要とするものがあります。

- Pkg-config

このパッケージは、既にインストールされたライブラリやパッケージのメタデータを取得するプログラムを提供します。

- **Procps-NG**

このパッケージは、プロセスの監視を行うプログラムを提供します。 システム管理にはこのパッケージが必要となります。 また LFS ブートスクリプトではこれを利用しています。

- **Psmisc**

このパッケージは、実行中のプロセスに関する情報を表示するプログラムを提供します。 システム管理にはこのパッケージが必要となります。

- **Python 3**

このパッケージは、ソースコードの可読性の向上を意図して開発されたインタープリター言語を提供します。

- **Readline**

このパッケージは、コマンドライン上での入力編集や履歴管理を行うライブラリを提供します。 これは Bash が利用しています。

- **Sed**

このパッケージは、テキストの編集を、テキストエディターを用いることなく可能とします。 LFS パッケージにおける configure スクリプトは、たいていこれを必要としています。

- **Shadow**

このパッケージは、セキュアな手法によりパスワード制御を行うプログラムを提供します。

- **Systemd**

このパッケージは Sysvinit の代替として、init プログラムなど数種のプログラムにより、システム起動やシステム制御を実現します。 商用ディストリビューションにおいてもよく利用されています。

- **Tar**

このパッケージは、アーカイブや圧縮機能を提供するもので LFS が扱うすべてのパッケージにて利用されています。

- **Tcl**

このパッケージはツールコマンド言語 (Tool Command Language) を提供します。 LFS が扱うパッケージにてテストスイートの実行に必要となります。

- **Texinfo**

このパッケージは Info ページに関しての入出力や変換を行うプログラムを提供します。 LFS が扱うパッケージのインストール時には、たいてい利用されます。

- **Util-linux**

このパッケージは数多くのユーティリティプログラムを提供します。 その中には、ファイルシステムやコンソール、パーティション、メッセージなどを取り扱うユーティリティがあります。

- **Wheel**

このパッケージは Python wheel パッケージング標準に基づいた標準実装の Python モジュールを提供します。

- **Vim**

このパッケージはテキストエディターを提供します。 これを採用しているのは、従来の vi エディタとの互換性があり、しかも数々の有用な機能を提供するものだからです。 テキストエディターは個人により好みはさまざまですから、もし別のエディターを利用したいなら、そちらを用いても構いません。

- **XML::Parser**

このパッケージは Expat とのインターフェースを実現する Perl モジュールです。

- **XZ Utils**

このパッケージはファイルの圧縮、伸張（解凍）を行うプログラムを提供します。 一般的に用いられるものの中では高い圧縮率を実現するものであり、特に XZ フォーマットや LZMA フォーマットの伸張（解凍）に利用されます。

- **Zlib**

このパッケージは、圧縮や解凍の機能を提供するもので、他のプログラムがこれを利用しています。

- **Zstd**

このパッケージは、一定のプログラムが利用している圧縮、伸張（解凍）ルーチンを提供します。 高圧縮率に加えて、圧縮、処理速度間のトレードオフを広範囲に提供します。

本書の表記

本書では、特定の表記を用いて分かりやすく説明を行っていきます。 ここでは Linux From Scratch ブックを通じて利用する表記例を示します。

```
./configure --prefix=/usr
```

この表記は特に説明がない限りは、そのまま入力するテキストを示しています。 またコマンドの説明を行うために用いる場合もあります。

場合によっては、1行で表現される内容を複数行に分けているものがあります。 その場合は各行の終わりにバックスラッシュ（あるいは円記号）を表記しています。

```
CC="gcc -B/usr/bin/" ./binutils-2.18/configure \
--prefix=/tools --disable-nls --disable-werror
```

バックスラッシュ（または円記号）のすぐ後ろには改行文字がきます。 そこに余計な空白文字やタブ文字があると、おかしな結果となるかもしれませんため注意してください。

```
install-info: unknown option '--dir-file=/mnt/lfs/usr/info/dir'
```

上の表記は固定幅フォントで示されており、たいていはコマンド入力の結果として出力される端末メッセージを示しています。 あるいは /etc/ld.so.conf といったファイル名を示すのに利用する場合もあります。



注記

ブラウザーの設定において、固定幅テキストに対しては適切なモノスペースフォントを用いるようにしてください。 これを設定していれば、`II` や `OO` のグリフを適切に識別できます。

Emphasis

上の表記はさまざまな意図で用いています。 特に重要な説明内容やポイントを表します。

<https://www.linuxfromscratch.org/>

この表記は LFS コミュニティ内や外部サイトへのハイパーリンクを示します。 そこには「ハウツー」やダウンロードサイトなどが含まれます。

```
cat > $LFS/etc/group << "EOF"
root:x:0:
bin:x:1:
.....
EOF
```

上の表記は設定ファイル類を生成する際に示します。 1行目のコマンドは `$LFS/etc/group` というファイルを生成することを指示しています。 そのファイルへは2行目以降 EOF が記述されるまでのテキストが output されます。 したがってこの表記は通常そのままタイプ入力します。

`<REPLACED TEXT>`

上の表記は入力するテキストを仮に表現したものです。 これをそのまま入力するものではないため、コピー、ペースト操作で貼り付けないでください。

`[OPTIONAL TEXT]`

上の表記は入力しなくてもよいオプションを示しています。

`passwd(5)`

上の表記はマニュアルページ (`man` ページ) を参照するものです。 カッコ内の数字は `man` の内部で定められている特定のセクションを表しています。 例えば `passwd` コマンドには2つのマニュアルページがあります。 LFS のインストールに従った場合、2つのマニュアルページは `/usr/share/man/man1/passwd.1` と `/usr/share/man/man5/passwd.5` に配置されます。 `passwd(5)` という表記は `/usr/share/man/man5/passwd.5` を参照することを意味します。 `man passwd` という入力に対しては「`passwd`」という語に合致する最初のマニュアルページが表示されるものであり `/usr/`

`share/man/man1/passwd.1` が表示されることになります。特定のマニュアルページを見たい場合は `man 5 passwd` といった入力を行う必要があります。マニュアルページが複数あるケースはまれですので、普通は `man <プログラム名>` と入力するだけで十分です。

本書の構成

本書は以下の部から構成されます。

第 I 部 - はじめに

第 I 部では LFS 構築作業を進めるための重要事項について説明します。また本書のさまざまな情報についても説明します。

第 II 部 - ビルド作業のための準備

第 II 部では、パーティションの生成、パッケージのダウンロード、一時的なツールのコンパイルといった、システム構築の準備作業について説明します。

第 III 部 - LFS クロスチェーンと一時的ツールの構築

第 III 部では、最終的な LFS システム構築のために必要となるツールのビルド説明を行います。

第 IV 部 - LFS システムの構築

第 IV 部では LFS システムの構築作業を順に説明していきます。そこでは全パッケージのコンパイルとインストール、ブートスクリプトの設定、カーネルのインストールを行います。出来上がる Linux システムをベースとして、他のソフトウェアを必要に応じて導入し、このシステムを拡張していくことができます。本書の終わりには、インストール対象のプログラム、ライブラリ、あるいは重要なファイル類についてのさくいんも示します。

第 V 部 - 付録

第 V 部では、本書における略語や用語、謝辞、パッケージの依存関係、LFS ブートスクリプトの一覧、本書配布のライセンス、パッケージ、プログラム、ライブラリ、スクリプトのさくいんを示します。

正誤情報とセキュリティアドバイス

LFS システムを構築するためのソフトウェアは日々拡張され更新されています。LFS ブックがリリースされた後に、セキュリティフィックスやバグフィックスが公開されているかもしれません。本版にて説明するパッケージや作業手順に対して、セキュリティフィックスやバグフィックス等が必要かどうか、ビルド作業を行う前に <https://www.linuxfromscratch.org/lfs/errata/11.2-systemd/> を確認してください。そして LFS ビルド作業を進めながら、対応する節においての変更を確認し適用してください。

上に加えて Linux From Scratch 編集者は、本ブックのリリース後に発見されたセキュリティぜい弱性のリストを管理しています。ビルド作業に入る前には <https://www.linuxfromscratch.org/lfs/advisories/> にアクセスして、重大なセキュリティぜい弱性がないかどうかを事前に確認してください。LFS のビルド作業を進めていく上では、必ずセキュリティアドバイスを確認し、セキュリティぜい弱性を解消する修正手順があれば、それに従ってください。

日本語訳について



日本語訳情報

本節はオリジナルの LFS ブックにはないものです。日本語訳に関する情報を示すために設けました。

はじめに

本書は LFS ブック 11.2-systemd の日本語版 20220901 です。オリジナルの LFS ブックと同様に DocBook を用いて構築しています。

日本語版の提供について

日本語版 LFS ブックは OSDN.jp 内に開発の場を設け <http://lfsbookja.osdn.jp/> にて「LFS ブック日本語版」のプロジェクト名で提供するものです。

HTML ファイル類や日本語化のために構築しているソース類について、あるいはそれらの取り扱い（ライセンス）については上記サイトを参照してください。

日本語版の生成について

日本語版 LFS ブックの生成は、以下のようにして行っています。

- そもそも LFS ブックのソースは、LFS のサイト <https://www.linuxfromscratch.org/> において、Stable 版として公開されていると同時に Subversion により、日々開発更新されているソース（XMLソース）が公開されています。日本語版はその XML ソースに基づいて作成しています。
- XML ソースは DocBook XML DTD の書式に従ったファイル形式です。日本語版では、ソースに記述された原文を日本語訳文に変えて、同様の処理により生成しています。ソース内に含まれる `INSTALL` ファイルには、処理に必要となるツール類の詳細が示されています。これらのツール類はすべて BLFS にてインストールする対象となっていますので、興味のある方は参照してください。
- 日本語訳にあたっては、原文にて「地の文」として表現されている文章を日本語化しています。逆に各手順におけるコマンド説明（四角の枠囲いで示されている箇所）は、日本語化の対象とはしていません。コマンド類や設定記述が英単語で行われるわけですから、これは当たり前のことです。ただ厳密に言えば、その四角の枠囲いの中でシェルのコメント書きが含まれる場合があり、これは日本語化せずそのまま表記しています。

日本語版における注意点

日本語版 LFS ブックを参照頂く際には、以下の点に注意してください。

- 本ページの冒頭にあるように、原文にはない記述は「日本語訳情報」として枠囲い文章で示することにします。
- 訳者は Linux に関する知識を隅から隅まで熟知しているわけではありません。したがってパッケージのことや Linux の仕組みに関して説明されている原文の、真の意味が捉えられず、原文だけを頼りに訳出している箇所もあります。もし誤訳、不十分な訳出、意味不明な箇所に気づかれた場合は、是非ご指摘、ご教示をお願いしたいと思います。
- 日本語訳にて表記しているカタカナ用語について触れておきます。特に語末に長音符号がつく（あるいはつかない）用語です。このことに関しては訳者なりに捉えているところがあるのですが、詳述は省略します。例えば「ユーザー（user）」という用語は語末に長音符号をつけるべきと考えます。一方「コンピュータ（computer）」という用語は、情報関連その他の分野では長音符号をつけない慣用があるものの、昨今これをつけるような流れもあり情勢が変わりつつあります。このように用語表記については、大いに “ゆれ” があるため、訳者なりに取り決めて表記することにしています。なじみの表記とは若干異なるものが現れるかもしれません、ご了承いただきたいと思います。

第I部 はじめに

第1章 はじめに

1.1. LFS をどうやって作るか

LFS システムは、既にインストールされている Linux ディストリビューション (Debian, OpenMandriva, Fedora, openSUSE など) を利用して構築していきます。この既存の Linux システム（ホスト）は、LFS 構築のためにさまざまなプログラム類を利用する基盤となります。プログラム類とはコンパイラ、リンクマー、シェルなどです。したがってそのディストリビューションのインストール時には「開発 (development)」オプションを選択し、それらのプログラム類が利用できるようにしておく必要があります。

コンピューター内にインストールされているディストリビューションを利用するのではなく、他に提供されている LiveCD を利用することもできます。

第 2 章では、新しく構築する Linux のためのパーティションとファイルシステムの生成方法について説明します。そのパーティション上にて LFS システムをコンパイルしインストールします。第 3 章では LFS 構築に必要となるパッケージとパッチについて説明します。これらをダウンロードして新たなファイルシステム内に保存します。第 4 章は作業環境の準備について述べています。この章では重要な説明を行っていますので、第 5 章以降に進む前に是非注意して読んでください。

第 5 章では初期のツールチェーン (binutils, gcc, glibc) を、クロスコンパイルによりインストールします。これによりこの新たなツールをホストシステムから切り離します。

第 6 章では、上で作ったクロスツールチェーンを利用して、基本的ユーティリティのクロスコンパイル方法を示します。

第 7 章では "chroot" 環境に入ります。そして今作り上げたビルドツールを使って、最終的なシステムをビルドしテストするために必要となる残りのツールをビルドします。

ホストシステムのツール類から新しいシステムを切り離していくこの手順は、やり過ぎのように見えるかもしれません。ツールチェーンの技術的情報にて詳細に説明しているので参照してください。

第 8 章において完全な LFS システムが出来上がります。chroot を使うもう一つのメリットは、LFS 構築作業にあたって引き続きホストシステムを利用できることです。パッケージをコンパイルしている最中には、通常どおり別の作業を行うことができます。

インストールの仕上げとして第 9 章にてベースシステムの設定を行い、第 10 章にてカーネルとブートローダーを設定します。第 11 章では LFS システム構築経験を踏まえて、その先に進むための情報を示します。本書に示す作業をすべて実施すれば、新たな LFS システムを起動することが出来ます。

上はごく簡単な説明にすぎません。各作業の詳細はこれ以降の章やパッケージの説明を参照してください。内容が難しいと思っていても、それは徐々に理解していくはずです。読者の皆さんには、是非 LFS アドベンチャーに挑んで頂きたいと思います。

1.2. 前版からの変更点

以下に示すのは前版から変更されているパッケージです。

アップグレード:

-
- Bc-6.0.1
- Binutils-2.39
- Coreutils-9.1
- D-Bus-1.14.0
- E2fsprogs-1.46.5
- Expat-2.4.8
- File-5.42
- GCC-12.2.0
- Glibc-2.36
- Gzip-1.12
- IANA-Etc-20220812

- Inetutils-2.3
- IPRoute2-5.19.0
- Jinja2-3.1.2
- Kbd-2.5.1
- Kmod-30
- Libcap-2.65
- Libelf-0.187 (from elfutils)
- Libpipeline-1.5.6
- Libtool-2.4.7
- Linux-5.19.2
- Man-DB-2.10.2
- MarkupSafe-2.1.1
- Meson-0.63.1
- Ninja-1.11.0
- OpenSSL-3.0.5
- Perl-5.36.0
- Procps-ng-4.0.0
- Psmisc-23.5
- Python-3.10.6
- Shadow-4.12.2
- Systemd-251
- Tzdata-2022c
- Util-Linux-2.38.1
- Vim-9.0.0228
- XZ-Utils-5.2.6
- Zlib-1.2.12

追加:

-
- Wheel-0.37.1
- zstd-1.5.2-upstream_fixes-1.patch

削除:

-
- perl-5.34.0-upstream_fixes-1.patch
- systemd-250-kernel_5.17_fixes-1.patch
- systemd-250-upstream_fixes-1.patch

1.3. 変更履歴

本書は Linux From Scratch ブック、バージョン 11.2-systemd、2022/09/01 公開です。本書が 6ヶ月以上更新されていなければ、より新しい版が公開されているはずです。以下のミラーサイトを確認してください。<https://www.linuxfromscratch.org/mirrors.html>

以下は前版からの変更点を示したものです。

変更履歴

- 2022-09-01
 - [bdubbs] - LFS-11.2 リリース

- 2022-08-20
 - [bdubbs] - vim-9.0.0228 へのアップデート。 #4500 にて言及。
 - [bdubbs] - iana-etc-20220812 へのアップデート。 #5006 にて言及。
 - [bdubbs] - gcc-12.2.0 へのアップデート。 #5098 を Fix に。
 - [bdubbs] - linux-5.19.2 (セキュリティフィックス) へのアップデート。 #5097 を Fix に。
 - [bdubbs] - tzdata-2022c へのアップデート。 #5096 を Fix に。
 - [bdubbs] - shadow-4.12.2 (セキュリティフィックス) へのアップデート。 #5095 を Fix に。
 - [bdubbs] - meson-0.63.1 へのアップデート。 #5094 を Fix に。
 - [bdubbs] - xz-5.2.6 へのアップデート。 #5093 を Fix に。
- 2022-08-18
 - [xry111] - 5 章 6 章において libtool アーカイブファイル (.la) を削除。 クロスコンパイルにとっては邪魔になるため。
- 2022-08-11
 - [bdubbs] - vim-9.0.0192 へのアップデート。 #4500 において言及。
 - [bdubbs] - iana-etc-20220803 へのアップデート。 #5006 において言及。
 - [bdubbs] - tzdata-2022b へのアップデート。 #5092 を Fix に。
 - [bdubbs] - iproute2-5.19.0 へのアップデート。 #5086 を Fix に。
 - [bdubbs] - linux-5.19.1 へのアップデート。 #5085 を Fix に。
 - [bdubbs] - bc-6.0.1 へのアップデート。 #5090 を Fix に。
- 2022-08-06
 - [bdubbs] - binutils-2.39 へのアップデート。 #5089 を Fix に。
 - [bdubbs] - util-linux-2.38.1 へのアップデート。 #5088 を Fix に。
 - [bdubbs] - Python3-3.10.6 へのアップデート。 #5087 を Fix に。
 - [bdubbs] - glibc-2.36 へのアップデート。 #5084 を Fix に。
- 2022-07-24
 - [bdubbs] - linux-5.18.14 へのアップデート。 (RETBleed せい弱性の影響があるマシン向けのセキュリティフィックス) #5082 を Fix に。
 - [bdubbs] - libcap-2.65 へのアップデート。 #5083 を Fix に。
- 2022-07-15
 - [bdubbs] - meson-0.63.0 へのアップデート。 #5079 を Fix に。
 - [bdubbs] - kmod-30 へのアップデート。 #5077 を Fix に。
 - [bdubbs] - inetutils-2.3 へのアップデート。 #5081 を Fix に。
 - [bdubbs] - linux-5.18.11 へのアップデート。 #5078 を Fix に。
 - [bdubbs] - OpenSSL-3.0.5 へのアップデート。 #5080 を Fix に。
- 2022-07-01
 - [bdubbs] - vim-9.0.0006 へのアップデート。 #4500 において言及。
 - [bdubbs] - iana-etc-20220610 へのアップデート。 #5006 において言及。
 - [bdubbs] - OpenSSL-3.0.4 へのアップデート。 #5076 を Fix に。
 - [bdubbs] - kbd-2.5.1 へのアップデート。 #5075 を Fix に。
 - [bdubbs] - linux-5.18.8 へのアップデート。 #5074 を Fix に。
 - [bdubbs] - bc-5.3.3 へのアップデート。 #5073 を Fix に。
- 2022-06-29
 - [pierre] - ncurses における C++ バインディングに関して、スタティックなバインディングを生成してから削除するのではなく、共有バインディングを生成することに。
- 2022-06-14
 - [bdubbs] - python3-3.10.5 へのアップデート。 #5070 を Fix に。
 - [bdubbs] - meson-0.62.2 へのアップデート。 #5068 を Fix に。

- [bdubbs] - kbd-2.5.0 へのアップデート。#5067 を Fix に。
- [bdubbs] - file-5.42 へのアップデート。#5072 を Fix に。
- [bdubbs] - linux-5.18.3 へのアップデート。#5069 を Fix に。
- [bdubbs] - bc-5.3.1 へのアップデート。#5071 を Fix に。
- 2022-05-29
 - [bdubbs] - iana-etc-20220524 へのアップデート。#5006 において言及。
 - [bdubbs] - iproute2-5.18.0 へのアップデート。#5065 を Fix に。
 - [bdubbs] - linux-5.18.1 へのアップデート。#5061 を Fix に。
 - [bdubbs] - perl-5.36.0 へのアップデート。#5066 を Fix に。
- 2022-05-29
 - [xry111] - vim-8.2.5014 へのアップデート(セキュリティフィックス)。#4500 において言及。
 - [xry111] - ninja-1.11.0 へのアップデート。#5062 を Fix に。
 - [xry111] - systemd-251 へのアップデート。#5064 を Fix に。
- 2022-05-16
 - [bdubbs] - linux-5.17.7 へのアップデート。#5059 を Fix に。
 - [bdubbs] - psmisc-23.5 へのアップデート。#5060 を Fix に。
- 2022-05-01
 - [bdubbs] - openssl-3.0.3 へのアップデート。#5057 を Fix に。
- 2022-05-01
 - [bdubbs] - nobody/nogroup の uid/gid を 65534 に変更。
 - [bdubbs] - meson-0.62.1 へのアップデート。#5052 を Fix に。
 - [bdubbs] - libpipeline-1.5.6 へのアップデート。#5053 を Fix に。
 - [bdubbs] - elfutils-0.187 へのアップデート。#5054 を Fix に。
 - [bdubbs] - Jinja2-3.1.2 へのアップデート。#5055 を Fix に。
 - [bdubbs] - vim-8.2.4814 へのアップデート。#4500 において言及。
 - [bdubbs] - linux-5.17.5 へのアップデート。#5050 を Fix に。
 - [bdubbs] - gcc-11.3.0 へのアップデート。#5051 を Fix に。
 - [bdubbs] - coreutils-9.1 へのアップデート。#5048 を Fix に。
 - [bdubbs] - bc-5.2.4 へのアップデート。#5049 を Fix に。
- 2022-04-15
 - [bdubbs] - wheel-0.37.1 (Python モジュール) 追加。
- 2022-04-15
 - [ken] - Xz のセキュリティフィックスパッチ。#5047 を Fix に。
 - [bdubbs] - libcap-2.64 へのアップデート。#5044 を Fix に。
 - [bdubbs] - linux-5.17.3 へのアップデート。#5043 を Fix に。
 - [bdubbs] - gzip-1.12 へのアップデート。#5042 を Fix に。
- 2022-03-31
 - [bdubbs] - zlib-1.2.12 へのアップデート(セキュリティアップデート)。#5040 を Fix に。
 - [bdubbs] - expat-2.4.8 へのアップデート。#5039 を Fix に。
 - [bdubbs] - Jinja2-3.1.1 へのアップデート。#5038 を Fix に。
 - [bdubbs] - Python-3.10.4 へのアップデート。#5037 を Fix に。
 - [bdubbs] - procps-ng-4.0.0 へのアップデート。#5036 を Fix に。
 - [bdubbs] - iproute2-5.17.0 へのアップデート。#5035 を Fix に。
 - [bdubbs] - meson-0.62.0 へのアップデート。#5034 を Fix に。
 - [bdubbs] - linux-5.17.1 へのアップデート(セキュリティアップデート)。#5033 を Fix に。
 - [bdubbs] - util-linux-2.38 へのアップデート。#4997 を Fix に。

- 2022-03-25
 - [pierre] - bootscripts を 20220324 にアップデート。 #5027 を Fix に。
- 2022-03-20
 - [xry111] - Python-3.10.3 へのアップデート。 #5028 を Fix に。
 - [xry111] - libtool-2.4.7 へのアップデート。 #5029 を Fix に。
 - [xry111] - linux-5.16.16 へのアップデート。 #5030 を Fix に。
 - [xry111] - tzdata-2022a へのアップデート。 #5031 を Fix に。
 - [xry111] - man-db-2.10.2 へのアップデート。 #5032 を Fix に。
- 2022-03-16
 - [xry111] - MarkupSafe-2.1.1 へのアップデート。 #5025 を Fix に。
- 2022-03-15
 - [bdubbs] - openssl-3.0.2 へのアップデート。 #5024 を Fix に。
 - [bdubbs] - meson-0.61.3 へのアップデート。 #5023 を Fix に。
 - [xry111] - expat-2.4.7 へのアップデート。 #5019 を Fix に。
 - [xry111] - bc-5.2.3 へのアップデート。 #5020 を Fix に。
 - [xry111] - linux-5.16.14 (セキュリティフィックス) へのアップデート。 #5021 を Fix に。
 - [xry111] - perl-5.34.1 へのアップデート。 #5022 を Fix に。
 - [xry111] - vim-8.2.4567 (セキュリティフィックス) へのアップデート。 #4500 において言及。
- 2022-03-05
 - [xry111] - \$LFS/source の所有者を lfs に変更しないこととする。 #5018 を Fix に。
 - [xry111] - zstd-1.5.2 アップストリームの修正パッチを追加。
- 2022-03-02
 - [xry111] - meson-0.61.2 へのアップデート。 #5013 を Fix に。
 - [xry111] - linux-5.16.12 へのアップデート。 #5014 を Fix に。
 - [xry111] - MarkupSafe-2.1.0 へのアップデート。 #5015 を Fix に。
 - [xry111] - dbus-1.14.0 へのアップデート。 #5017 を Fix に。
 - [xry111] - vim-8.2.4489 (セキュリティフィックス) へのアップデート。 #4500 において言及。
 - [xry111] - GCC 2 回めにおいて libstdc++ をビルドすることとし、個別の libstdc++ 2 回めを削除。
 - [xry111] - tcl における不要な --enable-64bit を削除。
- 2022-03-01
 - [bdubbs] - LFS-11.1 リリース。

1.4. 変更履歴（日本語版）

ここに示すのは LFS ブック 11.2-systemd 日本語版（バージョン20220901）の変更履歴です。



日本語訳情報

本節はオリジナルの LFS ブックにはないものです。 LFS ブック日本語版の変更履歴を示すために設けています。

「r11.1-XXX」という表記は、オリジナル LFS ブック GIT 管理ソースの連番号を意味します。また 6851fc8b2 などのリンクは、オリジナル XML ソースファイルの Git 管理下でのコミットハッシュ値（その参照ページ）を意味します。

変更履歴

- 2022-09-01
 - [matsuand] - LFS 11.2 リリース対応。 r11.1-189 (51b7349a9) までの対応。
- 2022-08-27
 - [matsuand] - r11.1-186 (bf6f9e75e) までの対応。

- 2022-08-26
 - [matsuand] - r11.1-182 (b3f157c68) までの対応。
- 2022-08-22
 - [matsuand] - r11.1-175 (fd6f71bd3) までの対応。
- 2022-08-20
 - [matsuand] - r11.1-171 (983647975) までの対応。
 - [matsuand] - r11.1-168 (6099a4714) までの対応。
- 2022-08-12
 - [matsuand] - r11.1-166 (c25dd3fc1) までの対応。
- 2022-08-10
 - [matsuand] - r11.1-163 (960a230b4) までの対応。
- 2022-08-07
 - [matsuand] - r11.1-158 (e06065fc2) までの対応。
- 2022-07-17
 - [matsuand] - r11.1-151 (d060b3354) までの対応。
- 2022-06-25
 - [matsuand] - r11.1-142 (bfc649552) までの対応。
- 2022-06-16
 - [matsuand] - r11.1-135 (c7b29be1c) までの対応。
- 2022-06-02
 - [matsuand] - r11.1-133 (9bc47a117) までの対応。
- 2022-05-17
 - [matsuand] - r11.1-119 (07b9641ca) までの対応。
- 2022-05-12
 - [matsuand] - r11.1-117 (59d5489ff) までの対応。
- 2022-04-22
 - [matsuand] - r11.1-92 (93db1e614) までの対応。
- 2022-04-19
 - [matsuand] - r11.1-84 (18e99c88b) までの対応。
- 2022-04-16
 - [matsuand] - r11.1-76 (1d694184b) までの対応。
- 2022-04-13
 - [matsuand] - r11.1-73 (b861051f1) までの対応。
- 2022-03-31
 - [matsuand] - r11.1-69 (676f0fdce) までの対応。
- 2022-03-27
 - [matsuand] - r11.1-65 (ab7af9e6f) までの対応。
- 2022-03-25
 - [matsuand] - r11.1-50 (9b463a215) までの対応。
- 2022-03-22
 - [matsuand] - r11.1-44 (53b26d62b) までの対応。
- 2022-03-17
 - [matsuand] - r11.1-37 (43149b904) までの対応。
- 2022-03-15
 - [matsuand] - r11.1-28 (f7ac150c8) までの対応。
- 2022-03-05

- [matsuand] - r11.1-20 (cb39502e1) までの対応。
- 2022-03-03
- [matsuand] - r11.1-14 (cc2c231b5) までの対応。
- 2022-03-01
- [matsuand] - LFS 11.1 リリース対応。 r11.0-203 (fe09af0cf) まで。

1.5. 情報源

1.5.1. FAQ

LFS システムの構築作業中にエラー発生したり、疑問を抱いたり、あるいは本書の誤記を発見した場合、まず手始めに <https://www.linuxfromscratch.org/faq/> に示されている「よく尋ねられる質問」(Frequently Asked Questions; FAQ) を参照してください。

1.5.2. メーリングリスト

[linuxfromscratch.org](https://www.linuxfromscratch.org) サーバーでは、LFS 開発プロジェクトのために多くのメーリングリストを立ち上げています。このメーリングリストは主となる開発用とは別に、サポート用のものもあります。FAQ だけでは問題解決に至らなかった場合に、次の手としてメーリングリストを検索する以下のサイトを参照してください。<https://www.linuxfromscratch.org/search.html>

これ以外に、投稿の方法、アーカイブの配置場所などに関しては <https://www.linuxfromscratch.org/mail.html> を参照してください。

1.5.3. IRC

LFS コミュニティのメンバーの中には、インターネットリレーチャット (Internet Relay Chat; IRC) によるサポートを行っている者もいます。ここに対して質問を挙げる場合は、FAQ やメーリングリストに同様の質問や答えがないかどうかを必ず確認してください。IRC は <irc.libera.chat> において、チャネル名 #lfs-support により提供しています。

1.5.4. ミラーサイト

LFS プロジェクトは世界中にミラーサイトがあります。これらを使えばウェブサイト参照やパッケージのダウンロードがより便利に利用できます。以下のサイトによりミラーサイトの情報を確認してください。<https://www.linuxfromscratch.org/mirrors.html>

1.5.5. 連絡先

質問やコメントは（上に示した）メーリングリストを活用してください。

1.6. ヘルプ

本書に基づく作業の中で問題が発生したり疑問が生まれた場合は <https://www.linuxfromscratch.org/faq/#generalfaq> にある FAQ のページを確認してください。質問への回答が示されているかもしれません。そこに回答が示されていなかつたら、問題の本質部分を見極めてください。トラブルシューティングとして以下のヒントが有用かもしれません。<https://www.linuxfromscratch.org/hints/downloads/files/errors.txt>

FAQ では問題解決ができない場合、メーリングリスト <https://www.linuxfromscratch.org/search.html> を検索してください。

我々のサイトにはメーリングリストやチャットを通じての情報提供を行う LFS コミュニティがあります。（詳細は「情報源」を参照してください。）我々は日々数多くのご質問を頂くのですが、たいていの質問は FAQ やメーリングリストを調べてみれば容易に答えが分かるものばかりです。したがって我々が最大限の支援を提供できるよう、ある程度の問題はご自身で解決するようにしてください。そうして頂くことで、我々はもっと特殊な状況に対するサポートを手厚く行っていくことができるからです。いくら調べても解決に至らず、お問い合わせ頂く場合は、以下に示すように十分な情報を提示してください。

1.6.1. 特記事項

問題が発生し問い合わせをする場合には、以下に示す基本的な情報を含めてください。

- お使いの LFS ブックのバージョン。（本書の場合 11.2-systemd）
- LFS 構築に用いたホスト Linux のディストリビューションとそのバージョン。
- ホストシステム要件 におけるスクリプトの出力結果。
- 問題が発生したパッケージまたは本書内の該当の章または節。
- 問題となったエラーメッセージや状況に対する詳細な情報。
- 本書どおりに作業しているか、逸脱していないかの情報。



注記

本書の作業手順を逸脱していたとしても、我々がお手伝いしないわけではありません。 つまるところ LFS は個人的な趣味によって構築されるものです。 本書の手順とは異なるやり方を正確に説明してください。 そうすれば内容の評価、原因究明が容易になります。

1.6.2. Configure スクリプトの問題

configure スクリプトの実行時に何か問題が発生した時は config.log ファイルを確認してみてください。
configure スクリプトの実行中に、端末画面に表示されないエラーが、このファイルに出力されているかもしれません。
問合せを行う際には 該当する 行を示してください。

1.6.3. コンパイル時の問題

コンパイル時に問題が発生した場合は、端末画面への出力とともに、数々のファイルの内容も問題解決の糸口となります。 configure スクリプトと make コマンドの実行によって端末画面に出力される情報は重要です。 問い合わせの際にには、出力されるすべての情報を示す必要はありませんが、関連する情報は十分に含めてください。 以下に示すのは make コマンドの実行時に出力される情報を切り出してみた例です。

```
gcc -DALIASPATH=\"/mnt/lfs/usr/share/locale:.\"  
-DLOCALEDIR=\"/mnt/lfs/usr/share/locale\"  
-DLIBDIR=\"/mnt/lfs/usr/lib\"  
-DINCLUDEDIR=\"/mnt/lfs/usr/include\" -DHAVE_CONFIG_H -I. -I.  
-g -O2 -c getopt1.c  
gcc -g -O2 -static -o make ar.o arscan.o commands.o dir.o  
expand.o file.o function.o getopt.o implicit.o job.o main.o  
misc.o read.o remake.o rule.o signature.o variable.o vpath.o  
default.o remote-stub.o version.o getopt.o  
-lutil job.o: In function `load_too_high':  
/lfs/tmp/make-3.79.1/job.c:1565: undefined reference  
to `getloadavg'  
collect2: ld returned 1 exit status  
make[2]: *** [make] Error 1  
make[2]: Leaving directory `/lfs/tmp/make-3.79.1'  
make[1]: *** [all-recursive] Error 1  
make[1]: Leaving directory `/lfs/tmp/make-3.79.1'  
make: *** [all-recursive-am] Error 2
```

たいていの方は、上のような場合に終わりの数行しか示してくれません。

```
make [2]: *** [make] Error 1
```

問題を解決するにはあまりに不十分な情報です。 そんな情報だけでは「何かがオカしい結果となった」ことは分かっても「なぜオカしい結果となった」のかが分からないからです。 上に示したのは、十分な情報を提供して頂くべきであることを例示したものであり、実行されたコマンドや関連するエラーメッセージが十分に含んだ例となっています。

インターネット上に、問い合わせを行う方法を示した優れた文章があります。 <http://catb.org/~esr/faqs/smarter-questions.html> この文章に示される内容やヒントを参考にして、より確実に回答が得られるよう心がけてください。

第II部 ビルド作業のための準備

第2章 ホストシステムの準備

2.1. はじめに

この章では LFS システムの構築に必要となるホストツールを確認し、必要に応じてインストールします。そして LFS システムをインストールするパーティションを準備します。パーティションを生成しファイルシステムを構築した上で、これをマウントします。

2.2. ホストシステム要件

ホストシステムには以下に示すソフトウェアが必要であり、それぞれに示されているバージョン以降である必要があります。最近の Linux ディストリビューションを利用するなら、あまり問題にはならないはずです。ディストリビューションによっては、ソフトウェアのヘッダーファイル群を別パッケージとして提供しているもの多々あります。例えば「<パッケージ名>-devel」であったり「<パッケージ名>-dev」といった具合です。お使いのディストリビューションがそのような提供の仕方をしている場合は、それらもインストールしてください。

各パッケージにて、示しているバージョンより古いものでも動作するかもしれません、テストは行っていません。

- Bash-3.2 (/bin/sh が bash に対するシンボリックリンクまたはハードリンクである必要があります。)
- Binutils-2.13.1 (2.39 以上のバージョンは、テストしていないためお勧めしません。)
- Bison-2.7 (/usr/bin/yacc が bison へのリンクか、bison を実行するためのスクリプトである必要があります。)
- Coreutils-6.9
- Diffutils-2.8.1
- Findutils-4.2.31
- Gawk-4.0.1 (/usr/bin/awk が gawk へのリンクである必要があります。)
- GCC-4.8 と C++ コンパイラである g++ (12.2.0 以上のバージョンは、テストしていないためお勧めしません。) ホストされたプログラムを C++ コンパイラがビルドできるように、C および C++ の標準ライブラリ（ヘッダーを含む）が存在しなければなりません。
- Grep-2.5.1a
- Gzip-1.3.12
- Linux Kernel-3.2

カーネルのバージョンを指定しているのは、第 5 章と第 8 章において、glibc をビルドする際にバージョンを指定するからであり、開発者の勧めに従うためです。これは udev においても必要になります。

ホストシステムのカーネルバージョンが 3.2 より古い場合は、ここに示した条件に合致するカーネルに置き換えることが必要です。これを実施するには2つの方法があります。お使いの Linux システムのベンダーが 3.2 以上のバージョンのカーネルを提供しているかを調べることです。提供していれば、それをインストールします。もしそれがない場合や、あったとしてもそれをインストールしたくない場合、カーネルをご自身でコンパイルが必要があります。カーネルのコンパイルと（ホストシステムが GRUB を利用しているとして）ブートローダーの設定方法については第 10 章を参照してください。

- M4-1.4.10
- Make-4.0
- Patch-2.5.4
- Perl-5.8.8
- Python-3.4
- Sed-4.1.5
- Tar-1.22
- Texinfo-4.7
- Xz-5.0.0

重要

上で示しているシンボリックリンクは、本書の説明を通じて LFS を構築するために必要となるものです。シンボリックリンクが別のソフトウェア（例えば dash や mawk）を指し示している場合でもうまく動作するかもしれません。しかしそれらに対して LFS 開発チームはテストを行っていませんしサポート対象としていません。そのような状況に対しては作業手順の変更が必要となり、特定のパッケージに対しては追加のパッチを要するかもしれません。

ホストシステムに、上のソフトウェアの適切なバージョンがインストールされているかどうか、またコンパイルが適切に行えるかどうかは、以下のスクリプトを実行して確認することができます。

```
cat > version-check.sh << "EOF"
#!/bin/bash
# Simple script to list version numbers of critical development tools
export LC_ALL=C
bash --version | head -n1 | cut -d" " -f2-4
MYSH=$(readlink -f /bin/sh)
echo "/bin/sh -> $MYSH"
echo $MYSH | grep -q bash || echo "ERROR: /bin/sh does not point to bash"
unset MYSH

echo -n "Binutils: "; ld --version | head -n1 | cut -d" " -f3-
bison --version | head -n1

if [ -h /usr/bin/yacc ]; then
    echo "/usr/bin/yacc -> `readlink -f /usr/bin/yacc`";
elif [ -x /usr/bin/yacc ]; then
    echo yacc is `/usr/bin/yacc --version | head -n1`
else
    echo "yacc not found"
fi

echo -n "Coreutils: "; chown --version | head -n1 | cut -d")" -f2
diff --version | head -n1
find --version | head -n1
gawk --version | head -n1

if [ -h /usr/bin/awk ]; then
    echo "/usr/bin/awk -> `readlink -f /usr/bin/awk`";
elif [ -x /usr/bin/awk ]; then
    echo awk is `/usr/bin/awk --version | head -n1`
else
    echo "awk not found"
fi
```

```

gcc --version | head -n1
g++ --version | head -n1
grep --version | head -n1
gzip --version | head -n1
cat /proc/version
m4 --version | head -n1
make --version | head -n1
patch --version | head -n1
echo Perl `perl -V:version` 
python3 --version
sed --version | head -n1
tar --version | head -n1
makeinfo --version | head -n1 # texinfo version
xz --version | head -n1

echo 'int main(){}' > dummy.c && g++ -o dummy dummy.c
if [ -x dummy ]
    then echo "g++ compilation OK";
    else echo "g++ compilation failed"; fi
rm -f dummy.c dummy
EOF

bash version-check.sh

```

2.3. 作業段階ごとの LFS 構築

LFS は一度にすべてを構築するものとして説明を行っています。つまり作業途中にシステムをシャットダウンすることを想定していません。ただこれは、システム構築を立ち止まることなくやり続けろと言っているわけではありません。

LFS 構築を途中から再開する場合には、どの段階からなのかに応じて、特定の作業を再度行うことが必要となります。

2.3.1. 第 1 章～第 4 章

これらの章ではホストシステム上で作業を行います。作業を再開する際には以下に注意します。

- 2.4 節以降において root ユーザーにより実行する作業では LFS 環境変数の設定が必要です。さらにそれはroot ユーザーにおいて設定されていなければなりません。

2.3.2. 第 5 章～第 6 章

- /mnt/lfs パーティションがマウントされている必要があります。
- この 2 つの章における処理はすべて、ユーザー lfs により実施してください。処理の実施前には su - lfs を行ないます。これをやり忘れた場合、パッケージインストールをホストに対して行ってしまい、利用不能になってしまうリスクがあります。
- 全般的なコンパイル手順に示す内容は極めて重要です。パッケージのインストール作業に少しでも疑わしい点があつたならば、展開作業を行った tarball やその展開ディレクトリをいったん消去し、再度展開し作業をやり直してください。

2.3.3. 第 7 章～第 10 章

- /mnt/lfs パーティションがマウントされている必要があります。
- 「所有者の変更」から「Chroot 環境への移行」までの操作は、root ユーザーで行います。LFS 環境変数が root ユーザーにおいて設定されている必要があります。
- chroot 環境に入った際には、環境変数 LFS が root ユーザーにおいて設定されている必要があります。これ以後 LFS 変数は使いません。
- 仮想ファイルシステムがマウントされている必要があります。これは chroot 環境への移行前後において、ホストの仮想端末を変更することで実現します。root ユーザーとなって 「/dev のマウントと有効化」と 「仮想カーネルファイルシステムのマウント」を実行する必要があります。

2.4. 新しいパーティションの生成

どのようなオペレーティングシステムでも同じことが言えますが、本システムでもインストール先は専用のパーティションを用いることになります。LFS システムを構築していくには、利用可能な空のパーティションか、あるいはパーティション化していないものをパーティションとして生成して利用することにします。

最小限のシステムであれば 10 GB 程度のディスク容量があれば十分です。これだけあればパッケージやソースの収容に十分で、そこでコンパイル作業を行っていくことができます。しかし主要なシステムとして LFS を構築するなら、さらにソフトウェアをインストールすることになるはずなので、さらなる容量が必要となります。30 GB ほどのパーティションがあれば、増量していくことを考えても十分な容量でしょう。LFS システムそのものがそれだけの容量を要するわけではありません。これだけの容量は十分なテンポラリ領域のために必要となるものであり、また LFS の完成後に機能追加していくためのものです。パッケージをインストールした後はテンポラリ領域は開放されますが、コンパイルの間は多くの領域を利用します。

コンパイル処理において十分なランダムアクセスメモリ (Random Access Memory; RAM) を確保できるとは限りませんので、スワップ (swap) フィールドをパーティションとして設けるのが普通です。この領域へは利用頻度が低いデータを移すことで、アクティブな処理プロセスがより多くのメモリを確保できるようにカーネルが制御します。swap パーティションは、LFS システムのものとホストシステムのものを共有することもできます。その場合は新しいパーティションを作る必要はありません。

ディスクのパーティション生成は `cfdisk` コマンドや `fdisk` コマンドを使って行います。コマンドラインオプションにはパーティションを生成するハードディスク名を指定します。例えばプライマリディスクであれば `/dev/sda` といったものになります。そして Linux ネイティブパーティションと、必要なら swap パーティションを生成します。プログラムの利用方法について不明であれば `cfdisk(8)` や `fdisk(8)` を参照してください。



注記

上級者の方であれば別のパーティション設定も可能です。最新の LFS システムは、ソフトウェア RAID アレイや、LVM 論理ボリュームを利用するすることができます。ただしこれらを実現するには `initramfs` が必要であり、高度なトピックです。こういったパーティション設定は、LFS 初心者にはお勧めしません。

新しく生成したパーティションの名前を覚えておいてください。（例えば `sda5` など。）本書ではこのパーティションを LFS パーティションとして説明していきます。また swap パーティションの名前も忘れないでください。これらの名前は、後に生成する `/etc/fstab` ファイルに記述するために必要となります。

2.4.1. パーティションに関するその他の問題

LFS メーリングリストにてパーティションに関する有用情報を望む声をよく聞きます。これは個人の趣味にもよる極めて主観的なものです。既存ディストリビューションが採用しているデフォルトのパーティションサイズと言えば、たいていはスワップパーティションを小容量で配置した上で、そのドライブ内の残容量すべてのサイズを割り当てています。このようなサイズ設定は LFS では最適ではありません。その理由はいくつかあります。そのようにしてしまうと、複数のディストリビューションの導入時や LFS 構築時に、柔軟さを欠き、構築がしにくくなります。バックアップを取る際にも無用な時間を要し、ファイルシステム上にて不適当なファイル配置を生み出すため、余計なディスク消費を発生させます。

2.4.1.1. ルートパーティション

ルートパーティション（これを `/root` ディレクトリと混同しないでください）は 20 GB もあれば、どんなシステムであっても妥当なところでしょう。それだけあれば LFS 構築も、また BLFS においてもおそらく十分なはずです。実験的に複数パーティションを設けるとしても、これだけのサイズで十分です。

2.4.1.2. スワップパーティション

既存のディストリビューションは、たいていはスワップパーティションを自動的に生成します。一般にスワップパーティションのサイズは、物理 RAM サイズの二倍の容量とすることが推奨されています。しかしそれだけの容量はほとんど必要ありません。ディスク容量が限られているなら、スワップパーティションの容量を 2GB 程度に抑えておいて、ディスクスワップがどれだけ発生するかを確認してみてください。

Linux のハイバネーション（ディスクへの退避状態）機能を利用する場合、マシンが停止する前に RAM の内容がスワップパーティションに書き出されます。この場合、スワップパーティションの容量は、システムの RAM 容量と最低でも同程度である必要があります。

スワップは好ましいことではありません。物理的なハードドライブの場合、スワップが発生しているかどうかは、単純にディスク音を聞いたり、コマンド実行時にシステムがどのように反応するかを見ればわかります。SSD ドライブの場合、スワップ時の音は聞こえてきません。その場合は `top` や `free` プログラムを使ってスワップ使用量を確認するこ

とができます。SSD ドライブにスワップパーティションを割り当てるることは極力避けるべきです。最初は 5GB くらいのファイルを編集するといった極端なコマンド実行を行ってみて、スワップが起きるかどうかを確認してみてください。スワップがごく普通に発生するようであれば、RAM を増設するのが適切です。

2.4.1.3. Grub バイオスパーティション

GUID パーティションテーブル (GUID Partition Table; GPT) を利用してブートディスクをパーティショニングした場合、普通は 1 MB 程度の小さなパーティションをさらに用意しておくことが必要です。このパーティションのフォーマットは不要であり、ブートローダーをインストールする際に GRUB が利用できるものでなければなりません。通常このパーティションは `fdisk` を用いた場合は 'BIOS Boot' と名付けられます。また `gdisk` を用いた場合は `EF02` というコード名が与えられます。



注記

Grub バイオスパーティションは、BIOS がシステムブート時に用いるドライブ上になければなりません。これは LFS ルートパーティションがあるドライブと同一にする必要はありません。システム上にあるドライブは、同一のパーティションテーブルタイプを利用していいことがあります。つまりこの Grub バイオスパーティションに必要なのは、ブートディスクのパーティションテーブルタイプに合わせることだけです。

2.4.1.4. 有用なパーティション

この他にも、必要のないパーティションというものがいくつかあります。しかしディスクレイアウトを取り決めるには考えておく必要があります。以下に示すのは十分な説明ではありませんが、一つの目安として示すものです。

- `/boot` - 作成することが強く推奨されます。カーネルやブート情報を収納するために利用するパーティションです。容量の大きなディスクの場合、ブート時に問題が発生することがあるので、これを回避するには、一つ目のディスクドライブの物理的に一番最初のパーティションを選びます。パーティションサイズを 200MB とすれば十分です。
- `/boot/efi` - EFI システムパーティションであり、UEFI を使ってシステム起動する場合に必要です。詳しくは BLFS ページを参照してください。
- `/home` - 作成することが強く推奨されます。複数のディストリビューションや LFS の間で、ホームディレクトリおよびユーザー固有の設定を共有することができます。パーティションサイズは、ある程度大きく取ることになりますが、利用可能なディスク残容量に依存します。
- `/usr` - LFSにおいては `/bin`, `/lib`, `/sbin` の各ディレクトリは、`/usr` 配下からのシンボリックリンクとしています。したがって `/usr` には、システムを動作させるために必要となる実行モジュールがすべて置かれます。LFSにおいて `/usr` を別パーティションとすることは、普通は不要です。それでもこれが必要となる場合、システム内のプログラムやライブラリすべてが収容できるように、そのパーティション容量を十分に確保することが必要です。`root` パーティションは、このような設定とするなら、極端に小さなサイズ(1 ギガバイト程度)でも十分です。これはシンクライアントやディスクなしワークステーションに適しています。(そういう環境では `/usr` がリモートサーバーにマウントされます。) ただし(LFS では対応していない) `initramfs` を利用する際には、これがブートする際に `/usr` が別パーティションになっていることが必要であるため、注意してください。
- `/opt` - このディレクトリは BLFS などにおいて、Gnome や KDE といった巨大なパッケージをいくつもインストールする際に活用されます。`/usr` ディレクトリ以外にインストールする場合です。これを別パーティションとするなら、一般的には 5 ~ 10 GB 程度が適当でしょう。
- `/tmp` - `/tmp` ディレクトリを別パーティションとするのは普通は行いません。ただしシンクライアント(thin client)では有効です。別パーティションとする場合であっても、数GB程度あれば十分です。
- `/usr/src` - このパーティションは LFS のパッケージソースを収容し LFS ビルド工程にて共用するものとして有効に利用することができます。さらに BLFS パッケージソースを収容しビルドする場所としても利用可能です。30~50GB くらいの容量があれば、十分なものです。

ブート時に自動的にパーティションをマウントしたい場合は `/etc/fstab` ファイルにて設定します。パーティションの設定方法については「`/etc/fstab` ファイルの生成」で説明しています。

2.5. ファイルシステムの生成

空のパーティションが準備できたのでファイルシステムを作ります。LFS では Linux カーネルが識別できるならどのようなファイルシステムを用いるのでも構いません。ただ最も標準的なものとして ext3 と ext4 があります。ファイルシステムをどのようにするかは単純な話ではなく、収容するファイルの性質やパーティションサイズにも依存します。例えば以下のとおりです。

`ext2`

比較的小容量のパーティションで、`/boot` のようにあまり更新されないパーティションに対して適しています。

ext3

ext2 の拡張でありジャーナルを含みます。このジャーナルとは、不測のシャットダウン時などに、パーティション状態の復元に用いられます。汎用的なファイルシステムとして用いることができます。

ext4

パーティショントラップとして用いられる ext 系の最新バージョンです。新たな機能として、ナノ秒単位のタイムスタンプの提供、大容量ファイル (16 TB) の生成利用、処理性能の改善が加えられています。

この他のファイルシステムとして、FAT32, NTFS, ReiserFS, JFS, XFS などがあり、それぞれに特定の目的に応じて活用されています。ファイルシステムの詳細については http://en.wikipedia.org/wiki/Comparison_of_file_systems を参照してください。

LFS ではルートファイルシステム (/) として ext4 を用いるものとします。LFS 用のパーティションに対して ext4 ファイルシステムを生成するために以下のコマンドを実行します。

```
mkfs -v -t ext4 /dev/<xxx>
```

<xxx> の部分は LFS パーティション名に合わせて置き換えてください。

既存の swap パーティションを利用している場合は、初期化を行う必要はありません。新しく swap パーティションを生成した場合には、以下のコマンドにより初期化を行ってください。

```
mkswap /dev/<yyy>
```

<yyy> の部分は swap パーティションの名に合わせて置き換えてください。

2.6. 変数 \$LFS の設定

本書の中では環境変数 LFS を何度も用います。LFS システムのビルド作業時には常に定義しておくことを忘れないでください。この変数は LFS パーティションとして選んだマウントポイントを定義します。例えば /mnt/lfs というものです。他のものとしても構いません。LFS を別のパーティションにビルドする場合、このマウントポイントはそのパーティションを示すようにしてください。ディレクトリを取り決めたら、変数を以下のコマンドにより設定します。

```
export LFS=/mnt/lfs
```

上のように変数を定義しておくと、例えば mkdir \$LFS/tools といったコマンドを、この通りに入力することで実行できるので便利です。これが実行されると、シェルが「\$LFS」を「/mnt/lfs」に（あるいは変数にセットされている別のディレクトリに）置換して処理してくれます。

注意

\$LFS が常にセットされていることを忘れずに確認してください。特に、別ユーザーでログインし直した場合 (su コマンドによって root ユーザーや別のユーザーでログインした場合) には、忘れないでください。

```
echo $LFS
```

上の出力結果が LFS システムのビルドディレクトリであることを確認してください。本書に示す例に従っている場合は /mnt/lfs が表示されるはずです。出力が正しくない場合は、冒頭に示したコマンド実行により \$LFS 変数に正しいディレクトリを設定してください。

注記

LFS 変数を確実に設定しておくために、ローカルな .bash_profile および /root/.bash_profile に上記変数を export するコマンドを記述しておく方法もあります。なお /etc/passwd ファイルにて LFS 変数を必要とするユーザーは、シェルとして bash を利用するようにしてください。/root/.bash_profile ファイルはログインプロセスの一部として機能するためです。

もう一つ気にかけることとして、ホストシステム上にログ出力を行う方法に関してです。グラフィカルディスプレイマネージャーを通じてログ出力を行うと、仮想端末が起動する際に、ユーザー独自の .bash_profile は普通は用いられません。この場合は、各ユーザー用と root 用の .bashrc に export コマンドを追加してください。ここでディストリビューションの中には、非対話形式での bash の実行時には .bashrc を実行しないように求めているものがあります。その場合は、非対話形式の利用をテストする前に export コマンドを追加してください。

2.7. 新しいパーティションのマウント

ファイルシステムが生成できたら、パーティションをアクセスできるようにします。これを行うためにはマウントポイントを定める必要があります。本書では前に示したように、環境変数 `LFS` に指定されたディレクトリに対してファイルシステムがマウントされるものとします。

マウントポイントを生成し、LFS ファイルシステムをマウントします。

```
mkdir -pv $LFS
mount -v -t ext4 /dev/<xxx> $LFS
```

`<xxx>` の部分は LFS パーティション名に合わせて置き換えてください。

LFS に対して複数のパーティションを用いる場合（例えば `/` と `/home` が別パーティションである場合）は、以下を実行してそれをマウントします。

```
mkdir -pv $LFS
mount -v -t ext4 /dev/<xxx> $LFS
mkdir -v $LFS/home
mount -v -t ext4 /dev/<yyy> $LFS/home
```

`<xxx>` や `<yyy>` の部分は、それぞれ適切なパーティション名に置き換えてください。

この新しいパーティションは特別な制限オプション（`nosuid`、`nodev` など）は設定せずにマウントします。`mount` コマンドの実行時に引数を与えると、LFS パーティションがどのようなオプション設定によりマウントされているかが分かります。もし `nosuid`、`nodev` オプションが設定されていたら、マウントし直してください。

警告

上で説明した内容は、LFS 構築作業においてコンピューターを再起動しない場合の話です。コンピューターを一度シャットダウンした場合は、LFS 構築作業の再開のたびに LFS パーティションを再マウントする必要があります。あるいはブート時に自動マウントをしたいのであれば、ホストシステムの `/etc/fstab` ファイルを書き換えておく必要があります。書き換えは例えば以下のようになります。

```
/dev/<xxx> /mnt/lfs ext4 defaults 1 1
```

追加のパーティションを利用している場合は、それらを書き加えることも忘れないでください。

`swap` パーティションを用いる場合は、`swapon` コマンドを使って利用可能にしてください。

```
/sbin/swapon -v /dev/<zzz>
```

`<zzz>` の部分は `swap` パーティション名に置き換えてください。

こうして動作環境が整いました。次はパッケージのダウンロードです。

第3章 パッケージとパッチ

3.1. はじめに

この章では基本的な Linux システム構築のためにダウンロードするべきパッケージの一覧を示します。各パッケージのバージョンは動作が確認されているものを示しており、本書ではこれに基づいて説明します。LFS errata やセキュリティアドバイザリーに示されれば別ですが、ここに示すバージョンとは異なるものは使わないようお勧めします。あるバージョンでビルドしたコマンドが、違うバージョンで動作する保証はないからです。最新のパッケージの場合、何かの対処を要するかもしれません。そのような対処方法は本書の開発版において開発され安定化が図られるかもしれません。

パッケージによっては、リリース tarball に加えて (Git や SVN の) リポジトリスナップショット tarball があつて、両者を同じファイル名で提供している場合があります。リリース tarball には、該当するリポジトリスナップショットの内容に加えて生成済みファイル（たとえば autoconf が作り出す configure スクリプト）が含まれます。本書では可能な限りリリース tarball を用いることにします。本書が指定するリリース tarball ではなく、リポジトリスナップショットを利用すると、問題が発生するかもしれません。

ダウンロードサイトは常にアクセス可能であるとは限りません。本書が提供された後にダウンロードする場所が変更になっていたら Google (<http://www.google.com/>) を使って検索してみてください。たいていのパッケージを見つけ出すことが出来るはずです。それでも見つけられなかつたら <https://www.linuxfromscratch.org/lfs/packages.html#packages> から入手してください。

ダウンロードしたパッケージやパッチは、ビルド作業を通じて常に利用可能な場所を選んで保存しておく必要があります。またソース類を伸張してビルドを行うための作業ディレクトリも必要です。そこで本書では \$LFS/sources ディレクトリを用意し、ソースやパッチの保存場所とし、そこでビルドを行う作業ディレクトリとします。このディレクトリにしておけば LFS パーティションに位置することから LFS ビルドを行う全工程において常に利用することが出来ます。

ダウンロードを行う前にまずはそのようなディレクトリを生成します。root ユーザーとなって以下のコマンドを実行します。

```
mkdir -v $LFS/sources
```

このディレクトリには書き込み権限とステイックキーを与えます。「ステイックキー (Sticky)」は複数ユーザーに対して書き込み権限が与えられても、削除については所有者しか実行出来ないようにします。以下のコマンドによって書き込み権限とステイックキーを定めます。

```
chmod -v a+wt $LFS/sources
```

LFS のビルドに必要なパッケージやパッチを得る方法は、いろいろとあります。

- 各ファイルは次の2節に示されているので、個々に入手することができます。
- 本書の安定版であれば、それに対して必要となるファイルを集めた tarball が、<https://www.linuxfromscratch.org/mirrors.html#files> に示す LFS ミラーサイトからダウンロードできます。
- wget と以下に示す wget-list ファイルを利用すれば、すべてのファイルをダウンロードすることができます。

パッケージとパッチのダウンロードを行うため wget-list を利用することにします。これは以下のように wget コマンドの入力引数に指定します。

```
wget --input-file=wget-list-systemd --continue --directory-prefix=$LFS/sources
```



日本語訳情報

オリジナルの LFS ブックでは、wget-list 内に含まれる、各種パッケージの入手 URL が主に米国サイトとなっています。一方、日本国内にて作業する方であれば、例えば GNU のパッケージ類は国内に数多くのミラーサイトが存在するため、そちらから取得するのが適切でしょう。これはネットワークリソースを利用する際のマナーとも言えるものです。堅苦しい話をするつもりはありません。国内サイトから入手することにすればダウンロード速度が断然早くなります。メリットは大きいと思いますのでお勧めします。

国内から入手可能なものは国内から入手することを目指し、訳者は以下の手順により wget-list を書き換えて利用しています。一例として国内には理化学研究所のサイト (ftp.riken.jp) があります。そこでは GNU パッケージ類がミラー提供されています。そこで wget-list にて ftp.gnu.org を指し示している URL を ftp.riken.jp に置き換えます。また同じ方法で Linux カーネル、Perl、Vim の入手先も変更します。

```
cat > wl.sed << "EOF"
s|ftp\.\gnu\.org/gnu/|ftp.riken.jp/GNU/|g
s|https://www\.kernel\.org/pub/linux/|http://ftp.riken.jp/Linux/kernel.org/linux/|g
s|www\.cpan\.org|ftp.riken.jp/lang/CPAN|g
s|ftp\.\vim\.org|ftp.jp.vim.org|g
EOF
sed -f wl.sed -i.orig wget-list-systemd
rm wl.sed
```

上記はあくまで一例です。しかもすべてのパッケージについて、国内サイトからの入手となるわけではありません。ただし上記を行うだけでも、大半のパッケージは国内サイトを向くことになります。上記にて国内のミラーサイトは、ネットワーク的に”より近い”ものを選んでください。サイトを変えた場合は、パッケージの URL が異なることが多々あるため、適宜 sed 置換内容を書き換えてください。

注意する点として各パッケージが更新されたばかりの日付では、国内ミラーサイトへの同期、反映が間に合わず、ソース類が存在しないことが考えられます。その場合にはパッケージ取得に失敗してしまいます。そこで wget-list と wget-list.orig を順に利用し、かつ wget コマンドにて -N オプションを使って（取得済のものはスキップするようにして）以下のコマンドを実行すれば、確実にすべてのパッケージを入手することができます。

```
wget -N --input-file=wget-list-systemd --continue --directory-prefix=$LFS/sources
wget -N --input-file=wget-list-systemd.orig --continue --directory-prefix=$LFS/sources
```

さらに LFS-7.0 からは md5sums というファイルを用意しています。このファイルは、入手した各種パッケージのファイルが正しいことを確認するために用いることができます。このファイルを \$LFS/sources に配置して以下を実行してください。

```
pushd $LFS/sources
md5sum -c md5sums
popd
```

必要なファイルを入手した方法が前述のどの方法であっても、この md5sum チェックを実施することができます。

3.2. 全パッケージ



注記

パッケージをダウンロードする前には セキュリティアドバイス (security advisories) を読んでください。セキュリティぜい弱性を回避するためにパッケージの最新バージョンがないかどうかを確認してください。

アップストリームでは、古いリリースを削除していることがあります。特にそのリリースにセキュリティぜい弱性を含んでいた場合です。以下に示す URL が無効になっていたら、まず初めにセキュリティアドバイスを読んでください。そして新たなバージョンが（ぜい弱性を解消して）入手できるかどうかを確認してください。それでもパッケージが削除されてしまっている場合は、ミラーサイトからのダウンロードを試してみてください。ぜい弱性が原因で削除されていた古いバージョンのパッケージがダウンロードできたとしても、ぜい弱性に問題があるのであれば、システムビルドに用いることはお勧めしません。

以下に示すパッケージをダウンロードするなどしてすべて入手してください。

- Acl (2.3.1) - 348 KB:

ホームページ: <https://savannah.nongnu.org/projects/acl>

ダウンロード: <https://download.savannah.gnu.org/releases/acl/acl-2.3.1.tar.xz>

MD5 sum: 95ce715fe09acca7c12d3306d0f076b2

- Attr (2.5.1) - 456 KB:

ホームページ: <https://savannah.nongnu.org/projects/attr>

ダウンロード: <https://download.savannah.gnu.org/releases/attr/attr-2.5.1.tar.gz>

MD5 sum: ac1c5a7a084f0f83b8cace34211f64d8

- Autoconf (2.71) - 1,263 KB:

ホームページ: <https://www.gnu.org/software/autoconf/>

ダウンロード: <https://ftp.gnu.org/gnu/autoconf/autoconf-2.71.tar.xz>

MD5 sum: 12cfaf1687ffa2606337efela64416106

- Automake (1.16.5) - 1,565 KB:

ホームページ: <https://www.gnu.org/software/automake/>

ダウンロード: <https://ftp.gnu.org/gnu/automake/automake-1.16.5.tar.xz>

MD5 sum: 4017e96f89fca45ca946f1c5db6be714

SHA256 sum: 80facc09885a57e6d49d06972c0ae1089c5fa8f4d4c7cfe5baea58e5085f136d

- Bash (5.1.16) - 10,277 KB:

ホームページ: <https://www.gnu.org/software/bash/>

ダウンロード: <https://ftp.gnu.org/gnu/bash/bash-5.1.16.tar.gz>

MD5 sum: c17b20a09fc38d67fb303aeb6c130b4e

• Bc (6.0.1) - 441 KB:

ホームページ: <https://git.yzena.com/gavin/bc>ダウンロード: <https://github.com/gavinhoward/bc/releases/download/6.0.1/bc-6.0.1.tar.xz>

MD5 sum: 4c8b8d51eb52ee66f5bcf6a6a1ca576e

• Binutils (2.39) - 24,578 KB:

ホームページ: <https://www.gnu.org/software/binutils/>ダウンロード: <https://ftp.gnu.org/gnu/binutils/binutils-2.39.tar.xz>

MD5 sum: f7e986ae9ff06405caf2e585ee36d27

• Bison (3.8.2) - 2,752 KB:

ホームページ: <https://www.gnu.org/software/bison/>ダウンロード: <https://ftp.gnu.org/gnu/bison/bison-3.8.2.tar.xz>

MD5 sum: c28f119f405a2304ff0a7ccdcc629713

• Bzip2 (1.0.8) - 792 KB:

ダウンロード: <https://www.sourceware.org/pub/bzip2/bzip2-1.0.8.tar.gz>

MD5 sum: 67e051268d0c475ea773822f7500d0e5

• Check (0.15.2) - 760 KB:

ホームページ: <https://libcheck.github.io/check>ダウンロード: <https://github.com/libcheck/check/releases/download/0.15.2/check-0.15.2.tar.gz>

MD5 sum: 50fcacfecde5a380415b12e9c574e0b2

• Coreutils (9.1) - 5,570 KB:

ホームページ: <https://www.gnu.org/software/coreutils/>ダウンロード: <https://ftp.gnu.org/gnu/coreutils/coreutils-9.1.tar.xz>

MD5 sum: 8b1ca4e018a7dce9bb937faec6618671

• D-Bus (1.14.0) - 1,332 KB:

ホームページ: <https://www.freedesktop.org/wiki/Software/dbus>ダウンロード: <https://dbus.freedesktop.org/releases/dbus/dbus-1.14.0.tar.xz>

MD5 sum: ddd5570aff05191dbe8e42d751f1b7d

• DejaGNU (1.6.3) - 608 KB:

ホームページ: <https://www.gnu.org/software/dejagnu/>ダウンロード: <https://ftp.gnu.org/gnu/dejagnu/dejagnu-1.6.3.tar.gz>

MD5 sum: 68c5208c58236eba447d7d6d1326b821

• Diffutils (3.8) - 1,548 KB:

ホームページ: <https://www.gnu.org/software/diffutils/>ダウンロード: <https://ftp.gnu.org/gnu/diffutils/diffutils-3.8.tar.xz>

MD5 sum: 6a6b0fdc72acfe3f2829aab477876fbc

• E2fsprogs (1.46.5) - 9,307 KB:

ホームページ: <http://e2fsprogs.sourceforge.net/>ダウンロード: <https://downloads.sourceforge.net/project/e2fsprogs/e2fsprogs/v1.46.5/e2fsprogs-1.46.5.tar.gz>

MD5 sum: 3da91854c960ad8a819b48b2a404eb43

• Elfutils (0.187) - 9,024 KB:

ホームページ: <https://sourceware.org/elfutils/>ダウンロード: <https://sourceware.org/ftp/elfutils/0.187/elfutils-0.187.tar.bz2>

MD5 sum: cc04f07b53a71616b22553c0a458cf4b

• Expat (2.4.8) - 444 KB:

ホームページ: <https://libexpat.github.io/>ダウンロード: <https://prdownloads.sourceforge.net/expat/expat-2.4.8.tar.xz>

MD5 sum: 0584a7318a4c007f7ec94778799d72fe

• Expect (5.45.4) - 618 KB:

ホームページ: <https://core.tcl.tk/expect/>ダウンロード: <https://prdownloads.sourceforge.net/expect/expect5.45.4.tar.gz>

MD5 sum: 00fce8de158422f5cccd2666512329bd2

• File (5.42) - 1,080 KB:

ホームページ: <https://www.darwinsky.com/file/>ダウンロード: <https://astron.com/pub/file/file-5.42.tar.gz>

MD5 sum: 4d4f70c3b08a8a70d8baf67f085d7e92

• Findutils (4.9.0) - 1,999 KB:

ホームページ: <https://www.gnu.org/software/findutils/>ダウンロード: <https://ftp.gnu.org/gnu/findutils/findutils-4.9.0.tar.xz>

MD5 sum: 4a4a547e888a944b2f3af31d789a1137

• Flex (2.6.4) - 1,386 KB:

ホームページ: <https://github.com/westes/flex>ダウンロード: <https://github.com/westes/flex/releases/download/v2.6.4/flex-2.6.4.tar.gz>

MD5 sum: 2882e3179748cc9f9c23ec593d6adc8d

• Gawk (5.1.1) - 3,075 KB:

ホームページ: <https://www.gnu.org/software/gawk/>ダウンロード: <https://ftp.gnu.org/gnu/gawk/gawk-5.1.1.tar.xz>

MD5 sum: 83650aa943ff2fd519b2abedf8506ace

• GCC (12.2.0) - 82,662 KB:

ホームページ: <https://gcc.gnu.org/>ダウンロード: <https://ftp.gnu.org/gnu/gcc/gcc-12.2.0/gcc-12.2.0.tar.xz>

MD5 sum: 73baf0af874439dcdb9fc063b6fb069

SHA256 sum:

• GDBM (1.23) - 1,092 KB:

ホームページ: <https://www.gnu.org/software/gdbm/>ダウンロード: <https://ftp.gnu.org/gnu/gdbm/gdbm-1.23.tar.gz>

MD5 sum: 8551961e36bf8c70b7500d255d3658ec

• Gettext (0.21) - 9,487 KB:

ホームページ: <https://www.gnu.org/software/gettext/>ダウンロード: <https://ftp.gnu.org/gnu/gettext/gettext-0.21.tar.xz>

MD5 sum: 40996bbaf7d1356d3c22e33a8b255b31

• Glibc (2.36) - 18,175 KB:

ホームページ: <https://www.gnu.org/software/libc/>ダウンロード: <https://ftp.gnu.org/gnu/glibc/glibc-2.36.tar.xz>

MD5 sum: 00e9b89e043340f688bc93ec03239b57

• GMP (6.2.1) - 1,980 KB:

ホームページ: <https://www.gnu.org/software/gmp/>ダウンロード: <https://ftp.gnu.org/gnu/gmp/gmp-6.2.1.tar.xz>

MD5 sum: 0b82665c4a92fd2ade7440c13fc4a42b

• Gperf (3.1) - 1,188 KB:

ホームページ: <https://www.gnu.org/software/gperf/>ダウンロード: <https://ftp.gnu.org/gnu/gperf/gperf-3.1.tar.gz>

MD5 sum: 9e251c0a618ad0824b51117d5d9db87e

• Grep (3.7) - 1,603 KB:

ホームページ: <https://www.gnu.org/software/grep/>ダウンロード: <https://ftp.gnu.org/gnu/grep/grep-3.7.tar.xz>

MD5 sum: 7c9cca97fa18670a21e72638c3e1dabf

• Groff (1.22.4) - 4,044 KB:

ホームページ: <https://www.gnu.org/software/groff/>ダウンロード: <https://ftp.gnu.org/gnu/groff/groff-1.22.4.tar.gz>

MD5 sum: 08fb04335e2f5e73f23ea4c3adbf0c5f

• GRUB (2.06) - 6,428 KB:

ホームページ: <https://www.gnu.org/software/grub/>ダウンロード: <https://ftp.gnu.org/gnu/grub/grub-2.06.tar.xz>

MD5 sum: cf0fd928b1e5479c8108ee52cb114363

• Gzip (1.12) - 807 KB:

ホームページ: <https://www.gnu.org/software/gzip/>ダウンロード: <https://ftp.gnu.org/gnu/gzip/gzip-1.12.tar.xz>

MD5 sum: 9608e4ac5f061b2a6479dc44e917a5db

• Iana-Etc (20220812) - 584 KB:

ホームページ: <https://www.iana.org/protocols>ダウンロード: <https://github.com/Mic92/iana-etc/releases/download/20220812/iana-etc-20220812.tar.gz>

MD5 sum: 851a53efd53c77d0ad7b3d2b68d8a3fc

• Inetutils (2.3) - 1,518 KB:

ホームページ: <https://www.gnu.org/software/inetutils/>ダウンロード: <https://ftp.gnu.org/gnu/inetutils/inetutils-2.3.tar.xz>

MD5 sum: e73e2ed42d73ceb47616b20131236036

SHA256 sum:

• Intltool (0.51.0) - 159 KB:

ホームページ: <https://freedesktop.org/wiki/Software/intltool>ダウンロード: <https://launchpad.net/intltool/trunk/0.51.0/+download/intltool-0.51.0.tar.gz>

MD5 sum: 12e517cac2b57a0121cda351570f1e63

• IPRoute2 (5.19.0) - 872 KB:

ホームページ: <https://www.kernel.org/pub/linux/utils/net/iproute2/>ダウンロード: <https://www.kernel.org/pub/linux/utils/net/iproute2/iproute2-5.19.0.tar.xz>

MD5 sum: 415bd9eeb8515a585e245809d2fe45a6

• Jinja2 (3.1.2) - 262 KB:

ホームページ: <https://jinja.palletsprojects.com/en/3.0.x/>ダウンロード: <https://files.pythonhosted.org/packages/source/J/Jinja2/Jinja2-3.1.2.tar.gz>

MD5 sum: d31148abd89c1df1cdb077a55db27d02

• Kbd (2.5.1) - 1,457 KB:

ホームページ: <https://kbd-project.org/>ダウンロード: <https://www.kernel.org/pub/linux/utils/kbd/kbd-2.5.1.tar.xz>

MD5 sum: 10f10c0a9d897807733f2e2419814abb

• Kmod (30) - 555 KB:

ダウンロード: <https://www.kernel.org/pub/linux/utils/kernel/kmod/kmod-30.tar.xz>

MD5 sum: 85202f0740a75eb52f2163c776f9b564

• Less (590) - 348 KB:

ホームページ: <https://www.greenwoodsoftware.com/less/>ダウンロード: <https://www.greenwoodsoftware.com/less/less-590.tar.gz>

MD5 sum: f029087448357812fba450091a1172ab

• Libcap (2.65) - 176 KB:

ホームページ: <https://sites.google.com/site/fullycapable/>ダウンロード: <https://www.kernel.org/pub/linux/libs/security/linux-privils/libcap2/libcap-2.65.tar.xz>

MD5 sum: 3543e753dd941255c4def6cc67a462bb

• Libffi (3.4.2) - 1,320 KB:

ホームページ: <https://sourceware.org/libffi/>ダウンロード: <https://github.com/libffi/libffi/releases/download/v3.4.2/libffi-3.4.2.tar.gz>

MD5 sum: 294b921e6cf9ab0fbaea4b639f8fdb8

• Libpipeline (1.5.6) - 954 KB:

ホームページ: <http://libpipeline.nongnu.org/>ダウンロード: <https://download.savannah.gnu.org/releases/libpipeline/libpipeline-1.5.6.tar.gz>

MD5 sum: 829c9ba46382b0b3e12dd11fcbbc1bb27

• Libtool (2.4.7) - 996 KB:

ホームページ: <https://www.gnu.org/software/libtool/>ダウンロード: <https://ftp.gnu.org/gnu/libtool/libtool-2.4.7.tar.xz>

MD5 sum: 2fc0b6ddcd66a89ed6e45db28fa44232

- Linux (5.19.2) - 128,553 KB:

ホームページ: <https://www.kernel.org/>

ダウンロード: <https://www.kernel.org/pub/linux/kernel/v5.x/linux-5.19.2.tar.xz>

MD5 sum: 391274e2e49a881403b0ff2e0712bf82



注記

Linux カーネルはわりと頻繁に更新されます。多くの場合はセキュリティ脆弱性の発見によるものです。特に正誤情報 (errata) のページにて説明がない限りは、入手可能な最新安定版のカーネルを用いてください。あるいは errata に指示があればそれに従ってください。

低速度のネットワークや高負荷の帯域幅を利用するユーザーが Linux カーネルをアップデートしようとする場合は、同一バージョンのカーネルパッケージとそのパッチを個別にダウンロードする方法もあります。その場合、時間の節約を図ることができ、あるいはマイナーバージョンが同一であれば複数パッチを当ててアップグレードする作業時間の短縮が図れます。

- M4 (1.4.19) - 1,617 KB:

ホームページ: <https://www.gnu.org/software/m4/>

ダウンロード: <https://ftp.gnu.org/gnu/m4/m4-1.4.19.tar.xz>

MD5 sum: 0d90823e1426f1da2fd872df0311298d

- Make (4.3) - 2,263 KB:

ホームページ: <https://www.gnu.org/software/make/>

ダウンロード: <https://ftp.gnu.org/gnu/make/make-4.3.tar.gz>

MD5 sum: fc7a67ea86ace13195b0bce683fd4469

- Man-DB (2.10.2) - 1,860 KB:

ホームページ: <https://www.nongnu.org/man-db/>

ダウンロード: <https://download.savannah.gnu.org/releases/man-db/man-db-2.10.2.tar.xz>

MD5 sum: e327f7af3786d15e5851658ae7ef47ed

- Man-pages (5.13) - 1,752 KB:

ホームページ: <https://www.kernel.org/doc/man-pages/>

ダウンロード: <https://www.kernel.org/pub/linux/docs/man-pages/man-pages-5.13.tar.xz>

MD5 sum: 3ac24e8c6fae26b801cb87ceb63c0a30

- MarkupSafe (2.1.1) - 20 KB:

ホームページ: <https://palletsprojects.com/p/markupsafe/>

ダウンロード: <https://files.pythonhosted.org/packages/source/M/MarkupSafe/MarkupSafe-2.1.1.tar.gz>

MD5 sum: 9809f9fdd98bc835b0c21aa8f79cbf30

- Meson (0.63.1) - 2,016 KB:

ホームページ: <https://mesonbuild.com>

ダウンロード: <https://github.com/mesonbuild/meson/releases/download/0.63.1/meson-0.63.1.tar.gz>

MD5 sum: 078e59d11a72b74c3bd78cb8205e9ed7

- MPC (1.2.1) - 820 KB:

ホームページ: <http://www.multiprecision.org/>

ダウンロード: <https://ftp.gnu.org/gnu/mpc/mpc-1.2.1.tar.gz>

MD5 sum: 9f16c976c25bb0f76b50be749cd7a3a8

- MPFR (4.1.0) - 1,490 KB:

ホームページ: <https://www.mpfr.org/>

ダウンロード: <https://ftp.gnu.org/gnu/mpfr/mpfr-4.1.0.tar.xz>

MD5 sum: bdd3d5efba9c17da8d83a35ec552baef

- Ncurses (6.3) - 3,500 KB:

ホームページ: <https://www.gnu.org/software/ncurses/>

ダウンロード: <https://invisible-mirror.net/archives/ncurses/ncurses-6.3.tar.gz>

MD5 sum: a2736befde5fee7d2b7eb45eb281cdbe

- Ninja (1.11.0) - 228 KB:

ホームページ: <https://ninja-build.org/>

ダウンロード: <https://github.com/ninja-build/ninja/archive/v1.11.0/ninja-1.11.0.tar.gz>

MD5 sum: 7d1a1a2f5cdc06795b3054df5c17d5ef

- OpenSSL (3.0.5) - 14,722 KB:
 ホームページ: <https://www.openssl.org/>
 ダウンロード: <https://www.openssl.org/source/openssl-3.0.5.tar.gz>
 MD5 sum: 163bb3e58c143793d1dc6a6ec7d185d5
- Patch (2.7.6) - 766 KB:
 ホームページ: <https://savannah.gnu.org/projects/patch/>
 ダウンロード: <https://ftp.gnu.org/gnu/patch/patch-2.7.6.tar.xz>
 MD5 sum: 78ad9937e4caadcba1526ef1853730d5
- Perl (5.36.0) - 12,746 KB:
 ホームページ: <https://www.perl.org/>
 ダウンロード: <https://www.cpan.org/src/5.0/perl-5.36.0.tar.xz>
 MD5 sum: 826e42da130011699172fd655e49cf2
- Pkg-config (0.29.2) - 1,970 KB:
 ホームページ: <https://www.freedesktop.org/wiki/Software/pkg-config>
 ダウンロード: <https://pkg-config.freedesktop.org/releases/pkg-config-0.29.2.tar.gz>
 MD5 sum: f6e931e319531b736fad017f470e68a
- Procps (4.0.0) - 979 KB:
 ホームページ: <https://sourceforge.net/projects/procps-ng>
 ダウンロード: <https://sourceforge.net/projects/procps-ng/files/Production/procps-ng-4.0.0.tar.xz>
 MD5 sum: eedf93f2f6083afb72188018e1e5
- Psmisc (23.5) - 395 KB:
 ホームページ: <https://gitlab.com/psmisc/psmisc>
 ダウンロード: <https://sourceforge.net/projects/psmisc/files/psmisc/psmisc-23.5.tar.xz>
 MD5 sum: 014f0b5d5ab32478a2c57812ad01e1fb
- Python (3.10.6) - 19,142 KB:
 ホームページ: <https://www.python.org/>
 ダウンロード: <https://www.python.org/ftp/python/3.10.6/Python-3.10.6.tar.xz>
 MD5 sum: afc7e14f7118d10d1ba95ae8e2134bf0
- Python Documentation (3.10.6) - 7,321 KB:
 ダウンロード: <https://www.python.org/ftp/python/doc/3.10.6/python-3.10.6-docs-html.tar.bz2>
 MD5 sum: 8f32c4f4f0b18ec56e8b3822bbaeb017
- Readline (8.1.2) - 2,923 KB:
 ホームページ: <https://tiswww.case.edu/php/chet/readline/rltop.html>
 ダウンロード: <https://ftp.gnu.org/gnu/readline/readline-8.1.2.tar.gz>
 MD5 sum: 12819fa739a78a6172400f399ab34f81
- Sed (4.8) - 1,317 KB:
 ホームページ: <https://www.gnu.org/software/sed/>
 ダウンロード: <https://ftp.gnu.org/gnu/sed/sed-4.8.tar.xz>
 MD5 sum: 6d906edfdb3202304059233f51f9a71d
- Shadow (4.12.2) - 1,706 KB:
 ホームページ: <https://shadow-maint.github.io/shadow/>
 ダウンロード: <https://github.com/shadow-maint/shadow/releases/download/4.12.2/shadow-4.12.2.tar.xz>
 MD5 sum: 52637cb34c357acf85c617cf95da34a6
- Systemd (251) - 11,168 KB:
 ホームページ: <https://www.freedesktop.org/wiki/Software/systemd/>
 ダウンロード: <https://github.com/systemd/systemd/archive/v251/systemd-251.tar.gz>
 MD5 sum: 8090fcccc3a2ec20995e89d56fed61b1
- Systemd Man Pages(251) - 596 KB:
 ホームページ: <https://www.freedesktop.org/wiki/Software/systemd/>
 ダウンロード: <https://anduin.linuxfromscratch.org/LFS/systemd-man-pages-251.tar.xz>
 MD5 sum: 87053ffef1cfb74e4fe28f627e12a2a4



注記

Linux From Scratch チームは、systemd ソースにおいて提供される man ページの tarball を独自に生成しています。これは、不要な依存関係を取り除くためです。

• Tar (1.34) - 2,174 KB:

ホームページ: <https://www.gnu.org/software/tar/>

ダウンロード: <https://ftp.gnu.org/gnu/tar/tar-1.34.tar.xz>

MD5 sum: 9a08d29a9ac4727130b5708347c0f5cf

• Tcl (8.6.12) - 10,112 KB:

ホームページ: <http://tcl.sourceforge.net/>

ダウンロード: <https://downloads.sourceforge.net/tcl/tcl8.6.12-src.tar.gz>

MD5 sum: 87ea890821d2221f2ab5157bc5eb885f

• Tcl Documentation (8.6.12) - 1,176 KB:

ダウンロード: <https://downloads.sourceforge.net/tcl/tcl8.6.12-html.tar.gz>

MD5 sum: a0d1a5b60bbb68f2f0bd3066a19c527a

• Texinfo (6.8) - 4,848 KB:

ホームページ: <https://www.gnu.org/software/texinfo/>

ダウンロード: <https://ftp.gnu.org/gnu/texinfo/texinfo-6.8.tar.xz>

MD5 sum: a91b404e30561a5df803e6eb3a53be71

• Time Zone Data (2022c) - 423 KB:

ホームページ: <https://www.iana.org/time-zones>

ダウンロード: <https://www.iana.org/time-zones/repository/releases/tzdata2022c.tar.gz>

MD5 sum: 4e3b2369b68e713ba5d3f7456f20bfdb

• Util-linux (2.38.1) - 7,321 KB:

ホームページ: <https://git.kernel.org/pub/scm/utils/util-linux/util-linux.git/>

ダウンロード: <https://www.kernel.org/pub/linux/utils/util-linux/v2.38/util-linux-2.38.1.tar.xz>

MD5 sum: cd11456f4ddd31f7fbfd9488c0c0d02

• Vim (9.0.0228) - 16,372 KB:

ホームページ: <https://www.vim.org>

ダウンロード: <https://anduin.linuxfromscratch.org/LFS/vim-9.0.0228.tar.gz>

MD5 sum: bc7e0a4829d94bb4c03a7a6b4ad6a8cf



注記

vim のバージョンは日々更新されます。 最新版を入手するには <https://github.com/vim/vim/tags> にアクセスしてください。

• Wheel (0.37.1) - 65 KB:

ホームページ: <https://pypi.org/project/wheel/>

ダウンロード: <https://anduin.linuxfromscratch.org/LFS/wheel-0.37.1.tar.gz>

MD5 sum: f490f1399e5903706cb1d4fbed9ecb28

• XML::Parser (2.46) - 249 KB:

ホームページ: <https://github.com/chorny/XML-Parser>

ダウンロード: <https://cpan.metacpan.org/authors/id/T/T0/TODDR/XML-Parser-2.46.tar.gz>

MD5 sum: 80bb18a8e6240fcf7ec2f7b57601c170

• Xz Utils (5.2.6) - 1,234 KB:

ホームページ: <https://tukaani.org/xz>

ダウンロード: <https://tukaani.org/xz/xz-5.2.6.tar.xz>

MD5 sum: d9cd5698e1ec06cf638c0d2d645e8175

• Zlib (1.2.12) - 1,259 KB:

ホームページ: <https://www.zlib.net/>

ダウンロード: <https://zlib.net/zlib-1.2.12.tar.xz>

MD5 sum: 28687d676c04e7103bb6ff2b9694c471

• Zstd (1.5.2) - 1,892 KB:

ホームページ: <https://facebook.github.io/zstd/>

ダウンロード: <https://github.com/facebook/zstd/releases/download/v1.5.2/zstd-1.5.2.tar.gz>

MD5 sum: 072b10f71f5820c24761a65f31f43e73

全パッケージのサイズ合計: 約 472 MB

3.3. 必要なパッチ

パッケージに加えて、いくつかのパッチも必要となります。 それらのパッチはパッケージの不備をただすもので、本来なら開発者が修正すべきものです。 パッチは不備修正だけでなく、ちょっとした修正を施して扱いやすいものにする目的のものもあります。 以下に示すものが LFS システム構築に必要となるパッチすべてです。



日本語訳情報

各パッチに付けられている簡略な名称については、訳出せずそのまま表記することにします。

- Bzip2 Documentation Patch - 1.6 KB:

ダウンロード: https://www.linuxfromscratch.org/patches/lfs/11.2/bzip2-1.0.8-install_docs-1.patch

MD5 sum: 6a5ac7e89b791aae556de0f745916f7f

- Coreutils Internationalization Fixes Patch - 166 KB:

ダウンロード: <https://www.linuxfromscratch.org/patches/lfs/11.2/coreutils-9.1-i18n-1.patch>

MD5 sum: c1ac7edf095027460716577633da9fc5

- Glibc FHS Patch - 2.8 KB:

ダウンロード: <https://www.linuxfromscratch.org/patches/lfs/11.2/glibc-2.36-fhs-1.patch>

MD5 sum: 9a5997c3452909b1769918c759eff8a2

- Kbd Backspace/Delete Fix Patch - 12 KB:

ダウンロード: <https://www.linuxfromscratch.org/patches/lfs/11.2/kbd-2.5.1-backspace-1.patch>

MD5 sum: f75cca16a38da6caa7d52151f7136895

- Systemd Upstream Patch - 3.0 KB:

ダウンロード: https://www.linuxfromscratch.org/patches/lfs/11.2/systemd-251-glibc_2.36_fix-1.patch

MD5 sum: fd8dc901e73ad00dc72a351a0d4ac48c

- Zstd Upstream Fixes Patch - 4 KB:

ダウンロード: https://www.linuxfromscratch.org/patches/lfs/11.2/zstd-1.5.2-upstream_fixes-1.patch

MD5 sum: a7e576e3f87415fdf388392b257cdcf3

全パッチの合計サイズ: 約 189.4 KB

上に挙げた必須のパッチに加えて LFS コミュニティが提供する任意のパッチが数多くあります。 それらは微小な不備改修や、デフォルトでは利用できない機能を有効にするなどを行います。 <https://www.linuxfromscratch.org/patches/downloads/> にて提供しているパッチ類を確認してください。 そして自分のシステムにとって必要なものは自由に適用してください。

第4章 準備作業の仕上げ

4.1. はじめに

本章では一時システムをビルドするために、あともう少し作業を行います。 \$LFS ディレクトリ内に、一連のインストールディレクトリを作ります。 リスク軽減のために一般ユーザーを生成し、このユーザーにおいてのビルド環境を作ります。 また LFS パッケージ類の構築時間を測る手段として標準時間「SBUs」について説明し、各パッケージのテストスイートについて触れます。

4.2. LFS ファイルシステムの限定的なディレクトリレイアウトの生成

LFS パーティションに対して行う最初の作業は、限定的なディレクトリ階層を作り出すことです。 第 6 章（また glibc や libstdc++ においては 第 5 章）においてビルドするプログラムを、最終的なディレクトリにインストールするためです。 第 8 章 にある一時的なプログラムを、再構築して上書きしていくために必要となります。

必要となるディレクトリレイアウトを生成するため、root ユーザーになって以下を実行します。

```
mkdir -pv $LFS/{etc,var} $LFS/usr/{bin,lib,sbin}

for i in bin lib sbin; do
    ln -sv usr/$i $LFS/$i
done

case $(uname -m) in
    x86_64) mkdir -pv $LFS/lib64 ;;
esac
```

第 6 章 にあるプログラムはクロスコンパイラによってビルドされます。（詳しくは ツールチェーンの技術的情報を参照してください。）クロスコンパイラは他のプログラムとは切り分けるため、特別なディレクトリにインストールすることにします。 ここでそのディレクトリを生成します。

```
mkdir -pv $LFS/tools
```

4.3. LFS ユーザーの追加

root ユーザーでログインしていると、ちょっとした誤操作がもとで、システムを破壊する重大な事態につながることがあります。 そこでパッケージのビルドにあたっては通常のユーザー権限にて作業することにします。 あなた自身のユーザーを利用するのでも構いませんが、全く新しいユーザー環境として lfs というユーザーを作成するのが分かりやすいでしょう。 所属するグループも lfs という名で作成します。 ビルド作業においてはこのユーザーを利用していきます。

そこで root ユーザーになって、新たなユーザーを追加する以下のコマンドを実行します。

```
groupadd lfs
useradd -s /bin/bash -g lfs -m -k /dev/null lfs
```

コマンドラインオプションの意味

-s /bin/bash
lfs ユーザーが利用するデフォルトのシェルを bash にします。

-g lfs
lfs ユーザーのグループを lfs とします。

-m
lfs ユーザーのホームディレクトリを生成します。

-k /dev/null
このパラメータは、ディレクトリ名をヌルデバイス (null device) に指定しています。 こうすることでスケルトンディレクトリ（デフォルトは /etc/skel）からのファイル群のコピーを無効とします。

lfs
生成するユーザーの名称を与えます。

`lfs` ユーザーとしてログインするために `lfs` に対するパスワードを設定します。 (root ユーザーでログインしている時に `lfs` へのユーザー切り替えを行なう場合には `lfs` ユーザーのパスワードは設定しておく必要はありません。)

passwd lfs

\$LFS ディレクトリの所有者を `lfs` ユーザーとすることで、このディレクトリ配下の全ディレクトリへのフルアクセス権を設定します。

```
chown -v lfs $LFS/{usr{,/*},lib,var,etc,bin,sbin,tools}
case $(uname -m) in
  x86_64) chown -v lfs $LFS/lib64 ;;
esac
```



注記

ホストシステムによっては、以下のコマンドを実行しても正常に処理されず、`lfs` ユーザーへのログインがバックグラウンドで処理中のままとなってしまうことがあります。プロンプトに "lfs:~\$" という表示がすぐに現れなかつた場合は、`fg` コマンドを入力することで解決するかもしれません。

`lfs` でログインします。これはディスプレイメーディヤーを通じて仮想端末を用いることができます。また以下のユーザー変更コマンドを用いるのでも構いません。

su - lfs

パラメーター「-」は `su` コマンドの実行において、非ログイン (non-login) シェルではなく、ログインシェルを起動することを指示します。ログインシェルとそうでないシェルの違いについては `bash(1)` や `info bash` を参照してください。

4.4. 環境設定

作業しやすい動作環境するために `bash` シェルに対するスタートアップファイルを二つ作成します。`lfs` ユーザーでログインして、以下のコマンドによって `.bash_profile` ファイルを生成します。

```
cat > ~/.bash_profile << "EOF"
exec env -i HOME=$HOME TERM=$TERM PS1='\u:\w\$ ' /bin/bash
EOF
```

`lfs` ユーザーとしてログインした時、起動されるシェルは普通はログインシェルとなります。この時、ホストシステムの `/etc/profile` ファイル（おそらく環境変数がいくつか定義されている）と `.bash_profile` が読み込まれます。`.bash_profile` ファイル内の `exec env -i.../bin/bash` というコマンドが、起動しているシェルを全くの空の環境として起動し直し `HOME`、`TERM`、`PS1` という環境変数だけを設定します。これはホストシステム内の不要な設定や危険をはらんだ設定を、ビルド環境に持ち込まないようにするためにです。このようにすることできれいな環境作りを実現できます。

新しく起動するシェルはログインシェルではなくなります。したがってこのシェルは `/etc/profile` ファイルや `.bash_profile` ファイルの内容を読み込んで実行することではなく、代わりに `.bashrc` ファイルを読み込んで実行します。そこで以下のようにして `.bashrc` ファイルを生成します。

```
cat > ~/.bashrc << "EOF"
set +h
umask 022
LFS=/mnt/lfs
LC_ALL=POSIX
LFS_TGT=$(uname -m)-lfs-linux-gnu
PATH=/usr/bin
if [ ! -L /bin ]; then PATH=/bin:$PATH; fi
PATH=$LFS/tools/bin:$PATH
CONFIG_SITE=$LFS/usr/share/config.site
export LFS LC_ALL LFS_TGT PATH CONFIG_SITE
EOF
```

.bashrc 内の設定の意味

`set +h`
`set +h` コマンドは `bash` のハッシュ機能を無効にします。通常このハッシュ機能は有用なものです。実行ファイルのフルパスをハッシュテーブルに記憶しておき、再度そのパスを探し出す際に `PATH` 変数の探査を省略します。しか

しこれより作り出すツール類はインストール直後にすぐ利用していきます。 ハッシュ機能を無効にすることで、プログラム実行が行われる際に、シェルは必ず PATH を探しにいきます。 つまり \$LFS/tools/bin ディレクトリ以下に新たに構築したツール類は必ず実行されるようになるわけです。 そのツールの古いバージョンがホストディストリビューションのディレクトリ、/usr/bin または /bin にあつたとしても、その場所を覚えていて実行されるということがなくなります。

```
umask 022
```

ユーザーのファイル生成マスク (file-creation mask; umask) を 022 にセットするのは、新たなファイルやディレクトリの生成はその所有者にのみ許可し、他者は読み取りと実行を可能とするためです。 (システムコール open(2) にてデフォルトモードが適用される場合、新規生成ファイルのパーミッションモードは 644、同じくディレクトリは 755 となります。)

```
LFS=/mnt/lfs
```

環境変数 LFS は常に指定したマウントポイントを指し示すように設定します。

```
LC_ALL=POSIX
```

LC_ALL 変数は特定のプログラムが扱う国情情報を制御します。 そのプログラムが output するメッセージを、指定された国情情報に基づいて構成します。 LC_ALL 変数は「POSIX」か「C」にセットしてください。 (両者は同じです。) そのようにセットしておけば、chroot 環境下での作業が問題なく進められます。

```
LFS_TGT=(uname -m)-lfs-linux-gnu
```

LFS_TGT 変数は標準がないマシン名称を設定します。 しかしこれはこの先、クロスコンパイラーやクロスリンクの構築、これを用いたツールチェーンの構築の際に、うまく動作させるための設定です。 詳しくは ツールチェーンの技術的情報にて説明しているので参照してください。

```
PATH=/usr/bin
```

最近の Linux ディストリビューションでは /bin と /usr/bin をマージしているものが多くあります。 その場合、第 6 章 に対しての標準の PATH 変数は /usr/bin/ に設定するだけで十分です。 そうでない場合は、パスに対して /bin を加える必要があります。

```
if [ ! -L /bin ]; then PATH=/bin:$PATH; fi
```

/bin がシンボリックリンクではないは PATH 変数に加える必要があります。

```
PATH=$LFS/tools/bin:$PATH
```

\$LFS/tools/bin ディレクトリを PATH 変数の先頭に設定します。 第 5 章の冒頭においてインストールしたクロスコンパイラーは、インストールした直後からシェル上から実行できるようになります。 この設定を行うことで、ハッシュ機能をオフにしたことと連携して、ホスト上のコンパイラーアーが利用されないようにします。

```
CONFIG_SITE=$LFS/usr/share/config.site
```

第 5 章と第 6 章においてこの変数を設定しておかないと、ディストリビューションによっては configure スクリプトが、ホストシステム上の /usr/share/config.site から設定項目を取得してしまうことがあります。 ホストの影響が及ばないようにここでオーバーライドします。

```
export ...
```

上のコマンド実行は、設定済の変数を改めて設定するものになりますが、シェルを新たに呼び出しても確実に設定されるようにエクスポートを行うことにします。

重要

商用ディストリビューションの中には、bash の初期化を行うスクリプトとして、ドキュメント化されていない /etc/bash.bashrc というものを加えているものがあります。 このファイルは lfs ユーザー環境を修正してしまう可能性があります。 それにより LFS にとっての重要なパッケージのビルドに支障をきたすことがあります。 lfs ユーザー環境をきれいに保つため、/etc/bash.bashrc というファイルが存在しているかどうかを確認してください。 そして存在していたらファイルを移動させてください。 root ユーザーになって以下を実行します。

```
[ ! -e /etc/bash.bashrc ] || mv -v /etc/bash.bashrc /etc/bash.bashrc.NOUSE
```

第 7 章 の冒頭において lfs ユーザーの利用を終えたとき（必要であれば）/etc/bash.bashrc を元に戻してください。

なお 「Bash-5.1.16」 においてビルドした、LFS における Bash パッケージは、/etc/bash.bashrc をロードしたり読み取ったりするように設定されていません。 したがって完璧な LFS システムであれば、このファイルは不要なものです。

一時的なツールを構築する準備の最後として、今作り出したユーザープロファイルを source によって取り込みます。

```
source ~/.bash_profile
```

4.5. SBU 値について

各パッケージをコンパイルしインストールするのにどれほどの時間を要するか、誰しも知りたくなるところです。しかし Linux From Scratch は数多くのシステム上にて構築可能であるため、正確な処理時間を見積ることは困難です。最も大きなパッケージ (Glibc) の場合、処理性能の高いシステムでも 20 分はかかります。それが性能の低いシステムとなると 3 日はかかるかもしれません！本書では処理時間を正確に示すのではなく、標準ビルト単位 (Standard Build Unit; SBU) を用いることにします。

SBU の測定は以下のようにします。本書で最初にコンパイルするのは 第 5 章における binutils です。このパッケージのコンパイルに要する時間を標準ビルト時間とし、他のコンパイル時間はその時間からの相対時間として表現します。

例えばあるパッケージのコンパイル時間が 4.5 SBU であったとします。そして binutils の 1 回目のコンパイルが 10 分であったとすると、そのパッケージは およそ 45 分かかると意味しています。幸いにも、たいていのパッケージは binutils よりもコンパイル時間は短いものです。

一般にコンパイル時間は、例えばホストシステムの GCC のバージョンの違いなど、多くの要因に左右されるため SBU 値は正確なものになりません。SBU 値は、インストールに要する時間の目安を示すものに過ぎず、場合によっては十数分の誤差が出ることもあります。



注記

最新のシステムは複数プロセッサー（デュアルコアとも言います）であることが多く、パッケージのビルトにあたっては「同時並行のビルト」によりビルト時間を削減できます。その場合プロセッサー数がいくつなのかを環境変数に指定するか、あるいは make プログラムの実行時に指定する方法があります。例えば Intel i5-6500 CPU であれば、以下のようにして同時並行の 4 つのプロセスを実行することができます。

```
export MAKEFLAGS=' -j4 '
```

あるいはビルト時の指定として以下のようにすることもできます。

```
make -j4
```

上のようにして複数プロセッサーが利用されると、本書に示している SBU 単位は、通常の場合に比べて大きく変化します。そればかりか場合により make 処理に失敗することもあります。したがってビルト結果を検証するにしても話が複雑になります。複数のプロセスラインがインターリーブにより多重化されるためです。ビルト時に何らかの問題が発生したら、单一プロセッサー処理を行ってエラーメッセージを分析してください。

4.6. テストスイートについて

各パッケージにはたいていテストスイートがあります。新たに構築したパッケージに対してはテストスイートを実行しておくのがよいでしょう。テストスイートは「健全性検査 (sanity check)」を行い、パッケージのコンパイルが正しく行われたことを確認します。テストスイートの実行によりいくつかのチェックが行われ、開発者の意図したとおりにパッケージが正しく動作することを確認していきます。ただこれは、パッケージにバグがないことを保証するものではありません。

テストスイートの中には他のものにも増して重要なものがあります。例えば、ツールチェーンの要である GCC、binutils、glibc に対するテストスイートです。これらのパッケージはシステム機能を確実なものとする重要な役割を担うものであるためです。GCC と glibc におけるテストスイートはかなりの時間を要します。それが低い性能のマシンであればなおさらです。でもそれらを実行しておくことを強く推奨します。



注記

第 5 章と第 6 章においてテストスイートを実行することはできません。各プログラムはクロスコンパイラーによってコンパイルされているので、ビルトしているホスト上での実行が対応できないためです。

binutils と GCC におけるテストスイートの実行では、擬似端末 (pseudo terminals; PTY) を使い尽くす問題が発生します。これにより相当数のテストが失敗します。これが発生する理由はいくつかありますが、もっともありがちな理由としてはホストシステムの devpts ファイルシステムが正しく構成されていないことがあります。この点については <https://www.linuxfromscratch.org/lfs/faq.html#no-ptys> においてかなり詳しく説明しています。

パッケージの中にはテストスイートに失敗するものがあります。しかしこれらは開発元が認識しているもので致命的なものではありません。以下の <https://www.linuxfromscratch.org/lfs/build-logs/11.2/> に示すログを参照して、失敗したテストが実は予期されているものであるかどうかを確認してください。このサイトは本書におけるすべてのテストスイートの正常な処理結果を示すものです。

第III部 LFS クロスチェー ンと一時的ツールの構築

重要な準備事項

はじめに

この部は 3 つのステージに分かれています。1 つめはクロスコンパイラと関連ライブラリをビルドします。2 つめはそのクロスコンパイラを使って、ホストのパッケージからは切り離された形で、各種ユーティリティーをビルドします。そして 3 つめでは chroot 環境に入ることで、さらにホスト環境から離れて、最終システムをビルドするために必要となる残りのツール類をビルドします。



重要

この部から、新システムのビルドに向けた本格的作業を開始します。ここではより注意深く、本書が示す手順どおりに作業を進めていくことが必要です。そこで何を行っているのかを十分に理解するようにしてください。これはビルドを完成させたいという思いとは別の話です。ただ単に書かれている内容を入力するだけの作業はやめてください。わかつていなきことがあれば、しっかりと本書を読むようにしてください。また入力した内容やコマンドの処理結果は、ファイル出力を行うなどして記録するようにしてください。tee ユーティリティーを使うことには、何かおかしなことにならぬよう調べられます。

次の節では、ビルド過程における技術的な情報を示します。それに続く節では、極めて重要な全般的なコンパイル手順を示しています。

ツールチェーンの技術的情報

本節ではシステムをビルドする原理や技術的な詳細について説明します。この節のすべてをすぐに理解する必要はありません。この先、実際の作業を行っていけば、いろいろな情報が明らかになってくるはずです。各作業を進めながら、いつでもこの節に戻って読み直してみてください。

第 5 章と第 6 章の最終目標は一時的なシステム環境を構築することです。この一時的なシステムはシステム構築のための十分なツール類を有していて、ホストシステムとは切り離されたものです。この環境へは chroot によって移行します。この環境は第 8 章において、クリーンでトラブルのない LFS システムの構築を行う土台となるものです。構築手順の説明においては、初心者の方であっても失敗を最小限にとどめ、同時に最大限の学習材料となるように心がけています。

ビルド過程はクロスコンパイルを基本として行います。通常クロスコンパイルとは、ビルドを行うマシンとは異なるマシン向けにコンパイラーや関連ツールチェーンをビルドすることです。これは厳密には LFS に必要なものではありません。というのも新たに作り出すシステムは、ビルドを使ったマシンと同一環境で動かすことにしておいたためです。しかしクロスコンパイルには大きな利点があって、クロスコンパイルによってビルドしたものは、ホスト環境上にはまったく依存できないものとなります。

クロスコンパイルについて



注記

LFS はクロスツールチェーン（あるいはネイティブツールチェーン）のビルドを説明する書ではなく、その説明は行っていません。クロスツールチェーンは、LFS のビルドとは異なる別の目的で用いるものであるため、何を行っているのかが十分に分かっていないまま、クロスチェーン向けのコマンドを利用することは避けてください。

クロスコンパイルには必要な捉え方があって、それだけで 1 つの節を当てて説明するだけの価値があるものです。初めて読む方は、この節を読み飛ばしてかまいません。ただしビルド過程を十分に理解するためには、後々この節に戻ってきて読んで頂くことをお勧めします。

ここにおいて取り上げる用語を定義しておきます。

ビルド (build)

ビルド作業を行うマシンのこと。他の節においてこのマシンは”ホスト (host) ”と呼ぶこともあります。

ホスト (host)

ビルドされたプログラムを実行するマシンまたはシステムのこと。ここでいう”ホスト”とは、他の節でいうものと同一ではありません。

ターゲット (target)

コンパイラーにおいてのみ用いられます。 コンパイラーの生成コードを必要とするマシンのこと。 これはビルドやホストとは異なることもあります。

例として以下のシナリオを考えてみます。 (これはよく "カナディアンクロス (Canadian Cross)" とも呼ばれるものです。) コンパイラーが低速なマシン上にだけあるとします。 これをマシン A と呼び、コンパイラーは ccA とします。 これとは別に高速なマシン (マシン B) があって、ただしそこにはコンパイラーがありません。 そしてここから作り出すプログラムコードは、まったく別の低速マシン (マシン C) 向けであるとします。 マシン C 向けにコンパイラーをビルドするためには、以下の 3 つの段階を経ることになります。

段階	ビルド	ホスト	ターゲット	作業
1	A	A	B	マシン A 上の ccA を使い、クロスコンパイラー cc1 をビルド。
2	A	B	C	マシン A 上の cc1 を使い、クロスコンパイラー cc2 をビルド。
3	B	C	C	マシン B 上の cc2 を使い、コンパイラー ccC をビルド。

マシン C 上で必要となる他のプログラムは、高速なマシン B 上において cc2 を用いてコンパイルすることができます。 マシン B がマシン C 向けのプログラムを実行できなかつたとすると、マシン C そのものが動作するようにならない限り、プログラムのビルドやテストは一切できないことになります。 たとえば ccC をテストするには、以下の 4 つめの段階が必要になります。

段階	ビルド	ホスト	ターゲット	作業
4	C	C	C	マシン C 上にて ccC を使い ccC そのものの再ビルドとテストを実施。

上の例において cc1 と cc2 だけがクロスコンパイラーです。 つまりこのコンパイラーは、これを実行しているマシンとは別のマシンに対するコードを生成できるものです。 これに比べて ccA と ccC というコンパイラーは、実行しているマシンと同一マシン向けのコードしか生成できません。 そういうコンパイラーのことをネイティブコンパイラーと呼びます。

LFS におけるクロスコンパイラの実装方法



注記

ほぼすべてのビルドシステムにおいては、cpu-vendor-kernel-os という形式のマシントリプレット (triplet) と呼ばれる名称が用いられます。お気づきのことと思いますが、なぜ”トリプレット”といいながら 4 つの項目からなる名前なのでしょう。その理由はこれまでの経緯にあります。当初は 3 つの項目による名前を使っていれば、マシンを間違なく特定できるものでした。しかし新たなマシン、新たなシステムが登場するようになって、これでは不十分であることがわかりました。”トリプレット”という語だけが残ったわけです。マシンのトリプレットを確認する一番簡単な方法は、config.guess スクリプトを実行することです。これは多くのパッケージのソースに含まれています。binutils のソースを伸張（解凍）し、この ./config.guess スクリプトを実行して、その出力を確認してください。たとえば 32 ビットのインテルプロセッサーであれば、i686-pc-linux-gnu と出力されます。64 ビットシステムであれば x86_64-pc-linux-gnu となります。

またプラットフォームのダイナミックリンクラーの名前にも注意してください。これはダイナミックローダーとも呼ばれます。（binutils の一部である標準リンクラー ld とは別ものですから混同しないでください。）

ダイナミックリンクラーは Glibc によって提供されているもので、何かのプログラムが必要とする共有ライブラリを検索しロードします。そして実行できるような準備を行って、実際に実行します。32 ビットインテルマシンに対するダイナミックリンクラーの名前は ld-linux.so.2 となります。（64 ビットシステムであれば ld-linux-x86-64.so.2 となります。）ダイナミックリンクラーの名前を確実に決定するには、何でもよいのでホスト上の実行モジュールを調べます。readelf -l <name of binary> | grep interpreter というコマンドを実行することです。出力結果を見てください。どのようなプラットフォームであっても確実な方法は、shlib-versions というファイルを見てみることです。これは Glibc ソースツリーのルートに存在しています。

LFS ではクロスコンパイルに似せた作業を行うため、ホストのトリプレットを多少調整します。LFS_TGT 変数において “vendor” 項目を変更します。またクロスリンクーやクロスコンパイラを生成する際には --with-sysroot オプションを利用します。これはホスト内に必要となるファイルがどこにあるかを指示するものです。第 6 章においてビルドされる他のプログラムが、ビルドマシンのライブラリにリンクできないようにするためにです。以下の 2 段階は必須ですが、最後の 1 つはテスト用です。

段階	ビルド	ホスト	ターゲット	作業
1	pc	pc	lfs	pc 上の cc-pc を使い、クロスコンパイラ cc-lfs をビルド。
2	pc	lfs	lfs	pc 上の cc-lfs を使い、クロスコンパイラ cc-lfs をビルド。
3	lfs	lfs	lfs	lfs 上の cc-lfs を使い cc-lfs そのものの再ビルドとテストを実施。

上の表において ”pc 上の” というのは、すでにそのディストリビューションにおいてインストールされているコマンドを実行することを意味します。また ”lfs 上の” とは、chroot 環境下にてコマンドを実行することを意味します。

さてクロスコンパイルに関しては、まだまだあります。 C 言語というと単にコンパイラーがあるだけではなく、標準ライブラリも定義しています。本書では glibc と呼ぶ GNU C ライブラリを用いています。このライブラリは lfs マシン向けにコンパイルされたものでなければなりません。つまりクロスコンパイラ ccl を使うということです。しかしコンパイラーには内部ライブラリというものがあって、アセンブラー命令セットだけでは利用できない複雑な命令が含まれます。その内部ライブラリは libgcc と呼ばれ、完全に機能させるには glibc ライブラリにリンクさせなければなりません。さらに C++ (libstdc++) に対する標準ライブラリも、glibc にリンクさせる必要があります。このようなニワトリと卵の問題を解決するには、まず libgcc に基づいた低機能版の ccl をビルドします。この ccl にはスレッド処理や例外処理といった機能が含まれていません。その後に、この低機能なコンパイラーを使って glibc をビルドします。

(glibc 自体は低機能ではありません。) そして libstdc++ をビルドします。 libstdc++ もやはり、libgcc と同じく機能がいくつか欠如しています。

これで話が終わるわけではありません。上の段落における結論は以下のようになります。 ccl からは完全な libstdc++ はビルドできないということです。しかし第 2 段階においては、C/C++ ライブラリをビルドできる唯一のコンパイラーです。もちろん第 2 段階においてビルドされるコンパイラー cc-lfs は、それらライブラリをビルドできます。しかし (1) GCC ビルドシステムは、それが pc 上で利用できるかどうかわかりません、そして (2) pc 上にてそれを使うと pc 内のライブラリにリンクしてしまうリスクがあります。なぜなら cc-lfs はネイティブコンパイラーであるからです。そこで libstdc++ は、後々 chroot 環境内でビルドしなければならないのです。

その他の手順詳細

クロスコンパイラーは、他から切り離された \$LFS/tools ディレクトリにインストールされます。このクロスコンパイラーは、最終システムに含めるものではないからです。

binutils をまず初めにインストールします。この後の GCC や Glibc の configure スクリプトの実行ではアセンブラーとリンクアダプタに対するさまざまな機能テストが行われるために、そこではどの機能が利用可能または利用不能であるかが確認されます。ただ重要なのは binutils を一番初めにビルドするという点だけではありません。GCC や Glibc の configure が正しく処理されなかったとすると、ツールチェーンがわずかながらも不完全な状態で生成されてしまいます。この状態は、すべてのビルド作業を終えた最後になって、大きな不具合となって現れてくることになります。テストスイートを実行することが欠かせません。これを実行しておけば、この先に行う多くの作業に入る前に不備があることが分かるからです。

Binutils はアセンブラーとリンクアダプタを二箇所にインストールします。\$LFS/tools/bin と \$LFS/tools/\$LFS_TGT/bin です。これらは一方が他方のハードリンクとなっています。リンクアダプタの重要なところはライブラリを検索する順番です。ld コマンドに --verbose オプションをつけて実行すれば詳しい情報が得られます。例えば \$LFS_TGT-ld --verbose | grep SEARCH を実行すると、検索するライブラリのパスとその検索順を示してくれます。ダミープログラムをコンパイルして ld に --verbose オプションをつけてリンクを行うと、どのファイルがリンクされたかが分かります。

例えば \$LFS_TGT-gcc dummy.c -Wl,--verbose 2>&1 | grep succeeded と実行すれば、リンクアダプタの処理中にオープンに成功したファイルがすべて表示されます。

次にインストールするのは GCC です。configure の実行時には以下のような出力が行われます。

```
checking what assembler to use... /mnt/lfs/tools/i686-lfs-linux-gnu/bin/as
checking what linker to use... /mnt/lfs/tools/i686-lfs-linux-gnu/bin/ld
```

これを示すのには重要な意味があります。GCC の configure スクリプトは、利用するツール類を探し出す際に PATH ディレクトリを参照していないということです。しかし gcc の実際の処理にあたっては、その検索パスが必ず使われるわけでもありません。gcc が利用する標準的なリンクアダプタを確認するには gcc -print-prog-name=ld を実行します。

さらに詳細な情報を知りたいときは、ダミープログラムをコンパイルする際に -v オプションをつけて実行します。例えば gcc -v dummy.c と入力すると、プリプロセッサー、コンパイル、アセンブルの各処理工程が示されますが、さらに gcc がインクルードした検索パスとその読み込み順も示されます。

次に健全化された (sanitized) Linux API ヘッダーをインストールします。これにより、標準 C ライブラリ (Glibc) が Linux カーネルが提供する機能とのインターフェースを可能とします。

次のパッケージは Glibc です。Glibc 構築の際に気にかけるべき重要なものは、コンパイラー、バイナリツール、カーネルヘッダーです。コンパイラーについては、一般にはあまり問題にはなりません。Glibc は常に configure スクリプトにて指定される --host パラメーターに関連づけしたコンパイラーを用いるからです。我々の作業においてそのコンパイラーとは \$LFS_TGT-gcc になります。バイナリツールとカーネルヘッダーは多少複雑です。従って無理なことはせずに有効な configure オプションを選択することが必要です。configure 実行の後は build ディレクトリにある config.make ファイルに重要な情報が示されているので確認してみてください。なお CC="\$LFS_TGT-gcc" とすれば、(\$LFS_TGT が展開されて) どこにある実行モジュールを利用するかを制御でき -nostdinc と -isystem を指定すれば、コンパイラーに対してインクルードファイルの検索パスを制御できます。これらの指定は Glibc パッケージの重要な面を示しています。Glibc がビルドされるメカニズムは自己完結したビルドが行われるものであり、ツールチェーンのデフォルト設定には基本的に依存しないことを示しています。

すでに述べたように、標準 C++ ライブラリはこの後でコンパイルします。そして 第 6 章では、プログラムそれ自身を必要としているプログラムをすべてビルドしていきます。そのようなパッケージのインストール手順においては DESTDIR 変数を使い、LFS ファイルシステム内にインストールします。

第 6 章の最後には、LFS のネイティブコンパイラーをインストールします。はじめに DESTDIR を使って binutils 2 回めをビルドし、他のプログラムにおいてもおなじようにインストールを行います。2 回めとなる GCC ビルドでは、libstdc++ や不要なライブラリは省略します。GCC の configure スクリプトにはハードコーディングされている部分があるので、CC_FOR_TARGET はホストのターゲットが同じであれば cc になります。しかしビルドシステムにおいては異なります。そこで configure オプションには CC_FOR_TARGET=\$LFS_TGT-gcc を明示的に指定するようにしています。

第 7 章での chroot による環境下では、最初の作業は libstdc++ をビルドすることです。そして各種プログラムのインストールを、ツールチェーンを適切に操作しながら実施していきます。これ以降、コアとなるツールチェーンは自己完結していきます。そしてシステムの全機能を動作させるための全パッケージの最終バージョンを、ビルドしテストしインストールします。

全般的なコンパイル手順

パッケージをビルドしていく際には、以下に示す内容を前提とします：

- パッケージの中には、コンパイルする前にパッチを当てるものがあります。パッチを当てるのは、そのパッケージが抱える問題を回避するためです。本章と後続の章でパッチを当てるものがあり、あるいは本章と後続の章のいずれか一方でパッチを当てるものもあります。したがってパッチをダウンロードする説明が書かれていなければ、何も気にせず先に進んでください。パッチを当てた際に offset や fuzz といった警告メッセージが出る場合がありますが、これらは気にしないでください。このような時でもパッチは問題なく適用されています。
- コンパイルの最中に、警告メッセージが画面上に出力されることがよくあります。これは問題はないため無視して構いません。警告メッセージは、メッセージ内に説明されているように、C や C++ の文法が誤りではないものの推奨されていないものであることを示しています。C 言語の標準はよく変更されますが、パッケージの中には古い基準に従っているものもあります。問題はないのですが、警告として画面表示されることになるわけです。
- もう一度、環境変数 LFS が正しく設定されているかを確認します。

```
echo $LFS
```

上の出力結果が LFS パーティションのマウントポイントのディレクトリであることを確認してください。本書では /mnt/lfs ディレクトリとして説明しています。

- 最後に以下の二つの点にも注意してください。

重要

ビルドにあたっては ホストシステム要件にて示す要件やシンボリックリンクが、正しくインストールされていることを前提とします。

- bash シェルの利用を想定しています。
- sh は bash へのシンボリックリンクであるものとします。
- /usr/bin/awk は gawk へのシンボリックリンクであるものとします。
- /usr/bin/yacc は bison へのシンボリックリンクであるか、あるいは bison を実行するためのスクリプトであるものとします。



重要

ビルド作業では以下の点が重要です。

1. ソースやパッチファイルを配置するディレクトリは `/mnt/lfs/sources/` などのように chroot 環境でもアクセスが出来るディレクトリとしてください。
2. ソースディレクトリに入ります。
3. 各パッケージについて：
 - a. tar コマンドを使ってパッケージの tarball を伸張（解凍）します。第 5 章と第 6 章では、パッケージを伸張（解凍）するのは lfs ユーザーとします。

パッケージ tarball はどこか別ディレクトリにあってもかまいませんが、ソースツリーをどこか別の場所でビルドする方法についてはサポートしていません。特にどこか別に配置しているソースコードを `cp -R` を使ってコピーすると、ソースツリー内のリンクやタイムスタンプを壊しかねません。 そうなるとビルドの失敗に通じることになります。

- b. パッケージの伸張（解凍）後に生成されたディレクトリに入ります。
- c. 本書の手順に従ってビルド作業を行っていきます。
- d. ソースディレクトリに戻ります。
- e. ビルド作業を通じて生成されたパッケージディレクトリを削除します。

第5章 クロスツールチェーンの構築

5.1. はじめに

本章ではクロスコンパイラーと関連ツールのビルド方法を示します。 ここでのクロスコンパイルは見せかけですが、その原理は本当のクロスツールチェーンと同じです。

本章にてビルドされるプログラムは `$LFS/tools` ディレクトリにインストールされます。 これはそれ以降にインストールされるファイルとは区別されます。 一方でライブラリについては、ビルドしたいシステムに適合するように最終的な場所にインストールします。

5.2. Binutils-2.39 - 1回め

Binutils パッケージは、リンクやアセンブラーなどのようにオブジェクトファイルを取り扱うツール類を提供します。

概算ビルト時間: 1 SBU
必要ディスク容量: 629 MB

5.2.1. クロスコンパイル版 Binutils のインストール



注記

全般的なコンパイル手順 と書かれた節に戻って再度説明をよく読み、重要事項として説明している内容をよく理解しておいてください。 そうすればこの後の無用なトラブルを減らすことができるはずです。

Binutils は一番最初にビルトするパッケージです。 ここでビルトされるリンクやアセンブラーを使って、Glibc や GCC のさまざまな機能が利用できるかどうかを判別することになります。

Binutils のドキュメントでは Binutils をビルトする際に、ビルト専用のディレクトリを使ってビルトすることを推奨しています。

```
mkdir -v build
cd      build
```



注記

本節以降で SBU 値を示していきます。 これを活用していくなら、本パッケージの `configure` から初めのインストールまでの処理時間を計測しましょう。 具体的には処理コマンドを `time` で囲んで `time { ... /configure ... && make && make install; }` と入力すれば実現できます。

Binutils をコンパイルするための準備をします。:

```
../configure --prefix=$LFS/tools \
            --with-sysroot=$LFS \
            --target=$LFS_TGT \
            --disable-nls \
            --enable-gprofng=no \
            --disable-werror
```

`configure` オプションの意味

`--prefix=$LFS/tools`

`configure` スクリプトに対して binutils プログラムを `$LFS/tools` ディレクトリ以下にインストールすることを指示します。

`--with-sysroot=$LFS`

クロスコンパイル時に、ターゲットとして必要となるシステムライブラリを `$LFS` より探し出すことを指示します。

`--target=$LFS_TGT`

変数 `LFS_TGT` に設定しているマシン名は `config.guess` スクリプトが返すものとは微妙に異なります。 そこでこのオプションは、binutils のビルトにあたってクロスリンクをビルトするように `configure` スクリプトに指示するものです。

`--disable-nls`

一時的なツール構築にあたっては i18n 国際化は行わないことを指示します。

`--enable-gprofng=no`

これは gprofng のビルトを無効にします。 gprofng は一時的ツールにおいては不要であるからです。

`--disable-werror`

ホストのコンパイラが警告を発した場合に、ビルトが中止するがないようにします。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

本パッケージの詳細は 「Binutils の構成」 を参照してください。

5.3. GCC-12.2.0 - 1回め

GCC パッケージは C コンパイラーや C++ コンパイラーなどの GNU コンパイラーコレクションを提供します。

概算ビルト時間: 12 SBU
必要ディスク容量: 3.8 GB

5.3.1. クロスコンパイル版 GCC のインストール

GCC は GMP、MPFR、MPC の各パッケージを必要とします。これらのパッケージはホストシステムに含まれていないかかもしれないため、以下を実行してビルトの準備をします。個々のパッケージを GCC ソースディレクトリの中に伸張（解凍）し、ディレクトリ名を変更します。これは GCC のビルト処理においてそれらを自動的に利用できるようにするためです。



注記

本節においては誤解が多く発生しています。ここでの手順は他のものと同様であり、手順の概要（パッケージビルト手順）は説明済です。まず初めに gcc の tarball を伸張（解凍）し、生成されたソースディレクトリに移動します。それに加えて本節では、以下の手順を行うものとなります。

```
tar -xf ../mpfr-4.1.0.tar.xz
mv -v mpfr-4.1.0 mpfr
tar -xf ../gmp-6.2.1.tar.xz
mv -v gmp-6.2.1 gmp
tar -xf ../mpc-1.2.1.tar.gz
mv -v mpc-1.2.1 mpc
```

x86_64 ホストにおいて、64 ビットライブラリに対するデフォルトのディレクトリ名は「lib」です。

```
case $(uname -m) in
  x86_64)
    sed -e '/m64=/s/lib64/lib/' \
          -i.orig gcc/config/i386/t-linux64
  ;;
esac
```

GCC のドキュメントでは、専用のビルトディレクトリを作成することが推奨されています。

```
mkdir -v build
cd      build
```

GCC をコンパイルするための準備をします。

```
../configure \
--target=$LFS_TGT \
--prefix=$LFS/tools \
--with-glibc-version=2.36 \
--with-sysroot=$LFS \
--with-newlib \
--without-headers \
--disable-nls \
--disable-shared \
--disable-multilib \
--disable-decimal-float \
--disable-threads \
--disable-libatomic \
--disable-libgomp \
--disable-libquadmath \
--disable-libssp \
--disable-libvtv \
--disable-libstdcxx \
--enable-languages=c,c++
```

configure オプションの意味

--with-glibc-version=2.36

このオプションは、ターゲットにおいて用いられることになる glibc のバージョンを指定します。これはホストディストリビューションにある libc のバージョンとは関係がありません。1回めの gcc によってコンパイルされるものは、すべて chroot 環境内で実行されるものであって、ホストにある libc とは切り離されているためです。

--with-newlib

この時点では利用可能な C ライブラリがまだ存在しません。したがって libgcc のビルト時に inhibit_libc 定数を定義します。これを行うことで、libc サポートを必要とするコード部分をコンパイルしないようにします。

--without-headers

完璧なクロスコンパイラーを構築するなら、GCC はターゲットシステムに互換性を持つ標準ヘッダーを必要とします。本手順においては標準ヘッダーは必要ありません。このスイッチは GCC がそういったヘッダーを探しにいかないようになります。

--disable-shared

このスイッチは内部ライブラリをスタティックライブラリとしてリンクすることを指示します。共有ライブラリが glibc を必要としており、処理しているシステム上にはまだインストールされていないためです。

--disable-multilib

x86_64 に対して LFS は multilib のサポートをしていません。このオプション指定は x86 には無関係です。

--disable-decimal-float, --disable-threads, --disable-libatomic, --disable-libgomp, --disable-libquadmath, --disable-libssp, --disable-libvtv, --disable-libstdcxx

これらのオプションは順に、十進浮動小数点制御、スレッド処理、libatomic, libgomp, libquadmath, libssp, libvtv, C++ 標準ライブラリのサポートをいずれも無効にすることを指示します。これらの機能を含めていると、クロスコンパイラーをビルトする際にはコンパイルに失敗します。またクロスコンバイルによって一時的な libc ライブラリを構築する際には不要なものです。

--enable-languages=c,c++

このオプションは C コンパイラーおよび C++ コンパイラーのみビルトすることを指示します。この時点での必要なのはこの言語だけだからです。

GCC をコンパイルします。

make

パッケージをインストールします。

make install

ここで GCC ビルドにおいては、内部にあるシステムヘッダーファイルをいくつかインストールしました。そのうちの limits.h というものは、対応するシステムヘッダーファイルである limits.h を読み込むものになっています。

そのファイルはここでは \$LFS/usr/include/limits.h になります。ただし GCC をビルトしたこの時点において \$LFS/usr/include/limits.h は存在していません。したがってインストールされたばかりの内部ヘッダーファイルは、部分的に自己完結したファイルとなり、システムヘッダーファイルによる拡張された機能を含むものになっています。glibc をビルトする際にはこれでもかまわないのですが、後々内部ヘッダーファイルは完全なものが必要になります。以下のようなコマンドを通じて、その内部ヘッダーファイルの完成版を作り出します。このコマンドは GCC ビルドが通常行っている方法と同じものです。

```
cd ..
cat gcc/limitx.h gcc/glimits.h gcc/limity.h > \
`dirname $($LFS_TGT-gcc -print-libgcc-file-name)`/install-tools/include/limits.h
```

本パッケージの詳細は 「GCC の構成」 を参照してください。

5.4. Linux-5.19.2 API ヘッダー

Linux API ヘッダー (linux-5.19.2.tar.xz 内) は glibc が利用するカーネル API を提供します。

概算ビルド時間:	0.1 SBU
必要ディスク容量:	1.4 GB

5.4.1. Linux API ヘッダー のインストール

Linux カーネルはアプリケーションプログラミングインターフェース (Application Programming Interface) を、システムの C ライブラリ (LFS の場合 Glibc) に対して提供する必要があります。これを行うには Linux カーネルのソースに含まれる、さまざまな C ヘッダーファイルを「健全化 (sanitizing)」して利用します。

本パッケージ内にある不適切なファイルを残さないように、以下を処理します。

```
make mrproper
```

そしてユーザーが利用するカーネルヘッダーファイルをソースから抽出します。推奨されている make ターゲット「headers_install」は利用できません。なぜなら rsync が必要となり、この時点では利用できないからです。ヘッダーファイルは初めに ./usr にコピーし、その後に必要な場所にコピーされます。

```
make headers
find usr/include -type f ! -name '*.h' -delete
cp -rv usr/include $LFS/usr
```

5.4.2. Linux API ヘッダー の構成

インストールヘッダー:	/usr/include/asm/*.h, /usr/include/asm-generic/*.h, /usr/include/drm/*.h, /usr/include/linux/*.h, /usr/include/misc/*.h, /usr/include/mtd/*.h, /usr/include/rdma/*.h, /usr/include/scsi/*.h, /usr/include/sound/*.h, /usr/include/video/*.h, /usr/include/xen/*.h
インストールディレクトリ:	/usr/include/asm, /usr/include/asm-generic, /usr/include/drm, /usr/include/linux, /usr/include/misc, /usr/include/mtd, /usr/include/rdma, /usr/include/scsi, /usr/include/sound, /usr/include/video, /usr/include/xen

概略説明

/usr/include/asm/*.h	Linux API ASM ヘッダーファイル
/usr/include/asm-generic/*.h	Linux API ASM の汎用的なヘッダーファイル
/usr/include/drm/*.h	Linux API DRM ヘッダーファイル
/usr/include/linux/*.h	Linux API Linux ヘッダーファイル
/usr/include/misc/*.h	Linux API のさまざまなヘッダーファイル
/usr/include/mtd/*.h	Linux API MTD ヘッダーファイル
/usr/include/rdma/*.h	Linux API RDMA ヘッダーファイル
/usr/include/scsi/*.h	Linux API SCSI ヘッダーファイル
/usr/include/sound/*.h	Linux API Sound ヘッダーファイル
/usr/include/video/*.h	Linux API Video ヘッダーファイル
/usr/include/xen/*.h	Linux API Xen ヘッダーファイル

5.5. Glibc-2.36

Glibc パッケージは主要な C ライブラリを提供します。このライブラリは基本的な処理ルーチンを含むもので、メモリ割り当て、ディレクトリ走査、ファイルのオープン、クローズや入出力、文字列操作、パターンマッチング、算術処理、等々があります。

概算ビルト時間: 4.4 SBU
必要ディスク容量: 821 MB

5.5.1. Glibc のインストール

はじめに LSB コンプライアンスに合うように、シンボリックリンクを生成します。さらに x86_64 向けとして、互換のシンボリックリンクを生成して、ダイナミックライブラリローダーが適切に動作するようにします。

```
case $(uname -m) in
    i?86)   ln -sfv ld-linux.so.2 $LFS/lib/ld-lsb.so.3
    ;;
    x86_64) ln -sfv ../lib/ld-linux-x86-64.so.2 $LFS/lib64
              ln -sfv ../lib/ld-linux-x86-64.so.2 $LFS/lib64/ld-lsb-x86-64.so.3
    ;;
esac
```



注記

上記のコマンドに間違いはありません。ln コマンドにはいくつか文法の異なるバージョンがあります。間違いがあると思った場合には info coreutils ln や ln(1) をよく確認してください。

Glibc のプログラムの中で、FHS コンプライアンスに適合しない /var/db ディレクトリを用いているものがあり、そこに実行時データを保存しています。以下のパッチを適用することで、実行時データの保存ディレクトリを FHS に合致するものとします。

```
patch -Np1 -i ../glibc-2.36-fhs-1.patch
```

Glibc のドキュメントでは、専用のビルトディレクトリを作成することが推奨されています。

```
mkdir -v build
cd      build
```

ldconfig と sln ユーティリティーを /usr/sbin にインストールするようにします。

```
echo "rootsbindir=/usr/sbin" > configparms
```

次に Glibc をコンパイルするための準備をします。

```
../configure \
--prefix=/usr \
--host=$LFS_TGT \
--build=$(./scripts/config.guess) \
--enable-kernel=3.2 \
--with-headers=$LFS/usr/include \
libc_cv_slibdir=/usr/lib
```

configure オプションの意味

--host=\$LFS_TGT, --build=\$(./scripts/config.guess)

このようなオプションを組み合わせることで /tools ディレクトリにあるクロスコンパイラー、クロスリンカーを使って Glibc がクロスコンパイルされるようになります。

--enable-kernel=3.2

Linux カーネル 3.2 以上のサポートを行うよう指示します。これ以前のカーネルは利用することができません。

--with-headers=\$LFS/usr/include

これまでに \$LFS/usr/include ディレクトリにインストールしたヘッダーファイルを用いて Glibc をビルトすることを指示します。こうすればカーネルにどのような機能があるか、どのようにして処理効率化を図れるかなどの情報を Glibc が得られることになります。

libc_cv_slibdir=/usr/lib

この指定は 64 ビットマシンにおいて、ライブラリのインストール先をデフォルトの /lib64 ではなく /usr/lib とします。

ビルド中には以下のようなメッセージが出力されるかもしれません。

```
configure: WARNING:
*** These auxiliary programs are missing or
*** incompatible versions: msgfmt
*** some features will be disabled.
*** Check the INSTALL file for required versions.
```

msgfmt プログラムがない場合 (missing) や互換性がない場合 (incompatible) でも特に問題はありません。 msgfmt プログラムは Gettext パッケージが提供するもので、ホストシステムに含まれているかもしれません。



注記

本パッケージは ”並行ビルド (parallel make)” を行うとビルドに失敗するとの報告例があります。もしビルドに失敗した場合は make コマンドに ”-j1” オプションをつけて再ビルドしてください。

パッケージをコンパイルします。

make

パッケージをインストールします。



警告

LFS が適切に設定されていない状態で、推奨する方法とは異なり root によってビルドを行うと、次のコマンドはビルドした glibc をホストシステムにインストールしてしまいます。これを行ってしまうと、ほぼ間違いないなくホストが利用不能になります。したがってその環境変数が適切に設定されていることを確認してから、以下のコマンドを実行してください。

make DESTDIR=\$LFS install

make install オプションの意味

DESTDIR=\$LFS

make 変数 DESTDIR はほとんどすべてのパッケージにおいて、そのパッケージをインストールするディレクトリを定義するために利用されています。これが設定されていない場合のデフォルトは、ルートディレクトリ (/) となります。ここではパッケージのインストール先を \$LFS とします。これは 「Chroot 環境への移行」 に入つてからはルートディレクトリとなります。

ldd スクリプト内にある実行可能なローダーへのパスがハードコーディングされているので、これを修正します。

sed '/RTLDLIST=/s@/usr@@g' -i \$LFS/usr/bin/ldd



注意

この時点で以下を必ず実施します。新しいツールチェーンの基本的な機能（コンパイルやリンク）が正常に処理されるかどうかを確認することです。健全性のチェック (sanity check) を行うものであり、以下のコマンドを実行します。

```
echo 'int main(){}' | gcc -xc -
readelf -l a.out | grep ld-linux
```

すべてが正常に処理され、エラーが発生しなければ、最終のコマンドの実行結果として以下が出力されるはずです。

[Requesting program interpreter: /lib64/ld-linux-x86-64.so.2]

インタープリター名は 32 ビットマシンの場合 /lib/ld-linux.so.2 となります。

出力結果が上とは異なったり、あるいは何も出力されなかつたりした場合は、どこかに不備があります。どこに問題があるのか調査、再試行を行つて解消してください。解決せずにこの先に進まないでください。

すべてが完了したら、テストファイルを削除します。

rm -v a.out



注記

次節にてビルドするパッケージでは、ツールチェーンが正しく構築できたかどうかを再度チェックすることになります。特に binutils 2 回めや gcc 2 回めのビルドに失敗したら、それ以前にインストールしてきた binutils, GCC, glibc のいずれかにてビルドがうまくできていないことを意味します。

ここでクロスツールチェーンが完成しました。そこで limits.h のインストールを確定させます。これには GCC 開発者が提供するユーティリティーを実行します。

```
$LFS/tools/libexec/gcc/$LFS_TGT/12.2.0/install-tools/mkheaders
```

本パッケージの詳細は 「Glibc の構成」 を参照してください。

5.6. GCC-12.2.0 から取り出した libstdc++

Libstdc++ は標準 C++ ライブラリです。 (GCC の一部が C++ によって書かれているため) C++ をコンパイルするため必要となります。ただし gcc 1 回めをビルドするにあたっては、このライブラリのインストールを個別に行わなければなりません。それはこのライブラリが glibc に依存していて、対象ディレクトリ内ではまだ glibc が利用できない状態にあるからです。

概算ビルト時間: 0.4 SBU
必要ディスク容量: 1.1 GB

5.6.1. Libstdc++ のインストール



注記

libstdc++ のソースは GCC に含まれます。したがってまずは GCC の tarball を伸張（解凍）した上で gcc-12.2.0 ディレクトリに入つて作業を進めます。

libstdc++ のためのディレクトリを新たに生成して移動します。

```
mkdir -v build
cd      build
```

libstdc++ をコンパイルするための準備をします。

```
../libstdc++-v3/configure \
--host=$LFS_TGT \
--build=$(./config.guess) \
--prefix=/usr \
--disable-multilib \
--disable-nls \
--disable-libstdcxx-pch \
--with-gxx-include-dir=/tools/$LFS_TGT/include/c++/12.2.0
```

configure オプションの意味

--host=...

利用するクロスコンパイラーを指示するものであり、/usr/bin にあるものではなく、まさに先ほど作り出したものを指定するものです。

--disable-libstdcxx-pch

本スイッチは、既にコンパイルされたインクルードファイルをインストールしないようにします。これはこの時点では必要ないためです。

--with-gxx-include-dir=/tools/\$LFS_TGT/include/c++/12.2.0

インクルードファイルをインストールするディレクトリを指定します。libstdc++ は LFS における標準 C++ ライブラリであるため、そのディレクトリは C++ コンパイラー (\$LFS_TGT-g++) が標準 C++ インクルードファイルを探し出すディレクトリでなければなりません。通常のビルドにおいてそのディレクトリ情報は、最上位ディレクトリの configure のオプションにて指定します。ここでの作業では、上のようにして明示的に指定します。C++ コンパイラーは sysroot パスに \$LFS (GCC 1 回めのビルド時に指定) をインクルードファイルの検索パスに加えます。したがって実際には \$LFS/tools/\$LFS_TGT/include/c++/12.2.0 となります。DESTDIR 変数（以下の make install にて指定）とこのスイッチを組み合わせることで、ヘッダーファイルをそのディレクトリにインストールするようにします。

libstdc++ をコンパイルします。

```
make
```

ライブラリをインストールします。

```
make DESTDIR=$LFS install
```

クロスコンパイルにとって libtool アーカイブファイルが邪魔になるため削除します。

```
rm -v $LFS/usr/lib/lib{stdc++,stdc++fs,supc++}.la
```

本パッケージの詳細は「GCC の構成」を参照してください。

第6章 クロスコンパイルによる一時的ツール

6.1. はじめに

本章では、つい先ほど作り出したクロスツールチェーンを利用して、基本ユーティリティーをクロスコンパイルする方法を示します。このユーティリティーは最終的な場所にインストールされますが、まだ利用することはできません。基本的な処理タスクは、まだホストのツールに依存します。ただしインストールされたライブラリは、リンクの際に利用されます。

ユーティリティーの利用は次の章において、「chroot」環境に入つてから可能になります。ただしそこに至る前の章の中で、パッケージをすべて作り出しておく必要があります。したがってホストシステムからは、まだ独立している状態ではありません。

ここでもう一度確認しておきますが、`root` ユーザーとしてビルドを行う際にも `LFS` の適切な設定が必要です。それができていないと、コンピューターが利用できなくなる可能性があります。本章は全体にわたって、`lfs` ユーザーにより操作します。環境は「環境設定」に示したものとなっている必要があります。

6.2. M4-1.4.19

M4 パッケージはマクロプロセッサーを提供します。

概算ビルド時間: 0.2 SBU
必要ディスク容量: 32 MB

6.2.1. M4 のインストール

M4 をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr \
--host=$LFS_TGT \
--build=$(build-aux/config.guess)
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

パッケージをインストールします。

```
make DESTDIR=$LFS install
```

本パッケージの詳細は 「M4 の構成」 を参照してください。

6.3. Ncurses-6.3

Ncurses パッケージは、端末に依存しない、文字ベースのスクリーン制御を行うライブラリを提供します。

概算ビルド時間:	0.7 SBU
必要ディスク容量:	50 MB

6.3.1. Ncurses のインストール

ビルドにあたって gawk が必ず最初に見つかるようにします。

```
sed -i s/mawk// configure
```

そして以下のコマンドを実行して、ビルドホスト上に「tic」プログラムをビルドします。

```
mkdir build
pushd build
./configure
make -C include
make -C progs tic
popd
```

Ncurses をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr \
           --host=$LFS_TGT \
           --build=$(./config.guess) \
           --mandir=/usr/share/man \
           --with-manpage-format=normal \
           --with-shared \
           --without-normal \
           --with-cxx-shared \
           --without-debug \
           --without-ada \
           --disable-stripping \
           --enable-widec
```

configure オプションの意味

--with-manpage-format=normal

本パラメーターは Ncurses が圧縮された man ページをインストールしないようにします。 ホストディストリビューションそのものが圧縮 man ページを利用していると、同じようになってしまいますからです。

--with-shared

これは Ncurses において共有 C ライブラリをビルドしインストールします。

--without-normal

これは Ncurses においてスタティックな C ライブラリのビルドおよびインストールを行わないようにします。

--without-debug

これは Ncurses においてデバッグライブラリのビルドおよびインストールを行わないようにします。

--with-cxx-shared

これは Ncurses において共有 C++ バインディングをビルドしインストールします。 同時にスタティックな C++ バインディングのビルドおよびインストールは行わないようにします。

--without-ada

このオプションは Ncurses に対して Ada コンパイラーのサポート機能をビルドしないよう指示します。 この機能はホストシステムでは提供されているかもしれません、chroot 環境に入ってしまうと利用できなくなります。

--disable-stripping

本スイッチは、ホスト上にある strip を使って、ビルドシステム内のプログラムのストリップを行わないようにします。 クロスコンパイルされたプログラムに対して、ホスト上のツールを使うと、ビルド失敗の原因になります。

--enable-widec

本スイッチは通常のライブラリ (libncurses.so.6.3) ではなくワイド文字対応のライブラリ (libncursesw.so.6.3) をビルドすることを指示します。 ワイド文字対応のライブラリは、マルチバイトロケールと従来の 8 ビット

トロケールの双方に対して利用可能です。 通常のライブラリでは 8ビットトロケールに対してしか動作しません。 ワイド文字対応と通常のものとでは、ソース互換があるもののバイナリ互換がありません。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

パッケージをインストールします。

```
make DESTDIR=$LFS TIC_PATH=$(pwd)/build/progs/tic install  
echo "INPUT(-lncursesw)" > $LFS/usr/lib/libncurses.so
```

install オプションの意味

TIC_PATH=\$(pwd)/build/progs/tic

ビルドマシン上において、作り出したばかりの *tic* のパスを示す必要があります。 こうすることで terminal データベースがエラーなく生成できることになります。

```
echo "INPUT(-lncursesw)" > $LFS/usr/lib/libncurses.so
```

パッケージの中で、わずかですが *libncurses.so* を必要としているものがあります。 これはすぐに生成する予定のものです。 ここでこの小さなリンクスクリプトを生成します。 これは 第 8 章 においてビルドします。

本パッケージの詳細は 「Ncurses の構成」 を参照してください。

6.4. Bash-5.1.16

Bash は Bourne-Again SHeLL を提供します。

概算ビルド時間:	0.5 SBU
必要ディスク容量:	64 MB

6.4.1. Bash のインストール

Bash をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr \
           --build=$(support/config.guess) \
           --host=$LFS_TGT \
           --without-bash-malloc
```

configure オプションの意味

`--without-bash-malloc`

このオプションは Bash のメモリ割り当て関数 (malloc) を利用しないことを指示します。この関数はセグメントーションフォールトが発生する可能性があるものとして知られています。このオプションをオフにすることで、Bash は Glibc が提供する malloc 関数を用いるものとなり、そちらの方が安定しています。

パッケージをコンパイルします。

make

パッケージをインストールします。

make DESTDIR=\$LFS install

他のプログラム類がシェルとして sh を用いるものがあるためリンクを作ります。

ln -sv bash \$LFS/bin/sh

本パッケージの詳細は 「Bash の構成」 を参照してください。

6.5. Coreutils-9.1

Coreutils パッケージはシステムの基本的な特性を表示したり設定したりするためのユーティリティを提供します。

概算ビルド時間:	0.6 SBU
必要ディスク容量:	163 MB

6.5.1. Coreutils のインストール

Coreutils をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr \
           --host=$LFS_TGT \
           --build=$(build-aux/config.guess) \
           --enable-install-program=hostname \
           --enable-no-install-program=kill,uptime
```

configure オプションの意味

--enable-install-program=hostname

このオプションは hostname プログラムを生成しインストールすることを指示します。 このプログラムはデフォルトでは生成されません。 そしてこれは Perl のテストスイートを実行するのに必要となります。

パッケージをコンパイルします。

make

パッケージをインストールします。

make DESTDIR=\$LFS install

プログラムを、最終的に期待されるディレクトリに移動させます。 この一時的環境にとっては必要なことではありませんが、これを実施するのは、実行モジュールの場所をハードコーディングしているプログラムがあるからです。

```
mv -v $LFS/usr/bin/chroot          $LFS/usr/sbin
mkdir -pv $LFS/usr/share/man/man8
mv -v $LFS/usr/share/man/man1/chroot.1 $LFS/usr/share/man/man8/chroot.8
sed -i 's/"1"/"8"/'                $LFS/usr/share/man/man8/chroot.8
```

本パッケージの詳細は 「Coreutils の構成」 を参照してください。

6.6. Diffutils-3.8

Diffutils パッケージはファイルやディレクトリの差分を表示するプログラムを提供します。

概算ビルド時間:	0.2 SBU
必要ディスク容量:	26 MB

6.6.1. Diffutils のインストール

Diffutils をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr --host=$LFS_TGT
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

パッケージをインストールします。

```
make DESTDIR=$LFS install
```

本パッケージの詳細は 「Diffutils の構成」 を参照してください。

6.7. File-5.42

File パッケージは指定されたファイルの種類を決定するユーティリティを提供します。

概算ビルド時間:	0.2 SBU
必要ディスク容量:	34 MB

6.7.1. File のインストール

ホストシステム上の file コマンドは、これから生成する同コマンドと同一バージョンでなければなりません。 これはシグニチャーファイル生成のために必要となります。 そこで以下のコマンドを実行してビルドします。

```
mkdir build
pushd build
  ./configure --disable-bzlib \
              --disable-libseccomp \
              --disable-xzlib \
              --disable-zlib
  make
popd
```

configure オプションの意味

--disable-*
configure スクリプトは、ホスト上に特定のライブラリが存在するときに、それを利用しようとします。 ライブラリが存在していて、かつそれに対応するヘッダーファイルが存在していないときに、コンパイルに失敗することがあります。 このオプションは、そういったホストの機能は不要なので利用しないようにします。

File をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr --host=$LFS_TGT --build=$(./config.guess)
```

パッケージをコンパイルします。

```
make FILE_COMPILE=$(pwd)/build/src/file
```

パッケージをインストールします。

```
make DESTDIR=$LFS install
```

クロスコンパイルにとっては libtool アーカイブファイルが邪魔になるため削除します。

```
rm -v $LFS/usr/lib/libmagic.la
```

本パッケージの詳細は 「File の構成」 を参照してください。

6.8. Findutils-4.9.0

`Findutils` パッケージはファイル検索を行うプログラムを提供します。このプログラムはディレクトリツリーを再帰的に検索したり、データベースの生成、保守、検索を行います。（データベースによる検索は再帰的検索に比べて処理速度は速いですが、データベースが最新のものに更新されていない場合は信頼できない結果となります。）

概算ビルト時間: 0.2 SBU
必要ディスク容量: 42 MB

6.8.1. Findutils のインストール

Findutils をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr \
            --localstatedir=/var/lib/locate \
            --host=$LFS_TGT \
            --build=$(build-aux/config.guess)
```

パッケージをコンパイルします。

make

パッケージをインストールします。

```
make DESTDIR=$LFS install
```

本パッケージの詳細は「Findutils の構成」を参照してください。

6.9. Gawk-5.1.1

Gawk パッケージはテキストファイルを操作するプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.2 SBU
必要ディスク容量: 45 MB

6.9.1. Gawk のインストール

はじめに、必要なないファイルはインストールしないようにします。

```
sed -i 's/extras//' Makefile.in
```

Gawk をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr \
--host=$LFS_TGT \
--build=$(build-aux/config.guess)
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

パッケージをインストールします。

```
make DESTDIR=$LFS install
```

本パッケージの詳細は 「Gawk の構成」 を参照してください。

6.10. Grep-3.7

Grep パッケージはファイル内の検索を行うプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.2 SBU
必要ディスク容量: 25 MB

6.10.1. Grep のインストール

Grep をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr \
--host=$LFS_TGT
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

パッケージをインストールします。

```
make DESTDIR=$LFS install
```

本パッケージの詳細は 「Grep の構成」 を参照してください。

6.11. Gzip-1.12

Gzip パッケージはファイルの圧縮、伸長（解凍）を行うプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU
必要ディスク容量: 11 MB

6.11.1. Gzip のインストール

Gzip をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr --host=$LFS_TGT
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

パッケージをインストールします。

```
make DESTDIR=$LFS install
```

本パッケージの詳細は 「Gzip の構成」 を参照してください。

6.12. Make-4.3

Make パッケージは、対象となるパッケージのソースファイルを用いて、実行モジュールやそれ以外のファイルの生成、管理を行うプログラムを提供します。

概算ビルト時間: 0.1 SBU
必要ディスク容量: 15 MB

6.12.1. Make のインストール

Make をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr \
--without-guile \
--host=$LFS_TGT \
--build=$(build-aux/config.guess)
```

configure オプションの意味

--without-guile

ここではクロスコンパイルをしているにもかかわらず、ビルドホスト内に guile が存在すると configure がそれを見つけて利用しようとします。 そうなってしまうとコンパイルが失敗します。 そこで本スイッチにより、そういうないようにします。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

パッケージをインストールします。

```
make DESTDIR=$LFS install
```

本パッケージの詳細は 「Make の構成」 を参照してください。

6.13. Patch-2.7.6

Patch パッケージは「パッチ」ファイルを適用することにより、ファイルの修正、生成を行うプログラムを提供します。「パッチ」ファイルは diff プログラムにより生成されます。

概算ビルド時間: 0.1 SBU
必要ディスク容量: 12 MB

6.13.1. Patch のインストール

Patch をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr \
--host=$LFS_TGT \
--build=$(build-aux/config.guess)
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

パッケージをインストールします。

```
make DESTDIR=$LFS install
```

本パッケージの詳細は 「Patch の構成」 を参照してください。

6.14. Sed-4.8

Sed パッケージはストリームエディターを提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU
必要ディスク容量: 20 MB

6.14.1. Sed のインストール

Sed をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr \
--host=$LFS_TGT
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

パッケージをインストールします。

```
make DESTDIR=$LFS install
```

本パッケージの詳細は 「Sed の構成」 を参照してください。

6.15. Tar-1.34

Tar パッケージは tar アーカイブの生成を行うとともに、アーカイブ操作に関する多くの処理を提供します。 Tar はすでに生成されているアーカイブからファイルを抽出したり、ファイルを追加したりします。 あるいはすでに保存されているファイルを更新したり一覧を表示したりします。

概算ビルド時間: 0.2 SBU
必要ディスク容量: 38 MB

6.15.1. Tar のインストール

Tar をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr \
            --host=$LFS_TGT \
            --build=$(build-aux/config.guess)
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

パッケージをインストールします。

```
make DESTDIR=$LFS install
```

本パッケージの詳細は 「Tar の構成」 を参照してください。

6.16. Xz-5.2.6

Xz パッケージは、ファイルの圧縮、伸張（解凍）を行うプログラムを提供します。これは lzma フォーマットおよび新しい xz 圧縮フォーマットを取り扱います。xz コマンドによりテキストファイルを圧縮すると、従来の gzip コマンドや bzip2 コマンドに比べて、高い圧縮率を実現できます。

概算ビルド時間: 0.1 SBU
必要ディスク容量: 16 MB

6.16.1. Xz のインストール

Xz をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr \
           --host=$LFS_TGT \
           --build=$(build-aux/config.guess) \
           --disable-static \
           --docdir=/usr/share/doc/xz-5.2.6
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

パッケージをインストールします。

```
make DESTDIR=$LFS install
```

クロスコンパイルにとつては libtool アーカイブファイルが邪魔になるため削除します。

```
rm -v $LFS/usr/lib/liblzma.la
```

本パッケージの詳細は「Xz の構成」を参照してください。

6.17. Binutils-2.39 - 2回め

Binutils パッケージは、リンクやアセンブラーなどのようにオブジェクトファイルを取り扱うツール類を提供します。

概算ビルト時間:	1.4 SBU
必要ディスク容量:	514 MB

6.17.1. Binutils のインストール

Binutils の tarball では、古い libtool のコピーが提供されています。これは sysroot サポートが行われていないので、ビルトされるバイナリが誤ってホストディストロのライブラリにリンクされてしまいます。この問題を以下により回避します。

```
sed '6009s/$add_dir//' -i ltmain.sh
```

ビルドのためのディレクトリを再び生成します。

```
mkdir -v build
cd      build
```

Binutils をコンパイルするための準備をします。

```
./configure \
--prefix=/usr \
--build=$(../config.guess) \
--host=$LFS_TGT \
--disable-nls \
--enable-shared \
--enable-gprofng=no \
--disable-werror \
--enable-64-bit-bfd
```

configure オプションの意味

--enable-shared
libbfd を共有ライブラリとしてビルドします。

--enable-64-bit-bfd
64 ビットサポートを有効にします（ホスト上にて、より小さなワードサイズとします）。64 ビットシステムにおいては不要ですが、不具合を引き起こすものではありません。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

パッケージをインストールします。

```
make DESTDIR=$LFS install
```

クロスコンパイルにとって libtool アーカイブファイルが邪魔になるため削除し、不要なスタティックライブラリも削除します。

```
rm -v $LFS/usr/lib/lib{bfd,ctf,ctf-nobfd,opcodes}.{a,la}
```

本パッケージの詳細は「Binutils の構成」を参照してください。

6.18. GCC-12.2.0 - 2回め

GCC パッケージは C コンパイラーや C++ コンパイラーなどの GNU コンパイラーコレクションを提供します。

概算ビルト時間: 15 SBU
必要ディスク容量: 4.5 GB

6.18.1. GCC のインストール

GCC の 1 回めのビルトと同様に、ここでも GMP、MPFR、MPC の各パッケージを必要とします。 tarball を解凍して、所定のディレクトリ名に移動させます。

```
tar -xf ../mpfr-4.1.0.tar.xz
mv -v mpfr-4.1.0 mpfr
tar -xf ../gmp-6.2.1.tar.xz
mv -v gmp-6.2.1 gmp
tar -xf ../mpc-1.2.1.tar.gz
mv -v mpc-1.2.1 mpc
```

x86_64 上でビルトしている場合は、64ビットライブラリのデフォルトディレクトリ名を「lib」にします。

```
case $(uname -m) in
  x86_64)
    sed -e '/m64=/s/lib64/lib/' -i.orig gcc/config/i386/t-linux64
  ;;
esac
```

libgcc と libstdc++ のヘッダーのビルドルールを変更して、これらのライブラリに対して POSIX スレッドサポートを含めてビルトするようにします。

```
sed '/thread_header =/s/@.*@/gthr-posix.h/' \
-i libgcc/Makefile.in libstdc++-v3/include/Makefile.in
```

専用のディレクトリを再度生成します。

```
mkdir -v build
cd      build
```

GCC のビルトに入る前に、デフォルトの最適化フラグを上書きするような環境変数の設定がないことを確認してください。

GCC をコンパイルするための準備をします。

```
../configure \
--build=$(..config.guess) \
--host=$LFS_TGT \
--target=$LFS_TGT \
LDFLAGS_FOR_TARGET=-L$PWD/$LFS_TGT/libgcc \
--prefix=/usr \
--with-build-sysroot=$LFS \
--enable-initfini-array \
--disable-nls \
--disable-multilib \
--disable-decimal-float \
--disable-libatomic \
--disable-libgomp \
--disable-libquadmath \
--disable-libssp \
--disable-libvtv \
--enable-languages=c,c++
```

configure オプションの意味

--with-build-sysroot=\$LFS
通常は --host を用いれば、GCC ビルトにクロスコンパイラが用いられ、参照すべきヘッダーやライブラリも \$LFS にあるものが用いられるように指示されます。しかし今ビルトを行っているシステム上の GCC は別のツール

を使っているので、上のような場所を認識できていません。 本スイッチは、必要なファイルをホスト内からではなく、\$LFS から探し出すようにします。

```
--target=$LFS_TGT
```

これまでの GCC はクロスコンパイルによって作り出してきており、コンパイル済み GCC 実行ファイルからターゲットライブラリ (libgcc と libstdc++) をビルドして作り出しができません。 なぜならその実行ファイルはホストディストリビューション上で動作させられないからです。 GCC ビルドシステムはその回避策として、デフォルトではホスト上にある C および C++ コンパイラーを利用しようとします。 ただし GCC のバージョンが異なる場合に、GCC ターゲットライブラリをビルドすることはサポートされていません。 したがってホスト上のコンパイラーがビルドに失敗する可能性があります。 本パラメーターは、確実に GCC 1回めの実行ファイルを使ってライブラリビルドを行うようにして、問題が発生しないようにします。

```
LDFLAGS_FOR_TARGET=...
```

GCC 1回めではスタティックバージョンの libgcc をビルドしていましたが、ここでは共有の libgcc をビルドするようにします。 これは C++ 例外処理のために必要となります。

```
--enable-initfini-array
```

本オプションを指定すれば、自動的に x86 上のネイティブコンパイラーを使って、ネイティブコンパイラーをビルドするようにします。 しかしここではクロスコンパイラーを作り出すつもりでいます。 したがって明示的に本オプションへ指定が必要になります。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

パッケージをインストールします。

```
make DESTDIR=$LFS install
```

最後に、便利なシンボリックリンクを作成します。 プログラムやスクリプトの中には gcc ではなく cc を用いるもの結構あります。 シンボリックリンクを作ることで各種のプログラムを汎用的にすることができます、通常 GNU C コンパイラーがインストールされていない多くの UNIX システムでも利用できるものになります。 cc を利用することにすれば、システム管理者がどの C コンパイラーをインストールすべきかを判断する必要がなくなります。

```
ln -sv gcc $LFS/usr/bin/cc
```

本パッケージの詳細は 「GCC の構成」 を参照してください。

第7章 chroot への移行と一時的ツールの追加ビルド

7.1. はじめに

本章では、一時的システムに足りていない最後の部分をビルドしていきます。つまり、多くのパッケージビルドに必要となるツールをビルドします。こうして循環的な相互参照の関係が解決するので、これまで利用してきたホストオペレーティングシステムから完全に離れて（実行中のカーネルは除きますが）"chroot" 環境に入って、ビルドを行っていきます。

chroot 環境内では適切な操作とするため、実行されているカーネルとのやり取りを確実に行います。それはいわゆる仮想カーネルファイルシステムを通じて行うものです。chroot 環境に入る際には、あらかじめマウントされていなければなりません。マウントがされているかどうかを確認する場合は `findmnt` を実行します。

「Chroot 環境への移行」まで、コマンドの実行は LFS を設定した上で、root ユーザーにより行う必要があります。chroot 環境に入っても、コマンドはすべて root 実行ですが、もう安心です。LFS を構築しているコンピューター上の OS にはもうアクセスしないからです。かと言つてコマンド実行を誤れば、簡単に LFS システムを壊してしまうことになりますから、十分に注意してください。

7.2. 所有者の変更



注記

本書のこれ以降で実行するコマンドはすべて root ユーザーでログインして実行します。もう `lfs` ユーザーは不要です。root ユーザーの環境にて環境変数 `$LFS` がセットされていることを今一度確認してください。

`$LFS` ディレクトリ配下の所有者は今は `lfs` ユーザーであり、これはホストシステム上にのみ存在するユーザーです。この `$LFS` ディレクトリ配下をこのままにしておくということは、そこにあるファイル群が、存在しないユーザーによって所有される形を生み出すことになります。これは危険なことです。後にユーザー アカウントが生成され同一のユーザー ID を持つたとすると `$LFS` の全ファイルの所有者となるので、悪意のある操作に利用されてしまいます。

この問題を解消するために `$LFS/*` ディレクトリの所有者を root ユーザーにします。以下のコマンドによりこれを実現します。

```
chown -R root:root $LFS/{usr,lib,var,etc,bin,sbin,tools}
case $(uname -m) in
  x86_64) chown -R root:root $LFS/lib64 ;;
esac
```

7.3. 仮想カーネルファイルシステムの準備

カーネルが取り扱うさまざまなファイルシステムは、カーネルとの間でやり取りが行われます。これらのファイルシステムは仮想的なものであり、ディスクを消費するものではありません。ファイルシステムの内容はメモリ上に保持されます。

ファイルシステムをマウントするディレクトリを以下のようにして生成します。

```
mkdir -pv $LFS/{dev,proc,sys,run}
```

7.3.1. /dev のマウントと有効化

通常のブートの際には、カーネルは `/dev` ディレクトリ上に `devtmpfs` ファイルシステムを自動的にマウントします。そしてデバイスが検出されたりアクセスされたりするたびに、デバイスが仮想ファイルシステムを動的生成できるようになっています。このデバイス生成処理は一般的には、システム起動時にカーネルと Udev によって行われます。今構築中のシステムにはまだ Udev を導入していませんし、再起動も行つていませんので `/dev` のマウントと有効化は手動で行ないます。これはホストシステムの `/dev` ディレクトリに対して、バインドマウントを行うことで実現します。バインドマウント (bind mount) は特殊なマウント方法の一つで、ディレクトリのミラーを生成したり、他のディレクトリへのマウントポイントを生成したりします。以下のコマンドにより実現します。

```
mount -v --bind /dev $LFS/dev
```

7.3.2. 仮想カーネルファイルシステムのマウント

残りの仮想カーネルファイルシステムを以下のようにしてマウントします。

```
mount -v --bind /dev/pts $LFS/dev/pts
mount -vt proc proc $LFS/proc
mount -vt sysfs sysfs $LFS/sys
mount -vt tmpfs tmpfs $LFS/run
```

ホストシステムによっては /dev/shm が /run/shm へのシンボリックリンクになっているものがあります。上の作業にて /run tmpfs がマウントされました。これはこのディレクトリを生成する必要がある時のみです。

```
if [ -h $LFS/dev/shm ]; then
    mkdir -pv $LFS/$(readlink $LFS/dev/shm)
fi
```

7.4. Chroot 環境への移行

残るツール類をビルドするために必要なパッケージは、ここまでにすべてビルドしました。そこで chroot 環境に入つて、残りの一時的ツールをインストールしていきます。この環境は、最終システムに向けたインストールを行う際にも用います。root ユーザーになって以下のコマンドを実行します。chroot 環境内は、この時点では一時的なツール類のみが利用可能な状態です。

```
chroot "$LFS" /usr/bin/env -i \
    HOME=/root \
    TERM=$TERM \
    PS1='(lfs chroot) \u:\w\$ ' \
    PATH=/usr/bin:/usr/sbin \
    /bin/bash --login
```

env コマンドの `-i` パラメーターは、chroot 環境での変数定義をすべてクリアするものです。そして `HOME`, `TERM`, `PS1`, `PATH` という変数だけここで定義し直します。`TERM=$TERM` は chroot 環境に入る前と同じ値を `TERM` 変数に与えます。この設定は vim や less のようなプログラムの処理が適切に行われるために必要となります。これ以外の変数として `CFLAGS` や `CXXFLAGS` などが必要であれば、ここで定義しておくと良いでしょう。

ここから先は LFS 変数は不要となります。すべての作業は LFS ファイルシステム内で行っていくことになるからです。起動される Bash シェルは `$LFS` ディレクトリがルート（/ ディレクトリ）となって動作します。

`/tools/bin` が `PATH` 内には存在しません。つまりクロスチェーンは chroot 環境内ではもはや利用しないということです。

`bash` のプロンプトに `I have no name!` と表示されますがこれは正常です。この時点ではまだ `/etc/passwd` を生成していないからです。



注記

本章のこれ以降と次章では、すべてのコマンドを chroot 環境内にて実行することが必要です。例えばシステムを再起動する場合のように chroot 環境からいったん抜け出した場合には、「/dev のマウントと有効化」と「仮想カーネルファイルシステムのマウント」にて説明した仮想カーネルファイルシステムがマウントされていることを確認してください。そして chroot 環境に入り直してからインストール作業を再開してください。

7.5. ディレクトリの生成

LFS ファイルシステムにおける完全なディレクトリ構成を作り出します。



注記

本節において触れるディレクトリの中には、明示的な指示か、あるいは何かのパッケージインストールによってすでに生成済みであるものがあります。以下では完全を期して繰り返し生成することにします。

ルートレベルのディレクトリをいくつか生成します。これは前章において必要としていた限定的なものの中には含まれていないものです。以下のコマンドを実行して生成します。

```
mkdir -pv {boot,home,mnt,opt,srv}
```

ルートレベル配下に、必要となる一連のサブディレクトリを、以下のコマンドにより生成します。

```
mkdir -pv /etc/{opt,sysconfig}
mkdir -pv /lib/firmware
mkdir -pv /media/{floppy,cdrom}
mkdir -pv /usr/{,local/}{include,src}
mkdir -pv /usr/local/{bin,lib,sbin}
mkdir -pv /usr/{,local/}share/{color,dict,doc,info,locale,man}
mkdir -pv /usr/{,local/}share/{misc,terminfo,zoneinfo}
mkdir -pv /usr/{,local/}share/man/man{1..8}
mkdir -pv /var/{cache,local,log,mail,opt,spool}
mkdir -pv /var/lib/{color,misc,locate}

ln -sfv /run /var/run
ln -sfv /run/lock /var/lock

install -dv -m 0750 /root
install -dv -m 1777 /tmp /var/tmp
```

ディレクトリは標準ではパーミッションモード 755 で生成されますが、すべてのディレクトリをこのままするのは適当ではありません。上のコマンド実行ではパーミッションを変更している箇所が二つあります。一つは root ユーザーのホームディレクトリに対してであり、もう一つはテンポラリディレクトリに対してです。

パーミッションモードを変更している一つめは /root ディレクトリに対して、他のユーザーによるアクセスを制限するためです。通常のユーザーが持つ、自分自身のホームディレクトリへのアクセス権設定と同じことを行ないます。二つめのモード変更は /tmp ディレクトリや /var/tmp ディレクトリに対して、どのユーザーも書き込み可能とし、ただし他のユーザーが作成したファイルは削除できないようにします。ビットマスク 1777 の最上位ビット、いわゆる「スティックィビット (sticky bit)」を用いて実現します。

7.5.1. FHS コンプライアンス情報

本書のディレクトリ構成は標準ファイルシステム構成 (Filesystem Hierarchy Standard; FHS) に基づいています。(その情報は <https://refspecs.linuxfoundation.org/fhs.shtml> に示されています。) FHS では、任意のディレクトリとして /usr/local/games や /usr/share/games などを規定しています。したがって本書では必要なディレクトリのみを作成していくことにします。他のディレクトリについては、どうぞ自由に取り決めて作成してください。

7.6. 重要なファイルとシンボリックリンクの生成

Linux のこれまでの経緯として、マウントされているファイルシステムの情報は /etc/mtab ファイルに保持されています。最新の Linux であれば、内部的にこのファイルを管理し、ユーザーに対しては /proc ファイルシステムを通じて情報提示しています。/etc/mtab ファイルの存在を前提としているプログラムが正常動作するように、以下のシンボリックリンクを作成します。

```
ln -sv /proc/self/mounts /etc/mtab
```

テストスイートの中に /etc/hosts ファイルを参照するものがあるので、単純なものをここで生成します。これは Perl の設定ファイルにおいても参照されます。

```
cat > /etc/hosts << EOF
127.0.0.1 localhost $(hostname)
::1           localhost
EOF
```

root ユーザーがログインできるように、またその「root」という名称を認識できるように /etc/passwd ファイルと /etc/group ファイルには該当する情報が登録されている必要があります。

以下のコマンドを実行して /etc/passwd ファイルを生成します。

```
cat > /etc/passwd << "EOF"
root:x:0:0:root:/root:/bin/bash
bin:x:1:1:bin:/dev/null:/usr/bin/false
daemon:x:6:6:Daemon User:/dev/null:/usr/bin/false
messagebus:x:18:18:D-Bus Message Daemon User:/run/dbus:/usr/bin/false
systemd-journal-gateway:x:73:73:systemd Journal Gateway:/:/usr/bin/false
systemd-journal-remote:x:74:74:systemd Journal Remote:/:/usr/bin/false
systemd-journal-upload:x:75:75:systemd Journal Upload:/:/usr/bin/false
systemd-network:x:76:76:systemd Network Management:/:/usr/bin/false
systemd-resolve:x:77:77:systemd Resolver:/:/usr/bin/false
systemd-timesync:x:78:78:systemd Time Synchronization:/:/usr/bin/false
systemd-coredump:x:79:79:systemd Core Dumper:/:/usr/bin/false
uuidd:x:80:80:UUID Generation Daemon User:/dev/null:/usr/bin/false
systemd-oom:x:81:81:systemd Out Of Memory Daemon:/:/usr/bin/false
nobody:x:65534:65534:Unprivileged User:/dev/null:/usr/bin/false
EOF
```

root ユーザーに対する本当のパスワードは後に定めます。

以下のコマンドを実行して /etc/group ファイルを生成します。

```
cat > /etc/group << "EOF"
root:x:0:
bin:x:1:daemon
sys:x:2:
kmem:x:3:
tape:x:4:
tty:x:5:
daemon:x:6:
floppy:x:7:
disk:x:8:
lp:x:9:
dialout:x:10:
audio:x:11:
video:x:12:
utmp:x:13:
usb:x:14:
cdrom:x:15:
adm:x:16:
messagebus:x:18:
systemd-journal:x:23:
input:x:24:
mail:x:34:
kvm:x:61:
systemd-journal-gateway:x:73:
systemd-journal-remote:x:74:
systemd-journal-upload:x:75:
systemd-network:x:76:
systemd-resolve:x:77:
systemd-timesync:x:78:
systemd-coredump:x:79:
uuidd:x:80:
systemd-oom:x:81:
wheel:x:97:
users:x:999:
nogroup:x:65534:
EOF
```

作成するグループは何かの標準に基づいたものではありません。一部は 9 章の udev の設定に必要となるものですし、一部は既存の Linux ディストリビューションが採用している慣用的なものです。またテストスイートにて特定のユーザーやグループを必要としているものがあります。Linux Standard Base (<http://www.linuxbase.org> 参照) では

root グループのグループID (GID) は 0、bin グループの GID は 1 を定めているにすぎません。 GID 5 は tty グループに対して広く用いられています。 また数値 5 は devpts ファイルシステムに対して systemd においても用いられています。 他のグループとその GID はシステム管理者が自由に取り決めることができます。 というのも通常のプログラムであれば GID の値に依存することではなく、あくまでグループ名を用いてプログラミングされているからです。

ID 65534 は NFS のカーネルが利用し、マップされていないユーザーやグループに対するユーザー名前空間を切り分けます（これは NFS サーバー上や親のユーザー空間に存在しますが、ローカルマシンや分離された名前空間には存在しません）。 未割り当ての ID を避けるために、この ID を nobody と nogroup に用いることになります。 他のディストリビューションにおいては、この ID を異なる用い方をしている場合があるため、移植性を考慮するプログラムでは、ここでの割り当てに依存しないようにしてください。

第 8 章におけるテストの中には、通常のユーザーを必要とするものがあります。 ここでそういったユーザーをここで追加し、その章の最後には削除します。

```
echo "tester:x:101:101::/home/tester:/bin/bash" >> /etc/passwd
echo "tester:x:101:" >> /etc/group
install -o tester -d /home/tester
```

プロンプトの「I have no name!」を取り除くために新たなシェルを起動します。 /etc/passwd ファイルと /etc/group ファイルを作ったので、ユーザー名とグループ名の名前解決が適切に動作します。

```
exec /usr/bin/bash --login
```

login、agetty、init といったプログラム（あるいは他のプログラム）は、システムに誰がいつログインしたかといった情報を多くのログファイルに記録します。 しかしログファイルがあらかじめ存在していない場合は、ログファイルの出力が行われません。 そこでそのようなログファイルを作成し、適切なパーミッションを与えます。

```
touch /var/log/{btmp,lastlog,faillog,wtmp}
chgrp -v utmp /var/log/lastlog
chmod -v 664 /var/log/lastlog
chmod -v 600 /var/log/btmp
```

/var/log/wtmp ファイルはすべてのログイン、ログアウトの情報を保持します。 /var/log/lastlog ファイルは各ユーザーが最後にログインした情報を保持します。 /var/log/faillog ファイルはログインに失敗した情報を保持します。 /var/log/btmp ファイルは不正なログイン情報を保持します。



注記

/run/utmp ファイルは現在ログインしているユーザーの情報を保持します。 このファイルはブートスクリプトが動的に生成します。

7.7. Gettext-0.21

Gettext パッケージは国際化を行うユーティリティを提供します。各種プログラムに対して NLS (Native Language Support) を含めてコンパイルすることができます。つまり各言語による出力メッセージが得られることになります。

概算ビルド時間: 1.6 SBU
必要ディスク容量: 282 MB

7.7.1. Gettext のインストール

ここで構築している一時的なツールに際して、Gettext パッケージからは3つのバイナリをインストールするだけで十分です。

Gettext をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --disable-shared
```

configure オプションの意味

--disable-shared

Gettext の共有ライブラリはこの時点では必要でないため、それらをビルドしないようにします。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

msgfmt, msgmerge, xgettext の各プログラムをインストールします。

```
cp -v gettext-tools/src/{msgfmt,msgmerge,xgettext} /usr/bin
```

本パッケージの詳細は「Gettext の構成」を参照してください。

7.8. Bison-3.8.2

Bison パッケージは構文解析ツールを提供します。

概算ビルド時間: 0.3 SBU
必要ディスク容量: 57 MB

7.8.1. Bison のインストール

Bison をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr \
            --docdir=/usr/share/doc/bison-3.8.2
```

configure オプションの意味

--docdir=/usr/share/doc/bison-3.8.2

ビルドシステムに対して、bison のドキュメントをインストールするディレクトリを、バージョンつきとします。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

本パッケージの詳細は 「Bison の構成」 を参照してください。

7.9. Perl-5.36.0

Perl パッケージは Perl 言語 (Practical Extraction and Report Language) を提供します。

概算ビルド時間:	1.6 SBU
必要ディスク容量:	282 MB

7.9.1. Perl のインストール

Perl をコンパイルするための準備をします。

```
sh Configure -des \
  -Dprefix=/usr \
  -Dvendorprefix=/usr \
  -Dprivlib=/usr/lib/perl5/5.36/core_perl \
  -Darchlib=/usr/lib/perl5/5.36/core_perl \
  -Dsitelib=/usr/lib/perl5/5.36/site_perl \
  -Dsitearch=/usr/lib/perl5/5.36/site_perl \
  -Dvendorlib=/usr/lib/perl5/5.36/vendor_perl \
  -Dvendorarch=/usr/lib/perl5/5.36/vendor_perl
```

Configure オプションの意味

-des
これは三つのオプションを組み合わせたものです。 -d はあらゆる項目に対してデフォルト設定を用います。 -e はタスクをすべて実施します。 -s は不要な出力は行わないようにします。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

本パッケージの詳細は 「Perl の構成」 を参照してください。

7.10. Python-3.10.6

Python 3 パッケージは Python 開発環境を提供します。オブジェクト指向プログラミング、スクリプティング、大規模プログラムのプロトタイピング、アプリケーション開発などに有用なものです。

概算ビルト時間: 0.9 SBU
必要ディスク容量: 364 MB

7.10.1. Python のインストール



注記

「python」の名前で始まるパッケージファイルは 2 種類あります。そのうち、扱うべきファイルは `Python-3.10.6.tar.xz` です。（1 文字めが大文字であるものです。）

Python をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr \
            --enable-shared \
            --without-ensurepip
```

`configure` パラメーターの意味

`--enable-shared`

このスイッチはスタティックライブラリをインストールしないようにします。

`--without-ensurepip`

このスイッチは Python パッケージインストーラーを無効にします。この段階では必要がないからです。

パッケージをコンパイルします。

`make`



注記

この時点において、依存パッケージをまだインストールしていないために、ビルトできない Python 3 モジュールがあります。それでもビルトシステムは、そのようなモジュールをビルトしようとします。そして一部のファイルのコンパイルが失敗して、コンパイラーメッセージには「致命的エラー」が示されます。このメッセージは無視できます。よく確認すべきなのは、トップレベルの `make` コマンドは失敗していないことです。任意でビルトすれば良いモジュールは、今ここでのビルトは必要ありません。それは、この後に 第 8 章においてビルトされます。

パッケージをインストールします。

`make install`

本パッケージの詳細は 「Python 3 の構成」 を参照してください。

7.11. Texinfo-6.8

Texinfo パッケージは info ページへの読み書き、変換を行うプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.2 SBU
必要ディスク容量: 113 MB

7.11.1. Texinfo のインストール

Texinfo をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

本パッケージの詳細は 「Texinfo の構成」 を参照してください。

7.12. Util-linux-2.38.1

Util-linux パッケージはさまざまなユーティリティープログラムを提供します。

概算ビルド時間:	0.6 SBU
必要ディスク容量:	149 MB

7.12.1. Util-linux のインストール

FHS では adjtime ファイルの配置場所として /etc ディレクトリではなく /var/lib/hwclock ディレクトリを推奨しています。そこで以下によりそのディレクトリを生成します。

```
mkdir -pv /var/lib/hwclock
```

Util-linux をコンパイルするための準備をします。

```
./configure ADJTIME_PATH=/var/lib/hwclock/adjtime \
--libdir=/usr/lib \
--docdir=/usr/share/doc/util-linux-2.38.1 \
--disable-chfn-chsh \
--disable-login \
--disable-nologin \
--disable-su \
--disable-setpriv \
--disable-runuser \
--disable-pylibmount \
--disable-static \
--without-python \
runstatedir=/run
```

configure オプションの意味

ADJTIME_PATH=/var/lib/hwclock/adjtime

これはハードウェアクロックの情報を保持したファイルの場所を設定するものであり、FHS に従ったものです。一時的なツールにとって厳密には必要ではありませんが、別の場所にはファイル生成するわけにはいきません。最終的な util-linux パッケージをビルドする際に、上書きしたり削除したりすることができなくなるからです。

--libdir=/usr/lib

本スイッチは、共有ライブラリを示す .so シンボリックリンクを同一ディレクトリ (/usr/lib) に直接生成するようにします。

--disable-*

コンポーネントのビルドの際に、LFS にはない、あるいはまだインストールしていない別のパッケージがあり、そのためには発生する警告メッセージを無効にします。

--without-python

本スイッチは Python を用いないようにします。ビルドの際に不要なバインディングを作らないようにするためにです。

runstatedir=/run

本スイッチは uuid ハードウェア UUID が利用するソケットの場所を適切に設定します。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

本パッケージの詳細は 「Util-linux の構成」 を参照してください。

7.13. 一時的システムのクリーンアップと保存

7.13.1. クリーンアップ

はじめに、現在インストールされているドキュメントは削除します。これを最終的なシステムに持ち込みません。これによって 35 MB を節約します。

```
rm -rf /usr/share/{info,man,doc}/*
```

libtool の .la ファイルはスタティックライブラリにリンクするときだけ使います。これらはダイナミック共有ライブラリを用いるとき、そして特に autotools 以外のビルドシステムを利用するときには不要であり、潜在的には支障を及ぼします。したがって chroot の中で、不要なファイルは削除します。

```
find /usr/{lib,libexec} -name \*.la -delete
```

現在のシステムサイズは、およそ 3 GB になりました。そして /tools ディレクトリは、もう必要がありません。ディスク容量は 1 GB 近くを占めています。ここで削除します。

```
rm -rf /tools
```

7.13.2. バックアップ

この時点において、基本的なプログラムやライブラリが生成されたので、現在の LFS システムの状態は良好なものです。このシステムを、後に再利用できるように、ここでバックアップを取ることができます。ここから先の章において、致命的な失敗をしてしまった場合は、すべてを削除して（今度はより慎重に）やり直すのが、一番のやり方であるのは、明らかです。ただし、そのときには一時システムも失ってしまっている状態です。余計な時間を費やすことなく、ビルドに成功したところまでのシステムを使ってやり直す策を考えるのであれば、ここで LFS システムのバックアップをとっておくことが、後々の役に立つかかもしれません。



注記

本節の残りの作業は必須ではありません。ただし 第 8 章 においてパッケージのインストールを始めていくと、一時的ツールは上書きされていきます。そこで以下に示すように、現時点でのシステムのバックアップをとっておくのが良いでしょう。

以下の手順は chroot 環境の外から実施します。これはつまり chroot 環境から抜け出してから手順を進めていくということです。こうする理由は、バックアップアーカイブの保存や読み込みをするなら、ファイルシステムへのアクセスは chroot 環境の外部から行うべきであって、安全のため \$LFS ディレクトリ階層の内部において行うべきではないからです。

バックアップを取ることにしているのであれば、ここで chroot 環境から抜け出ます。

```
exit
```



重要

以降の手順はすべて、ホストシステム上の root ユーザーにより実施します。特にコマンド実行は、よく注意しながら行ってください。誤ったことをすると、ホストシステムを書き換えることになります。環境変数 LFS はデフォルトで lfs ユーザーにおいて設定していましたが、root ユーザーにおいては設定していないかもしれません。

root ユーザーによってコマンド実行する際にも、必ず LFS が設定されていることを確認してください。

このことは 「変数 \$LFS の設定」 において説明済です。

バックアップを取る前には、仮想ファイルシステムをアンマウントします。

```
umount $LFS/dev/pts
umount $LFS/{sys,proc,run,dev}
```

バックアップアーカイブを生成したディレクトリを含むファイルシステムにおいて、未使用のディスク容量が最低でも 1 GB はあることを確認してください。（ソース tarball もバックアップアーカイブに含めます。）

なお、これ以降の手順説明においては、ホストシステム上の root ユーザーのホームディレクトリを用いています。これは通常、ルートファイルシステムに置かれているものです。

`root` ユーザーのホームディレクトリにバックアップを生成したくない場合は、`$HOME` の内容を適切に書き換えてください。

バックアップアーカイブを生成するために、以下のコマンドを実行します。

注記

バックアップアーカイブは圧縮するので、かなりの高速なシステムを利用していても、比較的長い時間（10分以上）を要します。

```
cd $LFS
tar -cJpf $HOME/lfs-temp-tools-11.2-systemd.tar.xz .
```

注記

第 8 章を続けるのであれば、以降に示す「重要」の説明のように、`chroot` 環境に再度入ることを忘れないでください。

7.13.3. 復元

誤操作をしてしまい、初めからやり直す必要が出てきたとします。そんなときは上のバックアップを復元し、すばやく回復させることにしましょう。`$LFS` 配下にソースも配置することにしているので、バックアップアーカイブ内にはそれらも含まれています。したがって再度ダウンロードする必要はありません。`$LFS` が適切に設定されていることを再度確認した上で、バックアップの復元を行うための以下のコマンドを実行します。

警告

以下に示すコマンドは相当に危険です。`root` ユーザーになって `rm -rf ./*` を実行する際に、`$LFS` ディレクトリに移動していない、あるいは環境変数 `LFS` を設定していないとしたら、システム全体を破壊することになります。厳に警告しておきます。

```
cd $LFS
rm -rf ./*
tar -xpf $HOME/lfs-temp-tools-11.2-systemd.tar.xz
```

環境変数が適切に設定されていることを再度確認の上、ここから続くシステムビルドに進んでいきます。

重要

`chroot` 環境から抜け出して、バックアップの生成を行った場合、あるいはビルド作業を再開する場合は、「仮想カーネルファイルシステムの準備」において説明している、カーネル仮想ファイルシステムがマウントされていることを確認してください (`findmnt | grep $LFS`)。もしマウントされていなかったら、マウントを行ってから、再び `chroot` 環境に入るようにしてください（「`Chroot` 環境への移行」参照）。

第IV部 LFSシステムの構築

第8章 基本的なソフトウェアのインストール

8.1. はじめに

この章では LFS システムの構築作業を始めます。

パッケージ類のインストール作業は簡単なものです。インストール手順の説明は、たいていは手短に一般的なものだけで済ますこともできます。ただ誤りの可能性を極力減らすために、個々のインストール手順の説明は十分に行うことになります。Linux システムがどのようにして動作しているかを学ぶには、個々のパッケージが何のために用いられていて、なぜユーザー（あるいはシステム）がそれを必要としているのかを知ることが重要になります。

コンパイラーには最適化オプションがありますが、これを利用することはお勧めしません。コンパイラーの最適化を用いればプログラムが若干速くなる場合もありますが、そもそもコンパイルが出来なかつたり、プログラムの実行時に問題が発生したりする場合があります。もしコンパイラーの最適化によってパッケージビルドが出来なかつたら、最適化をなしにしてもう一度コンパイルすることで解決するかどうかを確認してください。最適化を行ってパッケージがコンパイル出来たとしても、コードとビルドツールの複雑な関連に起因してコンパイルが適切に行われないリスクをはらんでいます。また `-march` オプションや `-mtune` オプションにて指定する値は、本書には明示しておらずテストも行っていませんので注意してください。これらはツールチェーンパッケージ (`Binutils`, `GCC`, `Glibc`) に影響を及ぼすことがあります。最適化オプションを用いることによって得られるものがあったとしても、それ以上にリスクを伴うことがしばしばです。初めて LFS 構築を手がける方は、最適化オプションをなしにすることをお勧めします。これ以降にビルドしていくツール類は、それでも十分に速く安定して動作するはずです。

各ページではインストール手順の説明よりも前に、パッケージの内容やそこに何が含まれているかを簡単に説明し、ビルドにどれくらいの時間を要するか、ビルド時に必要となるディスク容量はどれくらいかを示しています。またインストール手順の最後には、パッケージがインストールするプログラムやライブラリの一覧を示し、それらがどのようなものかを簡単に説明しています。



注記

第 8 章 にて導入するパッケージにおいて SBU 値と必要ディスク容量には、テストスイート実施による時間や容量をすべて含んでいます。なお SBU 値はすべて、単一の CPU コア (`-j1`) を用いて算出しています。

8.1.1. ライブラリについて

LFS 編集者は全般にスタティックライブラリは作らないものとしています。スタティックライブラリが作られたそもそもその目的は、現在の Linux システムにとってはもはや古いものです。スタティックライブラリをリンクすると障害となることすらあります。例えばセキュリティ問題を解決するためにライブラリリンクを更新しなければならなくなったら、スタティックライブラリにリンクしていたプログラムはすべて再構築しなければなりません。したがってスタティックライブラリを使うべきかどうかは、いつも迷うところであります。関連するプログラム（あるいはリンクされるプロシージャ）であってもどちらかに定めなければなりません。

本章の手順では、スタティックライブラリのインストールはたいてい行わないようにしています。多くのケースでは `configure` に対して `--disable-static` を与えることで実現しますが、これができない場合には他の方法を取ります。ただし `glibc` や `gcc` においては、一般的なパッケージビルドに必要であるため、スタティックライブラリを利用します。

ライブラリに関してのより詳細な議論については BLFS ブックの `Libraries: Static or shared?` を参照してください。

8.2. パッケージ管理

パッケージ管理についての説明を LFS ブックに加えて欲しいとの要望をよく頂きます。パッケージ管理ツールがあれば、インストールされるファイル類を管理し、パッケージの削除やアップグレードを容易に実現できます。パッケージ管理ツールでは、バイナリファイルやライブラリファイルだけでなく、設定ファイル類のインストールも取り扱います。

パッケージ管理ツールをどうしたら・・・いえいえ本節は特定のパッケージ管理ツールを説明するわけではなく、その利用を勧めるものではありません。もっと広い意味で、管理手法にはどういったものがあり、どのように動作するかを説明します。あなたにとって最適なパッケージ管理がこの中にあるかもしれません。あるいはそれらをいくつか組み合わせて実施することになるかもしれません。本節ではパッケージのアップグレードを行う際に発生する問題についても触れます。

LFS や BLFS においてパッケージ管理ツールに触れていない理由には以下のものがあります。

- 本書の目的は Linux システムがいかに構築されているかを学ぶことです。 パッケージ管理はその目的からはずれてしまします。
- パッケージ管理についてはいくつもの方法があり、それらには一長一短があります。 ユーザーに対して満足のいくものを見出すのは困難です。

ヒントプロジェクト (Hints Project) ページにパッケージ管理についての情報が示されています。 望むものがあるかどうか確認してみてください。

8.2.1. アップグレードに関する問題

パッケージ管理ツールがあれば、各種ソフトウェアの最新版がリリースされた際に容易にアップグレードができます。全般に LFS ブックや BLFS ブックに示されている作業手順に従えば、新しいバージョンへのアップグレードを行っていくことはできます。 以下ではパッケージをアップグレードする際に注意すべき点、特に稼動中のシステムに対して実施するポイントについて説明します。

- カーネルをアップグレードする必要がある場合（たとえば 5.10.17 から 5.10.18 や 5.11.1 へ、など）、これ以外に再ビルドを必要とするものはありません。 カーネルとユーザー空間の境界が適切に定義されているため、システムは動作し続けるはずです。 特に Linux API ヘッダーは、カーネルに伴ってアップグレードする必要もありません（次に説明するように、アップグレードしてはなりません）。 アップグレードしたカーネルは、システムを再起動すれば利用できるようになります。
- Linux API ヘッダーや Glibc を新しいバージョン（例えば glibc-2.31 から glibc-2.32）にアップグレードする必要が発生した場合は LFS を再構築することが安全です。 必要なパッケージの依存順を知つていれば再構築できるかもしれません、これはお勧めしません。
- 共有ライブラリを提供しているパッケージをアップデートする場合で、そのライブラリ名が変更になったとします。 この場合は、このライブラリに動的リンクを行っていたパッケージは、新たなライブラリに向けてのリンクとなるよう再コンパイルすることが必要になります。（なおパッケージバージョンとライブラリ名には関連性はありません。）たとえば foo-1.2.3 というパッケージがあって、これが共有ライブラリ libfoo.so.1 をインストールしているとします。 そして新バージョン foo-1.2.4 が共有ライブラリ libfoo.so.2 を持っていて、これにアップグレードするものとします。 この場合 libfoo.so.1 に動的リンクを行っていたパッケージは、すべて新ライブラリバージョン libfoo.so.2 へのリンクを行うように再コンパイルしなければなりません。 そのように依存していたパッケージをすべて再コンパイルしてからでないと、古いバージョンのライブラリは削除するべきではありません。
- 共有ライブラリを提供しているパッケージをアップデートする場合で、そのライブラリ名には変更がなかったとします。 ただしライブラリ名の変更はなくても、ライブラリファイルのバージョン番号が減らされたとします。（たとえばライブラリ名 libfoo.so.1 はそのまま不变であったとして、ライブラリファイル名が libfoo.so.1.25 から libfoo.so.1.24 に変更となった場合です。）この場合、それまでインストールされていたバージョン（例では libfoo.so.1.25）のライブラリファイルは削除すべきです。 そうしておかないと、ldconfig を実行したときに（自分でコマンドライン実行したり、別のパッケージをインストールする際に実施されたりしたときに）、シンボリックリンク libfoo.so.1 がリセットされますが、それが指示す先が古いライブラリファイルとなってしまいます。なぜならバージョン番号がより大きい方なので、そのバージョンの方が「より新しい」と解釈されるためです。 こういった状況は、パッケージをダウングレードした場合や、パッケージにおけるバージョン番号づけの取り決めが突然変わってしまった場合に起こり得るものです。
- 共有ライブラリを提供しているパッケージをアップデートする場合で、そのライブラリ名に変更はなかったとします。 ただしそこでは重大な問題（特にセキュリティぜい弱性）が解消されているような場合は、この共有ライブラリにリンクしている実行中プログラムは、すべて再起動してください。 アップグレードした後に、以下のコマンドを root で実行すると、どういったプログラムが古いバージョンのライブラリを利用しているかの一覧が表示されます。（libfoo の部分は、目的のライブラリ名に置き換えてください。）

```
grep -l -e 'libfoo.*deleted' /proc/*/*maps |
  tr -cd 0-9\n | xargs -r ps u
```

OpenSSH を利用してシステムにアクセスしている場合であって、これがリンクするライブラリがアップデートされたとします。 その場合は sshd サービスの再起動が必要です。 またシステムからはいったんログアウトしてログインし直し、その後に上のコマンドをもう一度実行して、削除されたライブラリを利用してないかどうかの確認を行ってください。

systemd デーモンが（PID 1 として実行されていて）、アップデートしたライブラリにリンクされていた場合は、リブートするのではなく、root ユーザーになって systemctl daemon-reexec を実行すれば再起動できます。

- バイナリや共有ライブラリが上書きされると、そのバイナリや共有バイナリ内のコードやデータを利用するプロセスがクラッシュすることがあります。 プロセスがクラッシュしないように、バイナリや共有ライブラリを正しく更新する方法は、まず初めに削除を行ってから、新たなものをそこにインストールすることです。 Coreutils が提供する install コマンドは、すでにこの処理が実装されているため、たいていのパッケージにおいて、バイナリやライブラリ

のインストールに利用されています。したがってそのような問題に悩まされることは、これまでほとんどなかったはずです。しかしパッケージの中には（特に BLFS にある Mozilla JS など）、すでにあるファイルを上書きする方式をとっているため、クラッシュするものがあります。そこでパッケージ更新の前には、それまでの作業を保存して、不要な起動プロセスは停止することが安全です。

8.2.2. パッケージ管理手法

以下に一般的なパッケージ管理手法について示します。パッケージ管理マネージャーを用いる前に、さまざまな方法を検討し特にそれぞれの欠点も確認してください。

8.2.2.1. すべては頭の中で

そうです。これもパッケージ管理のやり方の一つです。いろいろなパッケージに精通していて、どんなファイルがインストールされるか分かっている人もいます。そんな人はパッケージ管理ツールを必要としません。あるいはパッケージが更新された際にシステム全体を再構築しようと考えている人なら、やはりパッケージ管理ツールを必要としません。

8.2.2.2. 異なるディレクトリへのインストール

これは最も単純なパッケージ管理のやり方であり、パッケージ管理のためのツールを用いる必要はありません。個々のパッケージを個別のディレクトリにインストールする方法です。例えば `foo-1.1` というパッケージを `/usr/pkg/foo-1.1` ディレクトリにインストールし、この `/usr/pkg/foo-1.1` に対するシンボリックリンク `/usr/pkg/foo` を作成します。このパッケージの新しいバージョン `foo-1.2` をインストールする際には `/usr/pkg/foo-1.2` ディレクトリにインストールした上で、先ほどのシンボリックリンクをこのディレクトリを指し示すように置き換えます。

`PATH`、`LD_LIBRARY_PATH`、`MANPATH`、`INFOPATH`、`CPPFLAGS` といった環境変数に対しては `/usr/pkg/foo` ディレクトリを加える必要があるかもしれません。もっともパッケージによっては、このやり方では管理できないものもあります。

8.2.2.3. シンボリックリンク方式による管理

これは一つ前に示したパッケージ管理テクニックの応用です。各パッケージは同様にインストールします。ただし先ほどのようなシンボリックリンクを生成するのではなく `/usr` ディレクトリ階層の中に各ファイルのシンボリックリンクを生成します。この方法であれば環境変数を追加設定する必要がなくなります。シンボリックリンクを自動生成することができますが、パッケージ管理ツールの中にはこの手法を使って構築されているものもあります。よく知られているものとして `Stow`、`Epkg`、`Graft`、`Depot` があります。

インストール時には意図的な指示が必要です。パッケージにとっては `/usr` にインストールすることが指定されたものとなります。実際には `/usr/pkg` 配下にインストールされるわけです。このインストール方法は単純なものではありません。例えば今 `libfoo-1.1` というパッケージをインストールするものとします。以下のコマンドでは、このパッケージを正しくインストールできません。

```
./configure --prefix=/usr/pkg/libfoo/1.1
make
make install
```

インストール自体は動作しますが、このパッケージに依存している他のパッケージは期待どおりには `libfoo` を正しくリンクしません。例えば `libfoo` をリンクするパッケージをコンパイルする際には `/usr/lib/libfoo.so.1` がリンクされると思うかもしれません。実際には `/usr/pkg/libfoo/1.1/lib/libfoo.so.1` がリンクされることになります。正しくリンクするためには `DESTDIR` 変数を使って、パッケージのインストールをうまく仕組む必要があります。この方法は以下のようにして行います。

```
./configure --prefix=/usr
make
make DESTDIR=/usr/pkg/libfoo/1.1 install
```

この手法をサポートするパッケージは数多く存在しますが、そうでないものもあります。この手法を取り入れていないパッケージに対しては、手作業でインストールすることが必要になります。またはそういった問題を抱えるパッケージであれば `/opt` ディレクトリにインストールする方が簡単かもしれません。

8.2.2.4. タイムスタンプによる管理方法

この方法ではパッケージをインストールするにあたって、あるファイルにタイムスタンプが記されます。インストールの直後に `find` コマンドを適当なオプション指定により用いることで、インストールされるすべてのファイルのログが生成されます。これはタイムスタンプファイルの生成の後に行われます。この方法を用いたパッケージ管理ツールとして `install-log` があります。

この方法はシンプルであるという利点がありますが、以下の二つの欠点があります。インストールの際に、いずれかのファイルのタイムスタンプが現在時刻でなかった場合、そういったファイルはパッケージ管理ツールが正しく制御できません。またこの方法は一つのパッケージだけが、その時にインストールされることを前提とします。例えば二つのパッケージが二つの異なる端末から同時にインストールされるような場合は、ログファイルが適切に生成されません。

8.2.2.5. インストールスクリプトの追跡管理

この方法はインストールスクリプトが実行するコマンドを記録するものです。これには以下の二種類の手法があります。

インストールされるライブラリを事前にロードする場所を環境変数 `LD_PRELOAD` に定めておいてそれからインストールを行う方法です。パッケージのインストール中には `cp`、`install`、`mv` など、さまざまな実行モジュールにそのライブラリをリンクさせ、ファイルシステムを変更するようなシステムコールを監視することで、そのライブラリがパッケージを追跡管理できるようにします。この方法を実現するためには、動的リンクする実行モジュールはすべて `suid` ビット、`sgid` ビットがオフでなければなりません。事前にライブラリをロードしておくと、インストール中に予期しない副作用が発生するかもしれません。したがって、ある程度のテスト確認を行って、パッケージ管理ツールが不具合を引き起こさないことを、かかるべきファイルの記録を取っておくことが必要とされます。

二つめの方法は `strace` を用いるものです。これはインストールスクリプトの実行中に発生するシステムコールを記録するものです。

8.2.2.6. パッケージのアーカイブを生成する方法

この方法では、シンボリックリンク方式によるパッケージ管理にて説明したのと同じように、パッケージが個別のディレクトリにインストールされます。インストールの後は、インストールされたファイルのアーカイブが生成されます。このアーカイブはローカルPCへのインストールに用いられたり、他のPCへのインストールに利用されたりします。

商用ディストリビューションが採用しているパッケージ管理ツールは、ほとんどがこの方法によるものです。この方法に従ったパッケージ管理ツールの例に RPM があります。（これは Linux Standard Base Specification が規定しています。）また `pkg-utils`、Debian の `apt`、Gentoo の Portage システムがあります。このパッケージ管理手法を LFS システムに適用するヒント情報が <https://www.linuxfromscratch.org/hints/downloads/files/fakeroot.txt> にあります。

パッケージファイルにその依存パッケージ情報まで含めてアーカイブ生成することは、非常に複雑となり LFS の範疇を超えるものです。

Slackware は、パッケージアーカイブに対して tar ベースのシステムを利用しています。他のパッケージ管理ツールはパッケージの依存性を取り扱いますが、このシステムは意図的にこれを行っていません。Slackware のパッケージ管理に関する詳細は <http://www.slackbook.org/html/package-management.html> を参照してください。

8.2.2.7. ユーザー情報をベースとする管理方法

この手法は LFS に固有のものであり Matthias Benkmann により考案されました。ヒントプロジェクト (Hints Project) から入手することが出来ます。考え方としては、各パッケージを個々のユーザーが共有ディレクトリにインストールします。パッケージに属するファイル類は、ユーザーIDを確認することで容易に特定出来るようになります。この手法の特徴や短所については、複雑な話となるため本節では説明しません。詳しくは https://www.linuxfromscratch.org/hints/downloads/files/more_control_and_pkg_man.txt に示されているヒントを参照してください。

8.2.3. 他システムへの LFS の配置

LFS システムの利点の一つとして、どのファイルもディスク上のどこに位置していても構わないことです。他のコンピューターに対してビルドした LFS の複製を作ろうとするなら、それが同等のアーキテクチャーであれば容易に実現できます。つまり `tar` コマンドを使って LFS のルートディレクトリを含むパーティション（LFS の基本的なビルドの場合、非圧縮で 250MB 程度）をまとめ、これをネットワーク転送か、あるいは CD-ROM を通じて新しいシステムにコピーし、伸張（解凍）だけです。この場合でも、設定ファイルはいくらか変更が必要です。変更が必要となる設定ファイルは以下のとおりです。 `/etc/hosts`、`/etc/fstab`、`/etc/passwd`、`/etc/group`、`/etc/shadow`、`/etc/ld.so.conf`

新しいシステムのハードウェアと元のカーネルに差異があるかもしれないため、カーネルを再ビルドする必要があるでしょう。



注記

類似するアーキテクチャーのシステム間にコピーリーを行う際には問題が生じるとの報告があります。例えばインテルアーキテクチャーに対する命令セットは AMD プロセッサーに対するものと完全に一致しているわけではないため、一方の命令セットが後に他方で動作しなくなることも考えられます。

最後に新システムを起動可能とするために 「GRUB を用いたブートプロセスの設定」を設定する必要があります。

8.3. Man-pages-5.13

Man-pages パッケージは 2,200 以上のマニュアルページを提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU 以下
必要ディスク容量: 33 MB

8.3.1. Man-pages のインストール

Man-pages をインストールするために以下を実行します。

```
make prefix=/usr install
```

8.3.2. Man-pages の構成

インストールファイル: さまざまな man ページ

概略説明

man ページ C 言語の関数、重要なデバイスファイル、重要な設定ファイルなどを説明します。

8.4. Iana-Etc-20220812

Iana-Etc パッケージはネットワークサービスやプロトコルのためのデータを提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU 以下
必要ディスク容量: 4.8 MB

8.4.1. Iana-Etc のインストール

このパッケージでは、必要とするファイルを所定の場所にコピーするだけにします。

```
cp services protocols /etc
```

8.4.2. Iana-Etc の構成

インストールファイル: /etc/protocols, /etc/services

概略説明

/etc/protocols TCP/IP により利用可能なさまざまな DARPA インターネットプロトコル (DARPA Internet protocols) を記述しています。

/etc/services インターネットサービスを分かりやすく表現した名称と、その割り当てポートおよびプロトコルの種類の対応情報を提供します。

8.5. Glibc-2.36

Glibc パッケージは主要な C ライブラリを提供します。このライブラリは基本的な処理ルーチンを含むもので、メモリ割り当て、ディレクトリ走査、ファイルのオープン、クローズや入出力、文字列操作、パターンマッチング、算術処理、等々があります。

概算ビルト時間: 24 SBU
必要ディスク容量: 2.8 GB

8.5.1. Glibc のインストール

Glibc のプログラムの中には /var/db ディレクトリに実行データを収容するものがあり、これは FHS に準拠していません。以下のパッチを適用することで、実行データの収容先を FHS 準拠のディレクトリとします。

```
patch -Np1 -i ../glibc-2.36-fhs-1.patch
```

Glibc のドキュメントでは専用のビルトディレクトリを作成することが推奨されています。

```
mkdir -v build
cd      build
```

ldconfig と sln ユーティリティーを /usr/sbin にインストールするようにします。

```
echo "rootsbindir=/usr/sbin" > configparms
```

Glibc をコンパイルするための準備をします。

```
../configure --prefix=/usr
             \
             --disable-werror
             \
             --enable-kernel=3.2
             \
             --enable-stack-protector=strong
             \
             --with-headers=/usr/include
             \
             libc_cv_slibdir=/usr/lib
```

configure オプションの意味

--disable-werror

GCC に対して -Werror オプションを利用しないようにします。テストスイートを実行するために必要となります。

--enable-kernel=3.2

本オプションはビルトシステムに対して、カーネルバージョンが古くても 3.2 を用いることを指示します。これより古いバージョンにおけるシステムコールが用いられないようにするために、その回避策をとるものです。

--enable-stack-protector=strong

このオプション指定によりスタックに積まれる関数プリアンブル内に、追加のコードを付与することにより、システムセキュリティを向上させます。その追加コードは、スタック破壊攻撃 (stack smashing attacks) のようなバッファーオーバーフローをチェックします。

--with-headers=/usr/include

このオプションはビルトシステムにおいて、カーネル API ヘッダーを探す場所を指定します。

libc_cv_slibdir=/usr/lib

この変数によって、あらゆるシステムにおけるライブラリを正しく設定します。 lib64 は利用しません。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

重要

本節における Glibc のテストスイートは極めて重要なものです。したがってどのような場合であっても必ず実行してください。

全般にテストの中には失敗するものがありますが、以下に示すものであれば無視しても構いません。

```
make check
```

テストに失敗する場合があります。これは Glibc のテストスイートがホストシステムにある程度依存しているためです。4200 を超えるテストの中で、ほんの少数のテストは失敗しますが、無視できるものです。LFS の当バージョンにおいて発生しがちな問題を以下に示します。

- io/tst-lchmod は LFS の chroot 環境においては失敗します。
- misc/tst-ttyname は LFS の chroot 環境においては失敗します。
- nss/tst-nss-files-hosts-long は失敗することがあります。これはシステム内にループバック以外の IP アドレスがない場合です。
- ホストのカーネルが比較的古い場合に stdlib/tst-arc4random-thread というテストが失敗します。
- nss/tst-nss-files-hosts-multi のようなテストでは、内部のタイムアウトが原因で比較的遅くなるシステム上では失敗します。

支障が出る話ではありませんが Glibc のインストール時には /etc/ld.so.conf ファイルが存在していないとして警告メッセージが出力されます。これをなくすために以下を実行します。

```
touch /etc/ld.so.conf
```

Makefile を修正して、不要な健全性チェックを無効にします。これは、この段階での LFS 環境では失敗するためです。

```
sed '/test-installation/s@$(PERL)@echo not running@' -i ..../Makefile
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

ldd スクリプト内にある実行可能なローダーへのパスがハードコーディングされているので、これを修正します。

```
sed '/RTLDLIST=/s@/usr@@g' -i /usr/bin/ldd
```

nscd コマンドに対する設定ファイルや実行ディレクトリをインストールします。

```
cp -v ..../nscd/nscd.conf /etc/nscd.conf  
mkdir -pv /var/cache/nscd
```

nscd コマンドに対しての systemd サポートファイルをインストールします。

```
install -v -Dm644 ..../nscd/nscd.tmpfiles /usr/lib/tmpfiles.d/nscd.conf  
install -v -Dm644 ..../nscd/nscd.service /usr/lib/systemd/system/nscd.service
```

システムを各種の言語に対応させるためのロケールをインストールします。テストスイートにおいてロケールは必要ではありませんが、将来的にはロケールが不足していることによって、重要なテストが実施されずに見逃してしまうかもしれません。

各ロケールは `localeddef` プログラムを使ってインストールします。 例えば以下に示す 2 つめの `localeddef` では、キャラクターセットには依存しないロケール定義 `/usr/share/i18n/locales/cs_CZ` とキャラクターマップ定義 `/usr/share/i18n/charmaps=UTF-8.gz` とを結合させて `/usr/lib/locale/locale-archive` ファイルにその情報を付け加えます。 以下のコマンドは、テストを成功させるために必要となる最低限のロケールをインストールするものです。

```
mkdir -pv /usr/lib/locale
localedef -i POSIX -f UTF-8 C.UTF-8 2> /dev/null || true
localedef -i cs_CZ -f UTF-8 cs_CZ.UTF-8
localedef -i de_DE -f ISO-8859-1 de_DE
localedef -i de_DE@euro -f ISO-8859-15 de_DE@euro
localedef -i de_DE -f UTF-8 de_DE.UTF-8
localedef -i el_GR -f ISO-8859-7 el_GR
localedef -i en_GB -f ISO-8859-1 en_GB
localedef -i en_GB -f UTF-8 en_GB.UTF-8
localedef -i en_HK -f ISO-8859-1 en_HK
localedef -i en_PH -f ISO-8859-1 en_PH
localedef -i en_US -f ISO-8859-1 en_US
localedef -i en_US -f UTF-8 en_US.UTF-8
localedef -i es_ES -f ISO-8859-15 es_ES@euro
localedef -i es_MX -f ISO-8859-1 es_MX
localedef -i fa_IR -f UTF-8 fa_IR
localedef -i fr_FR -f ISO-8859-1 fr_FR
localedef -i fr_FR@euro -f ISO-8859-15 fr_FR@euro
localedef -i fr_FR -f UTF-8 fr_FR.UTF-8
localedef -i is_IS -f ISO-8859-1 is_IS
localedef -i is_IS -f UTF-8 is_IS.UTF-8
localedef -i it_IT -f ISO-8859-1 it_IT
localedef -i it_IT -f ISO-8859-15 it_IT@euro
localedef -i it_IT -f UTF-8 it_IT.UTF-8
localedef -i ja_JP -f EUC-JP ja_JP
localedef -i ja_JP -f SHIFT_JIS ja_JP.SJIS 2> /dev/null || true
localedef -i ja_JP -f UTF-8 ja_JP.UTF-8
localedef -i nl_NL@euro -f ISO-8859-15 nl_NL@euro
localedef -i ru_RU -f KOI8-R ru_RU.KOI8-R
localedef -i ru_RU -f UTF-8 ru_RU.UTF-8
localedef -i se_NO -f UTF-8 se_NO.UTF-8
localedef -i ta_IN -f UTF-8 ta_IN.UTF-8
localedef -i tr_TR -f UTF-8 tr_TR.UTF-8
localedef -i zh_CN -f GB18030 zh_CN.GB18030
localedef -i zh_HK -f BIG5-HKSCS zh_HK.BIG5-HKSCS
localedef -i zh_TW -f UTF-8 zh_TW.UTF-8
```

上に加えて、あなたの国、言語、キャラクターセットを定めるためのロケールをインストールしてください。

必要に応じて `glibc-2.36/localedata/SUPPORTED` に示されるすべてのロケールを同時にインストールしてください。（そこには上のロケールも含め、すべてのロケールが列記されています。）以下のコマンドによりそれを実現します。ただしこれには相当な処理時間を要します。

```
make locedata/install-locales
```

さらに必要なら `glibc-2.36/localedata/SUPPORTED` ファイルに示されていないロケールは `localeddef` コマンドを使って生成、インストールを行ってください。たとえば以下の 2 つのロケールは、本章で後に実施するテストにおいて必要になります。

```
localedef -i POSIX -f UTF-8 C.UTF-8 2> /dev/null || true
localedef -i ja_JP -f SHIFT_JIS ja_JP.SJIS 2> /dev/null || true
```



注記

現状の Glibc は、国際ドメイン名の解決に `libidn2` を利用します。これは実行時に依存するパッケージです。この機能が必要である場合は、BLFS にある `libidn2` ページに示されているインストール手順を参照してください。

8.5.2. Glibc の設定

8.5.2.1. nsswitch.conf の追加

/etc/nsswitch.conf ファイルを作成しておく必要があります。このファイルが無い場合、Glibc のデフォルト値ではネットワーク環境下にて Glibc が正しく動作しません。

以下のコマンドを実行して /etc/nsswitch.conf ファイルを生成します。

```
cat > /etc/nsswitch.conf << "EOF"
# Begin /etc/nsswitch.conf

passwd: files
group: files
shadow: files

hosts: files dns
networks: files

protocols: files
services: files
ethers: files
rpc: files

# End /etc/nsswitch.conf
EOF
```

8.5.2.2. タイムゾーンデータの追加

以下によりタイムゾーンデータをインストールし設定します。

```
tar -xf ../../tzdata2022c.tar.gz

ZONEINFO=/usr/share/zoneinfo
mkdir -pv $ZONEINFO/{posix,right}

for tz in etcetera southamerica northamerica europe africa antarctica \
          asia australasia backward; do
    zic -L /dev/null -d $ZONEINFO ${tz}
    zic -L /dev/null -d $ZONEINFO/posix ${tz}
    zic -L leapseconds -d $ZONEINFO/right ${tz}
done

cp -v zone.tab zone1970.tab iso3166.tab $ZONEINFO
zic -d $ZONEINFO -p America/New_York
unset ZONEINFO
```

zic コマンドの意味

zic -L /dev/null ...

うるう秒を含まない posix タイムゾーンデータを生成します。これらは zoneinfo や zoneinfo/posix に収容するものとして適切なものです。zoneinfo へは POSIX 準拠のタイムゾーンデータを含めることが必要であり、こうしておかないと数々のテストスイートにてエラーが発生してしまいます。組み込みシステムなどでは容量の制約が厳しいため、タイムゾーンデータはあまり更新したくない場合があり、posix ディレクトリを設けなければ 1.9 MB もの容量を節約できます。ただしアプリケーションやテストスイートによっては、エラーが発生するかもしれません。

zic -L leapseconds ...

うるう秒を含んだ正しいタイムゾーンデータを生成します。組み込みシステムなどでは容量の制約が厳しいため、タイムゾーンデータはあまり更新したくない場合や、さほど気にかけない場合もあります。right ディレクトリを省略することにすれば 1.9MB の容量を節約することができます。

zic ... -p ...

posixrules ファイルを生成します。ここでは New York を用います。POSIX では、日中の保存時刻として US ルールに従うことを規程しているためです。

ローカルなタイムゾーンの設定を行う1つの方法として、ここでは以下のスクリプトを実行します。

tzselect

地域情報を設定するためにいくつか尋ねられるのでそれに答えます。このスクリプトはタイムゾーン名を表示します。(例えば America/Edmonton などです。) /usr/share/zoneinfo ディレクトリにはさらに Canada/Eastern や EST5EDT のようなタイムゾーンもあります。これらはこのスクリプトでは認識されませんが、利用することは可能です。

以下のコマンドにより /etc/localtime ファイルを生成します。

```
ln -sfv /usr/share/zoneinfo/<xxx> /etc/localtime
```

<xxx> の部分は設定するタイムゾーンの名前(例えば Canada/Eastern など)に置き換えてください。

8.5.2.3. ダイナミックローダーの設定

ダイナミックリンクラー(/lib/ld-linux.so.2)がダイナミックライブラリを検索するデフォルトのディレクトリが /usr/lib ディレクトリです。各種プログラムが実行される際にはここから検索されたダイナミックライブラリがリンクされます。もし /usr/lib 以外のディレクトリにライブラリファイルがあるなら /etc/ld.so.conf ファイルに記述を追加して、ダイナミックローダーがそれらを探し出せるようにしておくことが必要です。追加のライブラリが配置されるディレクトリとしては /usr/local/lib ディレクトリと /opt/lib ディレクトリという二つがよく利用されます。

ダイナミックローダーの検索パスとして、それらのディレクトリを追加します。

以下のコマンドを実行して /etc/ld.so.conf ファイルを新たに生成します。

```
cat > /etc/ld.so.conf << "EOF"
# Begin /etc/ld.so.conf
/usr/local/lib
/opt/lib

EOF
```

必要がある場合には、ダイナミックローダーに対する設定として、他ディレクトリにて指定されるファイルをインクルードするようにもできます。通常は、そのファイル内の1行に、必要となるライブラリパスを記述します。このような設定を利用する場合には以下のようなコマンドを実行します。

```
cat >> /etc/ld.so.conf << "EOF"
# Add an include directory
include /etc/ld.so.conf.d/*.conf

EOF
mkdir -pv /etc/ld.so.conf.d
```

8.5.3. Glibc の構成

インストールプログラム:

gencat, getconf, getent, iconv, iconvconfig, ldconfig, ldd, ldd libc4, ld.so (ld-linux-x86-64.so.2 または ld-linux.so.2 へのリンク), locale, localedef, makedb, mtrace, nsqd, pcprofiledump, pldd, sln, sotrus, sprof, tzselect, xtrace, zdump, zic

インストールライブラリ:

ld-linux-x86-64.so.2, ld-linux.so.2, libBrokenLocale.{a, so}, libanl.{a, so}, libc.{a, so}, libc_nonshared.a, libc_malloc_debug.so, libcrypt.{a, so}, libdl.{a, so.2}, libg.a, libm.{a, so}, libmcheck.a, libmemusage.so, libmvec.{a, so}, libnsl.so.1, libnss_compat.so, libnss_dns.so, libnss_files.so, libnss_hesiod.so, libpcprofile.so, libpthread.{a, so.0}, libresolv.{a, so}, librt.{a, so.1}, libthread_db.so, and libutil.{a, so.1}

インストールディレクトリ:

/usr/include/arpa, /usr/include/bits, /usr/include/gnu, /usr/include/net, /usr/include/netash, /usr/include/netatalk, /usr/include/netax25, /usr/include/neteconet, /usr/include/netinet, /usr/include/netipx, /usr/include/netiucv, /usr/include/netpacket, /usr/include/netrom, /usr/include/netrose, /usr/include/nfs, /usr/include/protocols, /usr/include/rpc, /usr/include/sys, /usr/lib/audit, /usr/lib/gconv, /usr/lib/locale, /usr/libexec/getconf, /usr/share/i18n, /usr/share/zoneinfo, /var/cache/nsqd, /var/lib/nss_db

概略説明

gencat

メッセージカタログを生成します。

getconf	ファイルシステムに固有の変数に設定された値を表示します。
getent	管理データベースから設定項目を取得します。
iconv	キャラクターセットを変換します。
iconvconfig	高速ロードができる iconv モジュール設定ファイルを生成します。
ldconfig	ダイナミックリンクラーの実行時バインディングを設定します。
ldd	指定したプログラムまたは共有ライブラリが必要としている共有ライブラリを表示します。
lddlibc4	オブジェクトファイルを使って ldd コマンドを補助します。 これは x86_64 のような最新アーキテクチャーには存在しません。
locale	現在のロケールに対するさまざまな情報を表示します。
localeddef	ロケールの設定をコンパイルします。
makedb	テキストを入力として単純なデータベースを生成します。
mtrace	メモリトレースファイル (memory trace file) を読み込んで解釈します。 そして可読可能な書式で出力します。
nscd	一般的なネームサービスへの変更要求のキャッシュを提供するデーモン。
pcprofiledump	PC プロファイリングによって生成された情報をダンプします。
pldd	稼動中のプロセスにて利用されている動的共有オブジェクト (dynamic shared objects) を一覧出力します。
sln	スタティックなリンクを行う ln プログラム。
sotruss	指定されたコマンドの共有ライブラリ内のプロシジャー コールをトレースします。
sprof	共有オブジェクトのプロファイリングデータを読み込んで表示します。
tzselect	ユーザーに対してシステムの設置地域を問合せ、対応するタイムゾーンの記述を表示します。
xtrace	プログラム内にて現在実行されている関数を表示することで、そのプログラムの実行状況を追跡します。
zdump	タイムゾーンをダンプします。
zic	タイムゾーンコンパイラー。
ld-* .so	共有ライブラリのためのヘルパープログラム。
libBrokenLocale	Glibc が内部で利用するもので、異常が発生しているプログラムを見つけ出します。(例えば Motif アプリケーションなど) 詳しくは glibc-2.36/locale/broken_cur_max.c に書かれたコメントを参照してください。
libanl	非同期の名前解決 (asynchronous name lookup) ライブラリ。
libc	主要な C ライブラリ。
libc_malloc_debug	プリロード時のメモリ割り当てチェックをオンにします。
libcrypt	暗号化ライブラリ。
libdl	何の関数も含まないダミー ライブラリ。 以前はダイナミックリンクインターフェースライブラリでしたが、現在その関数は libc に含まれるようになりました。
libg	何の関数も含まないダミーのライブラリ。 かつては g++ のランタイムライブラリであったものです。
libm	数学ライブラリ。
libmvec	ベクトル数学ライブラリ。 libm が用いられる際に必要となるためリンクされます。
libmcheck	このライブラリにリンクした場合、メモリ割り当てのチェック機能を有効にします。
libmemusage	memusage コマンドが利用するもので、プログラムのメモリ使用に関する情報を収集します。
libnsl	ネットワークサービスライブラリ。 現在は非推奨。
libnss_*	NSS (Name Service Switch) モジュール。 ホスト、ユーザー名、エイリアス、サービス、プロトコルなどの名前解決を行う関数を提供します。 /etc/nsswitch.conf での設定に従って libc によりロードされます。
libpcprofile	PC プロファイルにたいして実行モジュールをプリロードするために用いられます。
libpthread	関数を全く含まないダミーのライブラリ。 かつては POSIX.1b Realtime Extension によって規定されているインターフェースをほとんど含めた関数を提供していました。 現在その関数は libc に含まれるようになりました。

libresolv	インターネットドメインネームサーバーに対しての、パケットの生成、送信、解析を行う関数を提供します。
librt	POSIX.1b リアルタイム拡張 (Realtime Extension) にて既定されているインターフェースをほぼ網羅した関数を提供します。
libthread_db	マルチスレッドプログラム用のデバッガーを構築するための有用な関数を提供します。
libutil	何の関数も含まないダミーライブライ。以前は、さまざまな Unix ユーティリティーに用いられる「標準的な」関数のコードを含んでいました。現在その関数は libc に含まれるようになりました。

8.6. Zlib-1.2.12

Zlib パッケージは、各種プログラムから呼び出される、圧縮、伸張（解凍）を行う関数を提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU 以下
必要ディスク容量: 6.1 MB

8.6.1. Zlib のインストール

Zlib をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストするには以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

不要なスタティックライブラリを削除します。

```
rm -fv /usr/lib/libz.a
```

8.6.2. Zlib の構成

インストールライブラリ: libz.so

概略説明

libz 各種プログラムから呼び出される、圧縮、伸張（解凍）を行う関数を提供します。

8.7. Bzip2-1.0.8

Bzip2 パッケージはファイル圧縮、伸長（解凍）を行うプログラムを提供します。テキストファイルであれば、これまでもよく用いられてきた gzip に比べて bzip2 の方が圧縮率の高いファイルを生成できます。

概算ビルド時間: less than 0.1 SBU
 必要ディスク容量: 7.2 MB

8.7.1. Bzip2 のインストール

本パッケージのドキュメントをインストールするためにパッチを適用します。

```
patch -Np1 -i ../bzip2-1.0.8-install_docs-1.patch
```

以下のコマンドによりシンボリックリンクを相対的なものとしてインストールします。

```
sed -i 's@\(\ln -s -f \)$(PREFIX)/bin/@\1@' Makefile
```

man ページのインストール先を正しいディレクトリに修正します。

```
sed -i "s@(PREFIX)/man@(PREFIX)/share/man@g" Makefile
```

Bzip2 をコンパイルするための準備をします。

```
make -f Makefile-libbz2_so
make clean
```

make パラメーターの意味

-f Makefile-libbz2_so

このパラメーターは Bzip2 のビルドにあたって通常の Makefile ファイルではなく Makefile-libbz2_so ファイルを利用することを指示します。これはダイナミックライブラリ libbz2.so をビルドし Bzip2 の各種プログラムをこれにリンクします。

パッケージのコンパイルとテストを行います。

```
make
```

パッケージをインストールします。

```
make PREFIX=/usr install
```

共有ライブラリをインストールします。

```
cp -av libbz2.so.* /usr/lib
ln -sv libbz2.so.1.0.8 /usr/lib/libbz2.so
```

共有化された bzip2 実行モジュールを /usr/bin ディレクトリにインストールします。またシンボリックリンクにより bzip2 のコピーを 2 つ作ります。

```
cp -v bzip2-shared /usr/bin/bzip2
for i in /usr/bin/{bzcat,bunzip2}; do
    ln -sfv bzip2 $i
done
```

不要なスタティックライブラリを削除します。

```
rm -fv /usr/lib/libbz2.a
```

8.7.2. Bzip2 の構成

インストールプログラム:	bunzip2 (bzip2 へのリンク), bzcat (bzip2 へのリンク), bzcmp (bzdif へのリンク), bzdiff, bzegrep (bzgrep へのリンク), bzfgrep (bzgrep へのリンク), bzgrep, bzip2, bzip2recover, bzless (bzmore へのリンク), bzmore
インストールライブラリ:	libbz2.so
インストールディレクトリ:	/usr/share/doc/bzip2-1.0.8

概略説明

bunzip2	bzip2 で圧縮されたファイルを解凍します。
bzcat	解凍結果を標準出力に出力します。
bzcmp	bzip2 で圧縮されたファイルに対して cmp を実行します。
bzdiff	bzip2 で圧縮されたファイルに対して diff を実行します。
bzegrep	bzip2 で圧縮されたファイルに対して egrep を実行します。
bzfgrep	bzip2 で圧縮されたファイルに対して fgrep を実行します。
bzgrep	bzip2 で圧縮されたファイルに対して grep を実行します。
bzip2	ブロックソート法（バロウズ-ホイラー変換）とハフマン符号化法を用いてファイル圧縮を行います。 圧縮率は、従来用いられてきた「Lempel-Ziv」アルゴリズムによるもの、例えば gzip コマンドによるものに比べて高いものです。
bzip2recover	壊れた bzip2 ファイルの復旧を試みます。
bzless	bzip2 で圧縮されたファイルに対して less を実行します。
bzmore	bzip2 で圧縮されたファイルに対して more を実行します。
libbz2	ブロックソート法（バロウズ-ホイラー変換）による可逆的なデータ圧縮を提供するライブラリ。

8.8. Xz-5.2.6

Xz パッケージは、ファイルの圧縮、伸張（解凍）を行うプログラムを提供します。これは lzma フォーマットおよび新しい xz 圧縮フォーマットを取り扱います。xz コマンドによりテキストファイルを圧縮すると、従来の gzip コマンドや bzip2 コマンドに比べて、高い圧縮率を実現できます。

概算ビルド時間: 0.2 SBU
必要ディスク容量: 16 MB

8.8.1. Xz のインストール

Xz をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr \
--disable-static \
--docdir=/usr/share/doc/xz-5.2.6
```

パッケージをコンパイルします。

make

ビルド結果をテストする場合は以下を実行します。

make check

パッケージをインストールします。

make install

8.8.2. Xz の構成

インストールプログラム:

lzcat (xzへのリンク), lzcmp (xzdiffへのリンク), lzdifff (xzdiffへのリンク), lzegrep (xzgrepへのリンク), lzfgrep (xzgrepへのリンク), lzgrep (xzgrepへのリンク), lzless (xzlessへのリンク), lzma (xzへのリンク), lzmadec, lzmainfo, lzmore (xzmoreへのリンク), unlzma (xzへのリンク), unxz (xzへのリンク), xz, xzcat (xzへのリンク), xzcmp (xzdiffへのリンク), xzdec, xzdiff, xzgrep (xzgrepへのリンク), xzfgrep (xzgrepへのリンク), xzgrep, xzless, xzmore

インストールライブラリ:

liblzma.so

インストールディレクトリ:

/usr/include/lzma, /usr/share/doc/xz-5.2.6

概略説明

lzcat	ファイルを伸張（解凍）し標準出力へ出力します。
lzcmp	LZMA 圧縮されたファイルに対して cmp を実行します。
lzdifff	LZMA 圧縮されたファイルに対して diff を実行します。
lzegrep	LZMA 圧縮されたファイルに対して egrep を実行します。
lzfgrep	LZMA 圧縮されたファイルに対して fgrep を実行します。
lzgrep	LZMA 圧縮されたファイルに対して grep を実行します。
lzless	LZMA 圧縮されたファイルに対して less を実行します。
lzma	LZMA フォーマットによりファイルの圧縮と伸張（解凍）を行います。
lzmadec	LZMA 圧縮されたファイルを高速に伸張（解凍）するコンパクトなプログラムです。
lzmainfo	LZMA 圧縮されたファイルのヘッダーに保持されている情報を表示します。
lzmore	LZMA 圧縮されたファイルに対して more を実行します。
unlzma	LZMA フォーマットされたファイルを伸張（解凍）します。
unxz	XZ フォーマットされたファイルを伸張（解凍）します。
xz	XZ フォーマットによりファイルの圧縮と伸張（解凍）を行います。
xzcat	ファイルの伸張（解凍）を行い標準出力へ出力します。
xzcmp	XZ 圧縮されたファイルに対して cmp を実行します。
xzdec	XZ 圧縮されたファイルを高速に伸張（解凍）するコンパクトなプログラムです。

xzdiff	XZ 圧縮されたファイルに対して diff を実行します。
xzgrep	XZ 圧縮されたファイルに対して egrep を実行します。
xzfgrep	XZ 圧縮されたファイルに対して fgrep を実行します。
xzgrep	XZ 圧縮されたファイルに対して grep を実行します。
xzless	XZ 圧縮されたファイルに対して less を実行します。
xzmore	XZ 圧縮されたファイルに対して more を実行します。
liblzma	Lempel-Ziv-Markov のチェーンアルゴリズムを利用し、損失なくブロックソートによりデータ圧縮を行う機能を提供するライブラリです。

8.9. Zstd-1.5.2

Zstandard とはリアルタイムの圧縮アルゴリズムのことであり、高圧縮率を実現します。 圧縮、処理速度間のトレードオフを広範囲に提供するとともに、高速な伸張（解凍）処理を実現します。

概算ビルト時間: 1.1 SBU
必要ディスク容量: 56 MB

8.9.1. Zstd のインストール

アップストリームが認識している問題修正のためのパッチを適用します。

```
patch -Np1 -i ../zstd-1.5.2-upstream_fixes-1.patch
```

パッケージをコンパイルします。

```
make prefix=/usr
```



注記

テスト結果の出力の中に 'failed' と示される箇所があります。これは実際のテストが失敗したときだけ 'FAIL' と出力されるものです。したがってテスト失敗ではありません。

ビルド結果をテストするには以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make prefix=/usr install
```

スタティックライブラリを削除します。

```
rm -v /usr/lib/libzstd.a
```

8.9.2. Zstd の構成

インストールプログラム:	zstd, zstdcat (zstd へのリンク), zstdgrep, zstdless, zstdmt (zstd へのリンク), unzstd (zstd へのリンク)
インストールライブラリ:	libzstd.so

概略説明

zstd	ZSTD 形式によりファイルを圧縮、伸張（解凍）します。
zstdgrep	ZSTD 圧縮ファイルに対して grep を実行します。
zstdless	ZSTD 圧縮ファイルに対して less を実行します。
libzstd	ZSTD アルゴリズムを利用した可逆データ圧縮を実装するライブラリ。

8.10. File-5.42

File パッケージは指定されたファイルの種類を決定するユーティリティを提供します。

概算ビルド時間:	0.1 SBU
必要ディスク容量:	16 MB

8.10.1. File のインストール

File をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストするには以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

8.10.2. File の構成

インストールプログラム:	file
インストールライブラリ:	libmagic.so

概略説明

file	指定されたファイルの種類判別を行います。処理にあたってはいくつかのテスト、すなわちファイルシステムテスト、マジックナンバーテスト、言語テストを行います。
libmagic	マジックナンバーによりファイル判別を行うルーチンを含みます。file プログラムがこれを利用しています。

8.11. Readline-8.1.2

Readline パッケージはコマンドラインの編集や履歴管理を行うライブラリを提供します。

概算ビルト時間: 0.1 SBU
必要ディスク容量: 15 MB

8.11.1. Readline のインストール

Readline を再インストールすると、それまでの古いライブラリは <ライブラリ名>.old というファイル名でコピーされます。これは普通は問題ないのですが ldconfig によるリンクに際してエラーを引き起こすことがあります。これを避けるため以下の二つの sed コマンドを実行します。

```
sed -i '/MV.*old/d' Makefile.in
sed -i '/{OLDSUFF}/c:' support/shlib-install
```

Readline をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr      \
            --disable-static \
            --with-curses    \
            --docdir=/usr/share/doc/readline-8.1.2
```

`configure` オプションの意味

--with-curses

このオプションは Readline パッケージに対して、`termcap` ライブラリ関数の探し場所を、切り離されている `termcap` ライブラリではなく `curses` ライブラリとすることを指示します。これにより `readline.pc` ファイルが適切に生成されます。

パッケージをコンパイルします。

```
make SHLIB LIBS="-lncursesw"
```

`make` オプションの意味

SHLTB TTBS = "Incursew"

このオプションにより Readline を libncurses

このパッケージにテストスイートは

パッケージをインストールします。

```
make SHLIB_LIBS="-lncursesw" install  
必要ならドキュメントをインストールします。  
install -v -m644 doc/* {ps pdf html dvi} /usr/share/doc/readline-8.1.2
```

8.11.2 Readline の構成

インストールライブラリ: libhistory.so, libreadline.so
インストールディレクトリ: /usr/include/readline /usr/share/doc/readline-8.1.2

概略說明

libhistory 入力履歴を適切に再現するためのユーザーインターフェースを提供します。

`libreadline` プログラムの対話セッションから入力されるキリストを処理するための一連のコマンドを提供します。

8.12. M4-1.4.19

M4 パッケージはマクロプロセッサーを提供します。

概算ビルド時間:	0.6 SBU
必要ディスク容量:	49 MB

8.12.1. M4 のインストール

M4 をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

ビルド結果をテストする場合は以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

8.12.2. M4 の構成

インストールプログラム: m4

概略説明

m4 指定されたファイル内のマクロ定義を展開して、そのコピーを生成します。 マクロ定義には埋め込み (built-in) マクロとユーザー定義マクロがあり、いくらでも引数を定義することができます。 マクロ定義の展開だけでなく m4 には以下のような埋め込み関数があります。 指定ファイルの読み込み、Unix コマンド実行、整数演算処理、テキスト操作、再帰処理などです。 m4 プログラムはコンパイラーのフロントエンドとして利用することができ、それ自体でマクロプロセッサーとして用いることもできます。

8.13. Bc-6.0.1

Bc パッケージは、任意精度 (arbitrary precision) の演算処理言語を提供します。

概算ビルド時間:	0.1 SBU 以下
必要ディスク容量:	7.4 MB

8.13.1. Bc のインストール

Bc をコンパイルするための準備をします。

```
CC=gcc ./configure --prefix=/usr -G -O3 -r
```

configure オプションの意味

CC=gcc

このパラメーターはコンパイラーを指定します。

-G

GNU bc が存在していない状態では動作しないテストスイートを省略します。

-O3

利用する最適化を指定します。

-r

bc における行編集機能を拡張するために Readline 利用を有効にします。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

ビルド結果をテストする場合は、以下を実行します。

```
make test
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

8.13.2. Bc の構成

インストールプログラム: bc, dc

概略説明

bc コマンドラインから実行する計算機 (calculator)。

dc 逆ポーランド (reverse-polish) 記法による計算機。

8.14. Flex-2.6.4

Flex パッケージは、字句パターンを認識するプログラムを生成するユーティリティを提供します。

概算ビルド時間:	0.4 SBU
必要ディスク容量:	33 MB

8.14.1. Flex のインストール

Flex をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr \
--docdir=/usr/share/doc/flex-2.6.4 \
--disable-static
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストするために以下を実行します。(約 0.5 SBU)

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

プログラムの中には flex コマンドが用いられず、その前身である lex コマンドを実行しようとするものがあります。 そういうたったプログラムへ対応するために lex という名のシンボリックリンクを生成します。 このリンクが lex のエミュレーションモードとして flex を呼び出します。

```
ln -sv flex /usr/bin/lex
```

8.14.2. Flex の構成

インストールプログラム:	flex, flex++ (flex へのリンク), lex (flex へのリンク)
インストールライブラリ:	libfl.so
インストールディレクトリ:	/usr/share/doc/flex-2.6.4

概略説明

flex	テキスト内のパターンを認識するためのプログラムを生成するツール。 これは多彩なパターン検索の規則構築を可能とします。 これを利用することで特別なプログラムの生成が不要となります。
flex++	flex の拡張。 C++ コードやクラスの生成に利用されます。 これは flex へのシンボリックリンクです。
lex	lex のエミュレーションモードとして flex を実行するシンボリックリンク。
libfl	flex ライブラリ。

8.15. Tcl-8.6.12

Tcl パッケージは、堅牢で汎用的なスクリプト言語であるツールコマンド言語（Tool Command Language）を提供します。Expect パッケージは Tcl 言語によって書かれています。

概算ビルド時間: 3.2 SBU
必要ディスク容量: 88 MB

8.15.1. Tcl のインストール

本パッケージとこれに続く 2 つのパッケージ（Expect と DejaGNU）は、Binutils および GCC などにおけるテストスイートを実行するのに必要となるためインストールするものです。テスト目的のためにこれら 3 つのパッケージをインストールするというのは、少々大げさなことかもしれません。ただ本質的ではないことであっても、重要なツール類が正常に動作するという確認が得られれば安心できます。

はじめにドキュメントを伸張（解凍）する以下のコマンドを実行します。

```
tar -xf ../tcl8.6.12-html.tar.gz --strip-components=1
```

Tcl をコンパイルするための準備をします。

```
SRCDIR=$(pwd)
cd unix
./configure --prefix=/usr          \
--mandir=/usr/share/man
```

パッケージをビルドします。

```
make

sed -e "s|$SRCDIR/unix|/usr/lib|" \
-e "s|$SRCDIR|/usr/include|" \
-i tclConfig.sh

sed -e "s|$SRCDIR/unix/pkgs/tdbc1.1.3|/usr/lib/tdbc1.1.3|" \
-e "s|$SRCDIR/pkgs/tdbc1.1.3/generic|/usr/include|" \
-e "s|$SRCDIR/pkgs/tdbc1.1.3/library|/usr/lib/tcl8.6|" \
-e "s|$SRCDIR/pkgs/tdbc1.1.3|/usr/include|" \
-i pkgs/tdbc1.1.3/tdbcConfig.sh

sed -e "s|$SRCDIR/unix/pkgs/itcl4.2.2|/usr/lib/itcl4.2.2|" \
-e "s|$SRCDIR/pkgs/itcl4.2.2/generic|/usr/include|" \
-e "s|$SRCDIR/pkgs/itcl4.2.2|/usr/include|" \
-i pkgs/itcl4.2.2/itclConfig.sh

unset SRCDIR
```

”make” コマンドに続くたくさんの ”sed” コマンドは、設定ファイルにあるビルドディレクトリへの参照を削除して、インストールディレクトリへの参照に置き換えます。これ以降の LFS 作業において必須のことではありませんが、後にビルドされるパッケージが Tcl を用いるかもしれないからです。

ビルド結果をテストする場合は、以下を実行します。

```
make test
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

インストールされたライブラリを書き込み可能にします。こうすることで後にデバッグシンボルを削除できるようにします。

```
chmod -v u+w /usr/lib/libtcl8.6.so
```

Tcl のヘッダーファイルをインストールします。これらは次にビルドする Expect が必要とするファイルです。

```
make install-private-headers
```

必要となるシンボリックリンクを生成します。

```
ln -sfv tclsh8.6 /usr/bin/tclsh
```

Perl の man ページと重複するものを名称変更します。

```
mv /usr/share/man/man3/{Thread,Tcl_Thread}.3
```

任意のドキュメントをダウンロードしている場合は、以下のコマンドを実行してインストールします。

```
mkdir -v -p /usr/share/doc/tcl-8.6.12
cp -v -r ../html/* /usr/share/doc/tcl-8.6.12
```

8.15.2. Tcl の構成

インストールプログラム: tclsh (tclsh8.6 へのリンク), tclsh8.6
インストールライブラリ: libtcl8.6.so, libtclstub8.6.a

概略説明

tclsh8.6	Tcl コマンドシェル
tclsh	tclsh8.6 へのリンク
libtcl8.6.so	Tcl ライブラリ
libtclstub8.6.a	Tcl スタブライブラリ

8.16. Expect-5.45.4

Expect パッケージには telnet, ftp, passwd, fsck, rlogin, tip といった対話処理ツールを、スクリプト化されたログを経由して自動化するツールを提供します。Expect はこういったアプリケーションをテストする場合にも利用できます。また本パッケージを利用しないと非常に困難となるようなタスクを、いつも簡単に処理できるようになります。DejaGnu フレームワークはこの Expect を用いて記述されています。

概算ビルト時間: 0.2 SBU
必要ディスク容量: 3.9 MB

8.16.1. Expect のインストール

Expect をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr \
           --with-tcl=/usr/lib \
           --enable-shared \
           --mandir=/usr/share/man \
           --with-tclinclude=/usr/include
```

configure オプションの意味

--with-tcl=/usr/lib
本パラメーターは configure に対して、tclConfig.sh スクリプトが存在するディレクトリを指示するために必要となります。
--with-tclinclude=/usr/include
Tcl の内部ヘッダーファイルを探し出す場所を指定します。

パッケージをビルドします。

make

ビルド結果をテストする場合は、以下を実行します。

make test

パッケージをインストールします。

```
make install
ln -svf expect5.45.4/libexpect5.45.4.so /usr/lib
```

8.16.2. Expect の構成

インストールプログラム: expect
インストールライブラリ: libexpect5.45.4.so

概略説明

expect スクリプトを通じて他の対話的なプログラムとの処理を行います。
libexpect-5.45.4.so Tcl 拡張機能を通じて、あるいは (Tcl がない場合に) C や C++ から直接、Expect とのやりとりを行う関数を提供します。

8.17. DejaGNU-1.6.3

DejaGnu パッケージは、GNU ツールに対してテストスイートを実行するフレームワークを提供します。これは expect によって書かれており、expect そのものは Tcl (ツールコマンド言語) を利用しています。

概算ビルド時間: 0.1 SBU 以下
必要ディスク容量: 6.9 MB

8.17.1. DejaGNU のインストール

アップストリームは、専用のビルドディレクトリを作成して DejaGNU をビルドすることを推奨しています。

```
mkdir -v build
cd      build
```

DejaGNU をコンパイルするための準備をします。

```
../configure --prefix=/usr
makeinfo --html --no-split -o doc/dejagnu.html .../doc/dejagnu.texi
makeinfo --plaintext      -o doc/dejagnu.txt  .../doc/dejagnu.texi
```

パッケージをビルドしてインストールします。

```
make install
install -v -dm755  /usr/share/doc/dejagnu-1.6.3
install -v -m644   doc/dejagnu.{html,txt} /usr/share/doc/dejagnu-1.6.3
```

コンパイル結果をテストするなら以下を実行します。

```
make check
```

8.17.2. DejaGNU の構成

インストールプログラム: dejagnu, runtest

概略説明

dejagnu DejaGNU の補助コマンドローンチャー。

runtest expect シェルの適正な場所を特定し DejaGNU を実行するためのラッパースクリプト。

8.18. Binutils-2.39

Binutils パッケージは、リンクーやアセンブラーなどのようにオブジェクトファイルを取り扱うツール類を提供します。

概算ビルト時間:	8.2 SBU
必要ディスク容量:	2.7 GB

8.18.1. Binutils のインストール

PTY が chroot 環境内にて正しく作動しているかどうかを確認するために、以下の簡単なテストを実行します。

```
expect -c "spawn ls"
```

上のコマンドは以下を出力するはずです。

```
spawn ls
```

上のような出力ではなく、以下のような出力メッセージが含まれていたら、PTY の動作が適切に構築できていないことを示しています。Binutils や GCC のテストスイートを実行する前に、この症状は解消しておく必要があります。

```
The system has no more ptys.  
Ask your system administrator to create more.
```

Binutils のドキュメントによると Binutils のビルトにあたっては専用のビルトディレクトリを作成することが推奨されています。

```
mkdir -v build  
cd build
```

Binutils をコンパイルするための準備をします。

```
../configure --prefix=/usr      \  
  --sysconfdir=/etc      \  
  --enable-gold      \  
  --enable-ld=default \  
  --enable-plugins    \  
  --enable-shared     \  
  --disable-werror   \  
  --enable-64-bit-bfd \  
  --with-system-zlib
```

configure パラメーターの意味

--enable-gold

ゴールドリンク (gold linker) をビルトし ld.gold としてインストールします。

--enable-ld=default

オリジナルの bfd リンカーをビルトし ld (デフォルトルinker) と ld.bfd としてインストールします。

--enable-plugins

リンクに対するプラグインサポートを有効にします。

--enable-64-bit-bfd

64 ビットサポート (ホスト上でのワードサイズの縮小) を有効にします。 64 ビットシステムでも不要な場合がありますが、指定しておいて支障はありません。

--with-system-zlib

本パッケージに含まれる zlib をビルトするのではなく、既にインストール済の zlib を用いるようにします。

パッケージをコンパイルします。

```
make tooldir=/usr
```

make パラメーターの意味

tooldir=/usr

通常 tooldir (実行ファイルが最終的に配置されるディレクトリ) は \$(exec_prefix)/\$(target_alias) に設定されています。 x86_64 マシンでは /usr/x86_64-pc-linux-gnu となります。 LFS は自分で設定を定めていく

システムですから /usr ディレクトリ配下に CPU ターゲットを特定するディレクトリを設ける必要がありません。 \$(exec_prefix)/\$(target_alias) というディレクトリ構成は、クロスコンパイル環境において必要となるものです。（例えばパッケージをコンパイルするマシンが Intel であり、そこから PowerPC マシン用の実行コードを生成するような場合です。）



重要

本節における Binutils のテストスイートは極めて重要なものです。したがってどのような場合であっても必ず実行してください。

コンパイル結果をテストします。

```
make -k check
```

パッケージをインストールします。

```
make tooldir=/usr install
```

不要なスタティックライブラリを削除します。

```
rm -fv /usr/lib/lib{bfd,ctf,ctf-nobfd,opcodes}.a
```

8.18.2. Binutils の構成

インストールプログラム:	addr2line, ar, as, c++filt, dwp, elfedit, gprof, gprofng, ld, ld.bfd,
インストールライブラリ:	ld.gold, nm, objcopy, objdump, ranlib, readelf, size, strings, strip
インストールディレクトリ:	libbfd.so, libctf.so, libctf-nobfd.so, libopcodes.so
	/usr/lib/ldscripts

概略説明

addr2line	指定された実行モジュール名とアドレスに基づいて、プログラム内のアドレスをファイル名と行番号に変換します。これは実行モジュール内のデバッグ情報を利用します。特定のアドレスがどのソースファイルと行番号に該当するかを確認するものです。
ar	アーカイブの生成、修正、抽出を行います。
as	gcc の出力結果をアセンブルして、オブジェクトファイルとして生成するアセンブラー。
c++filt	リンカーから呼び出されるもので C++ と Java のシンボルを複合 (demangle) し、オーバーロード関数が破壊されることを回避します。
dwp	DWARF パッケージユーティリティー。
elfedit	ELF ファイルの ELF ヘッダーを更新します。
gprof	コールグラフ (call graph) のプロファイルデータを表示します。
gprofng	性能データの収集と解析を行います。
ld	複数のオブジェクトファイルやアーカイブファイルから、一つのファイルを生成するリンカー。データの再配置やシンボル参照情報の結合を行います。
ld.gold	elf オブジェクト向けファイルフォーマットのサポートにのみ特化した ld の限定バージョン。
ld.bfd	ld へのハードリンク。
nm	指定されたオブジェクトファイル内のシンボル情報を一覧表示します。
objcopy	オブジェクトファイルの変換を行います。
objdump	指定されたオブジェクトファイルの各種情報を表示します。さまざまなオプションを用いることで特定の情報表示が可能です。表示される情報は、コンパイル関連ツールを開発する際に有用なものです。
ranlib	アーカイブの内容を索引として生成し、それをアーカイブに保存します。索引は、アーカイブのメンバーによって定義されるすべてのシンボルの一覧により構成されます。アーカイブのメンバーとは再配置可能なオブジェクトファイルのことです。
readelf	ELF フォーマットのバイナリファイルの情報を表示します。
size	指定されたオブジェクトファイルのセクションサイズと合計サイズを一覧表示します。
strings	指定されたファイルに対して、印字可能な文字の並びを出力します。文字は所定の長さ（デフォルトでは 4 文字）以上のものが対象となります。オブジェクトファイルの場合デフォルトでは、初期化セク

ションとロードされるセクションからのみ文字列を抽出し出力します。これ以外の種類のファイルの場合は、ファイル全体が走査されます。

strip	オブジェクトファイルからデバッグシンボルを取り除きます。
libbfd	バイナリファイルディスクリプター (Binary File Descriptor) ライブラリ。
libctf	Compat ANSI-C Type フォーマットタイプデバッギングサポートライブラリ。
libctf-nobfd	libbfd の機能を利用しない libctf の互換ライブラリ。
libopcodes	opcodes (オペレーションコード；プロセッサー命令を「認識可能なテキスト」として表現したもの) を取り扱うライブラリ。このライブラリは objdump のような、ビルド作業に用いるユーティリティプログラムが利用しています。

8.19. GMP-6.2.1

GMP パッケージは数値演算ライブラリを提供します。このライブラリには任意精度演算 (arbitrary precision arithmetic) を行う有用な関数が含まれます。

概算ビルド時間: 0.9 SBU
必要ディスク容量: 53 MB

8.19.1. GMP のインストール



注記

32 ビット x86 CPU にて環境構築する際に、64 ビットコードを扱う CPU 環境であってかつ `CFLAGS` を指定していると、本パッケージの `configure` スクリプトは 64 ビット用の処理を行い失敗します。これを回避するには、以下のように処理してください。

```
ABI=32 ./configure ...
```



注記

GMP のデフォルト設定に従うと、ホストのプロセッサー向けに最適化したライブラリを生成してしまいます。ホストに比べて、やや性能の劣るプロセッサー向けたライブラリを必要とする場合は、汎用ライブラリを生成するために以下を実行します。

```
cp -v configfsf.guess config.guess
cp -v configfsf.sub config.sub
```

GMP をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr \
--enable-cxx \
--disable-static \
--docdir=/usr/share/doc/gmp-6.2.1
```

`configure` オプションの意味

--enable-cxx
C++ サポートを有効にします。

--docdir=/usr/share/doc/gmp-6.2.1
ドキュメントのインストール先を適切に設定します。

パッケージをコンパイルし HTML ドキュメントを生成します。

```
make
make html
```



重要

本節における GMP のテストスイートは極めて重要なものです。したがってどのような場合であっても必ず実行してください。

テストを実行します。

```
make check 2>&1 | tee gmp-check-log
```



注意

`gmp` のコードはビルトするプロセッサー向けに高度に最適化されます。このためプロセッサーを特定したコードが実はシステム性能を的確に制御できないこともあります。それはテストにおいてエラーを引き起こしたり、`gmp` を利用する他のアプリケーションにおいて "Illegal instruction" というエラーとして発生したりすることがあります。そういう場合は `gmp` の再ビルトが必要であり、その際にはオプション `--build=x86_64-pc-linux-gnu` をつける必要があります。

197 個のテストが完了することを確認してください。 テスト結果は以下のコマンドにより確認することができます。

```
awk '/# PASS:/ {total+=$3} ; END{print total}' gmp-check-log
```

パッケージと HTML ドキュメントをインストールします。

```
make install  
make install-html
```

8.19.2. GMP の構成

インストールライブラリ: libgmp.so, libgmpxx.so
インストールディレクトリ: /usr/share/doc/gmp-6.2.1

概略説明

libgmp 精度演算関数 (precision math functions) を提供します。

libgmpxx C++ 用の精度演算関数を提供します。

8.20. MPFR-4.1.0

MPFR パッケージは倍精度演算 (multiple precision) の関数を提供します。

概算ビルド時間:	0.8 SBU
必要ディスク容量:	39 MB

8.20.1. MPFR のインストール

MPFR をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr      \
            --disable-static \
            --enable-thread-safe \
            --docdir=/usr/share/doc/mpfr-4.1.0
```

パッケージをコンパイルし HTML ドキュメントを生成します。

```
make
make html
```



重要

本節における MPFR のテストスイートは極めて重要なものです。 したがってどのような場合であっても必ず実行してください。

すべてのテストが正常に完了していることを確認してください。

```
make check
```

パッケージとドキュメントをインストールします。

```
make install
make install-html
```

8.20.2. MPFR の構成

インストールライブラリ:	libmpfr.so
インストールディレクトリ:	/usr/share/doc/mpfr-4.1.0

概略説明

libmpfr 倍精度演算の関数を提供します。

8.21. MPC-1.2.1

MPC パッケージは複素数演算を可能とするライブラリを提供するものです。高い精度と適切な丸め（rounding）を実現します。

概算ビルド時間:	0.3 SBU
必要ディスク容量:	21 MB

8.21.1. MPC のインストール

MPC をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr \
--disable-static \
--docdir=/usr/share/doc/mpc-1.2.1
```

パッケージをコンパイルし HTML ドキュメントを生成します。

```
make
make html
```

コンパイル結果をテストするには以下を実行します。

```
make check
```

パッケージとドキュメントをインストールします。

```
make install
make install-html
```

8.21.2. MPC の構成

インストールライブラリ:	libmpc.so
インストールディレクトリ:	/usr/share/doc/mpc-1.2.1

概略説明

libmpc 複素数による演算関数を提供します。

8.22. Attr-2.5.1

attr パッケージは、ファイルシステム上のオブジェクトに対しての拡張属性を管理するユーティリティを提供します。

概算ビルド時間:	0.1 SBU 以下
必要ディスク容量:	4.1 MB

8.22.1. Attr のインストール

Attr をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr      \
            --disable-static \
            --sysconfdir=/etc \
            --docdir=/usr/share/doc/attr-2.5.1
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

テストは、ext2, ext3, ext4 のような拡張属性をサポートしているファイルシステム上にて実施する必要があります。テストを実施するには以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

8.22.2. Attr の構成

インストールプログラム:	attr, getfattr, setfattr
インストールライブラリ:	libattr.so
インストールディレクトリ:	/usr/include/attr, /usr/share/doc/attr-2.5.1

概略説明

attr	ファイルシステム上のオブジェクトに対して、属性を拡張します。
getfattr	ファイルシステム上のオブジェクトに対して、拡張属性の情報を取得します。
setfattr	ファイルシステム上のオブジェクトに対して、拡張属性の情報を設定します。
libattr	拡張属性を制御するライブラリ関数を提供します。

8.23. Acl-2.3.1

Acl パッケージは、アクセスコントロールリスト (Access Control Lists) を管理するユーティリティーを提供します。これはファイルやディレクトリに対して、きめ細かく詳細にアクセス権限を設定するものとして利用されます。

概算ビルド時間: 0.1 SBU
必要ディスク容量: 6.1 MB

8.23.1. Acl のインストール

Acl をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr          \
            --disable-static      \
            --docdir=/usr/share/doc/acl-2.3.1
```

パッケージをコンパイルします。

make

Acl のテストは、Acl のライブラリによって Coreutils をビルドした後に、アクセス制御がサポートされたファイルシステム上にて実施する必要があります。テスト実施が必要である場合は、後に生成する Coreutils のビルドが終わってから、再び本パッケージに戻って `make check` を実行してください。

パッケージをインストールします。

make install

8.23.2. Acl の構成

インストールプログラム:	chacl, getfacl, setacl
インストールライブラリ:	libacl.so
インストールディレクトリ:	/usr/include/acl, /usr/share/doc/acl-2.3.1

概略説明

chacl	ファイルまたはディレクトリに対するアクセスコントロールリストを設定します。
getfacl	ファイルアクセスコントロールリストを取得します。
setfacl	ファイルアクセスコントロールリストを設定します。
libacl	アクセスコントロールリスト (Access Control Lists) を制御するライブラリ関数を提供します。

8.24. Libcap-2.65

Libcap パッケージは、Linux カーネルにおいて利用される POSIX 1003.1e 機能へのユーザー空間からのインターフェースを実装します。この機能は、強力な root 権限機能を他の権限へと分散します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU 以下
必要ディスク容量: 2.7 MB

8.24.1. Libcap のインストール

スタティックライブラリをインストールしないようにします。

```
sed -i '/install -m.*STA/d' libcap/Makefile
```

パッケージをコンパイルします。

```
make prefix=/usr lib=lib
```

make オプションの意味

`lib=lib`

このパラメーターは x86_64 においてライブラリを /usr/lib64 ではなく /usr/lib にインストールするようにします。x86 においては何も効果はありません。

ビルド結果をテストする場合は以下を実行します。

```
make test
```

パッケージをインストールします。

```
make prefix=/usr lib=lib install
```

8.24.2. Libcap の構成

インストールプログラム: capsh, getcap, getpcaps, setcap
インストールライブラリ: libcap.so, libpsx.so

概略説明

<code>capsh</code>	拡張属性サポートについて制御するためのシェルラッパー。
<code>getcap</code>	ファイルの拡張属性を検査します。
<code>getpcaps</code>	指定されたプロセスの拡張属性を表示します。
<code>setcap</code>	ファイルの拡張属性を設定します。
<code>libcap</code>	POSIX 1003.1e 拡張属性を制御するライブラリ関数を提供します。
<code>libpsx</code>	pthread ライブラリに関しての syscalls に対する POSIX セマンティックス対応の関数を提供します。

8.25. Shadow-4.12.2

Shadow パッケージはセキュアなパスワード管理を行うプログラムを提供します。

概算ビルト時間:	0.2 SBU
必要ディスク容量:	46 MB

8.25.1. Shadow のインストール



注記

もっと強力なパスワードを利用したい場合は <https://www.linuxfromscratch.org/blfs/view/stable-systemd/postlfs/cracklib.html> にて示している Cracklib パッケージを参照してください。Cracklib パッケージは Shadow パッケージよりも前にインストールします。その場合 Shadow パッケージの configure スクリプトでは `--with-libcrack` パラメーターをつけて実行する必要があります。

`groups` コマンドとその `man` ページをインストールしないようにします。これは Coreutils パッケージにて、より良いバージョンが提供されているからです。また 「Man-pages-5.13」 にてインストールされている `man` ページはインストールしないようにします。

```
sed -i 's/groups$(EXEEXT) //' src/Makefile.in
find man -name Makefile.in -exec sed -i 's/groups\.1 / /' {} \;
find man -name Makefile.in -exec sed -i 's/getspnam\.3 / /' {} \;
find man -name Makefile.in -exec sed -i 's/passwd\.5 / /' {} \;
```

パスワード暗号化に関して、デフォルトの `crypt` 手法ではなく、より強力な SHA-512 手法を用いることにします。こうしておくと 8 文字以上のパスワード入力が可能となります。またメールボックスを収めるディレクトリとして Shadow ではデフォルトで `/var/spool/mail` ディレクトリを利用していますが、これは古いものであるため `/var/mail` ディレクトリに変更します。また `PATH` から `/bin` と `/sbin` を削除します。これらは `/usr` からのシンボリックリンクであるからです。



注記

何らかの理由により `PATH` に対して `/bin` や `/sbin` を残しておく必要がある場合は、LFS ビルドが完成した後に `.bashrc` において `PATH` を設定してください。

```
sed -e 's:#ENCRYPT_METHOD DES:ENCRYPT_METHOD SHA512:' \
-e 's:/var/spool/mail:/var/mail:' \
-e '/PATH=/ {s@/sbin:@@;s@/bin:@@}' \
-i etc/login.defs
```



注記

Cracklib のサポートを含めて Shadow をビルドする場合は以下を実行します。

```
sed -i 's:DICTPATH.*:DICTPATH\t/lib/cracklib/pw_dict:' etc/login.defs
```

Shadow をコンパイルするための準備をします。

```
touch /usr/bin/passwd
./configure --sysconfdir=/etc \
--disable-static \
--with-group-name-max-length=32
```

configure オプションの意味

`touch /usr/bin/passwd`

プログラムの中には `/usr/bin/passwd` のパスがそのままハードコーディングされているものがあり、このファイルが存在しなかった場合のデフォルトパスが正しくなっていません。

`--with-group-name-max-length=32`

ユーザー名とグループ名の最大文字数を 32 とします。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

このパッケージにテストスイートはありません。

パッケージをインストールします。

```
make exec_prefix=/usr install  
make -C man install-man
```

8.25.2. Shadow の設定

このパッケージには、ユーザーやグループの追加、修正、削除、そのパスワードの設定、変更、その他の管理操作を行うユーティリティが含まれます。パスワードのシャドウイング (password shadowing) というものが何を意味するのか、その詳細についてはこのパッケージのソース内にある doc/HOWTO を参照してください。Shadow によるサポートを利用する場合、パスワード認証を必要とするプログラム（ディスプレイマネージャー、FTP プログラム、POP3、デーモン、など）は Shadow に準拠したものでなければなりません。つまりそれらのプログラムが、シャドウ化された (shadowed) パスワードを受け入れて動作しなければならないということです。

Shadow によるパスワードの利用を有効にするために、以下のコマンドを実行します。

```
pwconv
```

また Shadow によるグループパスワードを有効にするために、以下を実行します。

```
grpconv
```

Shadow の useradd コマンドに対するデフォルトの設定には、注意すべき点があります。まず useradd コマンドによりユーザーを生成する場合のデフォルトの動作では、ユーザーネームと同じグループを自動生成します。ユーザーID (UID) とグループID (GID) は 1000 以上が割り当てられます。useradd コマンドの利用時に特にパラメータを与えなければ、追加するユーザーのグループは新たな固有グループが生成されることになります。この動作が不適当であれば useradd コマンドの実行時に -g パラメーターか -N のいずれかを利用することが必要です。あるいは /etc/login.defs 内にある USERGROUPS_ENAB の設定を書き換えてください。詳しくは useradd(8) を参照してください。

次にデフォルトパラメーターを変更します。そのためにはファイル /etc/default/useradd の生成が必要です。特定の状況に合わせてこれを設定します。まずは以下のようにして、このファイルを生成します。

```
mkdir -p /etc/default  
useradd -D --gid 999
```

/etc/default/useradd のパラメーター説明

GROUP=999

このパラメーターは /etc/group ファイルにおいて設定されるグループ ID の先頭番号を指定します。999 という値は、上に示した --gid からきています。必要なら任意の数値に設定することもできます。useradd コマンドは既存の UID 値、GID 値を再利用することはありません。このパラメーターによって指定された数値が実際に利用されていた場合、その値以降で利用可能な値が採用されます。また useradd コマンドの実行にあたって パラメーター -g を利用せずに、その数値によって表される ID を持ったグループがシステム上に存在しなかった場合は、以下のようなメッセージが出力されます。useradd: unknown GID 999 ("GID 999 が不明です") この場合でも、アカウントは正しく生成されます。だからこそ「重要なファイルとシンボリックリンクの生成」において、グループ ID を指定してグループ users を生成できたわけです。

CREATE_MAIL_SPOOL=yes

このパラメーターは useradd コマンドの実行によって、追加されるユーザー用のメールボックスに関するファイルが生成されます。useradd コマンドは、このファイルのグループ所有者を mail (グループID 0660) に設定します。メールボックスに関するファイルを生成したくない場合は、以下のコマンドを実行します。

```
sed -i '/MAIL/s/yes/no/' /etc/default/useradd
```

8.25.3. root パスワードの設定

root ユーザーのパスワードを設定します。

```
passwd root
```

8.25.4. Shadow の構成

インストールプログラム:

chage, chfn, chgpasswd, chpasswd, chsh, expiry, faillog, getsubids, gpasswd,
groupadd, groupdel, groupmems, groupmod, grpck, grpconv, grpunconv, lastlog,
login, logoutd, newgidmap, newgrp, newuidmap, newusers, nologin, passwd,
pwck, pwconv, pwunconv, sg (newgrpへのリンク), su, useradd, userdel,
usermod, vigr (vipwへのリンク), vipw

インストールディレクトリ:

/etc/default

インストールディレクトリ:

libsubid.so

概略説明

chage	ユーザーのパスワード変更を行うべき期間を変更します。
chfn	ユーザーのフルネームや他の情報を変更します。
chgpasswd	グループのパスワードをバッチモードにて更新します。
chpasswd	ユーザーのパスワードをバッチモードにて更新します。
chsh	ユーザーのデフォルトのログインシェルを変更します。
expiry	現時点でのパスワード失効に関する設定をチェックし更新します。
faillog	ログイン失敗のログを調査します。 ログインの失敗を繰り返すことでアカウントがロックされる際の、最大の失敗回数を設定します。 またその失敗回数をリセットします。
getsubids	ユーザーのサブ id 範囲の一覧取得に用いられます。
gpasswd	グループに対してメンバーや管理者を追加、削除します。
groupadd	指定した名前でグループを生成します。
groupdel	指定された名前のグループを削除します。
groupmems	スーパーユーザー権限を持たなくとも、自分自身のグループのメンバーリストを管理可能とします。
groupmod	指定されたグループの名前や GID を修正します。
grpck	グループファイル /etc/group と /etc/gshadow の整合性を確認します。
grpconv	通常のグループファイルから Shadow グループファイルを生成、更新します。
grpunconv	/etc/gshadow ファイルを元に /etc/group ファイルを更新し /etc/gshadow ファイルを削除します。
lastlog	全ユーザーの中での最新ログインの情報、または指定ユーザーの最新ログインの情報を表示します。
login	ユーザーのログインを行います。
logoutd	ログオン時間とポートに対する制限を実施するためのデーモン。
newgidmap	ユーザー空間における gid マッピングを設定します。
newgrp	ログインセッション中に現在の GID を変更します。
newuidmap	ユーザー空間における uid マッピングを設定します。
newusers	複数ユーザーのアカウント情報を生成または更新します。
nologin	ユーザー アカウントが利用不能であることをメッセージ表示します。 利用不能なユーザー アカウントに対するデフォルトシェルとして利用することを意図しています。
passwd	ユーザー アカウントまたはグループ アカウントに対するパスワードを変更します。
pwck	パスワードファイル /etc/passwd と /etc/shadow の整合性を確認します。
pwconv	通常のパスワードファイルを元に shadow パスワードファイルを生成、更新します。
pwunconv	/etc/shadow ファイルを元に /etc/passwd ファイルを更新し /etc/shadow を削除します。
sg	ユーザーの GID を指定されたグループにセットした上で、指定されたコマンドを実行します。
su	ユーザー ID とグループ ID を変更してシェルを実行します。
useradd	指定した名前で新たなユーザーを生成します。 あるいは新規ユーザーのデフォルトの情報を更新します。
userdel	指定されたユーザー アカウントを削除します。
usermod	指定されたユーザーのログイン名、UID (User Identification)、利用シェル、初期グループ、ホームディレクトリなどを変更します。
vigr	/etc/group ファイルあるいは /etc/gshadow ファイルを編集します。

vipw /etc/passwd ファイルあるいは /etc/shadow ファイルを編集します。
libsubuid ユーザーに対するサブ ID 範囲を処理するライブラリ。

8.26. GCC-12.2.0

GCC パッケージは C コンパイラーや C++ コンパイラーなどの GNU コンパイラーコレクションを提供します。

概算ビルト時間: 160 SBU (テスト込み)
必要ディスク容量: 5.1 GB

8.26.1. GCC のインストール

x86_64 上でビルトしている場合は、64ビットライブラリのデフォルトディレクトリ名を "lib" にします。

```
case $(uname -m) in
x86_64)
    sed -e '/m64=/s/lib64/lib/' \
        -i.orig gcc/config/i386/t-linux64
;;
esac
```

GCC のドキュメントによると GCC のビルトにあたっては、専用のビルトディレクトリを作成することが推奨されています。

```
mkdir -v build
cd      build
```

GCC をコンパイルするための準備をします。

```
../configure --prefix=/usr           \
            LD=ld                \
            --enable-languages=c,c++ \
            --disable-multilib     \
            --disable-bootstrap    \
            --with-system-zlib
```

他のプログラミング言語は、また別の依存パッケージなどを要しますが、現時点では準備できていません。GCC がサポートする他のプログラム言語の構築方法については BLFS ブック の説明を参照してください。

Configure パラメーターの意味

LD=ld

本パラメーターは、本章の初期段階でビルトした binutils の ld を使うことを configure スクリプトに指示します。これを指定しなかった場合は、クロスビルト版のものが用いられることになります。

--with-system-zlib

このオプションはシステムに既にインストールされている zlib ライブラリをリンクすることを指示するものであり、内部にて作成されるライブラリを用いないようにします。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

重要

本節における GCC のテストスイートは極めて重要なものです。ただし相当な時間を要します。初めてビルトを行う方には、必ず実施することをお勧めします。テスト実行に要する時間は、make コマンドに *-jx* をつけることで、かなり削減できます。ここに示す *x* には、システムのコア数を指定するものです。

GCC テストスイートの中で、デフォルトのスタックを使い果たすものがあります。そこでテスト実施にあたり、スタックサイズを増やします。

```
ulimit -s 32768
```

一般ユーザーにてテストを行います。ただしエラーがあつても停止しないようにします。

```
chown -Rv tester .
su tester -c "PATH=$PATH make -k check"
```

テスト結果を確認するために以下を実行します。

```
../contrib/test_summary
```

テスト結果の概略のみ確認したい場合は、出力結果をパイプ出力して `grep -A7 Summ` を実行してください。

テスト結果については <https://www.linuxfromscratch.org/lfs/build-logs/11.2/> と <https://gcc.gnu.org/ml/gcc-testresults/> にある情報と比較することができます。

g++においては PR100400 に関するテスト 4 つが XPASS および FAIL として出力されます。この問題はテストファイルが適切に記述されていないために発生します。

テストに失敗することがあります、これを回避することはできません。GCC の開発者はこの問題を認識していますが、まだ解決していない状況です。上記の URL に示されている結果と大きく異なっていなければ、問題はありませんので先に進んでください。

パッケージをインストールします。

```
make install
```

GCC のビルドディレクトリの所有者は `tester` であるため、ヘッダーがインストールされるディレクトリ（とその内容）に対する所有権が不適切なものになります。そこでその所有権を `root` ユーザーとグループに変更します。

```
chown -v -R root:root \
/usr/lib/gcc/${gcc -dumpmachine}/12.2.0/include{,-fixed}
```

FHS の求めるところに応じてシンボリックリンクを作成します。これは慣例によるものです

```
ln -svr /usr/bin/cpp /usr/lib
```

リンク時の最適化 (Link Time Optimization; LTO) によりプログラム構築できるように、シンボリックリンクを作ります。

```
ln -sfv ../../libexec/gcc/${gcc -dumpmachine}/12.2.0/liblto_plugin.so \
/usr/lib/bfd-plugins/
```

最終的なツールチェーンが出来上がりました。ここで再びコンパイルとリンクが正しく動作することを確認することが必要です。そこで健全性テストをここで実施します。

```
echo 'int main(){}' > dummy.c
cc dummy.c -v -Wl,--verbose &> dummy.log
readelf -l a.out | grep ': /lib'
```

問題なく動作するはずで、最後のコマンドから出力される結果は以下のようになるはずです。（ダイナミックリンクライブラリの名前はプラットフォームによって違っているかもしれません。）

```
[Requesting program interpreter: /lib64/ld-linux-x86-64.so.2]
```

ここで起動ファイルが正しく用いられていることを確認します。

```
grep -o '/usr/lib.*;/crt[lin].*succeeded' dummy.log
```

上のコマンドの出力は以下のようになります。

```
/usr/lib/gcc/x86_64-pc-linux-gnu/12.2.0/../../../../lib/crt1.o succeeded
/usr/lib/gcc/x86_64-pc-linux-gnu/12.2.0/../../../../lib/crti.o succeeded
/usr/lib/gcc/x86_64-pc-linux-gnu/12.2.0/../../../../lib/crtn.o succeeded
```

作業しているマシンアーキテクチャーによっては、上の結果が微妙に異なるかもしれません。その違いは、たいていは `/usr/lib/gcc` の次のディレクトリ名にあります。注意すべき重要な点は `gcc` が `crt*.o` という 3 つのファイルを `/usr/lib` 配下から探し出しているということです。

コンパイラーが正しいヘッダーファイルを読み取っているかどうかを検査します。

```
grep -B4 '^ /usr/include' dummy.log
```

上のコマンドは以下の出力を返します。

```
#include <...> search starts here:
/usr/lib/gcc/x86_64-pc-linux-gnu/12.2.0/include
/usr/local/include
/usr/lib/gcc/x86_64-pc-linux-gnu/12.2.0/include-fixed
/usr/include
```

もう一度触れておきますが、プラットフォームの「三つの組 (target triplet)」の次にくるディレクトリ名は CPU アーキテクチャーにより異なる点に注意してください。

次に、新たなリンクが正しいパスを検索して用いられているかどうかを検査します。

```
grep 'SEARCH.* /usr/lib' dummy.log | sed 's|;|\\n|g'
```

'-linux-gnu' を含んだパスは無視すれば、最後のコマンドの出力は以下となるはずです。

```
SEARCH_DIR("/usr/x86_64-pc-linux-gnu/lib64")
SEARCH_DIR("/usr/local/lib64")
SEARCH_DIR("/lib64")
SEARCH_DIR("/usr/lib64")
SEARCH_DIR("/usr/x86_64-pc-linux-gnu/lib")
SEARCH_DIR("/usr/local/lib")
SEARCH_DIR("/lib")
SEARCH_DIR("/usr/lib");
```

32ビットシステムではディレクトリが多少異なります。 以下は i686 マシンでの出力例です。

```
SEARCH_DIR("/usr/i686-pc-linux-gnu/lib32")
SEARCH_DIR("/usr/local/lib32")
SEARCH_DIR("/lib32")
SEARCH_DIR("/usr/lib32")
SEARCH_DIR("/usr/i686-pc-linux-gnu/lib")
SEARCH_DIR("/usr/local/lib")
SEARCH_DIR("/lib")
SEARCH_DIR("/usr/lib");
```

次に libc が正しく用いられていることを確認します。

```
grep "/lib.* /libc.so.6" dummy.log
```

最後のコマンドの出力は以下のようになるはずです。

```
attempt to open /usr/lib/libc.so.6 succeeded
```

GCC が正しくダイナミックリンク用いているかを確認します。

```
grep found dummy.log
```

上のコマンドの出力は以下のようになるはずです。 (ダイナミックリンク用の名前はプラットフォームによって違っているかもしれません。)

```
found ld-linux-x86-64.so.2 at /usr/lib/ld-linux-x86-64.so.2
```

出力結果が上と異なっていたり、出力が全く得られなかつたりした場合は、何かが根本的に間違っているということです。 どこに問題があるのか調査、再試行を行って解消してください。 問題を残したままこの先には進まないでください。

すべてが正しく動作したら、テストに用いたファイルを削除します。

```
rm -v dummy.c a.out dummy.log
```

最後に誤ったディレクトリにあるファイルを移動します。

```
mkdir -pv /usr/share/gdb/auto-load/usr/lib
mv -v /usr/lib/*gdb.py /usr/share/gdb/auto-load/usr/lib
```

8.26.2. GCC の構成

インストールプログラム:	c++, cc (gccへのリンク), cpp, g++, gcc, gcc-ar, gcc-nm, gcc-ranlib, gcov, gcov-dump, gcov-tool, lto-dump
インストールライブラリ:	libasan.{a,so}, libatomic.{a,so}, libccl.so, libgcc.a, libgcc_eh.a, libgcc_s.so, libgcov.a, libgomp.{a,so}, libitm.{a,so}, liblsan.{a,so}, liblto_plugin.so, libquadmath.{a,so}, libssp.{a,so}, libssp_nonshared.a, libstdc++.{a,so}, libstdc++fs.a, libsupc++.a, libtsan.{a,so}, libubsan.{a,so}
インストールディレクトリ:	/usr/include/c++, /usr/lib/gcc, /usr/libexec/gcc, /usr/share/gcc-12.2.0

概略説明

c++	C++ コンパイラ
cc	C コンパイラ
cpp	C プリプロセッサー。コンパイラがこれをを利用して、ソース内に記述された #include、#define や同じようなステートメントを展開します。
g++	C++ コンパイラ
gcc	C コンパイラ
gcc-ar	ar に関するラッパーであり、コマンドラインへのプラグインを追加します。このプログラムは「リンク時の最適化 (link time optimization)」機能を付与する場合にのみ利用されます。デフォルトのビルドオプションでは有効にはなりません。
gcc-nm	nm に関するラッパーであり、コマンドラインへのプラグインを追加します。このプログラムは「リンク時の最適化 (link time optimization)」機能を付与する場合にのみ利用されます。デフォルトのビルドオプションでは有効にはなりません。
gcc-ranlib	ranlib に関するラッパーであり、コマンドラインへのプラグインを追加します。このプログラムは「リンク時の最適化 (link time optimization)」機能を付与する場合にのみ利用されます。デフォルトのビルドオプションでは有効にはなりません。
gcov	カバレッジテストツール。プログラムを解析して、最適化が最も効果的となるのはどこかを特定します。
gcov-dump	オフラインの gcda および gcno プロファイルダンプツール。
gcov-tool	オフラインの gcda プロファイル処理ツール。
lto-dump	LTO が有効にした GCC によって生成されるオブジェクトファイルをダンプするためのツール。
libasan	アドレスサニタイザー (Address Sanitizer) のランタイムライブラリ。
libatomic	GCC 不可分 (アトミック) ビルトインランタイムライブラリ。
libcc1	C 言語プリプロセスライブラリ。
libgcc	gcc のランタイムサポートを提供します。
libgcov	GCC のプロファイリングを有効にした場合にこのライブラリがリンクされます。
libgomp	C/C++ や Fortran においてマルチプラットフォームでの共有メモリ並行プログラミング (multi-platform shared-memory parallel programming) を行うための GNU による OpenMP API インプリメンテーションです。
libitm	GNU のトランザクショナル (transactional) メモリーライブラリ。
libsan	リークサニタイザー (Leak Sanitizer) のランタイムライブラリ。
liblto_plugin	GCC の LTO プラグインは、LTO を有効にした GCC から生成されたオブジェクトファイルを binutils が処理できるようにします。
libquadmath	GCC の4倍精度数値演算 (Quad Precision Math) ライブラリ API
libssp	GCC のスタック破壊を防止する (stack-smashing protection) 機能をサポートするルーチンを提供します。
libstdc++	標準 C++ ライブラリ
libstdc++fs	ISO/IEC TS 18822:2015 ファイルシステムライブラリ。
libsupc++	C++ プログラミング言語のためのサポートルーチンを提供します。
libtsan	スレッドサニタイザー (Thread Sanitizer) のランタイムライブラリ。
libubsan	Undefined Behavior Sanitizer ランタイムライブラリ。

8.27. Pkg-config-0.29.2

pkg-config パッケージは `configure` や `make` による処理において、インクルードパスやライブラリパスの情報を提供するツールです。

概算ビルド時間: 0.3 SBU
必要ディスク容量: 29 MB

8.27.1. Pkg-config のインストール

Pkg-config をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr \
           --with-internal-glib \
           --disable-host-tool \
           --docdir=/usr/share/doc/pkg-config-0.29.2
```

`configure` オプションの意味

`--with-internal-glib`

これは `pkg-config` が内包しているバージョンの `glib` を利用するようにします。 LFS においては `Glib` をインストールせず利用できないからです。

`--disable-host-tool`

本オプションは、`pkg-config` プログラムに対しての不要なハードリンクを生成しないようにします。

パッケージをコンパイルします。

make

ビルド結果をテストする場合は以下を実行します。

make check

パッケージをインストールします。

make install

8.27.2. Pkg-config の構成

インストールプログラム: `pkg-config`
インストールディレクトリ: `/usr/share/doc/pkg-config-0.29.2`

概略説明

`pkg-config` 指定されたライブラリやパッケージに対するメタ情報を返します。

8.28. Ncurses-6.3

Ncurses パッケージは、端末に依存しない、文字ベースのスクリーン制御を行うライブラリを提供します。

概算ビルト時間: 0.4 SBU
必要ディスク容量: 45 MB

8.28.1. Ncurses のインストール

Ncurses をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr \
--mandir=/usr/share/man \
--with-shared \
--without-debug \
--without-normal \
--with-cxx-shared \
--enable-pc-files \
--enable-widec \
--with-pkg-config-libdir=/usr/lib/pkgconfig
```

configure オプションの意味

--with-shared

これは Ncurses において共有 C ライブラリをビルトしインストールします。

--without-normal

これは Ncurses においてスタティックな C ライブラリのビルトおよびインストールを行わないようにします。

--without-debug

これは Ncurses においてデバッグライブラリのビルトおよびインストールを行わないようにします。

--with-cxx-shared

これは Ncurses において共有 C++ バインディングをビルトしインストールします。 同時にスタティックな C++ バインディングのビルトおよびインストールは行わないようにします。

--enable-pc-files

本スイッチは pkg-config 用の .pc ファイルを生成しインストールすることを指示します。

--enable-widec

本スイッチは通常のライブラリ (libncurses.so.6.3) ではなくワイド文字対応のライブラリ (libncursesw.so.6.3) をビルトすることを指示します。 ワイド文字対応のライブラリは、マルチバイトロケールと従来の 8 ビットロケールの双方に対して利用可能です。 通常のライブラリでは 8 ビットロケールに対してしか動作しません。 ワイド文字対応と通常のものとでは、ソース互換があるもののバイナリ互換がありません。

パッケージをコンパイルします。

make

このパッケージにテストスイートはありますが、パッケージをインストールした後でないと実行できません。 テストスイートのためのファイル群はサブディレクトリ test/ 以下に残っています。 詳しいことはそのディレクトリ内にある README ファイルを参照してください。

本パッケージをインストールすると、所定位置にある libncursesw.so.6.3 が上書きされます。 このときに、そのライブラリファイルのコードやデータを利用しているシェルプロセスが、クラッシュする場合があります。 そこで本パッケージは DESTDIR を使ってインストールして、install コマンドによってライブラリファイルを正しく置き換えるようにします。 configure では取り扱われないスタティックアーカイブは不要であるため、同様に削除されます。

```
make DESTDIR=$PWD/dest install
install -vm755 dest/usr/lib/libncursesw.so.6.3 /usr/lib
rm -v dest/usr/lib/libncursesw.so.6.3
cp -av dest/* /
```

アプリケーションによっては、ワイド文字対応ではないライブラリをリンカーが探し出すよう求めるものが多くあります。そのようなアプリケーションに対しては、以下のようなシンボリックリンクやリンクスクリプトを作り出して、ワイド文字対応のライブラリにリンクさせるよう仕向けます。

```
for lib in ncurses form panel menu ; do
    rm -vf /usr/lib/lib${lib}.so
    echo "INPUT(-l${lib}w)" > /usr/lib/lib${lib}.so
    ln -sfv ${lib}w.pc /usr/lib/pkgconfig/${lib}.pc
done
```

最後に古いアプリケーションにおいて、ビルド時に `-lcurses` を指定するものがあるため、これもビルド可能なものにします。

```
rm -vf /usr/lib/libcursesw.so
echo "INPUT(-lcursesw)" > /usr/lib/libcursesw.so
ln -sfv libcurses.so /usr/lib/libcurses.so
```

必要なら Ncurses のドキュメントをインストールします。

```
mkdir -pv /usr/share/doc/ncurses-6.3
cp -v -R doc/* /usr/share/doc/ncurses-6.3
```



注記

ここまで作業手順では、ワイド文字対応ではない Ncurses ライブラリは生成しませんでした。ソースからコンパイルして構築するパッケージなら、実行時にそのようなライブラリにリンクするものはないからであり、バイナリコードのアプリケーションで非ワイド文字対応のものは Ncurses 5 にリンクされています。バイナリコードしかないアプリケーションを取り扱う場合、あるいは LSB 対応を要する場合で、それがワイド文字対応ではないライブラリを必要とするなら、以下のコマンドによりそのようなライブラリを生成してください。

```
make distclean
./configure --prefix=/usr \
            --with-shared \
            --without-normal \
            --without-debug \
            --without-cxx-binding \
            --with-abi-version=5
make sources libs
cp -av lib/lib*.so.5* /usr/lib
```

8.28.2. Ncurses の構成

インストールプログラム:	<code>captoinfo</code> (tic へのリンク), <code>clear</code> , <code>infocmp</code> , <code>infotocap</code> (tic へのリンク), <code>ncursesw6-config</code> , <code>reset</code> (tset へのリンク), <code>tabs</code> , <code>tic</code> , <code>toe</code> , <code>tput</code> , <code>tset</code>
インストールライブラリ:	<code>libcursesw.so</code> (<code>libcursesw.so</code> へのシンボリックリンクおよびリンクスクリプト), <code>libformw.so</code> , <code>libmenuw.so</code> , <code>libncursesw.so</code> , <code>libpanelw.so</code> , これらに加えてワイド文字対応ではない通常のライブラリでその名称から "w" を取り除いたもの。
インストールディレクトリ:	<code>/usr/share/tabset</code> , <code>/usr/share/terminfo</code> , <code>/usr/share/doc/ncurses-6.3</code>

概略説明

<code>captoinfo</code>	<code>termcap</code> の記述を <code>terminfo</code> の記述に変換します。
<code>clear</code>	画面消去が可能ならこれを行います。
<code>infocmp</code>	<code>terminfo</code> の記述どうしを比較したり出力したりします。
<code>infotocap</code>	<code>terminfo</code> の記述を <code>termcap</code> の記述に変換します。
<code>ncursesw6-config</code>	<code>ncurses</code> の設定情報を提供します。
<code>reset</code>	端末をデフォルト設定に初期化します。
<code>tabs</code>	端末上のタブストップの設定をクリアしたり設定したりします。
<code>tic</code>	<code>terminfo</code> の定義項目に対するコンパイラーです。これはソース形式の <code>terminfo</code> ファイルをバイナリ形式に変換し、 <code>ncurses</code> ライブラリ内の処理ルーチンが利用できるようにします。 <code>terminfo</code> ファイルは特定端末の特性に関する情報が記述されるものです。

toe	利用可能なすべての端末タイプを一覧表示します。 そこでは端末名と簡単な説明を示します。
tput	端末に依存する機能設定をシェルが利用できるようにします。 また端末のリセットや初期化、あるいは長い端末名称の表示も行います。
tset	端末の初期化に利用します。
libcursesw	libncursesw へのリンク。
libncursesw	さまざまな方法により端末画面上に文字列を表示するための関数を提供します。 これらの関数を用いた具体例として、カーネルの make menuconfig の実行によって表示されるメニューがあります。
libformw	フォームを実装するための関数を提供します。
libmenuw	メニューを実装するための関数を提供します。
libpanelw	パネルを実装するための関数を提供します。

8.29. Sed-4.8

Sed パッケージはストリームエディターを提供します。

概算ビルド時間:	0.4 SBU
必要ディスク容量:	31 MB

8.29.1. Sed のインストール

Sed をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr
```

パッケージをコンパイルし HTML ドキュメントを生成します。

```
make
make html
```

コンパイル結果をテストするには以下を実行します。

```
chown -Rv tester .
su tester -c "PATH=$PATH make check"
```

パッケージとドキュメントをインストールします。

```
make install
install -d -m755          /usr/share/doc/sed-4.8
install -m644 doc/sed.html /usr/share/doc/sed-4.8
```

8.29.2. Sed の構成

インストールプログラム:	sed
インストールディレクトリ:	/usr/share/doc/sed-4.8

概略説明

sed テキストファイルを一度の処理でフィルタリングし変換します。

8.30. Psmisc-23.5

Psmisc パッケージは稼動中プロセスの情報表示を行うプログラムを提供します。

概算ビルド時間:	0.1 SBU 以下
必要ディスク容量:	5.8 MB

8.30.1. Psmisc のインストール

Psmisc をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

このパッケージにテストスイートはありません。

パッケージをインストールします。

```
make install
```

8.30.2. Psmisc の構成

インストールプログラム:	fuser, killall, peekfd, prtstat, pslog, pstree, pstree.xll (pstree へのリンク)
--------------	---

概略説明

fuser	指定されたファイルまたはファイルシステムを利用しているプロセスのプロセス ID (PID) を表示します。
killall	プロセス名を用いてそのプロセスを終了 (kill) させます。 指定されたコマンドを起動しているすべてのプロセスに対してシグナルが送信されます。
peekfd	PID を指定することによって、稼動中のそのプロセスのファイルディスクリプターを調べます。
prtstat	プロセスに関する情報を表示します。
pslog	プロセスに対する現状のログパスを表示します。
pstree	稼働中のプロセスをツリー形式で表示します。
pstree.xll	pstree と同じです。 ただし終了時には確認画面が表示されます。

8.31. Gettext-0.21

Gettext パッケージは国際化を行うユーティリティを提供します。各種プログラムに対して NLS (Native Language Support) を含めてコンパイルすることができます。つまり各言語による出力メッセージが得られることになります。

概算ビルド時間: 2.7 SBU
必要ディスク容量: 235 MB

8.31.1. Gettext のインストール

Gettext をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr \
--disable-static \
--docdir=/usr/share/doc/gettext-0.21
```

パッケージをコンパイルします。

make

コンパイル結果をテストするなら (3 SBU 程度の処理時間を要しますが) 以下を実行します。

make check

パッケージをインストールします。

```
make install
chmod -v 0755 /usr/lib/preloadable_libintl.so
```

8.31.2. Gettext の構成

インストールプログラム:	autopoint, envsubst, gettext, gettext.sh, gettextize, msgattrib, msgcat, msgcmp, msgcomm, msgconv, msgen, msgexec, msgfilter, msgfmt, msggrep, msginit, msgmerge, msgunfmt, msguniq, ngettext, recode-sr-latin, xgettext
インストールライブラリ:	libasprintf.so, libgettextlib.so, libgettextpo.so, libgettextsrc.so, libtextstyle.so, preloadable_libintl.so
インストールディレクトリ:	/usr/lib/gettext, /usr/share/doc/gettext-0.21, /usr/share/gettext, /usr/share/gettext-0.19.8

概略説明

autopoint	Gettext 標準のインフラストラクチャーファイル (infrastructure file) をソースパッケージ内にコピーします。
envsubst	環境変数をシェル書式の文字列として変換します。
gettext	メッセージカタログ内の翻訳文を参照し、メッセージをユーザーの利用言語に変換します。
gettext.sh	主に gettext におけるシェル関数ライブラリとして機能します。
gettextize	パッケージの国際化対応を始めるにあたり、標準的な Gettext 関連ファイルを、指定されたパッケージのトップディレクトリにコピーします。
msgattrib	翻訳カタログ内のメッセージの属性に応じて、そのメッセージを抽出します。またメッセージの属性を操作します。
msgcat	指定された .po ファイルを連結します。
msgcmp	二つの .po ファイルを比較して、同一の msgid による文字定義が両者に含まれているかどうかをチェックします。
msgcomm	指定された .po ファイルにて共通のメッセージを検索します。
msgconv	翻訳カタログを別のキャラクターエンコーディングに変換します。
msgen	英語用の翻訳カタログを生成します。
msgexec	翻訳カタログ内の翻訳文すべてに対してコマンドを適用します。
msgfilter	翻訳カタログ内の翻訳文すべてに対してフィルター処理を適用します。
msgfmt	翻訳カタログからバイナリメッセージカタログを生成します。

msggrep	指定された検索パターンに合致する、あるいは指定されたソースファイルに属する翻訳カタログの全メッセージを出力します。
msginit	新規に .po ファイルを生成します。 その時にはユーザーの環境設定に基づいてメタ情報を初期化します。
msgmerge	二つの翻訳ファイルを一つにまとめます。
msgunfmt	バイナリメッセージカタログを翻訳テキストに逆コンパイルします。
msguniq	翻訳カタログ中に重複した翻訳がある場合にこれを統一します。
ngettext	出力メッセージをユーザーの利用言語に変換します。 特に複数形のメッセージを取り扱います。
recode-sr-latin	セルビア語のテキストに対し、キリル文字からラテン文字にコード変換します。
xgettext	指定されたソースファイルから、翻訳対象となるメッセージ行を抽出して、翻訳テンプレートとして生成します。
libasprintf	autosprintf クラスを定義します。 これは C++ プログラムにて利用できる C 言語書式の出力ルーチンを生成するものです。 <string> 文字列と <iostream> ストリームを利用します。
libgettextlib	さまざまな Gettext プログラムが利用している共通的ルーチンを提供するプライベートライブラリです。 これは一般的な利用を想定したものではありません。
libgettextpo	.po ファイルの出力に特化したプログラムを構築する際に利用します。 Gettext が提供する標準的なアプリケーション (msgcomm, msgcmp, msgattrib, msgen) などでは処理出来ないものがある場合に、このライブラリを利用します。
libgettextsrc	さまざまな Gettext プログラムが利用している共通的ルーチンを提供するプライベートライブラリです。 これは一般的な利用を想定したものではありません。
libtextstyle	テキストスタイルライブラリ。
preloadable_libintl	LD_PRELOAD が利用するライブラリ。 翻訳されていないメッセージを収集 (log) する libintl をサポートします。

8.32. Bison-3.8.2

Bison パッケージは構文解析ツールを提供します。

概算ビルド時間:	8.7 SBU
必要ディスク容量:	63 MB

8.32.1. Bison のインストール

Bison をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr --docdir=/usr/share/doc/bison-3.8.2
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストするなら以下を実行します。(約 5.5 SBU)

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

8.32.2. Bison の構成

インストールプログラム:	bison, yacc
インストールライブラリ:	liby.a
インストールディレクトリ:	/usr/share/bison

概略説明

bison 構文規則の記述に基づいて、テキストファイルの構造を解析するプログラムを生成します。 Bison は Yacc (Yet Another Compiler Compiler) の互換プログラムです。

yacc bison のラッパースクリプト。 yacc プログラムがあるなら bison を呼び出さずに yacc を実行します。 -y オプションが指定された時は bison を実行します。

liby Yacc 互換の関数として yyerror 関数と main 関数を含むライブラリです。 このライブラリはあまり使い勝手の良いものではありません。 ただし POSIX ではこれが必要になります。

8.33. Grep-3.7

Grep パッケージはファイル内の検索を行うプログラムを提供します。

概算ビルド時間:	0.8 SBU
必要ディスク容量:	37 MB

8.33.1. Grep のインストール

Grep をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストするには以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

8.33.2. Grep の構成

インストールプログラム: egrep, fgrep, grep

概略説明

egrep 拡張正規表現 (extended regular expression) にマッチした行を表示します。これは非推奨となっているため、代わりに grep -E を使ってください。

fgrep 固定文字列の一覧にマッチした行を表示します。これは非推奨となっているため、代わりに grep -F を使ってください。

grep 基本的な正規表現に合致した行を出力します。

8.34. Bash-5.1.16

Bash は Bourne-Again SHell を提供します。

概算ビルド時間: 1.4 SBU
必要ディスク容量: 50 MB

8.34.1. Bash のインストール

Bash をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr \
           --docdir=/usr/share/doc/bash-5.1.16 \
           --without-bash-malloc \
           --with-installed-readline
```

configure オプションの意味

--with-installed-readline

このオプションは Bash が持つ独自の readline ライブラリではなく、既にインストールした readline ライブラリを用いることを指示します。

パッケージをコンパイルします。

make

テストスイートを実行しない場合は「パッケージをインストールします。」と書かれた箇所まで読み飛ばしてください。

テストを実施するにあたっては tester ユーザーによるソースツリーへの書き込みを可能とします。

chown -Rv tester .

本パッケージのテストスイートは、非 root ユーザーが実行するものとされていて、利用する端末が標準入力に接続できているものとしています。この仕様を満たすためには、Expect を使って新たな疑似端末を起動します。そして tester ユーザーとしてテストを実行します。

```
su -s /usr/bin/expect tester << EOF
set timeout -1
spawn make tests
expect eof
lassign [wait] _ _ _ value
exit $value
EOF
```

パッケージをインストールします。

make install

新たにコンパイルした bash プログラムを実行します。(この時点までに実行されていたものが置き換えられます。)

exec /usr/bin/bash --login

8.34.2. Bash の構成

インストールプログラム: bash, bashbug, sh (bash へのリンク)
インストールディレクトリ: /usr/include/bash, /usr/lib/bash, /usr/share/doc/bash-5.1.16

概略説明

bash	広く活用されているコマンドインターパリター。処理実行前には、指示されたコマンドラインをさまざまに展開したり置換したりします。この機能があるからこそインターパリター機能を強力なものにしています。
bashbug	bash に関連したバグ報告を、標準書式で生成しメール送信することを補助するシェルスクリプトです。
sh	bash プログラムへのシンボリックリンク。sh として起動された際には、かつてのバージョンである sh の起動時の動作と、出来るだけ同じになるように振舞います。同時に POSIX 標準に適合するよう動作します。

8.35. Libtool-2.4.7

Libtool パッケージは GNU 汎用ライブラリをサポートするスクリプトを提供します。これは複雑な共有ライブラリをラップして一貫した可搬性を実現します。

概算ビルト時間: 1.5 SBU
必要ディスク容量: 43 MB

8.35.1. Libtool のインストール

Libtool をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストするには以下を実行します。

```
make check
```



注記

マルチコアのシステム上で libtool のテストをすると、その処理時間は大幅に減ります。実行する際には、上のコマンドに TESTSUITEFLAGS=-j<N> を加えます。例えば -j4 を指定するとテスト時間は 6 割以上減ります。

LFS ビルド環境下では 5 つのテストが失敗します。これはパッケージ間の相互依存のためです。automake をインストールした後に再テストすれば、全テストが成功します。

パッケージをインストールします。

```
make install
```

不要なスタティックライブラリを削除します。

```
rm -fv /usr/lib/libltdl.a
```

8.35.2. Libtool の構成

インストールプログラム:	libtool, libtoolize
インストールライブラリ:	libltdl.so
インストールディレクトリ:	/usr/include/libltdl, /usr/share/libtool

概略説明

libtool	汎用的なライブラリ構築支援サービスを提供します。
libtoolize	パッケージに対して libtool によるサポートを加える標準的手法を提供します。
libltdl	dlopen を行うライブラリの複雑さを隠蔽します。

8.36. GDBM-1.23

GDBM パッケージは GNU データベースマネージャーを提供します。これは拡張性のあるハッシングなど、従来の UNIX dbm と同様のデータベース機能を実現するライブラリです。このライブラリにより、キーデータペアの収容、キーによるデータ検索と抽出、キーに基づいたデータ削除などを行うことができます。

概算ビルド時間: 0.1 SBU
必要ディスク容量: 13 MB

8.36.1. GDBM のインストール

GDBM をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr \
--disable-static \
--enable-libgdbm-compat
```

configure オプションの意味

--enable-libgdbm-compat

このオプションは libgdbm 互換ライブラリをビルドすることを指示します。LFS パッケージ以外において、かつての古い DBM ルーチンを必要とするものがあるかもしれません。

パッケージをコンパイルします。

make

ビルド結果をテストする場合は以下を実行します。

make check

パッケージをインストールします。

make install

8.36.2. GDBM の構成

インストールプログラム:	gdbm_dump, gdbm_load, gdbmtool
インストールライブラリ:	libgdbm.so, libgdbm_compat.so

概略説明

gdbm_dump	GDBM データベースをファイルにダンプします。
gdbm_load	GDBM のダンプファイルからデータベースを再生成します。
gdbmtool	GDBM データベースをテストし修復します。
libgdbm	ハッシュデータベースを取り扱う関数を提供します。
libgdbm_compat	古い DBM 関数を含んだ互換ライブラリ。

8.37. Gperf-3.1

Gperf は、キーセットに基づいて完全なハッシュ関数の生成を実現します。

概算ビルド時間:	0.1 SBU 以下
必要ディスク容量:	6.0 MB

8.37.1. Gperf のインストール

Gperf をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr --docdir=/usr/share/doc/gperf-3.1
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

同時実行によるテスト (-j オプションを 1 より大きくした場合) ではテストに失敗します。 ビルド結果をテストする場合は以下を実行します。

```
make -j1 check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

8.37.2. Gperf の構成

インストールプログラム:	gperf
インストールディレクトリ:	/usr/share/doc/gperf-3.1

概略説明

gperf キーセットに基づいて、完全なハッシュ関数を生成します。

8.38. Expat-2.4.8

Expat パッケージは XML を解析するためのストリーム指向 (stream oriented) な C ライブラリを提供します。

概算ビルド時間:	0.1 SBU
必要ディスク容量:	12 MB

8.38.1. Expat のインストール

Expat をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr      \
            --disable-static \
            --docdir=/usr/share/doc/expat-2.4.8
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

ビルド結果をテストする場合は以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

必要ならドキュメントをインストールします。

```
install -v -m644 doc/*.{html,css} /usr/share/doc/expat-2.4.8
```

8.38.2. Expat の構成

インストールプログラム:	xmlwf
インストールライブラリ:	libexpat.so
インストールディレクトリ:	/usr/share/doc/expat-2.4.8

概略説明

`xmlwf` XML ドキュメントが整形されているかどうかをチェックするユーティリティです。

`libexpat` XML を処理する API 関数を提供します。

8.39. Inetutils-2.3

Inetutils パッケージはネットワーク制御を行う基本的なプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.3 SBU
必要ディスク容量: 31 MB

8.39.1. Inetutils のインストール

Inetutils をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr      \
           --bindir=/usr/bin \
           --localstatedir=/var \
           --disable-logger \
           --disable-whois \
           --disable-rcp \
           --disable-rexec \
           --disable-rlogin \
           --disable-rsh \
           --disable-servers
```

configure オプションの意味

--disable-logger

このオプションは logger プログラムをインストールしないようにします。 このプログラムはシステムログデーターモンに対してメッセージ出力を行うスクリプトにて利用されます。 ここでこれをインストールしないのは、後に Util-linux パッケージにおいて、より最新のバージョンをインストールするためです。

--disable-whois

このオプションは whois のクライアントプログラムをインストールしないようにします。 このプログラムはもはや古いものです。 より良い whois プログラムのインストール手順については BLFS ブックにて説明しています。

--disable-r*

これらのパラメーターは、セキュリティの問題により用いるべきではない古いプログラムを作らないようにします。 古いプログラムによる機能は BLFS ブックにて示す openssh でも提供されています。

--disable-servers

このオプションは Inetutils パッケージに含まれるさまざまなネットワークサーバーをインストールしないようにします。 これらのサーバーは基本的な LFS システムには不要なものと考えられます。 サーバーの中には本質的にセキュアでないものがあり、信頼のあるネットワーク内でのみしか安全に扱うことができないものもあります。 サーバーの多くは、これに代わる他の適切なものが存在します。

パッケージをコンパイルします。

make

コンパイル結果をテストするには以下を実行します。

make check

パッケージをインストールします。

make install

各種プログラムを適切な場所に移動します。

mv -v /usr/{,s}bin/ifconfig

8.39.2. Inetutils の構成

インストールプログラム: dnsdomainname, ftp, ifconfig, hostname, ping, ping6, talk, telnet, tftp, traceroute

概略説明

dnsdomainname システムの DNS ドメイン名を表示します。

ftp	ファイル転送プロトコル (file transfer protocol) に基づくプログラム。
hostname	ホスト名の表示または設定を行います。
ifconfig	ネットワークインターフェースを管理します。
ping	エコーリクエスト (echo-request) パケットを送信し、返信にどれだけ要したかを表示します。
ping6	IPv6 ネットワーク向けの ping
talk	他ユーザーとのチャットを利用します。
telnet	TELNET プロトコルインターフェース。
tftp	軽量なファイル転送プログラム。 (trivial file transfer program)
traceroute	処理起動したホストからネットワーク上の他のホストまで、送出したパケットの経由ルートを追跡します。 その合間に検出されたすべての hops (= ゲートウェイ) も表示します。

8.40. Less-590

Less パッケージはテキストファイルビューアーを提供します。

概算ビルト時間:	0.1 SBU 以下
必要ディスク容量:	4.2 MB

8.40.1. Less のインストール

Less をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr --sysconfdir=/etc
```

configure オプションの意味

--sysconfdir=/etc
本パッケージによって作成されるプログラムが /etc ディレクトリにある設定ファイルを参照するように指示します。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

このパッケージにテストスイートはありません。

パッケージをインストールします。

```
make install
```

8.40.2. Less の構成

インストールプログラム: less, lessecho, lesskey

概略説明

less	ファイルビューアーまたはページャー。 指示されたファイルの内容を表示します。 表示中にはスクロール、文字検索、移動が可能です。
lessecho	Unix システム上のファイル名において * や ? といったメタ文字 (meta-characters) を展開するために必要なります。
lesskey	less におけるキー割り当てを設定するために利用します。

8.41. Perl-5.36.0

Perl パッケージは Perl 言語 (Practical Extraction and Report Language) を提供します。

概算ビルド時間:	9.4 SBU
必要ディスク容量:	236 MB

8.41.1. Perl のインストール

ここでビルトするバージョンの Perl は Compress::Raw::Zlib モジュールと Compress::Raw::Bzip2 モジュールをビルトします。しかしデフォルトでは内部にコピーされたライブラリソースを用いてビルトを行います。以下のコマンドは、既にインストールされているライブラリを用いるようにします。

```
export BUILD_ZLIB=False
export BUILD_BZIP2=0
```

Perl のビルト設定を完全に制御したい場合は、以下のコマンドから「-des」オプションを取り除くことで手動設定を進めることもできます。Perl が自動判別するデフォルト設定に従うので良ければ、以下のコマンドにより Perl をコンパイルするための準備をします。

```
sh Configure -des
  -Dprefix=/usr                                \
  -Dvendorprefix=/usr                           \
  -Dprivlib=/usr/lib/perl5/5.36/core_perl     \
  -Darchlib=/usr/lib/perl5/5.36/core_perl     \
  -Dsitelib=/usr/lib/perl5/5.36/site_perl      \
  -Dsitearch=/usr/lib/perl5/5.36/site_perl     \
  -Dvendorlib=/usr/lib/perl5/5.36/vendor_perl \
  -Dvendorarch=/usr/lib/perl5/5.36/vendor_perl \
  -Dman1dir=/usr/share/man/man1                \
  -Dman3dir=/usr/share/man/man3                \
  -Dpager="/usr/bin/less -isR"                  \
  -Duseshrplib                                  \
  -Dusetthreads
```

configure オプションの意味

-Dvendorprefix=/usr

このオプションは各種の perl モジュールをどこにインストールするかを指定します。

-Dpager="/usr/bin/less -isR"

このオプションは more プログラムでなく less プログラムが利用されるようにします。

-Dman1dir=/usr/share/man/man1 -Dman3dir=/usr/share/man/man3

まだ Groff をインストールしていないので Configure スクリプトが Perl の man ページを必要としないと判断してしまいます。このオプションを指定することによりその判断を正します。

-Duseshrplib

Perl モジュールの中で必要とされる共有ライブラリ libperl をビルトします。

-Dusetthreads

スレッドサポートをビルトします。

-Dprivlib, -Darchlib, -Dsitelib, ...

この設定は、Perl がインストール済のモジュールを探す場所を指定します。LFS 編集者はディレクトリ構造として Perl の Major.Minor バージョン (5.36) の形に基づいて、インストールモジュールを配置することにしています。このようにしておくと、新たなパッチレベル (5.36.0) によるアップグレードの際に、モジュールを再インストールする必要がなくなるためです。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストするには以下を実行します。(約 11 SBU)

```
make test
```

パッケージはインストールしクリーンアップします。

```
make install
unset BUILD_ZLIB BUILD_BZIP2
```

8.41.2. Perl の構成

インストールプログラム:

corelist, cpan, enc2xs, encguess, h2ph, h2xs, instmodsh, json_pp, libnetcfg, perl, perl5.36.0 (perl へのハードリンク), perlbug, perldoc, perlivp, perlthanks (perlbug へのハードリンク), piconv, pl2pm, pod2html, pod2man, pod2text, pod2usage, podchecker, podselect, prove, ptar, ptardiff, ptargrep, shasum, splain, xsubpp, zipdetails

インストールライブラリ:

ここで示しきれないほど多くのライブラリ

インストールディレクトリ:

/usr/lib/perl5

概略説明

corelist	Module::CoreList に対するコマンドラインフロントエンド。
cpan	コマンドラインから CPAN (Comprehensive Perl Archive Network) との通信を行います。
enc2xs	Unicode キャラクターマッピングまたは Tcl エンコーディングファイルから Perl の Encode 拡張モジュールを構築します。
encguess	複数ファイルのエンコーディングを調査します。
h2ph	C 言語のヘッダーファイル .h を Perl のヘッダーファイル .ph に変換します。
h2xs	C 言語のヘッダーファイル .h を Perl 拡張 (Perl extension) に変換します。
instmodsh	インストールされている Perl モジュールを調査するシェルスクリプト。インストールされたモジュールから tarball を作ることもできます。
json_pp	特定の入出力フォーマット間でデータを変換します。
libnetcfg	Perl モジュール libnet の設定に利用します。
perl	C 言語、sed、awk、sh の持つ機能を寄せ集めて出来上がった言語。
perl5.36.0	perl へのハードリンク。
perlbug	Perl およびそのモジュールに関するバグ報告を生成して、電子メールを送信します。
perldoc	pod フォーマットのドキュメントを表示します。pod フォーマットは Perl のインストールツリーあるいは Perl スクリプト内に埋め込まれています。
perlivp	Perl Installation Verification Procedure のこと。Perl とライブラリが正しくインストールできているかを調べるものです。
perlthanks	感謝のメッセージ (Thank you messages) を電子メールで Perl 開発者に送信します。
piconv	キャラクターエンコーディングを変換する iconv の Perl バージョン。
pl2pm	Perl4 の .pl ファイルを Perl5 の .pm モジュールファイルへの変換を行うツール。
pod2html	pod フォーマットから HTML フォーマットに変換します。
pod2man	pod データを *roff の入力ファイル形式に変換します。
pod2text	pod データをアスキーテキスト形式に変換します。
pod2usage	ファイル内に埋め込まれた pod ドキュメントから使用方法の記述部分を表示します。
podchecker	pod 形式の文書ファイルに対して文法をチェックします。
podselect	pod ドキュメントに対して指定したセクションを表示します。
prove	Test::Harness モジュールのテストを行うコマンドラインツール。
ptar	Perl で書かれた tar 相当のプログラム。
ptardiff	アーカイブの抽出前後を比較する Perl プログラム。
ptargrep	tar アーカイブ内のファイルに対してパターンマッチングを適用するための Perl プログラム。
shasum	SHA チェックサム値を表示またはチェックします。
splain	Perl スクリプトの警告エラーの診断結果を詳細 (verbose) に出力するために利用します。
xsubpp	Perl の XS コードを C 言語コードに変換します。
zipdetails	Zip ファイルの内部構造に関する情報を出力します。

8.42. XML::Parser-2.46

XML::Parser モジュールは James Clark 氏による XML パーサー Expat への Perl インターフェースです。

概算ビルド時間: 0.1 SBU 以下
必要ディスク容量: 2.3 MB

8.42.1. XML::Parser のインストール

XML::Parser をコンパイルするための準備をします。

```
perl Makefile.PL
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

ビルド結果をテストする場合は以下を実行します。

```
make test
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

8.42.2. XML::Parser の構成

インストールモジュール: Expat.so

概略説明

Expat Perl Expat インターフェースを提供します。

8.43. Intltool-0.51.0

Intltool パッケージは、プログラムソースファイルから翻訳対象の文字列を抽出するために利用する国際化ツールです。

概算ビルト時間: 0.1 SBU 以下
必要ディスク容量: 1.5 MB

8.43.1. Intltool のインストール

perl-5.22 以降にて発生する警告メッセージを修正します。

```
sed -i 's:\\\\${:\\\\$\\\\{:' intltool-update.in
```



注記

上の正規表現は、バックスラッシュが多すぎて変に思うかもしれません。ここで行っているのは '\${' という記述の並びに対して、右ブレースの前にバックスラッシュを追加して '\$\${}' を作り出しています。

Intltool をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

ビルド結果をテストする場合は以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
install -v -Dm644 doc/I18N-HOWTO /usr/share/doc/intltool-0.51.0/I18N-HOWTO
```

8.43.2. Intltool の構成

インストールプログラム: intltool-extract, intltool-merge, intltool-prepare, intltool-update, intltoolize

インストールディレクトリ: /usr/share/doc/intltool-0.51.0, /usr/share/intltool

概略説明

intltoolize	パッケージに対して intltool を利用できるようにします。
intltool-extract	gettext が読み込むことの出来るヘッダーファイルを生成します。
intltool-merge	翻訳された文字列をさまざまな種類のファイルにマージします。
intltool-prepare	pot ファイルを更新し翻訳ファイルにマージします。
intltool-update	po テンプレートファイルを更新し翻訳ファイルにマージします。

8.44. Autoconf-2.71

Autoconf パッケージは、ソースコードを自動的に設定するシェルスクリプトの生成を行うプログラムを提供します。

概算ビルド時間:	0.1 SBU 以下 (テスト込みで約 6.7 SBU)
必要ディスク容量:	24 MB

8.44.1. Autoconf のインストール

Autoconf をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

ビルド結果をテストするには、以下を実行します。

```
make check
```



注記

マルチコアのシステム上で autoconf のテストをすると、その処理時間は大幅に減ります。 実行する際には、上のコマンドに TESTSUITEFLAGS=-j<N> を加えます。 例えば -j4 を指定するとテスト時間は 6 割以上減ります。

パッケージをインストールします。

```
make install
```

8.44.2. Autoconf の構成

インストールプログラム:	autoconf, autoheader, autom4te, autoreconf, autoscan, autoupdate, ifnames
インストールディレクトリ:	/usr/share/autoconf

概略説明

autoconf	ソースコードを提供するソフトウェアパッケージを自動的に設定する (configure する) シェルスクリプトを生成します。 これにより数多くの Unix 互換システムへの適用を可能とします。 生成される設定 (configure) スクリプトは独立して動作します。 つまりこれを実行するにあたっては autoconf プログラムを必要としません。
autoheader	C 言語の #define 文を configure が利用するためのテンプレートファイルを生成するツール。
autom4te	M4 マクロプロセッサーに対するラッパー。
autoreconf	autoconf と automake のテンプレートファイルが変更された時に、自動的に autoconf、autoheader、aclocal、automake、gettextize、libtoolize を無駄なく適正な順で実行します。
autoscan	ソフトウェアパッケージに対する configure.in ファイルの生成をサポートします。 ディレクトリ内のソースファイルを調査して、共通的な可搬性に関わる問題を見出します。 そして configure.scan ファイルを生成して、そのパッケージの configure.in ファイルの雛形として提供します。
autoupdate	configure.in ファイルにおいて、かつての古い autoconf マクロが利用されている場合に、それを新しいマクロに変更します。
ifnames	ソフトウェアパッケージにおける configure.in ファイルの記述作成をサポートします。 これはそのパッケージが利用する C プリプロセッサーの条件ディレクティブの識別子を出力します。 可搬性を考慮した構築ができている場合は、本プログラムが configure スクリプトにおいて何をチェックするべきかを決定してくれます。 また autoscan によって生成された configure.in ファイルでの過不足を調整する働きもします。

8.45. Automake-1.16.5

Automake パッケージは Autoconf が利用する Makefile などを生成するプログラムを提供します。

概算ビルド時間:	0.1 SBU 以下 (テスト込みで約 7.7 SBU)
必要ディスク容量:	116 MB

8.45.1. Automake のインストール

Automake をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr --docdir=/usr/share/doc/automake-1.16.5
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

make オプションの `-j4` を用いるとテストを速く進めることができます。たとえ 1 つのプロセッサーであっても有用であり、個々のテストにおける内部遅延に関係するためです。ビルド結果をテストするには以下を実行します。

```
make -j4 check
```

テスト `t/subobj.sh` は失敗します。

パッケージをインストールします。

```
make install
```

8.45.2. Automake の構成

インストールプログラム:	<code>aclocal</code> , <code>aclocal-1.16</code> (<code>aclocal</code> へのハードリンク), <code>automake</code> , <code>automake-1.16</code> (<code>automake</code> へのハードリンク)
--------------	---

インストールディレクトリ:	<code>/usr/share/aclocal-1.16</code> , <code>/usr/share/automake-1.16</code> , <code>/usr/share/doc/automake-1.16.5</code>
---------------	--

概略説明

<code>aclocal</code>	<code>configure.in</code> ファイルの内容に基づいて <code>aclocal.m4</code> ファイルを生成します。
<code>aclocal-1.16</code>	<code>aclocal</code> へのハードリンク。
<code>automake</code>	<code>Makefile.am</code> ファイルから <code>Makefile.in</code> ファイルを自動生成するツール。パッケージ内のすべての <code>Makefile.in</code> ファイルを作るには、このプログラムをトップディレクトリから実行します。 <code>configure.in</code> ファイルを調べて、適切な <code>Makefile.am</code> ファイルを検索します。そして対応する <code>Makefile.in</code> ファイルを生成します。
<code>automake-1.16</code>	<code>automake</code> へのハードリンク。

8.46. OpenSSL-3.0.5

OpenSSL パッケージは暗号化に関する管理ツールやライブラリを提供します。これを利用することにより、他のパッケージにおいて暗号化機能が実現されます。例えば OpenSSH、Email アプリケーション、(HTTPS サイトアクセスを行う) ウェブブラウザーなどです。

概算ビルド時間: 5.0 SBU
必要ディスク容量: 476 MB

8.46.1. OpenSSL のインストール

OpenSSL をコンパイルするための準備をします。

```
./config --prefix=/usr \
          --openssldir=/etc/ssl \
          --libdir=lib \
          shared \
          zlib-dynamic
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

ビルド結果をテストする場合は以下を実行します。

```
make test
```

カーネル設定によっては (CONFIG_CRYPTO_USER_API* の設定に一貫性がないと)、30-test_afalg.t というテストが 1 つだけ失敗することがわかっています。失敗しても、無視してかまいません。

パッケージをインストールします。

```
sed -i '/INSTALL_LIBS/s/libcrypto.a libssl.a/' Makefile
make MANSUFFIX=ssl install
```

ドキュメントディレクトリにバージョンを含めます。他のパッケージとの整合をとるためです。

```
mv -v /usr/share/doc/openssl /usr/share/doc/openssl-3.0.5
```

必要であれば、さらにドキュメントをインストールします。

```
cp -vfr doc/* /usr/share/doc/openssl-3.0.5
```



注記

せい弱性への対処を行った新バージョンが公開されたら、OpenSSL をアップデートすることになります。OpenSSL 3.0.0 以降では、バージョンのつけ方が MAJOR.MINOR.PATCH という形式になりました。API/API の互換性は、同一の MAJOR バージョン番号では保証されます。本パッケージは libcrypto.so または libssl.so へのリンクを行っていますが、LFS では共有ライブラリをインストールするだけなので、MAJOR バージョン番号が同一のアップグレードである限りは、パッケージを再コンパイルする必要はありません。

そうであっても、それらのライブラリにリンクしているプログラムが稼働中であるなら、一度停止してから再起動が必要です。詳しくは関連する話が「アップグレードに関する問題」にあるので参照してください。

8.46.2. OpenSSL の構成

インストールプログラム:	c_rehash, openssl
インストールライブラリ:	libcrypto.so, libssl.so
インストールディレクトリ:	/etc/ssl, /usr/include/openssl, /usr/lib/engines, /usr/share/doc/openssl-3.0.5

概略説明

c_rehash	ディレクトリ内のすべてのファイルをスキャンする Perl スクリプト。それらのファイルに対するハッシュ値へのシンボリックリンクを生成します。c_rehash の利用は非推奨と考えられており、この代わりに openssl rehash コマンドを使ってください。
----------	--

openssl	OpenSSL の暗号化ライブラリが提供するさまざまな関数を、シェルから利用するためのコマンドラインツール。 <code>man 1 openssl</code> に示される数多くの関数を利用することができます。
libcrypto.so	各種のインターネット標準にて採用されている暗号化アルゴリズムを幅広く実装しています。このライブラリが提供する機能は、SSL、TLS、S/MIME を実装する OpenSSL において利用されており、また OpenSSH、OpenPGP、あるいはこの他の暗号化標準の実装にも利用されています。
libssl.so	トランSPORT層セキュリティ (Transport Layer Security; TLFS v1) プロトコルを実装しています。これは豊富な API 関数とそのドキュメントを提供します。ドキュメントは <code>man 3 ssl</code> の実行により参照できます。

8.47. Kmod-30

Kmod パッケージは、カーネルモジュールをロードするためのライブラリやユーティリティーを提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU
必要ディスク容量: 12 MB

8.47.1. Kmod のインストール

Kmod をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr \
           --sysconfdir=/etc \
           --with-openssl \
           --with-xz \
           --with-zstd \
           --with-zlib
```

configure オプションの意味

--with-openssl

このオプションは Kmod において、カーネルモジュールに対する PKCS7 署名を取り扱えるようにします。

--with-xz, --with-zlib, --with-zstd

これらのオプションは、Kmod が圧縮されたカーネルモジュールを取り扱えるようにするものです。

パッケージをコンパイルします。

make

本パッケージのテストスイートでは、生のカーネルヘッダー（以前にインストールした「健全化（sanitized）」されたヘッダーではないもの）が必要です。これは LFS の範囲を超えているものです。

パッケージインストールし、Module-Init-Tools パッケージとの互換性を保つためにシンボリックリンクを生成します。Module-Init-Tools パッケージは、これまで Linux カーネルモジュールを取り扱っていたものです。

make install

```
for target in depmod insmod modinfo modprobe rmmod; do
    ln -sfv ..../bin/kmod /usr/sbin/$target
done

ln -sfv kmod /usr/bin/lsmod
```

8.47.2. Kmod の構成

インストールプログラム:	depmod (kmodへのリンク), insmod (kmodへのリンク), kmod, lsmod (kmodへのリンク), modinfo (kmodへのリンク), modprobe (kmodへのリンク), rmmod (kmodへのリンク)
インストールライブラリ:	libkmod.so

概略説明

depmod	存在しているモジュール内に含まれるシンボル名に基づいて、モジュールの依存関係を記述したファイル (dependency file) を生成します。これは modprobe が必要なモジュールを自動的にロードするために利用します。
insmod	稼動中のカーネルに対してロード可能なモジュールをインストールします。
kmod	カーネルモジュールのロード、アンロードを行います。
lsmod	その時点でロードされているモジュールを一覧表示します。
modinfo	カーネルモジュールに関連付いたオブジェクトファイルを調べて、出来る限りの情報を表示します。
modprobe	depmod によってモジュールの依存関係を記述したファイル (dependency file) が生成されます。これを使って関連するモジュールを自動的にロードします。
rmmod	稼動中のカーネルからモジュールをアンロードします。

libkmod このライブラリは、カーネルモジュールのロード、アンロードを行う他のプログラムが利用します。

8.48. Elfutils-0.187 から取り出した libelf

Libelf は、ELF (Executable and Linkable Format) 形式のファイルを扱うライブラリを提供します。

概算ビルド時間:	0.9 SBU
必要ディスク容量:	117 MB

8.48.1. Libelf のインストール

Libelf は elfutils-0.187 パッケージに含まれます。ソース tarball として elfutils-0.187.tar.bz2 を利用します。

Libelf をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr \
           --disable-debuginfod \
           --enable-libdebuginfod=dummy
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

ビルド結果をテストする場合は以下を実行します。

```
make check
```

Libelf のみをインストールします。

```
make -C libelf install
install -vm644 config/libelf.pc /usr/lib/pkgconfig
rm /usr/lib/libelf.a
```

8.48.2. Libelf の構成

インストールライブラリ:	libelf.so (シンボリックリンク), libelf-0.187.so
インストールディレクトリ:	/usr/include/elfutils

概略説明

libelf ELF オブジェクトファイルを取り扱うための API 関数を提供します。

8.49. Libffi-3.4.2

Libffi ライブラリは、さまざまな呼出規約 (calling conventions) に対しての、移植性に優れた高レベルのプログラミングインターフェースを提供します。このライブラリを用いることで、プログラム実行時に呼出インターフェース記述 (call interface description) による関数を指定して呼び出すことができるようになります。

概算ビルト時間: 1.8 SBU
必要ディスク容量: 10 MB

8.49.1. Libffi のインストール



注記

GMP と同じように libffi では、利用中のプロセッサーに応じた最適化を行なってビルドされます。異なるシステムに向けてのビルドを行う場合は、以下のコマンドにおいて `--with-gcc-arch=` を使って、そのシステム上の CPU の実装を完全に表すアーキテクチャ名に変更してください。そうしなかった場合には、libffi をリンクするアプリケーションにおいて Illegal Operation エラーを発生させることになります。

`ibfffi` をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr \
            --disable-static \
            --with-gcc-arch=native \
            --disable-exec-static-tramp
```

`configure` オプションの意味

```
--with-gcc-arch=native
```

現状のシステムに応じて GCC が最適化されるようになります。仮にこれを指定しなかった場合、システムを誤認して誤ったコードを生成してしまう場合があります。生成されたコードが、より劣ったシステム向けのネイティブコードをコピーしていたとすると、より劣ったシステムに対するパラメーターを指定することとなります。システムに応じた詳細は [the x86 options in the GCC manual](#) を参照してください。

--disable-exec-static-tramp

スタティックなトランポリン (trampoline) サポートを無効にします。これは libffi における新しいセキュリティ機能ですが、BLFS パッケージの中（特に GJS）では、この機能に対応していないものがあります。

パッケージをコンパイルします。

make

ビルド結果をテストする場合は、以下を実行します。

make check

パッケージをインストールします。

make install

8.49.2. Libffi の構成

インストールライブラリ: libffi.so

概略說明

`libffi` 外部関数インターフェース API 関数を提供します。

8.50. Python-3.10.6

Python 3 パッケージは Python 開発環境を提供します。オブジェクト指向プログラミング、スクリプティング、大規模プログラムのプロトタイピング、アプリケーション開発などに有用なものです。

概算ビルド時間:	3.4 SBU
必要ディスク容量:	283 MB

8.50.1. Python 3 のインストール

Python をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr \
            \
--enable-shared \
--with-system-expat \
--with-system-ffi \
--enable-optimizations
```

configure オプションの意味

`--with-system-expat`

本スイッチは、システムにインストールされている Expat をリンクすることを指示します。

`--with-system-ffi`

本スイッチは、システムにインストールされている libffi をリンクすることを指示します。

`--enable-optimizations`

本スイッチは安定的ではあるものの高くつく最適化を有効にします。

パッケージをコンパイルします。

make

この時点においてテスト実行することはお勧めしません。部分的にしか仕上がってない LFS 環境では安定せずハングすることがあります。テストを必要とする場合は、本章を一番最後まで進めてから再度実行するか、あるいは BLFS において Python 3 をインストール際に行います。そうではなくここでテスト実行をするなら `make test` を実行します。

パッケージをインストールします。

make install

いくつかの場面において Python 3 プログラムやモジュールをインストールする際には、全ユーザー向けのインストールを行うために root ユーザーになって `pip3` コマンドを用いています。このことは Python 開発者が推奨している、仮想環境内で一般ユーザーにより（そのユーザーが `pip3` を実行することで）パッケージビルドを行う方法とは相容れないものです。これを行っているため、root ユーザーとして `pip3` を用いると、警告メッセージが複数出力されます。開発者がなぜその方法を推奨しているかというと、システムパッケージマネージャー（たとえば `dpkg`）などと衝突が発生するからです。LFS ではシステムワイドなパッケージマネージャーを利用してないため、このことは問題となりません。

また `pip3` そのものが、自分の最新版が存在していないかどうかを実行時に確認します。LFS の `chroot` 環境においては、ドメイン名解決がまだ設定されていないので、最新版の確認は失敗して警告が出力されます。LFS システムを再起動してネットワーク設定を行えば、最新版の存在時には、あらかじめビルトされていた `wheel` を PyPI から更新するような警告メッセージが示されます。もっとも LFS では `pip3` を Python 3 の一部として考えるので、個別に更新しないでください。したがってあらかじめビルトされた `wheel` を更新することは、ソースコードから Linux システムをビルトするという目的から逸脱してしまいます。このことから、最新版の `pip3` を求める警告も無視してください。警告メッセージを省略したい場合は、以下のコマンドを実行します。

```
cat > /etc/pip.conf << EOF
[global]
root-user-action = ignore
disable-pip-version-check = true
EOF
```



重要

LFS や BLFSにおいては通常、Python モジュールのビルドとインストールには pip3 コマンドを用いています。この両ブックにおいて実行する pip3 install コマンドは、Python 仮想環境内でない場合には root ユーザーで実行するようにしてください。root ユーザー以外によって pip3 install を実行しても問題なく動作するように見えるかもしれません、インストールしたモジュールが別のユーザーからはアクセスできない事態を作り出します。

pip3 install はデフォルトでは、すでにインストールされているモジュールを再インストールすることは行いません。pip3 install コマンドを使ってモジュールのアップグレードを行う（たとえば meson-0.61.3 から meson-0.62.0 にするような場合）には、コマンドラインに --upgrade オプションを含めてください。またモジュールのダウングレードや再インストールが必要となる理由が確実にあるのであれば、コマンドラインに -force-reinstall --no-deps を含めて実行してください。

必要なら、整形済みドキュメントをインストールします。

```
install -v -dm755 /usr/share/doc/python-3.10.6/html
tar --strip-components=1 \
--no-same-owner \
--no-same-permissions \
-C /usr/share/doc/python-3.10.6/html \
-xvf ../python-3.10.6-docs-html.tar.bz2
```

ドキュメント install コマンドの意味

--no-same-owner と --no-same-permissions

インストールするファイルの所有者とパーミッションを適切に設定します。このオプションがないと tar によって展開されるファイルは、アップストリームが作り出した値になってしまうためです。

8.50.2. Python 3 の構成

インストールプログラム:	2to3, idle3, pip3, pydoc3, python3, python3-config
インストールライブラリ:	libpython3.10.so, libpython3.so
インストールディレクトリ:	/usr/include/python3.10, /usr/lib/python3, /usr/share/doc/python-3.10.6

概略説明

2to3	Python 2.x のソースコードを読み込み、種々の変更を行って Python 3.x 用の適正なソースコードに変換するための Python プログラムです
idle3	Python に特化した GUI エディターを起動するラッパースクリプト。このスクリプトを実行するには、Python より前に Tk をインストールして、Python モジュールである Tkinter をビルドしておく必要があります。
pip3	Python のパッケージインストーラー。この pip を使って Python Package Index などのインデックスサイトから各種パッケージをインストールできます。
pydoc3	Python ドキュメントツール。
python3	インターフリターであり、対話的なオブジェクト指向プログラミング言語。

8.51. Wheel-0.37.1

Wheel は Python wheel パッケージング標準に基づいた標準実装の Python ライブラリです。

概算ビルド時間:	0.1 SBU 以下
必要ディスク容量:	956 KB

8.51.1. Wheel のインストール

以下のコマンドを実行して wheel をインストールします。

```
pip3 install --no-index $PWD
```

pip3 オプションの意味

`install`

パッケージをインストールします。

`--no-index`

pip がオンラインパッケージリポジトリ (PyPI) からファイルを取得しないようにします。 パッケージ類が適切な順番でインストールされていれば、最初にファイルを取得しておく必要はないはずです。 ただしこのオプションをつけておくことで、ユーザーが操作を誤っても安全であるようにします。

`$PWD`

インストールするファイルを現在のワーキングディレクトリ内から探し出します。

8.51.2. Wheel の構成

インストールプログラム:

wheel

インストールディレクトリ:

/usr/lib/python3.10/site-packages/wheel, /usr/lib/python3.10/site-packages/
wheel-0.37.1-py3.10.egg-info

概略説明

wheel wheel パッケージの解凍、圧縮、変換を行うユーティリティーです。

8.52. Ninja-1.11.0

このパッケージは、処理速度を重視した軽量なビルドシステムを提供します。

概算ビルド時間:	0.6 SBU
必要ディスク容量:	79 MB

8.52.1. Ninja のインストール

ninja は同時に最大数のプロセスにより処理実行します。 そのプロセス数はデフォルトでは、システムのコア数に 2 を加えたものとなります。 このことが CPU をオーバーヒートさせたり、out of memory を引き起こす場合があります。

コマンドラインから実行する場合には -jN パラメーターを使って、並行プロセスの数を制御することもできます。 ただ ninja の実行を組み込んでいるパッケージの場合は -j パラメーターを与えることができません。

以降に示す 任意 の手順を用いると、並行プロセス数を環境変数 NINJAJOBS から制御できるようになります。 たとえば 以下のように設定します。

```
export NINJAJOBS=4
```

こうすると ninja の並行プロセスを 4 つに制限できます。

必要な場合は、環境変数 NINJAJOBS を利用するため以下を実行します。

```
sed -i '/int Guess/a \
int    j = 0; \
char* jobs = getenv( "NINJAJOBS" ); \
if ( jobs != NULL ) j = atoi( jobs ); \
if ( j > 0 ) return j; \
' src/ninja.cc
```

以下を実行して ninja をビルドします。

```
python3 configure.py --bootstrap
```

build オプションの意味

--bootstrap

本パラメーターは、この時点でのシステムに対して ninja 自身を再ビルドすることを指示します。

ビルド結果をテストする場合は、以下を実行します。

```
./ninja ninja_test
./ninja_test --gtest_filter=-SubprocessTest.SetWithLots
```

パッケージをインストールします。

```
install -vM755 ninja /usr/bin/
install -vDm644 misc/bash-completion /usr/share/bash-completion/completions/ninja
install -vDm644 misc/zsh-completion /usr/share/zsh/site-functions/_ninja
```

8.52.2. Ninja の構成

インストールプログラム: ninja

概略説明

ninja Ninja ビルドシステム。

8.53. Meson-0.63.1

Meson はオープンソースによるビルドシステムです。非常に高速であり、できるかぎりユーザーフレンドリーであることを意識しています。

概算ビルド時間:	0.1 SBU 以下
必要ディスク容量:	38 MB

8.53.1. Meson のインストール

Meson をビルドするには、以下のコマンドを実行します。

```
pip3 wheel -w dist --no-build-isolation --no-deps $PWD
```

このテストスイートには、LFS の範囲外としているパッケージがいくつか必要です。

パッケージをインストールします。

```
pip3 install --no-index --find-links dist meson
install -vDm644 data/shell-completions/bash/meson /usr/share/bash-completion/completions/meson
install -vDm644 data/shell-completions/zsh/_meson /usr/share/zsh/site-functions/_meson
```

install パラメーターの意味

-w dist

生成された wheel を dist ディレクトリに配置します。

--find-links dist

dist ディレクトリから wheel をインストールします。

8.53.2. Meson の構成

インストールプログラム:

meson

インストールディレクトリ:

/usr/lib/python3.10/site-packages/meson-0.63.1.dist-info, /usr/lib/python3.10/site-packages/mesonbuild

概略説明

meson 生産性の高いビルドシステム。

8.54. Coreutils-9.1

Coreutils パッケージはシステムの基本的な特性を表示したり設定したりするためのユーティリティを提供します。

概算ビルド時間: 2.8 SBU
必要ディスク容量: 159 MB

8.54.1. Coreutils のインストール

POSIX によると Coreutils により生成されるプログラムは、マルチバイトロケールであっても文字データを正しく取り扱うことを求めています。以下のパッチは標準に準拠することと、国際化処理に関連するバグを解消することを行います。

```
patch -Npl -i ../coreutils-9.1-i18n-1.patch
```



注記

このパッチには以前は多くのバグがありました。新たなバグを見つかったら Coreutils の開発者に報告する前に、このパッチの適用前でもバグが再現するかどうかを確認してください。

Coreutils をコンパイルするための準備をします。

```
autoreconf -fiv
FORCE_UNSAFE_CONFIGURE=1 ./configure \
    --prefix=/usr \
    --enable-no-install-program=kill,uptime
```

configure オプションの意味

autoreconf

国際化対応を行うパッチによって、当パッケージのビルドシステムが修正されます。したがって設定ファイル類を再生成する必要があります。

FORCE_UNSAFE_CONFIGURE=1

この環境変数は root ユーザーによりパッケージをビルドできるようにします。

--enable-no-install-program=kill,uptime

指定のプログラムは、後に他のパッケージからインストールするため Coreutils からはインストールしないことを指示します。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

テストスイートを実行しない場合は「パッケージをインストールします。」と書かれたところまで読み飛ばしてください。

ここからテストスイートを実施していきます。まずは root ユーザーに対するテストを実行します。

```
make NON_ROOT_USERNAME=tester check-root
```

ここからは tester ユーザー向けのテストを実行します。ただしテストの中には、複数のグループに属するユーザーを必要とするものがあります。そのようなテストが確実に実施されるように、一時的なグループを作り tester ユーザーがそれに属するようにします。

```
echo "dummy:x:102:tester" >> /etc/group
```

特定のファイルのパーミッションを変更して root ユーザー以外でもコンパイルとテストができるようにします。

```
chown -Rv tester .
```

テストを実行します。

```
su tester -c "PATH=$PATH make RUN_EXPENSIVE_TESTS=yes check"
```

sort-NaN-infloop というテストは GCC-12 を用いると失敗します。

一時的に作成したグループを削除します。

```
sed -i '/dummy/d' /etc/group
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

FHS が規定しているディレクトリにプログラムを移します。

```
mv -v /usr/bin/chroot /usr/sbin
mv -v /usr/share/man/man1/chroot.1 /usr/share/man/man8/chroot.8
sed -i 's/"1"/"8"/' /usr/share/man/man8/chroot.8
```

8.54.2. Coreutils の構成

インストールプログラム:

[, b2sum, base32, base64, basename, basenc, cat, chcon, chgrp, chmod, chown, chroot, cksum, comm, cp, csplit, cut, date, dd, df, dir, dircolors, dirname, du, echo, env, expand, expr, factor, false, fmt, fold, groups, head, hostid, id, install, join, link, ln, logname, ls, md5sum, mkdir, mkfifo, mknod, mktemp, mv, nice, nl, nohup, nproc, numfmt, od, paste, pathchk, pinky, pr, printenv, printf, ptx, pwd, readlink, realpath, rm, rmdir, runcon, seq, shasum, sha224sum, sha256sum, sha384sum, sha512sum, shred, shuf, sleep, sort, split, stat, stdbuf, stty, sum, sync, tac, tail, tee, test, timeout, touch, tr, true, truncate, tsort, tty, uname, unexpand, uniq, unlink, users, vdir, wc, who, whoami, yes

libstdbuf.so (/usr/libexec/coreutils ディレクトリ内)

インストールライブラリ:

/usr/libexec/coreutils

インストールディレクトリ:

概略説明

[実際のコマンドは /usr/bin/[であり、これは test コマンドへのシンボリックリンクです。
base32	base32 規格 (RFC 4648) に従ってデータのエンコード、デコードを行います。
base64	base64 規格 (RFC 3548) に従ってデータのエンコード、デコードを行います。
b2sum	Prints or checks BLAKE2 (512-bit) checksums
basename	ファイル名からパス部分と指定されたサフィックスを取り除きます。
basenc	各種アルゴリズムを利用したデータのエンコード、出コードを行います。
cat	複数ファイルを連結して標準出力へ出力します。
chcon	ファイルやディレクトリに対してセキュリティコンテキスト (security context) を変更します。
chgrp	ファイルやディレクトリのグループ所有権を変更します。
chmod	指定されたファイルのパーミッションを指定されたモードに変更します。 モードは、変更内容を表す文字表現か8進数表現を用いることができます。
chown	ファイルやディレクトリの所有者またはグループを変更します。
chroot	指定したディレクトリを / ディレクトリとみなしてコマンドを実行します。
cksum	指定された複数ファイルについて、CRC (Cyclic Redundancy Check; 巡回冗長検査) チェックサム値とバイト数を表示します。
comm	ソート済の二つのファイルを比較して、一致しない固有の行と一致する行を三つのカラムに分けて出力します。
cp	ファイルをコピーします。
csplit	指定されたファイルを複数の新しいファイルに分割します。 分割は指定されたパターンか行数により行います。 そして分割後のファイルにはバイト数を出力します。
cut	指定されたフィールド位置や文字位置によってテキスト行を部分的に取り出します。
date	指定された書式により現在時刻を表示します。 またはシステム日付を設定します。
dd	指定されたブロックサイズとブロック数によりファイルをコピーします。 変換処理を行うことができます。
df	マウントされているすべてのファイルシステムに対して、ディスクの空き容量 (使用量) を表示します。 あるいは指定されたファイルを含んだファイルシステムについてのみの情報を表示します。
dir	指定されたディレクトリの内容を一覧表示します。 (ls コマンドに同じ。)

dircolors	環境変数 LS_COLOR にセットするべきコマンドを出力します。 これは ls がカラー設定を行う際に利用します。
dirname	ファイル名からディレクトリ名以外のサフィックスを取り除きます。
du	カレントディレクトリ、指定ディレクトリ（サブディレクトリを含む）、指定された個々のファイルについて、それらが利用しているディスク使用量を表示します。
echo	指定された文字列を表示します。
env	環境設定を変更してコマンドを実行します。
expand	タブ文字を空白文字に変換します。
expr	表現式を評価します。
factor	指定された整数値すべてに対する素因数 (prime factor) を表示します。
false	何も行わず処理に失敗します。 これは常に失敗を意味するステータスコードを返して終了します。
fmt	指定されたファイル内にて段落を整形します。
fold	指定されたファイル内の行を折り返します。
groups	ユーザーの所属グループを表示します。
head	指定されたファイルの先頭10行（あるいは指定された行数）を表示します。
hostid	ホスト識別番号（16進数）を表示します。
id	現在のユーザーあるいは指定されたユーザーについて、有効なユーザーID、グループID、所属グループを表示します。
install	ファイルコピーを行います。その際にパーミッションモードを設定し、可能なら所有者やグループも設定します。
join	2つのファイル内にて共通項を持つ行を結合します。
link	指定された名称によりファイルへのハードリンクを生成します。
ln	ファイルに対するハードリンク、あるいはソフトリンク（シンボリックリンク）を生成します。
logname	現在のユーザーのログイン名を表示します。
ls	指定されたディレクトリ内容を一覧表示します。
md5sum	MD5 (Message Digest 5) チェックサム値を表示、あるいはチェックします。
mkdir	指定された名前のディレクトリを生成します。
mkfifo	指定された名前の FIFO (First-In, First-Out) を生成します。 これは UNIX の用語で "名前付きパイプ (named pipe)" とも呼ばれます。
mknod	指定された名前のデバイスノードを生成します。 デバイスノードはキャラクター型特殊ファイル (character special file)、ブロック特殊ファイル (block special file)、FIFO です。
mktemp	安全に一時ファイルを生成します。 これはスクリプト内にて利用されます。
mv	ファイルあるいはディレクトリを移動、名称変更します。
nice	スケジューリング優先度を変更してプログラムを実行します。
nl	指定されたファイル内の行を数えます。
nohup	ハングアップに関係なくコマンドを実行します。 その出力はログファイルにリダイレクトされます。
nproc	プロセスが利用可能なプロセスユニット (processing unit) の数を表示します。
numfmt	記述された文字列と数値を互いに変換します。
od	ファイル内容を 8進数または他の書式でダンプします。
paste	指定された複数ファイルを結合します。 その際には各行を順に並べて結合し、その間をタブ文字で区切ります。
pathchk	ファイル名が有効で移植可能であるかをチェックします。
pinky	軽量な finger クライアント。 指定されたユーザーに関する情報を表示します。
pr	ファイルを印刷するために、ページ番号を振りカラム整形を行います。
printenv	環境変数の内容を表示します。
printf	指定された引数を指定された書式で表示します。 C 言語の printf 関数に似ています。
ptx	指定されたファイル内のキーワードに対して整列済インデックス (permuted index) を生成します。
pwd	現在の作業ディレクトリ名を表示します。

readlink	指定されたシンボリックリンクの対象を表示します。
realpath	解析されたパスを表示します。
rm	ファイルまたはディレクトリを削除します。
rmdir	ディレクトリが空である時にそのディレクトリを削除します。
runcon	指定されたセキュリティコンテキストでコマンドを実行します。
seq	指定された範囲と増分に従って数値の並びを表示します。
shalsum	160 ビットの SHA1 (Secure Hash Algorithm 1) チェックサム値を表示またはチェックします。
sha224sum	224 ビットの SHA1 チェックサム値を表示またはチェックします。
sha256sum	256 ビットの SHA1 チェックサム値を表示またはチェックします。
sha384sum	384 ビットの SHA1 チェックサム値を表示またはチェックします。
sha512sum	512 ビットの SHA1 チェックサム値を表示またはチェックします。
shred	指定されたファイルに対して、複雑なパターンデータを繰り返し上書きすることで、データ復旧を困難なものにします。
shuf	テキスト行を入れ替えます。
sleep	指定時間だけ停止します。
sort	指定されたファイル内の行をソートします。
split	指定されたファイルを、バイト数または行数を指定して分割します。
stat	ファイルやファイルシステムのステータスを表示します。
stdbuf	標準ストリームのバッファリング操作を変更してコマンド実行します。
stty	端末回線の設定や表示を行います。
sum	指定されたファイルのチェックサムやブロック数を表示します。
sync	ファイルシステムのバッファを消去します。 変更のあったブロックは強制的にディスクに書き出し、スーパーブロック (super block) を更新します。
tac	指定されたファイルを逆順にして連結します。
tail	指定されたファイルの最終の10行 (あるいは指定された行数) を表示します。
tee	標準入力を読み込んで、標準出力と指定ファイルの双方に出力します。
test	ファイルタイプの比較やチェックを行います。
timeout	指定時間内だけコマンドを実行します。
touch	ファイルのタイムスタンプを更新します。 そのファイルに対するアクセス時刻、更新時刻を現在時刻にするものです。 そのファイルが存在しなかった場合はゼロバイトのファイルを新規生成します。
tr	標準入力から読み込んだ文字列に対して、変換、圧縮、削除を行います。
true	何も行わず処理に成功します。これは常に成功を意味するステータスコードを返して終了します。
truncate	ファイルを指定されたサイズに縮小または拡張します。
tsort	トポロジカルソート (topological sort) を行います。 指定されたファイルの部分的な順序に従って並び替えリストを出力します。
tty	標準入力に接続された端末のファイル名を表示します。
uname	システム情報を表示します。
unexpand	空白文字をタブ文字に変換します。
uniq	連続する同一行を一行のみ残して削除します。
unlink	指定されたファイルを削除します。
users	現在ログインしているユーザー名を表示します。
vdir	ls -l と同じ。
wc	指定されたファイルの行数、単語数、バイト数を表示します。 複数ファイルが指定された場合はこれに加えて合計も出力します。
who	誰がログインしているかを表示します。
whoami	現在有効なユーザーIDに関連づいているユーザー名を表示します。
yes	処理が停止されるまで繰り返して「y」または指定文字を出力します。
libstdbuf	stdbuf が利用するライブラリ。

8.55. Check-0.15.2

Check は C 言語に対してのユニットテストのフレームワークです。

概算ビルド時間:	0.1 SBU (テスト込みで約 3.6 SBU)
必要ディスク容量:	12 MB

8.55.1. Check のインストール

Check をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr --disable-static
```

パッケージをビルドします。

```
make
```

コンパイルが終了しました。 テストスイートを実行する場合は、以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make docdir=/usr/share/doc/check-0.15.2 install
```

8.55.2. Check の構成

インストールプログラム:	checkmk
インストールライブラリ:	libcheck.so

概略説明

checkmk	Check ユニットテストフレームワークにて利用される、C 言語ユニットテストを生成するための Awk スクリプト。
libcheck.so	テストプログラムから Check を呼び出すための関数を提供します。

8.56. Diffutils-3.8

Diffutils パッケージはファイルやディレクトリの差分を表示するプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.6 SBU
必要ディスク容量: 35 MB

8.56.1. Diffutils のインストール

Diffutils をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

ビルド結果をテストするなら以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

8.56.2. Diffutils の構成

インストールプログラム: cmp, diff, diff3, sdiff

概略説明

cmp 二つのファイルを比較して、どこが異なるか、あるいは何バイト異なるかを示します。

diff 二つのファイルまたは二つのディレクトリを比較して、ファイル内のどの行に違いがあるかを示します。

diff3 三つのファイルの各行を比較します。

sdiff 二つのファイルを結合して対話的に結果を出力します。

8.57. Gawk-5.1.1

Gawk パッケージはテキストファイルを操作するプログラムを提供します。

概算ビルド時間:	0.4 SBU
必要ディスク容量:	44 MB

8.57.1. Gawk のインストール

まずは不要なファイルがインストールされないようにします。

```
sed -i 's/extras//' Makefile.in
```

Gawk をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストするには以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

必要ならドキュメントをインストールします。

```
mkdir -pv /usr/share/doc/gawk-5.1.1
cp -v doc/{awkforai.txt,*.{eps,pdf,jpg}} /usr/share/doc/gawk-5.1.1
```

8.57.2. Gawk の構成

インストールプログラム:	awk (gawk へのリンク), gawk, awk-5.1.1
インストールライブラリ:	filefuncs.so, fnmatch.so, fork.so, inplace.so, intdiv.so, ordchr.so, readdir.so, readfile.so, revoutput.so, revtoway.so, rwarray.so, time.so (すべて /usr/lib/gawk ディレクトリ内)
インストールディレクトリ:	/usr/lib/gawk, /usr/libexec/awk, /usr/share/awk, /usr/share/doc/gawk-5.1.1

概略説明

awk	gawk へのリンク。
gawk	テキストファイルを操作するプログラム。これは awk の GNU インプリメンテーションです。
gawk-5.1.1	gawk へのハードリンク。

8.58. Findutils-4.9.0

Findutils パッケージはファイル検索を行うプログラムを提供します。このプログラムはディレクトリツリーを再帰的に検索したり、データベースの生成、保守、検索を行います。（データベースによる検索は再帰的検索に比べて処理速度は速いですが、データベースが最新のものに更新されていない場合は信頼できない結果となります。）

概算ビルド時間: 0.8 SBU
必要ディスク容量: 52 MB

8.58.1. Findutils のインストール

Findutils をコンパイルするための準備をします。

```
case $(uname -m) in
    i?86)   TIME_T_32_BIT_OK=yes ./configure --prefix=/usr --localstatedir=/var/lib/locate ;;
    x86_64) ./configure --prefix=/usr --localstatedir=/var/lib/locate ;;
esac
```

configure オプションの意味

TIME_32_BIT_OK=yes

この設定は 32 ビットシステム上でビルドする際に必要となります。

--localstatedir

locate データベースの場所を FHS コンプライアンスに準拠するディレクトリ /var/lib/locate に変更します。

パッケージをコンパイルします。

make

コンパイル結果をテストするなら以下を実行します。

```
chown -Rv tester .
su tester -c "PATH=$PATH make check"
```

パッケージをインストールします。

make install

8.58.2. Findutils の構成

インストールプログラム: find, locate, updatedb, xargs
インストールディレクトリ: /var/lib/locate

概略説明

find	指定された条件に合致するファイルを、指定されたディレクトリツリー内から検索します。
locate	ファイル名データベースを検索して、指定された文字列を含むもの、または検索パターンに合致するものを表示します。
updatedb	locate データベースを更新します。これはすべてのファイルシステムを検索します。（検索非対象とする設定がない限りは、マウントされているすべてのファイルシステムを対象とします。）そして検索されたファイル名をデータベースに追加します。
xargs	指定されたコマンドに対してファイル名の一覧を受け渡して実行します。

8.59. Groff-1.22.4

Groff パッケージはテキストを処理して整形するプログラムを提供します。

概算ビルド時間:	0.5 SBU
必要ディスク容量:	88 MB

8.59.1. Groff のインストール

Groff はデフォルトの用紙サイズを設定する環境変数 `PAGE` を参照します。米国のユーザーであれば `PAGE=letter` と設定するのが適当です。その他のユーザーなら `PAGE=A4` とするのが良いかもしれません。このデフォルト用紙サイズはコンパイルにあたって設定されます。「A4」なり「letter」なりの値は `/etc/papersize` ファイルにて設定することも可能です。

Groff をコンパイルするための準備をします。

```
PAGE=<paper_size> ./configure --prefix=/usr
```

このパッケージでは並行ビルドはサポートされていません。パッケージをコンパイルします。

```
make -j1
```

このパッケージにテストスイートはありません。

パッケージをインストールします。

```
make install
```

8.59.2. Groff の構成

インストールプログラム:	<code>addftinfo</code> , <code>afmtodit</code> , <code>chem</code> , <code>eqn</code> , <code>eqn2graph</code> , <code>gdiffmk</code> , <code>glilypond</code> , <code>gperl</code> , <code>gpinyin</code> , <code>grap2graph</code> , <code>grn</code> , <code>grodvi</code> , <code>groffer</code> , <code>grog</code> , <code>grolbp</code> , <code>grolj4</code> , <code>gropdf</code> , <code>grops</code> , <code>grotty</code> , <code>hpftodit</code> , <code>indxbib</code> , <code>lkbib</code> , <code>lookbib</code> , <code>mmroff</code> , <code>neqn</code> , <code>nroff</code> , <code>pdfmom</code> , <code>pdfroff</code> , <code>pfbtops</code> , <code>pic</code> , <code>pic2graph</code> , <code>post-grohtml</code> , <code>preconv</code> , <code>pre-grohtml</code> , <code>refer</code> , <code>roff2dvi</code> , <code>roff2html</code> , <code>roff2pdf</code> , <code>roff2ps</code> , <code>roff2text</code> , <code>roff2x</code> , <code>soelim</code> , <code>tbl</code> , <code>tfmtodit</code> , <code>troff</code>
インストールディレクトリ:	<code>/usr/lib/groff</code> , <code>/usr/share/doc/groff-1.22.4</code> , <code>/usr/share/groff</code>

概略説明

<code>addftinfo</code>	<code>troff</code> のフォントファイルを読み込んで <code>groff</code> システムが利用する付加的なフォントメトリック情報を追加します。
<code>afmtodit</code>	<code>groff</code> と <code>grops</code> が利用するフォントファイルを生成します。
<code>chem</code>	化学構造図 (chemical structure diagrams) を生成するための <code>Groff</code> プロセッサー。
<code>eqn</code>	<code>troff</code> の入力ファイル内に埋め込まれている記述式をコンパイルして <code>troff</code> が解釈できるコマンドとして変換します。
<code>eqn2graph</code>	<code>troff</code> の EQN (数式) を、刈り込んだ (crop した) イメージに変換します。
<code>gdiffmk</code>	<code>groff</code> 、 <code>nroff</code> 、 <code>troff</code> の入力ファイルを比較して、その差異を変更マークとして出力します。
<code>glilypond</code>	<code>lilypond</code> 言語で書かれたシートミュージック (sheet music) を <code>groff</code> 言語に変換します。
<code>gperl</code>	<code>groff</code> プリプロセッサーであり <code>groff</code> ファイルへの perl コード追加を行います。
<code>gpinyin</code>	<code>groff</code> プリプロセッサーであり <code>groff</code> ファイルへの中国語発音 Pinyin 追加を行います。
<code>grap2graph</code>	<code>grap</code> ダイアグラムを、刈り込んだ (crop した) ビットマップイメージに変換します。
<code>grn</code>	<code>gremlin</code> 図を表すファイルを処理するための <code>groff</code> プリプロセッサー。
<code>grodvi</code>	TeX の dvi フォーマットを生成するための <code>groff</code> ドライバープログラム。
<code>groff</code>	<code>groff</code> 文書整形システムのためのフロントエンド。通常は <code>troff</code> プログラムを起動し、指定されたデバイスに適合したポストプロセッサーを呼び出します。
<code>groffer</code>	<code>groff</code> ファイルや man ページを X 上や TTY 端末上に表示します。
<code>grog</code>	入力ファイルを読み込んで、印刷時には <code>groff</code> コマンドオプションのどれが必要かを推定します。コマンドオプションは <code>-e</code> 、 <code>-man</code> 、 <code>-me</code> 、 <code>-mm</code> 、 <code>-ms</code> 、 <code>-p</code> 、 <code>-s</code> のいずれかです。そしてそのオプションを含んだ <code>groff</code> コマンドを表示します。

grolbp	Canon CAPSL プリンター (LBP-4 または LBP-8 シリーズのレーザープリンター) に対する groff ドライバープログラム。
grolj4	HP LaserJet 4 プリンターに対しての PCL5 フォーマットを出力する groff ドライバープログラム。
gropdf	GNU troff の出力を PDF に変換します。
grops	GNU troff の出力を PostScript に変換します。
grotty	GNU troff の出力を、タイプライター風のデバイスに適した形式に変換します。
hpftodit	HP のタグ付けが行われたフォントメトリックファイルから groff -Tlj4 コマンドにて利用されるフォントファイルを生成します。
indxbib	指定されたファイル内に示される参考文献データベース (bibliographic database) に対しての逆引きインデックス (inverted index) を生成します。これは refer、lookbib、lkbib といったコマンドが利用します。
lkbib	指定されたキーを用いて参考文献データベースを検索し、合致したすべての情報を表示します。
lookbib	(標準入力が端末であれば) 標準エラー出力にプロンプトを表示して、標準入力から複数のキーワードを含んだ一行を読み込みます。そして指定されたファイルにて示される参考文献データベース内に、そのキーワードが含まれるかどうかを検索します。キーワードが含まれるものと標準出力に出力します。入力がなくなるまでこれを繰り返します。
mmroff	groff 用の単純なプリプロセッサー。
neqn	数式を ASCII (American Standard Code for Information Interchange) 形式で出力します。
nroff	groff を利用して nroff コマンドをエミュレートするスクリプト。
pdfmom	groff 関連ラッパー。mom マクロによるファイルから PDF を生成します。
pdffroff	groff を利用して pdf 文書ファイルを生成します。
pfbtops	.pfb フォーマットの PostScript フォントを ASCII フォーマットに変換します。
pic	troff または TeX の入力ファイル内に埋め込まれた図の記述を、troff または TeX が処理できるコマンドの形式に変換します。
pic2graph	PIC ダイアグラムを、刈り込んだ (crop した) イメージに変換します。
post-grohtml	GNU troff の出力を HTML に変換します。
preconv	入力ファイルのエンコーディングを GNU troff が取り扱うものに変換します。
pre-grohtml	GNU troff の出力を HTML に変換します。
refer	ファイル内容を読み込んで、そのコピーを標準出力へ出力します。ただし引用文を表す .[と .] で囲まれた行、および引用文をどのように処理するかを示したコマンドを意味する .R1 と .R2 で囲まれた行は、コピーの対象としません。
roff2dvi	roff ファイルを DVI フォーマットに変換します。
roff2html	roff ファイルを HTML フォーマットに変換します。
roff2pdf	roff ファイルを PDF フォーマットに変換します。
roff2ps	roff ファイルを ps ファイルに変換します。
roff2text	roff ファイルをテキストファイルに変換します。
roff2x	roff ファイルを他のフォーマットに変換します。
soelim	入力ファイルを読み込んで .so ファイル の形式で記述されている行を、記述されている ファイルだけに置き換えます。
tbl	troff 入力ファイル内に埋め込まれた表の記述を troff が処理できるコマンドの形式に変換します。
tfmtodit	コマンド groff -Tdvi を使ってフォントファイルを生成します。
troff	Unix の troff コマンドと高い互換性を持ちます。通常は groff コマンドを用いて本コマンドが起動されます。groff コマンドは、プリプロセッサー、ポストプロセッサーを、適切な順で適切なオプションをつけて起動します。

8.60. GRUB-2.06

GRUB パッケージは GRand Unified Bootloader を提供します。

概算ビルト時間: 0.7 SBU
必要ディスク容量: 159 MB

8.60.1. GRUB のインストール



注記

システムが UEFI をサポートしていて、これを使って LFS を起動しようとする場合は、LFS における本パッケージは省略することができます。その場合は本章の終わりに、BLFS ページ に従って UEFI 対応の GRUB (およびその依存パッケージ) をインストールしてください。

GRUB をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr \
            --sysconfdir=/etc \
            --disable-efiemu \
            --disable-werror
```

configure オプションの意味

--disable-werror
本オプションは、最新の flex によって警告が出力されても、ビルドを成功させるために指定します。
--disable-efiemu
このオプションは LFS にとって不要な機能やテストプログラムをビルドしないようにします。
パッケージをコンパイルします。

make

本パッケージのテストスイートの利用はお勧めできません。 テストのほとんどが、限定されている今の LFS 環境内では利用できないパッケージに依存しています。 それでもテストを行うのであれば、make check を実行します。

パッケージをインストールします。

```
make install  
mv -v /etc/bash_completion.d/grub /usr/share/bash-completion/completions
```

GRUB を使ってシステムのブート起動設定を行う方法については「[GRUB を用いたブートプロセスの設定](#)」で説明しています。

8.60.2. GRUB の構成

インストールプログラム:

grub-bios-setup, grub-editenv, grub-file, grub-fstest, grub-glue-efi, grub-install, grub-kbdcomp, grub-macbless, grub-menulst2cfg, grub-mkconfig, grub-mkimage, grub-mklayout, grub-mknetdir, grub-mkpasswd-pbkdf2, grub-mkrelabelpath, grub-mkrescue, grub-mkstandalone, grub-of pathname, grub-probe, grub-reboot, grub-render-label, grub-script-check, grub-set-default, grub-sparc64-setup, grub-syslinux2cfg

インストールディレクトリ:

`/usr/lib/grub, /etc/grub.d, /usr/share/grub, /boot/grub` (grub-install が初めて起動される時)

概略說明

grub-bios-setup

`grub-install` に対するヘルパープログラム。

grub-editenv

環境ブロック (environment block) を編集するツール。

grub-file

FILE が指定されたタイプであるかどうかをチェックします。

grub-fstest

ファイルシステムドライバーをデバッグするツール。

grub-glue-ef

32 ビットおよび 64 ビットの実行バイナリを App

grub-kbdcomp	xkb レイアウトを GRUB が認識できる他の書式に変換するスクリプト。
grub-macbless	HFS または HFS+ ファイルに対する Mac 風の bless
grub-menulst2cfg	GRUB Legacy の menu.lst を GRUB 2 にて利用される grub.cfg に変換します。
grub-mkconfig	GRUB の設定ファイルを生成します。
grub-mkimage	GRUB のブートイメージ (bootable image) を生成します。
grub-mklayout	GRUB のキーボードレイアウトファイルを生成します。
grub-mknetdir	GRUB のネットブートディレクトリを生成します。
grub-mkpsswd-pbkdf2	ブートメニューにて利用する、PBKDF2 により暗号化されたパスワードを生成します。
grub-mkrelopth	システムのパスをルートからの相対パスとします。
grub-mkrescue	フロッピーディスクや CDROM/DVD 用の GRUB のブートイメージを生成します。
grub-mkstandalone	スタンドアロンイメージを生成します。
grub-ofpathname	GRUB デバイスのパスを出力するヘルパープログラム。
grub-probe	指定されたパスやデバイスに対するデバイス情報を検証 (probe) します。
grub-reboot	デフォルトのブートメニューを設定します。 これは次にブートした時だけ有効なものです。
grub-render-label	Apple Mac に対して Apple .disk_label を提供します。
grub-script-check	GRUB の設定スクリプトにおける文法をチェックします。
grub-set-default	デフォルトのブートメニューを設定します。
grub-sparc64-setup	grub-setup に対するヘルパープログラム。
grub-syslinux2cfg	syslinux の設定ファイルを grub.cfg フォーマットに変換します。

8.61. Gzip-1.12

Gzip パッケージはファイルの圧縮、伸長（解凍）を行うプログラムを提供します。

概算ビルド時間:	0.3 SBU
必要ディスク容量:	21 MB

8.61.1. Gzip のインストール

Gzip をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストするには以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

8.61.2. Gzip の構成

インストールプログラム: gunzip, gzexe, gzip, uncompress (gunzipへのハードリンク), zcat, zcmp, zdiff, zegrep, zfgrep, zforce, zgrep, zless, zmore, znew

概略説明

gunzip	gzip により圧縮されたファイルを解凍します。
gzexe	自動解凍形式の実行ファイルを生成します。
gzip	Lempel-Ziv (LZ77) 方式により指定されたファイルを圧縮します。
uncompress	圧縮されたファイルを解凍します。
zcat	gzip により圧縮されたファイルを解凍して標準出力へ出力します。
zcmp	gzip により圧縮されたファイルに対して cmp を実行します。
zdiff	gzip により圧縮されたファイルに対して diff を実行します。
zegrep	gzip により圧縮されたファイルに対して egrep を実行します。
zfgrep	gzip により圧縮されたファイルに対して fgrep を実行します。
zforce	指定されたファイルが gzip により圧縮されている場合に、強制的に拡張子 .gz を付与します。 こうすることで gzip は再度の圧縮を行わないようになります。 これはファイル転送によってファイル名が切り詰められてしまった場合に活用することができます。
zgrep	gzip により圧縮されたファイルに対して grep を実行します。
zless	gzip により圧縮されたファイルに対して less を実行します。
zmore	gzip により圧縮されたファイルに対して more を実行します。
znew	compress フォーマットの圧縮ファイルを gzip フォーマットのファイルとして再圧縮します。 つまり .z から .gz への変換を行います。

8.62. IPRoute2-5.19.0

IPRoute2 パッケージは IPv4 ベースの基本的または応用的ネットワーク制御を行うプログラムを提供します。

概算ビルド時間:	0.2 SBU
必要ディスク容量:	16 MB

8.62.1. IPRoute2 のインストール

本パッケージにて提供している arpd プログラムは LFS では取り扱わない Berkeley DB に依存しています。したがって arpd プログラムはインストールしません。ただし arpd プログラムに対応するディレクトリや man ページはインストールされてしまいます。これをインストールしないように、以下のコマンドを実行します。 arpd プログラムを必要とする場合は BLFS ブックの <https://www.linuxfromscratch.org/blfs/view/stable-systemd/server/db.html#db> に示される Berkeley DB の構築手順に従ってください。

```
sed -i /ARPD/d Makefile
rm -fv man/man8/arpd.8
```

パッケージをコンパイルします。

```
make NETNS_RUN_DIR=/run/netns
```

本パッケージには有効なテストスイートはありません。

パッケージをインストールします。

```
make SBINDIR=/usr/sbin install
```

必要な場合はドキュメントをインストールします。

```
mkdir -pv /usr/share/doc/iproute2-5.19.0
cp -v COPYING README* /usr/share/doc/iproute2-5.19.0
```

8.62.2. IPRoute2 の構成

インストールプログラム:	bridge, ctstat (lnstat へのリンク), genl, ifcfg, ifstat, ip, lnstat, nstat, routef, routel, rtacct, rtmon, rtpr, rtstat (lnstat へのリンク), ss, tc
インストールディレクトリ:	/etc/iproute2, /usr/lib/tc, /usr/share/doc/iproute2-5.19.0

概略説明

bridge ネットワークブリッジを設定します。
 ctstat 接続ステータスの表示ユーティリティ。
 genl 汎用的な netlink ユーティリティフロントエンド。
 ifcfg ip コマンドに対するシェルスクリプトラッパー。 [http://www\(skbuff.net/putils/](http://www(skbuff.net/putils/) にて提供されている
iputils パッケージの arping プログラムと rdisk プログラムを利用します。
 ifstat インターフェースの統計情報を表示します。 インターフェースによって送受信されたパケット量が示されます。
 ip 主となる実行モジュールで、複数の機能性を持ちます。
 ip link <デバイス名> はデバイスのステータスを参照し、またステータスの変更を行います。
 ip addr はアドレスとその属性を参照し、新しいアドレスの追加、古いアドレスの削除を行います。
 ip neighbor は隣接ルーター (neighbor) の割り当てや属性を参照し、隣接ルーターの項目追加や古いものの削除を行います。
 ip rule はルーティングポリシー (routing policy) を参照し、変更を行います。
 ip route はルーティングテーブル (routing table) を参照し、ルーティングルール (routing table rule) を変更します。
 ip tunnel は IP トンネル (IP tunnel) やその属性を参照し、変更を行います。
 ip maddr はマルチキャストアドレス (multicast address) やその属性を参照し、変更を行います。
 ip mroute はマルチキャストルーティング (multicast routing) の設定、変更、削除を行います。
 ip monitor はデバイスの状態、アドレス、ルートを継続的に監視します。
 lnstat Linux のネットワーク統計情報を提供します。 これはかつての rtstat プログラムを汎用的に機能充実を図ったプログラムです。

nstat	ネットワーク統計情報を表示します。
routef	ip route のコンポーネント。 これはルーティングテーブルをクリアします。
routel	ip route のコンポーネント。 これはルーティングテーブルの一覧を表示します。
rtacct	/proc/net/rt_acct の内容を表示します。
rtmon	ルート監視ユーティリティー。
rtpr	ip -o コマンドにより出力される内容を読みやすい形に戻します。
rtstat	ルートステータスの表示ユーティリティー。
ss	netstat コマンドと同じ。 アクティブな接続を表示します。
tc	トラフィック制御プログラム (Traffic Controlling Executable)。 これは QoS (Quality Of Service) と COS (Class Of Service) を実装するプログラムです。 tc qdisc はキューイング規則 (queueing discipline) の設定を行います。 tc class はキューイング規則スケジューリング (queueing discipline scheduling) に基づくクラスの設定を行います。 tc estimator はネットワークフローを見積もります。 tc filter は、QoS/COS パケットのフィルタリング設定を行います。 tc policy は、QoS/COS ポリシーの設定を行います。

8.63. Kbd-2.5.1

Kbd パッケージは、キーテーブル (key-table) ファイル、コンソールフォント、キーボードユーティリティを提供します。

概算ビルト時間: 0.1 SBU
必要ディスク容量: 35 MB

8.63.1. Kbd のインストール

バックスペース (backspace) キーとデリート (delete) キーは Kbd パッケージのキーマップ内では一貫した定義にはなっていません。以下のパッチは i386 用のキーマップについてその問題を解消します。

```
patch -Np1 -i ../kbd-2.5.1-backspace-1.patch
```

パッチを当てればバックスペースキーの文字コードは 127 となり、デリートキーはよく知られたエスケープコードを生成することになります。

不要なプログラム resizecons とその man ページを削除します。（今はもう存在しない svgalib がビデオモードファイルを提供するために利用していたものであり、普通は setfont コマンドがコンソールサイズを適切に設定します。）

```
sed -i '/RESIZECONS_PROGS=/s/yes/no/' configure
sed -i 's/resizecons.8 //' docs/man/man8/Makefile.in
```

Kbd をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr --disable-vlock
```

configure オプションの意味

--disable-vlock

このオプションは vlock ユーティリティーをビルトしないようにします。そのユーティリティーは PAM ライブラリが必要ですが、chroot 環境では利用することができません。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

ビルド結果をテストする場合は以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```



注記

ベラルーシ語のような言語において Kbd パッケージは正しいキーマップを提供せず、ISO-8859-5 エンコーディングで CP1251 キーマップであるものとして扱われます。そのような言語ユーザーは個別に正しいキーマップをダウンロードして設定する必要があります。

必要ならドキュメントをインストールします。

```
mkdir -pv /usr/share/doc/kbd-2.5.1
cp -R -v docs/doc/* /usr/share/doc/kbd-2.5.1
```

8.63.2. Kbd の構成

インストールプログラム:

chvt, deallocvt, dumpkeys, fgconsole, getkeycodes, kbdinfo, kbd_mode, kbdrate, loadkeys, loadunimap, mapscrn, openvt, psfaddtable (psfxtable へのリンク), psfgettable (psfxtable へのリンク), psfstriptable (psfxtable へのリンク), psfxtable, setfont, setkeycodes, setleds, setmetamode, setvtrgb, showconsolefont, showkey, unicode_start, unicode_stop

インストールディレクトリ:

/usr/share/consolefonts, /usr/share/consoletrans, /usr/share/keymaps, /usr/share/doc/kbd-2.5.1, /usr/share/unimaps

概略説明

chvt	現在表示されている仮想端末を切り替えます。
deallocvt	未使用の仮想端末への割り当てを開放します。
dumpkeys	キーボード変換テーブル (keyboard translation table) の情報をダンプします。
fgconsole	アクティブな仮想端末数を表示します。
getkeycodes	カーネルのスキャンコード-キーコード (scancode-to-keycode) マッピングテーブルを表示します。
kbdinfo	コンソール状態に関する情報を取得します。
kbd_mode	キーボードモードの表示または設定を行います。
kbdrate	キーボードのリピート速度 (repeat rate) と遅延時間 (delay rate) を設定します。
loadkeys	キーボード変換テーブル (keyboard translation tables) をロードします。
loadunimap	カーネルのユニコード-フォント (unicode-to-font) マッピングテーブルをロードします。
mapscrn	かつてのプログラムです。これはユーザー定義の文字マッピングテーブルをコンソールドライバーにロードするために利用します。現在では setfont を利用します。
openvty	新しい仮想端末 (virtual terminal; VT) 上でプログラムを起動します。
psfaddtable	Unicode キャラクターテーブルをコンソールフォントに追加します。
psfgettable	コンソールフォントから埋め込まれた Unicode キャラクターテーブルを抽出します。
psfstriptable	コンソールフォントから埋め込められた Unicode キャラクターテーブルを削除します。
psfxtable	コンソールフォント用のユニコード文字テーブルを取り扱います。
setfont	EGA (Enhanced Graphic Adapter) フォントや VGA (Video Graphics Array) フォントを変更します。
setkeycodes	カーネルのスキャンコード-キーコード (scancode-to-keycode) マッピングテーブルの項目をロードします。キーボード上に特殊キーがある場合に利用します。
setleds	キーボードフラグや LED (Light Emitting Diode) を設定します。
setmetamode	キーボードのメタキー (meta-key) 設定を定義します。
setvtrgb	仮想端末すべてに対してコンソールのカラーマップを設定します。
showconsolefont	現在設定されている EGA/VGA コンソールスクリーンフォントを表示します。
showkey	キーボード上にて押下されたキーのスキャンコード、キーコード、ASCII コードを表示します。
unicode_start	キーボードとコンソールをユニコードモードにします。キーマップファイルが ISO-8859-1 エンコーディングで書かれている場合にのみこれを利用します。他のエンコーディングの場合、このプログラムの出力結果は正しいものになりません。
unicode_stop	キーボードとコンソールをユニコードモードから戻します。

8.64. Libpipeline-1.5.6

Libpipeline パッケージは、サブプロセスのパイプラインを柔軟かつ便利に取り扱うライブラリを提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU
必要ディスク容量: 10 MB

8.64.1. Libpipeline のインストール

Libpipeline をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

ビルド結果をテストする場合は以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

8.64.2. Libpipeline の構成

インストールライブラリ: libpipeline.so

概略説明

libpipeline このライブラリは、サブプロセス間のパイプラインを安全に構築するために利用されます。

8.65. Make-4.3

Make パッケージは、対象となるパッケージのソースファイルを用いて、実行モジュールやそれ以外のファイルの生成、管理を行うプログラムを提供します。

概算ビルト時間: 0.5 SBU
必要ディスク容量: 14 MB

8.65.1. Make のインストール

Make をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストするには以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

8.65.2. Make の構成

インストールプログラム: make

概略説明

make パッケージの構成要素に対して、どれを(再)コンパイルするかを自動判別し、対応するコマンドを実行します。

8.66. Patch-2.7.6

Patch パッケージは「パッチ」ファイルを適用することにより、ファイルの修正、生成を行うプログラムを提供します。「パッチ」ファイルは diff プログラムにより生成されます。

概算ビルド時間: 0.2 SBU
必要ディスク容量: 12 MB

8.66.1. Patch のインストール

Patch をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストするには以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

8.66.2. Patch の構成

インストールプログラム: patch

概略説明

patch パッチファイルに従って対象ファイルを修正します。パッチファイルは通常 diff コマンドによって修正前後の違いが列記されているものです。そのような違いを対象ファイルに適用することで patch はパッチを適用したファイルを生成します。

8.67. Tar-1.34

Tar パッケージは tar アーカイブの生成を行うとともに、アーカイブ操作に関する多くの処理を提供します。 Tar はすでに生成されているアーカイブからファイルを抽出したり、ファイルを追加したりします。 あるいはすでに保存されているファイルを更新したり一覧を表示したりします。

概算ビルド時間: 1.7 SBU
必要ディスク容量: 40 MB

8.67.1. Tar のインストール

Tar をコンパイルするための準備をします。

```
FORCE_UNSAFE_CONFIGURE=1 \
./configure --prefix=/usr
```

configure オプションの意味

FORCE_UNSAFE_CONFIGURE=1

このオプションは、mknod に対するテストを root ユーザーにて実行するようにします。 一般にこのテストを root ユーザーで実行することは危険なこととされますが、ここでは部分的にビルドしたシステムでテストするものであるため、オーバーライドすることで支障はありません。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストするために以下を実行します。

```
make check
```

テストの 1 つ capabilities: binary store/restore は、LFS が selinux を含んでいないため、実行に失敗します。 ただし LFS ビルドに利用するファイルシステム上において、ホストカーネルが拡張属性をサポートしていない場合、このテストはスキップされます。

パッケージをインストールします。

```
make install
make -C doc install-html docdir=/usr/share/doc/tar-1.34
```

8.67.2. Tar の構成

インストールプログラム: tar
インストールディレクトリ: /usr/share/doc/tar-1.34

概略説明

tar アーカイブの生成、アーカイブからのファイル抽出、アーカイブの内容一覧表示を行います。 アーカイブは tarball とも呼ばれます。

8.68. Texinfo-6.8

Texinfo パッケージは info ページへの読み書き、変換を行うプログラムを提供します。

概算ビルド時間:	0.6 SBU
必要ディスク容量:	114 MB

8.68.1. Texinfo のインストール

Texinfo をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストするには以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

必要なら TeX システムに属するコンポーネント類をインストールします。

```
make TEXMF=/usr/share/texmf install-tex
```

make パラメーターの意味

TEXMF=/usr/share/texmf

Makefile 変数である *TEXMF* に TeX ツリーのルートディレクトリを設定します。 これは後に TeX パッケージをインストールするための準備です。

ドキュメントシステム Info は、メニュー項目の一覧を単純なテキストファイルに保持しています。 そのファイルは */usr/share/info/dir* にあります。 残念ながら数々のパッケージの Makefile は、既にインストールされている info ページとの同期を取る処理を行わない場合があります。 */usr/share/info/dir* の再生成を必要とするなら、以下のコマンドを実行してこれを実現します。

```
pushd /usr/share/info
rm -v dir
for f in *
do install-info $f dir 2>/dev/null
done
popd
```

8.68.2. Texinfo の構成

インストールプログラム:	info, install-info, makeinfo (texi2any へのリンク), pdftexi2dvi, pod2texi, texi2any, texi2dvi, texi2pdf, texindex
インストールライブラリ:	MiscXS.so, ParseTeXi.so, XSParagraph.so (すべて /usr/lib/texinfo ディレクトリ内)
インストールディレクトリ:	/usr/share/texinfo, /usr/lib/texinfo

概略説明

info	info ページを見るために利用します。 これは man ページに似ていますが、単に利用可能なコマンドラインオプションを説明するだけのものではなく、おそらくはもっと充実しています。 例えば man bison と info bison を比較してみてください。
install-info	info ページをインストールします。 info 索引ファイルにある索引項目も更新します。
makeinfo	指定された Texinfo ソースファイルを Info ページ、プレーンテキスト、HTML ファイルに変換します。
pdftexi2dvi	指定された Texinfo ドキュメントファイルを PDF (Portable Document Format) ファイルに変換します。

pod2texi	Pod フォーマットを Texinfo フォーマットに変換します。
texi2any	Texinfo のソースファイルを他のさまざまなフォーマットに変換します。
texi2dvi	指定された Texinfo ドキュメントファイルを、デバイスに依存しない印刷可能なファイルに変換します。
texi2pdf	指定された Texinfo ドキュメントファイルを PDF (Portable Document Format) ファイルに変換します。
texindex	Texinfo 索引ファイルの並び替えを行います。

8.69. Vim-9.0.0228

Vim パッケージは強力なテキストエディターを提供します。

概算ビルト時間:	2.5 SBU
必要ディスク容量:	217 MB



Vim の代替ソフトウェア

もし Emacs、Joe、Nano など他のエディターを用いたい場合は <https://www.linuxfromscratch.org/blfs/view/stable-systemd/postlfs/editors.html> に示される手順に従ってインストールしてください。

8.69.1. Vim のインストール

設定ファイル `vimrc` がインストールされるデフォルトディレクトリを `/etc` に変更します。

```
echo '#define SYS_VIMRC_FILE "/etc/vimrc"' >> src/feature.h
```

`vim` をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストするために、`tester` ユーザーがソースツリーに書き込みできるようにします。

```
chown -Rv tester .
```

`tester` ユーザーによりテストを実行します。

```
su tester -c "LANG=en_US.UTF-8 make -j1 test" &> vim-test.log
```

このテストスイートは数多くのバイナリデータを端末画面上に出力します。これは端末画面の設定によっては問題を引き起こします。これを避けるには、上に示すように出力をリダイレクトしてログファイルに出力するようにしてください。テストが成功すれば、ログファイルの最後に "ALL DONE" と表示されます。

パッケージをインストールします。

```
make install
```

たいていのユーザーは `vim` ではなく `vi` を使うようです。 `vi` を入力しても `vim` が実行されるように、実行モジュールに対するシンボリックリンクを作成します。さらに指定された言語による `man` ページへのシンボリックリンクも作成します。

```
ln -sv vim /usr/bin/vi
for L in /usr/share/man/{,*/}man1/vim.1; do
    ln -sv vim.1 ${dirname $L}/vi.1
done
```

デフォルトでは `vim` のドキュメントが `/usr/share/vim` にインストールされます。以下のようなシンボリックリンクを生成することで `/usr/share/doc/vim-9.0.0228` へアクセスしてもドキュメントが参照できるようにし、他のパッケージが配置するドキュメントの場所と整合を取ります。

```
ln -sv ../../vim/vim90/doc /usr/share/doc/vim-9.0.0228
```

LFS システムに対して X ウィンドウシステムをインストールする場合 X のインストールの後で `vim` を再コンパイルする必要があります。 `vim` には GUI 版があり X や他のライブラリがインストールされていて初めて構築できるためです。この作業の詳細については `vim` のドキュメントと BLFS ブックの <https://www.linuxfromscratch.org/blfs/view/stable-systemd/postlfs/vim.html> に示されている Vim のインストール説明のページを参照してください。

8.69.2. Vim の設定

デフォルトで vim は vi 非互換モード (vi-incompatible mode) で起動します。他のエディターを使ってきたユーザーにとっては、よく分からぬものかもしれません。以下の設定における「nocompatible」(非互換) は、Vi の新しい機能を利用することを意味しています。もし「compatible」(互換) モードに変更したい場合は、この設定ファイルの冒頭にて行っておくことが必要です。このモード設定は他の設定を置き換えるものとなることから、まず初めに行っておかなければならぬものだからです。以下のコマンドを実行して vim の設定ファイルを生成します。

```
cat > /etc/vimrc << "EOF"
" Begin /etc/vimrc

" Ensure defaults are set before customizing settings, not after
source $VIMRUNTIME/defaults.vim
let skip_defaults_vim=1

set nocompatible
set backspace=2
set mouse=
syntax on
if (&term == "xterm") || (&term == "putty")
    set background=dark
endif

" End /etc/vimrc
EOF
```

`set nocompatible` と設定しておくと vi 互換モードでの動作に比べて有用な動作となります。(これがデフォルトになっています。) その設定の記述から「no」の文字を取り除けば、旧来の vi コマンドの動作となります。`set backspace=2` を設定しておくと、行を超えてバックスペースキーによる編集が可能となります。またインデントが自動的に行われ、コマンド起動時には自動的に挿入モードとなります。`syntax on` パラメーターを指定すれば vim の文法ハイライト (syntax highlighting) 機能が有効になります。`set mouse=` を指定すると chroot 環境やリモート接続時であってもマウスによるテキスト選択が適切になります。最後にある `if` 文は、`set background=dark` を指定した場合に、特定の端末エミュレーター上において vim が背景色を誤って認識しないようにするためのものです。エミュレーターの背景色が黒色であった場合に、より適切なハイライトが実現できます。

この他に利用できるオプションについては、以下のコマンドを実行することで出力される説明を参照してください。

```
vim -c ':options'
```



注記

vim がインストールするスペルファイル (spell files) はデフォルトでは英語に対するものだけです。必要な言語のスペルファイルをインストールするなら <ftp://ftp.vim.org/pub/vim/runtime/spell/> から、特定の言語、エンコーディングによる *.spl ファイル、またオプションとして *.sug ファイルをダウンロードしてください。そしてそれらのファイルを `/usr/share/vim/vim90/spell/` ディレクトリに保存してください。

スペルファイルを利用するには `/etc/vimrc` ファイルにて、例えば以下のような設定が必要になります。

```
set spelllang=en,ru
set spell
```

詳しくは、上で説明した URL にて提供されている README ファイルを参照してください。

8.69.3. Vim の構成

インストールプログラム:

`ex` (vim へのリンク), `rview` (vim へのリンク), `rvim` (vim へのリンク), `vi` (vim へのリンク), `view` (vim へのリンク), `vim`, `vimdiff` (vim へのリンク), `vimtutor`, `xxd`

インストールディレクトリ:

`/usr/share/vim`

概略説明

`ex` vim を ex モードで起動します。

rview	view の機能限定版。 シェルは起動できず、サスPENDも行うことはできません。
rvim	vim の機能限定版。 シェルは起動できず、サスPENDも行うことはできません。
vi	vim へのリンク。
view	vim を読み込み専用モード (read-only mode) で起動します。
vim	エディター。
vimdiff	vim により、同一ファイルにおける 2 つまたは 3 つの版を同時に編集し、差異を表示します。
vimtutor	vim の基本的なキー操作とコマンドについて教えてくれます。
xxd	指定されたファイルの内容を 16進数ダンプとして変換します。 逆の変換も行うことができるため、バイナリパッチにも利用されます。

8.70. MarkupSafe-2.1.1

MarkupSafe は、XML/HTML/XHTML マークアップセーフな文字列を実装する Python モジュールです。

概算ビルド時間: 0.1 SBU 以下
必要ディスク容量: 168 KB

8.70.1. MarkupSafe のインストール

以下のコマンドを実行して MarkupSafe をコンパイルします。

```
pip3 wheel -w dist --no-build-isolation --no-deps $PWD
```

このパッケージにテストスイートはありません。

パッケージをインストールします。

```
pip3 install --no-index --no-user --find-links dist MarkupSafe
```

8.70.2. MarkupSafe の構成

インストールディレクトリ: /usr/lib/python3.10/site-packages/MarkupSafe-2.1.1.dist-info

8.71. Jinja2-3.1.2

Jinja2 は、Python の簡単なテンプレート言語を実装する Python モジュールです。

概算ビルド時間: 0.1 SBU 以下
必要ディスク容量: 3.0 MB

8.71.1. Jinja2 のインストール

パッケージをビルドするために以下を実行します。

```
pip3 wheel -w dist --no-build-isolation --no-deps $PWD
```

パッケージをインストールします。

```
pip3 install --no-index --no-user --find-links dist Jinja2
```

8.71.2. Jinja2 の構成

インストールディレクトリ: /usr/lib/python3.10/site-packages/Jinja2-3.1.2.dist-info

8.72. Systemd-251

systemd パッケージは、システムの起動、稼動、終了の制御を行うプログラムを提供します。

概算ビルト時間: 2.3 SBU
必要ディスク容量: 251 MB

8.72.1. systemd のインストール

はじめに glibc-2.36 において発生する問題を修正します。

```
patch -Np1 -i ./systemd-251-glibc_2.36_fix-1.patch
```

デフォルトの udev ルールから、不要な 2 つのグループ render と sgx を削除します。

```
sed -i -e 's/GROUP="render"/GROUP="video"/' \
-e 's/GROUP="sgx", //' rules.d/50-udev-default.rules.in
```

systemd をコンパイルするための準備をします。

```
mkdir -p build
cd      build

meson --prefix=/usr \
       --buildtype=release \
       -Ddefault-dnssec=no \
       -Dfirstboot=false \
       -Dinstall-tests=false \
       -Dldconfig=false \
       -Dsysusers=false \
       -Drpmmacrosdir=no \
       -Dhomed=false \
       -Duserdb=false \
       -Dman=false \
       -Dmode=release \
       -Dpamconfdir=no \
       -Ddocdir=/usr/share/doc/systemd-251 \
       ..
```

meson オプションの意味

--buildtype=release

本スイッチは、デフォルトのビルドタイプ（「debug」）をオーバーライドします。そのままにしておくと、最適化されていない実行モジュールが生成されるためです。

-Ddefault-dnssec=no

本スイッチは、実験的な DNSSEC サポートを無効にします。

-Dfirstboot=false

本スイッチは、systemd サービスを、システムの初回構築用としてインストールしないようにします。LFS ではすべて手作業で行うため、この機能が必要ないからです。

-Dinstall-tests=false

本スイッチはコンパイルされたテストをインストールしないようにします。

-Dldconfig=false

本スイッチは、システム起動時に ldconfig を実行するような systemd ユニットはインストールしないようにします。LFS のようにソースから作り出すディストリビューションにとっては無用なものであり、起動時間も長くなりますが。もし必要であれば本スイッチを除いてください。

-Dsysusers=false

本スイッチは、システム起動初期に /etc/group ファイルと /etc/passwd ファイルを設定する systemd サービスをインストールしないようにします。この二つのファイルは前章にて生成済です。LFS システム上におけるこのデーモンは、ユーザー アカウントを手動で生成するまでは、利用することはできません。

-Drpmmacrosdir=no

本スイッチは systemd において利用される RPM マクロをインストールしないようにします。LFS では RPM をサポートしていないためです。

```
-D{userdb,homed}=false
```

LFS が取り扱う範囲にそぐわない依存関係を持ったデーモンを削除します。

```
-Dman=false
```

man ページを生成することで発生する追加パッケージの導入を行わないようにします。 systemd の man ページは、後ほど生成済みの tarball を使ってインストールすることにします。

```
-Dmode=release
```

アップストリームにおいて試験的機能とみなされている機能を無効にします。

```
-Dpamconfdir=no
```

PAM 設定は LFS 上では機能しないため、これをインストールしないようにします。

パッケージをコンパイルします。

ninja

パッケージをインストールします。

ninja install

man ページをインストールします。

```
tar -xf ../../systemd-man-pages-251.tar.xz --strip-components=1 -C /usr/share/man
```

systemd-journald に対して必要となる /etc/machine-id ファイルを生成します。

systemd-machine-id-setup

基本的なターゲット構造を設定します。

systemctl preset-all

バイナリディストリビューションの更新サービスを無効にします。 ソースからのビルトを行う単純な Linux システムでは不要だからです 有効化されても設定が行われていない場合には、エラーが出力されます。

systemctl disable systemd-sysupdate

8.72.2. systemd の構成

インストールプログラム:

busctl, coredumpctl, halt (systemctl へのシンボリックリンク), hostnamectl, init, journalctl, kernel-install, localectl, loginctl, machinectl, networkctl, oomctl, portablectl, poweroff (systemctl へのシンボリックリンク), reboot (systemctl へのシンボリックリンク), resolvconf (resolvectl へのシンボリックリンク), resolvectl, runlevel (systemctl へのシンボリックリンク), shutdown (systemctl へのシンボリックリンク), systemctl, systemd-analyze, systemd-ask-password, systemd-cat, systemd-cgls, systemd-cgtop, systemd-creds, systemd-delta, systemd-detect-virt, systemd-dissect, systemd-escape, systemd-hwdb, systemd-id128, systemd-inhibit, systemd-machine-id-setup, systemd-mount, systemd-notify, systemd-nspawn, systemd-path, systemd-repart, systemd-resolve (resolvectl へのシンボリックリンク), systemd-run, systemd-socket-activate, systemd-stdio-bridge, systemd-sysext, systemd-tmpfiles, systemd-tty-ask-password-agent, systemd-umount (systemd-mount へのシンボリックリンク), telinit (systemctl へのシンボリックリンク), timedatectl, udevadm libnss_myhostname.so.2, libnss_mymachines.so.2, libnss_resolve.so.2, libnss_systemd.so.2, libsystemd.so, libsystemd-shared-251.so (/usr/lib/systemd ディレクトリ内), libudev.so

インストールライブラリ:

/etc/binfmt.d, /etc/init.d, /etc/kernel, /etc/modules-load.d, /etc/sysctl.d, /etc/systemd, /etc/tmpfiles.d, /etc/udev, /etc/xdg/systemd, /usr/lib/systemd, /usr/lib/udev, /usr/include/systemd, /usr/lib/binfmt.d, /usr/lib/environment.d, /usr/lib/kernel, /usr/lib/modules-load.d, /usr/lib/sysctl.d, /usr/lib/systemd, /usr/lib/tmpfiles.d, /usr/share/doc/systemd-251, /usr/share/factory, /usr/share/systemd, /var/lib/systemd, /var/log/journal

概略説明

busctl

D-Bus のバスを監視するために用います。

coredumpctl	systemd journal よりコアダンプを抽出します。
halt	普通は shutdown にオプション <i>-h</i> をつけて実行します。 ただし既にランレベルが 0 である場合を除きます。 カーネルに対してシステムの停止を指示します。 システムが停止したことは /var/log/wtmp ファイルに記録されます。
hostnamectl	システムのホスト名および関連設定を確認し変更します。
init	カーネルがハードウェアを初期化する際に起動される最初のプロセスであり、この後の起動処理を担い、設定ファイルに応じたブートプロセスと他の全てのプロセスを起動します。つまり systemd を起動するということです。
journalctl	Systemd のジャーナルの内容を確認します。
kernel-install	カーネルや initramfs イメージを /boot ディレクトリに対して追加、削除します。
localectl	システムロケールやキーボードレイアウト設定を確認し変更します。
logindctl	Systemd のログインマネージャーの状態を確認し制御します。
machinectl	Systemd の仮想マシンとコンテナー登録マネージャー (Container Registration Manager) の状態を確認し制御します。
networkctl	systemd-network から見えるネットワークリンクの状態を確認 (introspect) し設定します。
oomctl	systemd の Out Of Memory デーモンを制御します。
portablectl	ローカルシステムにおいてポータブルサービスのアタッチ、デタッチを行います。
poweroff	カーネルに対してシステム停止を指示し、コンピューターの電源を落とします。 (halt参照)
reboot	カーネルに対してシステム再起動を指示します。 (halt参照)
resolvconf	systemd-resolved に対する DNS サーバーやドメイン設定を登録します。
resolvectl	ネットワーク名前解決マネージャーに対して制御コマンドを送信します。 あるいはドメイン名、IPv4、IPv6 アドレス、DNS レコードやサービスなどを解決します。
runlevel	現時点とその直前のランレベルを表示します。 最新のランレベルは /run/utmp ファイルに記録されます。
shutdown	すべてのプロセスとすべてのログインユーザーへの通知を行なった上で、システムを安全に停止します。
systemctl	Systemd システムとサービスマネージャーの状態について確認し制御します。
systemd-analyze	現在のシステム起動において、起動処理パフォーマンスを決定します。 また問題のある systemd ユニットを特定します。
systemd-ask-password	コマンドラインから指定された質問文を用いて、システムパスワードやユーザーのパスフレーズを確認します。
systemd-cat	systemd journal に対してプロセスの STDOUT と STDERR に接続します。
systemd-cgls	指定された Linux コントロールグループ (control group) の階層を再帰的に表示します。
systemd-cgtop	最上位のローカル Linux コントロールグループ (control group) を表示し、CPU、メモリ、ディスクI/Oロードの並びにより示します。
systemd-creds	資格情報を表示し処理します。
systemd-delta	/etc ディレクトリにある設定ファイルを同定したり比較したりします。 この設定ファイルは /usr ディレクトリにあるデフォルト設定をオーバーライドします。
systemd-detect-virt	システムが仮想化環境で動作しているかどうかを検出し、それに応じて udev を調整します。
systemd-dissect	OS ディスクイメージの調査に用いられます。
systemd-escape	systemd ユニット名での文字エスケープを行います。
systemd-hwdb	ハードウェアデータベース (hwdb) を管理します。
systemd-id128	id128 文字列を生成し表示します。

systemd-inhibit	システム停止、休止、アイドル禁止ロックを行うプログラムを実行します。 プロセスが正常起動するまでは、システムシャットダウンのような処理は行いません。
systemd-machine-id-setup	システムインストールツールがマシンIDを初期化するために利用します。 このマシンIDは <code>/etc/machine-id</code> ファイル内にあるものから、インストール時にランダムに生成されます。
systemd-mount	ディスクの一時的あるいは自動マウントを行ないます。
systemd-notify	init システムに対してステータス変更が発生したことを通知するデーモンスクリプトが利用します。
systemd-nspawn	軽量な名前空間コンテナー (light-weight namespace container) においてコマンドや OS の実行に用いられます。
systemd-path	システムパスやユーザーパスを検索します。
systemd-repart	systemd が OS イメージ内 (たとえばコンテナーなど) で用いられている場合に、パーティションテーブルに対してパーティションの拡張や追加を行うために用いられます。
systemd-resolve	ドメイン名、IPv4 と IPv6 アドレス、DNSリソースレコード、サービスの名前解決を行います。
systemd-run	一時的な .service ユニットや .scope ユニットを生成および起動し、その指定コマンドを実行します。 これは systemd ユニットの検証を行うことができます。
systemd-socket-activate	ソケットデバイスの情報を読み取って、ソケットに対するコネクション上にてプロセスを起動します。
systemd-sysext	システム拡張イメージを有効にします。
systemd-tmpfiles	<code>tmpfiles.d</code> ディレクトリにて指定された設定ファイルの内容に基づいて、テンポラリファイルなどの生成削除等を行います。
systemd-umount	マウントポイントをアンマウントします。
systemd-tty-password-agent	未定となっている Systemd のパスワード変更指示の一覧を表示し処理します。
telinit	init コマンドに対してランレベルを何にするかを指示します。
timedatectl	システムクロックとその設定を確認し変更します。
udevadm	汎用的な udev 管理ツール。 udevd デーモンの制御、Udev データベースデータの提供、uevent の監視、uevent の完了までの待機、udev 設定のテスト、指定デバイスに対する uevent の起動、といったことを行います。
libsystemd	主となる systemd ユーティリティライブラリ。
libudev	Udev デバイス情報にアクセスするためのライブラリ。

8.73. D-Bus-1.14.0

D-Bus はメッセージバスシステムであり、アプリケーションから他のアプリケーションへの通信を容易に行う方法を提供します。D-Bus にはシステムデーモン（例えば”新たなハードウェアデバイスが追加されました”や”プリンターキューが変更されました”といったイベント）やログインユーザーごとのセッションデーモン（ユーザーアプリケーション間で必要な一般的なIPC）があります。またメッセージバスは、一般的な1対1によるメッセージ送受信のフレームワーク上にビルドされます。これは二つのアプリケーション間に（メッセージバスデーモンを介さずに）直接通信するためを利用されます。

概算ビルド時間: 0.2 SBU
必要ディスク容量: 19 MB

8.73.1. D-Bus のインストール

D-Bus をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr \
            --sysconfdir=/etc \
            --localstatedir=/var \
            --runstatedir=/run \
            --disable-static \
            --disable-doxygen-docs \
            --disable-xml-docs \
            --docdir=/usr/share/doc/dbus-1.14.0 \
            --with-system-socket=/run/dbus/system_bus_socket
```

configure オプションの意味

--runstatedir=/run と --with-system-socket=/run/dbus/system_bus_socket

これは PID ファイルとシステムバスソケットの場所を設定するものであり、かつての /var/run ではなく /run とします。

パッケージをコンパイルします。

make

本パッケージにはテストスイートがあります。ただし実行するためには LFS には含まれていないパッケージをいくつか必要とします。テストの実行方法については <https://www.linuxfromscratch.org/blfs/view/stable-systemd/general/dbus.html> に示されています。

パッケージをインストールします。

make install

シンボリックリンクを生成します。D-Bus と systemd が同一の machine-id ファイルを利用できるようにするためにです。

```
ln -sfv /etc/machine-id /var/lib/dbus
```

8.73.2. D-Bus の構成

インストールプログラム:	dbus-cleanup-sockets, dbus-daemon, dbus-launch, dbus-monitor, dbus-run-session, dbus-send, dbus-test-tool, dbus-update-activation-environment, dbus-uuidgen
インストールライブラリ:	libdbus-1.{a,so}
インストールディレクトリ:	/etc/dbus-1, /usr/include/dbus-1.0, /usr/lib/dbus-1.0, /usr/share/dbus-1, /usr/share/doc/dbus-1.14.0, /var/lib/dbus

概略説明

dbus-cleanup-sockets	ディレクトリ内に取り残されたソケットを削除します。
dbus-daemon	D-Bus メッセージバスデーモン。
dbus-launch	シェルスクリプトから dbus-daemon を起動します。
dbus-monitor	D-Bus メッセージバスを通じたメッセージ送信を監視します。

dbus-run-session	シェルスクリプトから dbus-daemon のセッションバスインスタンスを起動します。 そしてそのセッションにて指定されたプログラムを起動します。
dbus-send	D-Bus メッセージバスにメッセージを送ります。
dbus-test-tool	D-Bus のテストを補助するツールです。
dbus-update-activation-environment	D-Bus のセッションサービスに対して設定される環境変数を更新します。
dbus-uuidgen	ユニーク ID を生成します。
libdbus-1	D-Bus メッセージバスとの通信を行う API 関数を提供します。

8.74. Man-DB-2.10.2

Man-DB パッケージは man ページを検索したり表示したりするプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.4 SBU
必要ディスク容量: 40 MB

8.74.1. Man-DB のインストール

Man-DB をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr \
           --docdir=/usr/share/doc/man-db-2.10.2 \
           --sysconfdir=/etc \
           --disable-setuid \
           --enable-cache-owner=bin \
           --with-browser=/usr/bin/lynx \
           --with-vgrind=/usr/bin/vgrind \
           --with-grap=/usr/bin/grap
```

configure オプションの意味

--disable-setuid

これは man プログラムが man ユーザーに対して setuid を実行しないようにします。

--enable-cache-owner=bin

システムワイドなキャッシュファイルの所有ユーザーを bin とします。

--with-...

この三つのオプションはデフォルトで利用するプログラムを指定します。 lynx はテキストベースの Web ブラウザーです。 (BLFS でのインストール手順を参照してください。) vgrind はプログラムソースを Groff の入力形式に変換します。 grap は Groff 文書においてグラフを組版するために利用します。 vgrind と grap は man ページを見るだけであれば必要ありません。これらは LFS や BLFS には含まれません。もし利用したい場合は LFS の構築を終えた後に自分でインストールしてください。

パッケージをコンパイルします。

make

コンパイル結果をテストするには以下を実行します。

make check

パッケージをインストールします。

make install

8.74.2. LFS における英語以外のマニュアルページ

以下に示す表は /usr/share/man/<11> 配下にインストールされる man ページとそのエンコーディングを示します。 Man-DB は man ページが UTF-8 エンコーディングかどうかを正しく認識します。

表8.1 8 ビット man ページのキャラクターエンコーディング

言語 (コード)	エンコーディング	言語 (コード)	エンコーディング
デンマーク語 (da)	ISO-8859-1	クロアチア語 (hr)	ISO-8859-2
ドイツ語 (de)	ISO-8859-1	ハンガリー語 (hu)	ISO-8859-2
英語 (en)	ISO-8859-1	日本語 (ja)	EUC-JP
スペイン語 (es)	ISO-8859-1	韓国語 (ko)	EUC-KR
エストニア語 (et)	ISO-8859-1	リトアニア語 (lt)	ISO-8859-13
フィンランド語 (fi)	ISO-8859-1	ラトビア語 (lv)	ISO-8859-13
フランス語 (fr)	ISO-8859-1	マケドニア語 (mk)	ISO-8859-5

言語 (コード)	エンコーディング	言語 (コード)	エンコーディング
アイルランド語 (ga)	ISO-8859-1	ポーランド語 (pl)	ISO-8859-2
ガリシア語 (gl)	ISO-8859-1	ルーマニア語 (ro)	ISO-8859-2
インドネシア語 (id)	ISO-8859-1	ギリシア語 (el)	ISO-8859-7
アイスランド語 (is)	ISO-8859-1	スロバキア語 (sk)	ISO-8859-2
イタリア語 (it)	ISO-8859-1	スロベニア語 (sl)	ISO-8859-2
ノルウェー語 ブークモール (Norwegian Bokmal; nb)	ISO-8859-1	セルビア Latin (sr@latin)	ISO-8859-2
オランダ語 (nl)	ISO-8859-1	セルビア語 (sr)	ISO-8859-5
ノルウェー語 ニーノシュク (Norwegian Nynorsk; nn)	ISO-8859-1	トルコ語 (tr)	ISO-8859-9
ノルウェー語 (no)	ISO-8859-1	ウクライナ語 (uk)	KOI8-U
ポルトガル語 (pt)	ISO-8859-1	ベトナム語 (vi)	TCVN5712-1
スウェーデン語 (sv)	ISO-8859-1	中国語 簡体字 (Simplified Chinese) (zh_CN)	GBK
ベラルーシ語 (be)	CP1251	中国語 簡体字 (Simplified Chinese), シンガポール (zh_sg)	GBK
ブルガリア語 (bg)	CP1251	中国語 繁体字 (Traditional Chinese), 香港 (zh_HK)	BIG5HKSCS
チェコ語 (cs)	ISO-8859-2	中国語 繁体字 (Traditional Chinese) (zh_TW)	BIG5



注記

上に示されていない言語によるマニュアルページはサポートされません。

8.74.3. Man-DB の構成

インストールプログラム: accessdb, apropos (whatisへのリンク), catman, lexgrog, man, man-recode, mandb, manpath, whatis
 インストールライブラリ: libman.so, libmandb.so (いずれも /usr/lib/man-db ディレクトリ内)
 インストールディレクトリ: /usr/lib/man-db, /usr/libexec/man-db, /usr/share/doc/man-db-2.10.2

概略説明

accessdb	whatis データベースの内容をダンプして読みやすい形で出力します。
apropos	whatis データベースを検索して、指定した文字列を含むシステムコマンドの概略説明を表示します。
catman	フォーマット済マニュアルページを生成、更新します。
lexgrog	指定されたマニュアルページについて、一行のサマリー情報を表示します。
man	指定されたマニュアルページを整形して表示します。
man-recode	マニュアルページを別のエンコーディングに変換します。
mandb	whatis データベースを生成、更新します。
manpath	\$MANPATH の内容を表示します。あるいは (\$MANPATH が設定されていない場合は) man.conf 内の設定とユーザー設定に基づいて適切な検索パスを表示します。
whatis	whatis データベースを検索して、指定されたキーワードを含むシステムコマンドの概略説明を表示します。
libman	man に対しての実行時のサポート機能を提供します。
libmandb	man に対しての実行時のサポート機能を提供します。

8.75. Procps-ng-4.0.0

Procps-ng パッケージはプロセス監視を行うプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU
必要ディスク容量: 19 MB

8.75.1. Procps-ng のインストール

procps-ng をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr \
            --docdir=/usr/share/doc/procps-ng-4.0.0 \
            --disable-static \
            --disable-kill \
            --with-systemd
```

configure オプションの意味

--disable-kill
本スイッチは kill コマンドをビルドしないようにします。このコマンドは Util-linux パッケージにてインストールされます。

パッケージをコンパイルします。

make

テストスイートを実行する場合は、以下を実行します。

make check

ホストディストリビューション上において、特定のアプリケーション（たとえば JVM や ウェブブラウザー）が独自のメモリ割り当てを行っている場合に、`free with commit` という名前のテストが失敗します。

パッケージをインストールします。

make install

8.75.2. Procps-ng の構成

インストールプログラム:	free, pgrep, pidof, pkill, pmap, ps, pwdx, slabtop, sysctl, tload, top, uptime, vmstat, w, watch
インストールライブラリ:	libproc-2.so
インストールディレクトリ:	/usr/include/procps, /usr/share/doc/procps-ng-4.0.0

概略説明

free	物理メモリ、スワップメモリの双方において、メモリの使用量、未使用量を表示します。
pgrep	プロセスの名前などの属性によりプロセスを調べます。
pidof	指定されたプログラムの PID を表示します。
pkill	プロセスの名前などの属性によりプロセスに対してシグナルを送信します。
pmap	指定されたプロセスのメモリマップを表示します。
ps	現在実行中のプロセスを一覧表示します。
pwait	実行前にプロセスの完了を待ちます。
pwdx	プロセスが実行されているカレントディレクトリを表示します。
slabtop	リアルタイムにカーネルのスラブキャッシュ (slab cache) 情報を詳細に示します。
sysctl	システム稼動中にカーネル設定を修正します。
tload	システムの負荷平均 (load average) をグラフ化して表示します。
top	CPU をより多く利用しているプロセスの一覧を表示します。これはリアルタイムにプロセッサーの動作状況を逐次表示します。
uptime	システムの稼動時間、ログインユーザー数、システム負荷平均 (load average) を表示します。

vmstat	仮想メモリの統計情報を表示します。 そこではプロセス、メモリ、ページング、ブロック入出力 (Input/Output; I/O)、トラップ、CPU 使用状況を表示します。
w	どのユーザーがログインしていて、どこから、そしていつからログインしているかを表示します。
watch	指定されたコマンドを繰り返し実行します。 そしてその出力結果の先頭の一画面分を表示します。 出力結果が時間の経過とともにどのように変わるかを確認することができます。
libproc-2	本パッケージのほとんどのプログラムが利用している関数を提供します。

8.76. Util-linux-2.38.1

Util-linux パッケージはさまざまなユーティリティプログラムを提供します。 ファイルシステム、コンソール、パーティション、カーネルメッセージなどを取り扱うユーティリティです。

概算ビルド時間: 1.0 SBU
必要ディスク容量: 283 MB

8.76.1. Util-linux のインストール

Util-linux をコンパイルするための準備をします。

```
./configure ADJTIME_PATH=/var/lib/hwclock/adjtime \
--bindir=/usr/bin \
--libdir=/usr/lib \
--sbindir=/usr/sbin \
--docdir=/usr/share/doc/util-linux-2.38.1 \
--disable-chfn-chsh \
--disable-login \
--disable-nologin \
--disable-su \
--disable-setpriv \
--disable-runuser \
--disable-pylibmount \
--disable-static \
--without-python
```

--disable と --without のオプションは、LFS では必要のないパッケージ、あるいは他のパッケージのインストールによって不整合となったパッケージに対して出力される警告をなくします。

パッケージをコンパイルします。

make

必要なら root ユーザー以外にて、以下のようにテストスイートを実行します。

警告

root ユーザーによりテストスイートを実行すると、システムに悪影響を及ぼすことがあります。 テストスイートを実行するためには、カーネルオプション CONFIG_SCSI_DEBUG が現環境にて有効であり、かつモジュールとしてビルドされていなければなりません。 カーネルに組み込んでいるとブートできません。 またテストを完全に実施するには BLFS での各種パッケージのインストールも必要になります。 テストが必要であるなら、LFS システムを完成した後に、再起動したシステムにて以下を実行します。

```
bash tests/run.sh --srcdir=$PWD --builddir=$PWD
```

```
chown -Rv tester .
su tester -c "make -k check"
```

hardlink テストは、カーネルオプションにおいて CONFIG_CRYPTO_USER_API_HASH セットが設定されていない場合は失敗します。

パッケージをインストールします。

make install

8.76.2. Util-linux の構成

インストールプログラム:

```
addpart, agetty, blkdiscard, blkid, blkzone, blockdev, cal, cfdisk, chcpu,
chmem, choom, chrt, col, colcrt, colrm, column, ctrlaltdel, delpart, dmesg,
eject, fallocate, fdisk, fincore, findfs, findmnt, flock, fsck, fsck.cramfs,
fsck.minix, fsfreeze, fstrim, getopt, hexdump, hwclock, i386, ionice,
ipcmk, ipcrm, ipcs, irqtop, isosize, kill, last, lastb (lastへのリンク),
ldattach, linux32, linux64, logger, look, losetup, lsblk, lscpu, lsipc,
lsirq, lslocks, lslogins, lsmem, lsns, mcookie, mesg, mkfs, mkfs.bfs,
mkfs.cramfs, mkfs.minix, mkswap, more, mount, mountpoint, namei, nsenter,
partx, pivot_root, prlimit, readprofile, rename, renice, resizepart, rev,
rfkill, rtcwake, script, scriptlive, scriptreplay, setarch, setsid, setterm,
sfdisk, sulogin, swaplabel, swapoff (swaponへのリンク), swapon, switch_root,
taskset, uclampset, ul, umount, uname26, unshare, utmpdump, uuid, uidgen,
uuidparse, wall, wdctl, whereis, wipefs, x86_64, zramctl
```

インストールライブラリ:

libblkid.so, libfdisk.so, libmount.so, libsmartcols.so, libuuid.so

インストールディレクトリ:

/usr/include/blkid, /usr/include/libfdisk, /usr/include/libmount, /usr/include/libsmartcols, /usr/include/uuid, /usr/share/doc/util-linux-2.38.1, /var/lib/hwclock

概略説明

addpart	Linux カーネルに対して新しいパーティションの情報を通知します。
agetty	tty ポートを開いてログイン名の入力を受け付けます。そして login プログラムを起動します。
blkdiscard	デバイス上のセクターを取り除きます。
blkid	ロックデバイスの属性を見つけて表示するためのコマンドラインユーティリティ。
blkzone	指定されたロックデバイスにおいてゾーンコマンドを実行します。
blockdev	コマンドラインからロックデバイスの ioctl の呼び出しを行います。
cal	簡単なカレンダーを表示します。
cfdisk	指定されたデバイスのパーティションテーブルを操作します。
chcpu	CPU の状態を変更します。
chmem	メモリを設定します。
choom	OOM-killer スコアを表示し調整します。
chrt	リアルタイムプロセスの属性を操作します。
col	逆改行 (reverse line feeds) を取り除きます。
colcrt	性能が不十分な端末のために nroff の出力結果から重ね書き (overstriking) や半改行 (half-lines) を取り除きます。
colrm	指定されたカラムを取り除きます。
column	指定されたファイルの内容を複数カラムに整形します。
ctrlaltdel	ハードリセットまたはソフトリセットを行うために Ctrl+Alt+Del キー押下時の機能を設定します。
delpart	Linux カーネルに対してパーティションが削除されているかどうかを確認します。
dmesg	カーネルのブートメッセージをダンプします。
eject	リムーバブルメディアをイジェクトします。
fallocate	ファイルのための領域を事前割り当てします。
fdisk	指定されたデバイスのパーティションテーブルを操作します。
fincore	メモリコア内にあるファイル情報のページ数を調べます。
findfs	ファイルシステムに対するラベルまたは UUID (Universally Unique Identifier) を使ってファイルシステムを検索します。
findmnt	libmount ライブラリに対するコマンドラインインターフェース。mountinfo, fstab, mtab の各ファイルに対しての処理を行います。
flock	ファイルロックを取得してロックしたままコマンドを実行します。
fsck	ファイルシステムのチェックを行い、必要に応じて修復を行います。

fsck.cramfs	指定されたデバイス上の Cramfs ファイルシステムに対して一貫性検査 (consistency check) を行います。
fsck.minix	指定されたデバイス上の Minix ファイルシステムに対して一貫性検査 (consistency check) を行います。
fsfreeze	カーネルドライバー制御における FIFREEZE/FITHAW ioctl に対する単純なラッパープログラム。
fstrim	マウントされたファイルシステム上にて、利用されていないブロックを破棄します。
getopt	指定されたコマンドラインのオプション引数を解析します。
hexdump	指定されたファイルを 16進数書式または他の指定された書式でダンプします。
hwclock	システムのハードウェアクロックを読み取ったり設定したりします。 このハードウェアクロックはリアルタイムクリック (Real-Time Clock; RTC) または BIOS (Basic Input-Output System) クロックとも呼ばれます。
i386	setarch へのシンボリックリンク。
ionice	プログラムに対する I/O スケジュールクラスとスケジュール優先度を取得または設定します。
ipcmk	さまざまな IPC リソースを生成します。
ipcrm	指定された IPC (Inter-Process Communication) リソースを削除します。
ipcs	IPC のステータス情報を提供します。
irqtop	カーネルのインターラプトカウンター情報を top(1) スタイルにより表示します。
isosize	iso9660 ファイルシステムのサイズを表示します。
kill	プロセスに対してシグナルを送信します。
last	ユーザーの最新のログイン（ログアウト）の情報を表示します。 これは /var/log/wtmp ファイルの終わりから調べているものです。 またシステムブート、シャットダウン、ランレベルの変更時の情報も表示します。
lastb	ログインに失敗した情報を表示します。 これは /var/log/btmp に記録されています。
lattach	シリアル回線 (serial line) に対して回線規則 (line discipline) を割り当てます。
linux32	setarch へのシンボリックリンク。
linux64	setarch へのシンボリックリンク。
logger	指定したメッセージをシステムログに出力します。
look	指定された文字列で始まる行を表示します。
losetup	ループデバイス (loop device) の設定と制御を行います。
lsblk	ロックデバイスのすべて、あるいは指定されたものの情報を、木構造のような形式で一覧表示します。
lscpu	CPU アーキテクチャーの情報を表示します。
lsipc	システムに搭載されている IPC 機能の情報を表示します。
lsirq	カーネルのインターラプトカウンター情報を表示します。
lslocks	ローカルのシステムロックを一覧表示します。
lslogins	ユーザー、グループ、システムアカウントの情報を一覧表示します。
lsmem	オンライン状態にある利用可能なメモリ範囲を一覧表示します。
lsns	名前空間を一覧表示します。
mcookie	xauth のためのマジッククッキー (128ビットのランダムな16進数値) を生成します。
mesg	現在のユーザーの端末に対して、他のユーザーがメッセージ送信できるかどうかを制御します。
mkfs	デバイス上にファイルシステムを構築します。 (通常はハードディスクパーティションに対して行います。)
mkfs.bfs	SCO (Santa Cruz Operations) の bfs ファイルシステムを生成します。
mkfs.cramfs	cramfs ファイルシステムを生成します。
mkfs.minix	Minix ファイルシステムを生成します。
mkswap	指定されたデバイスまたはファイルをスワップ領域として初期化します。
more	テキストを一度に一画面分だけ表示するフィルタープログラム。
mount	ファイルシステムツリー内の特定のディレクトリを、指定されたデバイス上のファイルシステムに割り当てます。

mountpoint	ディレクトリがマウントポイントであるかどうかをチェックします。
namei	指定されたパスに存在するシンボリックリンクを表示します。
nsenter	他プロセスの名前空間にてプログラムを実行します。
partx	カーネルに対して、ディスク上にパーティションが存在するか、何番が存在するかを伝えます。
pivot_root	指定されたファイルシステムを、現在のプロセスに対する新しいルートファイルシステムにします。
prlimit	プロセスが利用するリソースの限界値を取得または設定します。
readprofile	カーネルのプロファイリング情報を読み込みます。
rename	指定されたファイルの名称を変更します。
renice	実行中のプロセスの優先度を変更します。
resizepart	Linux カーネルに対してパーティションのリサイズを指示します。
rev	指定されたファイル内の行の並びを入れ替えます。
rkfill	ワイアレスデバイスの有効化、無効化を行うツール。
rtcwake	指定された起動時刻までの間、システムをスリープ状態とするモードを指定します。
script	端末セッションでの出力結果の写し (typescript) を生成します。
scriptlive	タイミング情報を使って、セッションのタイプスクリプトを再実行します。
scriptreplay	タイミング情報 (timing information) を利用して、出力結果の写し (typescript) を再生します。
setarch	新しいプログラム環境にて、表示されるアーキテクチャーを変更します。 また設定フラグ (personality flag) の設定も行います。
setsid	新しいセッションで指定されたプログラムを実行します。
setterm	端末の属性を設定します。
sfdisk	ディスクパーティションテーブルを操作します。
sulogin	root ユーザーでのログインを行います。 通常は init が起動するもので、システムがシングルユーザー mode で起動する際に利用されます。
swablabel	スワップ領域の UUID とラベルを変更します。
swapoff	ページングまたはスワッピングに利用しているデバイスまたはファイルを無効にします。
swapon	ページングまたはスワッピングに利用しているデバイスまたはファイルを有効にします。 また現在利用されているデバイスまたはファイルを一覧表示します。
switch_root	別のファイルシステムを、マウントツリーのルートとして変更します。
taskset	プロセスの CPU 親和性 (affinity) を表示または設定します。
uclampset	システムやプロセスの使用率クランプ属性を操作します。
ul	使用中の端末にて、アンダースコア文字を、エスケープシーケンスを用いた下線文字に変換するためのフィルター。
umount	システムのファイルツリーからファイルシステムを切断します。
uname26	setarch へのシンボリックリンク。
unshare	上位の名前空間とは異なる名前空間にてプログラムを実行します。
utmpdump	指定されたログインファイルの内容を分かりやすい書式で表示します。
uuidd	UUID ライブリから利用されるデーモン。 時刻情報に基づく UUID を、安全にそして一意性を確保して生成します。
uuidgen	新しい UUID を生成します。 生成される UUID は当然、他に生成されている UUID とは異なり、自他システムでも過去現在にわたってもユニークなものです。
uuidparse	ユニークな識別子を解析するためのユーティリティ。
wall	ファイルの内容、あるいはデフォルトでは標準入力から入力された内容を、現在ログインしている全ユーザーの端末上に表示します。
wdctl	ハードウェアの watchdog ステータスを表示します。
whereis	指定されたコマンドの実行モジュール、ソース、man ページの場所を表示します。
wipefs	ファイルシステムのシグニチャーをデバイスから消去します。
x86_64	setarch へのシンボリックリンク。
zramctl	zram (compressed ram disk) デバイスを初期化し制御するためのプログラム。

libblkid	デバイスの識別やトークンの抽出を行う処理ルーチンを提供します。
libfdisk	パーティションテーブルを操作する処理ルーチンを提供します。
libmount	ブロックデバイスのマウントとアンマウントに関する処理ルーチンを提供します。
libsmartcols	タブラー形式 (tabular form) による画面出力を補助する処理ルーチンを提供します。
libuuid	ローカルシステム内だけに限らずアクセスされるオブジェクトに対して、一意性が保証された識別子を生成する処理ルーチンを提供します。

8.77. E2fsprogs-1.46.5

e2fsprogs パッケージは ext2 ファイルシステムを扱うユーティリティを提供します。これは同時に ext3、ext4 ジャーナリングファイルシステムもサポートします。

概算ビルド時間: 回転式ディスクで 4.4 SBU、SSD で 1.2 SBU
 必要ディスク容量: 94 MB

8.77.1. E2fsprogs のインストール

e2fsprogs パッケージは、ソースディレクトリ内にサブディレクトリを作つてビルドすることが推奨されています。

```
mkdir -v build
cd      build
```

e2fsprogs をコンパイルするための準備をします。

```
../configure --prefix=/usr          \
             --sysconfdir=/etc        \
             --enable-elf-shlibs     \
             --disable-libblkid      \
             --disable-libuuid       \
             --disable-uuid          \
             --disable-fsck
```

configure オプションの意味

--enable-elf-shlibs

このオプションは、本パッケージ内のプログラムが利用する共有ライブラリを生成します。

--disable-*

このオプションは libuuid ライブラリ、libblkid ライブラリ、uuid デーモン、fsck ラッパーをいずれもビルドせずにインストールしないようにします。これらは util-linux パッケージによって、より最新のものがインストールされています。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストするには以下を実行します。

```
make check
```

u_direct_io という 1 つのテストが、システムによっては失敗する場合があります。

パッケージをインストールします。

```
make install
```

不要なスタティックライブラリを削除します。

```
rm -fv /usr/lib/{libcom_err,libe2p,libext2fs,libss}.a
```

本パッケージは gzip 圧縮された.info ファイルをインストールしますが、共通的な dir を更新しません。そこで以下のコマンドにより gzip ファイルを解凍した上で dir ファイルを更新します。

```
gunzip -v /usr/share/info/libext2fs.info.gz
install-info --dir-file=/usr/share/info/dir /usr/share/info/libext2fs.info
```

必要なら、以下のコマンドを実行して追加のドキュメントをインストールします。

```
makeinfo -o      doc/com_err.info .. /lib/et/com_err.texinfo
install -v -m644 doc/com_err.info /usr/share/info
install-info --dir-file=/usr/share/info/dir /usr/share/info/com_err.info
```

8.77.2. E2fsprogs の構成

インストールプログラム:	badblocks, chattr, compile_et, debugfs, dumpe2fs, e2freefrag, e2fsck, e2image, e2label, e2mmpstatus, e2scrub, e2scrub_all, e2undo, e4crypt, e4defrag, filefrag, fsck.ext2, fsck.ext3, fsck.ext4, logsave, lsattr, mke2fs, mkfs.ext2, mkfs.ext3, mkfs.ext4, mklost+found, resize2fs, tune2fs
インストールライブラリ:	libcom_err.so, libe2p.so, libext2fs.so, libss.so
インストールディレクトリ:	/usr/include/e2p, /usr/include/et, /usr/include/ext2fs, /usr/include/ss, /usr/lib/e2fsprogs, /usr/share/et, /usr/share/ss

概略説明

badblocks	デバイス（通常はディスクパーティション）の不良ブロックを検索します。
chattr	ext2 ファイルシステム上のファイル属性を変更します。 ext2 ファイルシステムのジャーナリング版である ext3 ファイルシステムにおいても変更を行います。
compile_et	エラーテーブルコンパイラ。 これはエラーコード名とメッセージの一覧を、 com_err ライブラリを利用する C ソースコードとして変換するものです。
debugfs	ファイルシステムデバッガー。 これは ext2 ファイルシステムの状態を調査し変更することができます。
dumpe2fs	指定されたデバイス上にあるファイルシステムについて、スーパーブロックの情報とロックグループの情報を表示します。
e2freefrag	フリースペースのフラグメント情報を表示します。
e2fsck	ext2 ファイルシステムと ext3 ファイルシステムをチェックし、必要なら修復を行うことができます。
e2image	ext2 ファイルシステムの重要なデータをファイルに保存します。
e2label	指定されたデバイス上にある ext2 ファイルシステムのラベルを表示または変更します。
e2mmpstatus	ext4 ファイルシステムの MMP ステータスをチェックします。
e2scrub	マウントされている ext[234] ファイルシステムの内容をチェックします。
e2scrub_all	マウントされている ext[234] ファイルシステムのエラーをチェックします。
e2undo	デバイス上にある ext2/ext3/ext4 ファイルシステムの undo ログを再実行します。 これは e2fsprogs プログラムが処理に失敗した際に undo を行うこともできます。
e4crypt	ext4 ファイルシステムの暗号化ユーティリティー。
e4defrag	ext4 ファイルシステムにたいするオンラインのデフラグプログラム。
filefrag	特定のファイルがどのようにデフラグ化しているかを表示します。
fsck.ext2	デフォルトでは ext2 ファイルシステムをチェックします。 これは e2fsck へのハードリンクです。
fsck.ext3	デフォルトでは ext3 ファイルシステムをチェックします。 これは e2fsck へのハードリンクです。
fsck.ext4	デフォルトでは ext4 ファイルシステムをチェックします。 これは e2fsck へのハードリンクです。
logsave	コマンドの出力結果をログファイルに保存します。
lsattr	ext2 ファイルシステム上のファイル属性を一覧表示します。
mk_cmds	コマンド名とヘルプメッセージの一覧を、サブシステムライブラリ libss を利用する C ソースコードとして変換するものです。
mke2fs	指定されたデバイス上に ext2 ファイルシステム、または ext3 ファイルシステムを生成します。
mkfs.ext2	デフォルトでは ext2 ファイルシステムを生成します。 これは mke2fs へのハードリンクです。
mkfs.ext3	デフォルトでは ext3 ファイルシステムを生成します。 これは mke2fs へのハードリンクです。
mkfs.ext4	デフォルトでは ext4 ファイルシステムを生成します。 これは mke2fs へのハードリンクです。
mklost+found	ext2 ファイルシステム上に lost+found ディレクトリを作成します。 これはそのディレクトリ内にあらかじめディスクブロックを割り当てておくことにより e2fsck コマンド処理を軽減させます。
resize2fs	ext2 ファイルシステムを拡張または縮小するために利用します。
tune2fs	ext2 ファイルシステム上にて調整可能なシステムパラメーターを調整します。
libcom_err	共通的なエラー表示ルーチン。

libe2p	dumpe2fs、chattr、lsattr の各コマンドが利用します。
libext2fs	ユーザーレベルのプログラムが ext2 ファイルシステムを操作可能とするためのルーチンを提供します。
libss	debugfs コマンドが利用します。

8.78. デバッグシンボルについて

プログラムやライブラリの多くは、デフォルトではデバッグシンボルを含めてコンパイルされています。（gcc の `-g` オプションが用いられています。）デバッグ情報を含めてコンパイルされたプログラムやライブラリは、デバッグ時にメモリアドレスが参照できるだけでなく、処理ルーチンや変数の名称も知ることができます。

しかしそういったデバッグ情報は、プログラムやライブラリのファイルサイズを極端に大きくします。以下にデバッグシンボルが占める割合の例を示します。

- デバッグシンボルを含んだ bash の実行ファイル： 1200 KB
- デバッグシンボルを含まない bash の実行ファイル： 480 KB
- デバッグシンボルを含んだ Glibc と GCC の関連ファイル（`/lib` と `/usr/lib`）： 87 MB
- デバッグシンボルを含まない Glibc と GCC の関連ファイル： 16MB

利用するコンパイラーや C ライブラリの違いによって、生成されるファイルのサイズは異なります。デバッグシンボルを含む、あるいは含まないサイズを比較した場合、その差は 2倍から 5倍の違いがあります。

プログラムをデバッグするユーザーはそう多くはありません。デバッグシンボルを削除すればディスク容量はかなり節減できます。次節ではプログラムやライブラリからデバッグシンボルを取り除く（`strip` する）方法を示します。

8.79. ストリップ

本節での作業を行うかどうかは任意です。対象ユーザーがプログラマーではなく、プログラム類をデバッグするような使い方をしないのであれば、実行ファイルやライブラリに含まれるデバッグシンボルや不要シンボルを削除しても構いません。そうすれば 2 GB ものサイズ削減を図ることができます。たとえデバッグできなくなっても困らないはずです。

以下に示すコマンドは簡単なものです。ただし入力つづりは簡単に間違いややすいので、もし誤った入力をするとシステムを利用不能にしてしまいます。したがって `strip` コマンドを実行する前に、現時点の LFS システムのバックアップを取っておくことをお勧めします。

`strip` コマンドに `--strip-unneeded` オプションをつけて実行すると、バイナリやライブラリからデバッグシンボルをすべて削除します。そして（スタティックライブラリ向けの）リンカーや（動的リンクバイナリあるいは共有ライブラリ向けの）ダイナミックリンカーにとって不要なシンボルテーブル項目もすべて削除します。

ライブラリのいくつかについて、デバッグシンボルを持つような別ファイルを生成します。このデバッグ情報を必要とするのは BLFS における `valgrind` または `gdb` の縮退テストを実施するのに必要であるからです。

なお `strip` は、処理しているバイナリファイルやライナリファイルを上書きします。そのファイルにあるコードやデータを利用しているプロセスは、これによってクラッシュすることがあります。仮に `strip` 自体を実行しているプロセスがその影響を受けたとすると、ストリップ最中のバイナリやライナリは壊れてしまうかもしれません。これが起きたら、システムが完全に利用不能となりかねません。これを避けるため、ライナリやバイナリのいくつかを `/tmp` にコピーして、そこでストリップした上で、`install` コマンドを使って、元の場所にインストールし直すことにします。ここで `install` コマンドを利用する意味については、「アップグレードに関する問題」に示す関連項目を参照してください。



注記

ELF ローダーの名前は、64 ビットシステムでは ld-linux-x86-64.so.2、32 ビットシステムでは ld-linux.so.2 です。後述の手順では、現行のアーキテクチャーに合わせて適切な名前を選ぶようにしています。ただし「g」で終わるものは除いています。そのようなものはすでにコマンド実行されているからです。

```

save_usrlib=$(cd /usr/lib; ls ld-linux*[^g])
    libc.so.6
    libthread_db.so.1
    libquadmath.so.0.0.0
    libstdc++.so.6.0.30
    libitm.so.1.0.0
    libatomic.so.1.2.0"

cd /usr/lib

for LIB in $save_usrlib; do
    objcopy --only-keep-debug $LIB $LIB.dbg
    cp $LIB /tmp/$LIB
    strip --strip-unneeded /tmp/$LIB
    objcopy --add-gnu-debuglink=$LIB.dbg /tmp/$LIB
    install -vm755 /tmp/$LIB /usr/lib
    rm /tmp/$LIB
done

online_usrbin="bash find strip"
online_usrlib="libbfd-2.39.so
                libhistory.so.8.1
                libncursesw.so.6.3
                libm.so.6
                libreadline.so.8.1
                libz.so.1.2.12
                $(cd /usr/lib; find libnss*.so* -type f)"

for BIN in $online_usrbin; do
    cp /usr/bin/$BIN /tmp/$BIN
    strip --strip-unneeded /tmp/$BIN
    install -vm755 /tmp/$BIN /usr/bin
    rm /tmp/$BIN
done

for LIB in $online_usrlib; do
    cp /usr/lib/$LIB /tmp/$LIB
    strip --strip-unneeded /tmp/$LIB
    install -vm755 /tmp/$LIB /usr/lib
    rm /tmp/$LIB
done

for i in $(find /usr/lib -type f -name '*.so*' ! -name '*dbg') \
        $(find /usr/lib -type f -name '*.a') \
        $(find /usr/{bin,sbin,libexec} -type f); do
    case "$online_usrbin $online_usrlib $save_usrlib" in
        *$(basename $i)* )
            ;;
        * ) strip --strip-unneeded $i
            ;;
    esac
done

unset BIN LIB save_usrlib online_usrbin online_usrlib

```

ファイルフォーマットが認識できないファイルがいくつも警告表示されますが、無視して構いません。この警告は、処理したファイルが実行モジュールではなくスクリプトファイルであることを示しています。

8.80. 仕切り直し

テストを通じて生成された不要なファイル等を削除します。

```
rm -rf /tmp/*
```

また /usr/lib ディレクトリと /usr/libexec ディレクトリには、拡張子が .la であるファイルがいくつかインストールされます。これは "libtool アーカイブ" ファイルというものであり、すでに説明しているように、これは静态ライブラリとリンクする際に利用します。これらはダイナミック共有ライブラリを用いるとき、そして特に autotools 以外のビルドシステムを利用するときには不要であり、潜在的には支障を及ぼします。削除する場合は以下を実行します。

```
find /usr/lib /usr/libexec -name \*.la -delete
```

libtool アーカイブファイルについての詳細は BLFS の節 "About Libtool Archive (.la) files" を参照してください。

第 6 章と第 7 章においてビルドしたコンパイラは、部分的にしかインストールしていませんが、これ以降は必要としません。そこで以下によって削除します。

```
find /usr -depth -name $(uname -m)-lfs-linux-gnu\* | xargs rm -rf
```

最後に、本章のはじめに生成した 'tester' ユーザー アカウントを削除します。

```
userdel -r tester
```

第9章 システム設定

9.1. はじめに

本章ではシステム設定ファイルと systemd サービスについて説明します。 まずはネットワークの設定に必要となる一般的な設定ファイルです。

- ・ 「全般的なネットワークの設定」
- ・ 「ホスト名の設定」
- ・ 「/etc/hosts ファイルの設定」

次にデバイスを適切に設定するための方法について説明します。

- ・ 「デバイスとモジュールの扱いについて」
- ・ 「デバイスの管理」

そしてシステムクロックとキーボードレイアウトです。

- ・ 「システムクロックの設定」
- ・ 「Linux コンソールの設定」

またユーザーログの出力に利用されるスクリプトや設定ファイルについて触れます。

- ・ 「システムロケールの設定」
- ・ 「/etc/inputrc ファイルの生成」

最後に systemd の処理設定です。

- ・ 「Systemd の利用と設定」

9.2. 全般的なネットワークの設定

本節はネットワークカードを設定する場合にのみ作業を行っていきます。

9.2.1. ネットワークインターフェースの設定ファイル

systemd はバージョン 209 から、ネットワーク設定を行うデーモン `systemd-networkd` を提供するようになりました。 このデーモンが基本的なネットワーク設定を行います。 さらにバージョン 213 からは、DNS 名前解決を固定的に `/etc/resolv.conf` ファイルによって行っていたものが `systemd-resolved` により行うよう変更されています。 いずれのデーモンもデフォルトで有効となっています。



注記

If you will not use `systemd-networkd` for network configuration (for example, when the system is not connected to network, or you want to use another utility like NetworkManager for network configuration), disable a service to prevent an error message during boot:

```
sudo systemctl disable systemd-networkd-wait-online
```

`systemd-networkd` (および `systemd-resolved`) に対する設定ファイルは `/usr/lib/systemd/network` ディレクトリまたは `/etc/systemd/network` ディレクトリに置きます。 `/usr/lib/systemd/network` ディレクトリにある設定ファイルよりも `/etc/systemd/network` ディレクトリにある設定ファイルの方が優先されます。 設定ファイルには `.link`, `.netdev`, `.network` の三種類があります。 これらの説明や設定例については `man` ページ `systemd-link(5)`, `systemd-netdev(5)`, `systemd-network(5)` を参照してください。

9.2.1.1. ネットワークデバイスの命名

通常 Udev は、システムの物理的な特性に従った `enp2s1` などのような名称をネットワークカードインターフェースに割り当てます。 インタフェース名が分からない場合は、システム起動直後に `ip link` を実行して確認してください。



注記

インターフェース名は、システム上で起動している udev デーモンの実装や設定に依存します。 LFS における udev デーモン (「Systemd-251」においてインストール) は、LFS システムを起動させるまでは動作しません。 したがってホストディストリビューションにおいて各コマンドを実行しても、LFS 上において用いられるインターフェース名が何であるのかは特定できません。 それは chroot 環境内においても同じことです。

システムにおいて、接続タイプに応じたネットワークインターフェースは、それぞれに 1 つであるのが通常です。 例えれば有線接続のインターフェース名は、従来より eth0 とされます。 また無線接続の場合は wifi0 や wlan0 といった名前が用いられます。

ネットワークインターフェース名を従来どおりとしたり、カスタマイズしたりするには、以下に示す 3 通りの方法があります。

- udev のデフォルトポリシーに対する .link ファイルをマスクして無効にします。

```
ln -s /dev/null /etc/systemd/network/99-default.link
```

- インターフェースに対する名前として "internet0", "dmz0", "lan0" といった命名スキームを自分で定めます。 これを行うには /etc/systemd/network/ ディレクトリに .link ファイルを生成し、必要なインターフェースに対して具体的な名前、つまりより良い命名スキームを定めます。 例えば以下のようにします。

```
cat > /etc/systemd/network/10-ether0.link << "EOF"
[Match]
# Change the MAC address as appropriate for your network device
MACAddress=12:34:45:78:90:AB

[Link]
Name=ether0
EOF
```

詳細は man ページ `systemd.link(5)` を確認してください。

- /boot/grub/grub.cfg ファイル内において、カーネルの設定行に `net.ifnames=0` を追加します。

9.2.1.2. 固定 IP アドレスの設定

以下のコマンドは固定IPアドレスの設定を行う設定ファイルを生成するものです。 (`systemd-networkd` と `systemd-resolved` を利用します。)

```
cat > /etc/systemd/network/10-eth-static.network << "EOF"
[Match]
Name=<network-device-name>

[Network]
Address=192.168.0.2/24
Gateway=192.168.0.1
DNS=192.168.0.1
Domains=<Your Domain Name>
EOF
```

複数のDNSサーバーを有している場合は、DNS設定行を複数指定することができます。 固定的に `/etc/resolv.conf` ファイルを利用する場合は DNS および Domains の設定行は記載しません。

9.2.1.3. DHCP 設定

以下のコマンドは IPv4 DHCP 設定を行う設定ファイルを生成します。

```
cat > /etc/systemd/network/10-eth-dhcp.network << "EOF"
[Match]
Name=<network-device-name>

[Network]
DHCP=ipv4

[DHCP]
UseDomains=true
EOF
```

9.2.2. /etc/resolv.conf ファイルの生成

インターネットへの接続を行う場合には、ドメイン名サービス (domain name service; DNS) による名前解決を必要とします。これによりインターネットドメイン名を IP アドレスに、あるいはその逆の変換を行います。これを行うには ISP やネットワーク管理者が指定する DNS サーバーの割り振り IP アドレスを /etc/resolv.conf ファイルに設定します。

9.2.2.1. systemd 解決による設定



注記

ネットワークインターフェース設定を systemd-resolved とは別 の方法（例えば ppp など）で行う場合、または別のタイプのローカルリゾルバー（local resolver；たとえば bind や dnsmasq や unbound など）や /etc/resolv.conf を生成するソフトウェア（つまり systemd が提供するものでない resolvconf プログラム）などを用いる場合、systemd-resolved サービスは用いてはなりません。

systemd-resolved を無効にするには、以下のコマンドを実行します。

```
sudo systemctl disable systemd-resolved
```

DNS 設定に systemd-resolved を用いると /run/systemd/resolve/resolv.conf ファイルが生成されます。また /etc/resolv.conf が存在していない場合は、systemd-resolved が /run/systemd/resolve/stub-resolv.conf へのシンボリックリンクとして生成します。その場合は /etc/resolv.conf を手動で生成する必要はありません。

9.2.2.2. スタティックな resolv.conf 設定

スタティックな /etc/resolv.conf ファイルを必要とする場合は、以下のコマンドにより生成します。

```
cat > /etc/resolv.conf << "EOF"
# Begin /etc/resolv.conf

domain <Your Domain Name>
nameserver <IP address of your primary nameserver>
nameserver <IP address of your secondary nameserver>

# End /etc/resolv.conf
EOF
```

domain ステートメントは省略するか、search ステートメントで代用することが可能です。詳しくは resolv.conf の man ページを参照してください。

<IP address of the nameserver>（ネームサーバーの IP アドレス）の部分には、DNS が割り振る適切な IP アドレスを記述します。IP アドレスの設定は複数行う場合もあります。（代替構成を必要とするなら二次サーバーを設けることでしょう。）一つのサーバーのみで十分な場合は、二つめの nameserver の行は削除します。ローカルネットワークにおいてはルーターの IP アドレスを設定することになるでしょう。これ以外の方法として、IP アドレスに Google Public DNS サービスをネームサーバーとして利用する方法もあります。



注記

Google Public IPv4 DNS アドレスは 8.8.8.8 と 8.8.4.4 です。また IPv6 では 2001:4860:4860::8888 と 2001:4860:4860::8844 です。

9.2.3. ホスト名の設定

システム起動時には /etc/hostname が参照されてシステムのホスト名が決定されます。

以下のコマンドを実行することで /etc/hostname ファイルを生成するとともに、ホスト名を設定します。

```
echo "<lfs>" > /etc/hostname
```

<lfs> の部分は、各システムにおいて定めたい名称に置き換えてください。ここでは完全修飾ドメイン名 (Fully Qualified Domain Name; FQDN) は指定しないでください。その情報は /etc/hosts ファイルにて行います。

9.2.4. /etc/hosts ファイルの設定

完全修飾ドメイン名 (Fully Qualified Domain Name; FQDN)、エイリアスの各設定は /etc/hosts ファイルにて行います。 固定アドレスを用いる場合は IPアドレスを定める必要があります。 ホストファイルの文法は以下のとおりです。

```
IP_address myhost.example.org aliases
```

インターネットに公開されていないコンピューターである場合（つまり登録ドメインであったり、あらかじめ IP アドレスが割り当てられていたりする場合。 普通のユーザーはこれを持ちません。）IP アドレスはプライベートネットワーク IP アドレスの範囲で指定します。 以下がそのアドレス範囲です。

Private Network Address Range	Normal Prefix
10.0.0.1 - 10.255.255.254	8
172.x.0.1 - 172.x.255.254	16
192.168.y.1 - 192.168.y.254	24

x は 16 から 31、y は 0 から 255 の範囲の数値です。

IP アドレスの例は 192.168.1.1 となります。 また FQDN の例としては lfs.example.org となります。

ネットワークカードを用いない場合でも FQDN の記述は行ってください。 MTA のような特定のプログラムが動作する際に必要となることがあるからです。

以下のようにして /etc/hosts ファイルを生成します。

```
cat > /etc/hosts << "EOF"
# Begin /etc/hosts

127.0.0.1 localhost.localdomain localhost
127.0.1.1 <FQDN> <HOSTNAME>
<192.168.0.2> <FQDN> <HOSTNAME> [alias1] [alias2] ...
::1      localhost ip6-localhost ip6-loopback
ff02::1  ip6-allnodes
ff02::2  ip6-allrouters

# End /etc/hosts
EOF
```

<192.168.0.2>, <FQDN>, <HOSTNAME> の部分は利用状況に応じて書き換えてください。（ネットワーク管理者から IP アドレスを指定されている場合や、既存のネットワーク環境に接続する場合など。）エイリアスの記述は省略しても構いません。 また <192.168.0.2> の行も、DHCP や IPv6 による自動設定による接続を行う場合には省略可能です。

::1 という項目は IPv6 における 127.0.0.1 に相当し、IPv6 のループバックインターフェースを表します。
127.0.1.1 は FQDN に対して特別に割り当てられたループバック項目です。

9.3. デバイスとモジュールの扱いについて

第 8 章の systemd のビルトを通じて Udev パッケージをインストールしました。 このパッケージがどのように動作するかの詳細を説明する前に、デバイスを取り扱うかつての方法について順を追って説明していきます。

Linux システムは一般に、スタティックなデバイス生成方法を採用していました。 この方法では /dev のもとに膨大な量の（場合によっては何千にもおよぶ）デバイスノードが生成されます。 実際にハードウェアデバイスが存在するかどうかに関わらずです。 これは MAKEDEV スクリプトを通じて生成されます。 このスクリプトからは mknod プログラムが呼び出されますが、その呼び出しは、この世に存在するありとあらゆるデバイスのメジャー/マイナー番号を用いて行われます。

udev による方法では、カーネルが検知したデバイスだけがデバイスノードとなります。 デバイスノードはシステムが起動するたびに生成されることになるので、 devtmpfs ファイルシステム上に保存されます。（devtmpfs は仮想ファイルシステムであり、メモリ上に置かれます。）デバイスノードの情報はさほど多くないので、消費するメモリ容量は無視できるほど少ないものです。

9.3.1. 開発経緯

2000年2月に新しいファイルシステム devfs がカーネル 2.3.46 に導入され、2.4系の安定版カーネルにて利用できるようになりました。 このファイルシステムはカーネルのソース内に含まれ実現されていましたが、デバイスを動的に生成するこの手法は、主要なカーネル開発者の十分な支援は得られませんでした。

`devfs` が採用した手法で問題になるのは、主にデバイスの検出、生成、命名の方法です。特にデバイスの命名方法がおそらく最も重大な問題です。一般的に言えることとして、デバイス名が変更可能であるならデバイス命名の規則はシステム管理者が考えることであって、特定の開発者に委ねるべきことではありません。また `devfs` にはその設計に起因した競合の問題があるため、根本的にカーネルを修正しなければ解消できる問題ではありません。そこで長い間、保守されることがなかったために非推奨 (deprecated) として位置づけられ、最終的に 2006年6月にはカーネルから取り除かれました。

開発版の 2.5 系カーネルと、後にリリースされた安定版のカーネル 2.6 系を経て、新しい仮想ファイルシステム `sysfs` が登場しました。`sysfs` が実現したのは、システムのハードウェア設定をユーザー空間のプロセスとして表に出したことです。ユーザー空間での設定を可視化したことによって `devfs` が為していたことを、ユーザー空間にて開発することが可能になったわけです。

9.3.2. Udev の実装

9.3.2.1. Sysfs ファイルシステム

`sysfs` ファイルシステムについては上で簡単に触れました。`sysfs` はどのようにしてシステム上に存在するデバイスを知るのか、そしてどのデバイス番号を用いるべきなのか。そこが知りたいところです。カーネルに直接組み込まれて構築されたドライバーの場合は、対象のオブジェクトをカーネルが検出し、そのオブジェクトを `sysfs` (内部的には `devtmpfs`) に登録します。モジュールとしてコンパイルされたドライバーの場合は、その登録がモジュールのロード時に行われます。`sysfs` ファイルシステムが (`/sys` に) マウントされると、ドライバーによって `sysfs` に登録されたデータは、ユーザー空間のプロセスと (デバイスノードの修正を含む) さまざまな処理を行う `udevd` にて利用可能となります。

9.3.2.2. デバイスノードの生成

デバイスファイルはカーネルによって、`devtmpfs` ファイルシステム上に作り出されます。デバイスノードを登録しようとするドライバーは (デバイスコア経由で) `devtmpfs` を通じて登録を行います。`devtmpfs` のインスタンスが `/dev` 上にマウントされると、デバイスノードには固定的な名称、パーミッション、所有者の情報が設定され生成されます。

この後にカーネルは `udevd` に対して `uevent` を送信します。`udevd` は、`/etc/udev/rules.d`, `/usr/lib/udev/rules.d`, `/run/udev/rules.d` の各ディレクトリ内にあるファイルの設定ルールに従って、デバイスノードに対するシンボリックリンクを生成したり、パーミッション、所有者、グループの情報を変更したり、内部的な `udevd` データベースの項目を修正したりします。

上の三つのディレクトリ内にて指定されるルールは番号づけされており、三つのディレクトリの内容は一つにまとめられます。デバイスノードの生成時に `udevd` がそのルールを見つけ出せなかつた時は、`devtmpfs` が利用される際の初期のパーミッションと所有者の情報のままとなります。

9.3.2.3. モジュールのロード

モジュールとしてコンパイルされたデバイスドライバーの場合、デバイス名の別名が作り出されています。その別名は `modinfo` プログラムを使えば確認することができます。そしてこの別名は、モジュールがサポートするバス固有の識別子に関連づけられます。例えば `snd-fm801` ドライバーは、ベンダーID 0x1319 とデバイスID 0x0801 の PCI ドライバーをサポートします。そして「`pci:v00001319d00000801sv*sd*bc04sc01i*`」というエイリアスがあります。たいていのデバイスでは、`sysfs` を通じてドライバーがデバイスを扱うものであり、ドライバーのエイリアスをバスドライバーが提供します。`/sys/bus/pci/devices/0000:00:0d.0/modalias` ファイルならば「`pci:v00001319d00000801sv00001319sd00001319bc04sc01i00`」という文字列を含んでいるはずです。`udev` が提供するデフォルトの生成規則によって `udevd` から `/sbin/modprobe` が呼び出されることになり、その際には `uevent` に関する環境変数 `MODALIAS` の設定内容が利用されます。(この環境変数の内容は `sysfs` 内の `modalias` ファイルの内容と同じはずです。) そしてワイルドカードが指定されているならそれが展開された上で、エイリアス文字列に合致するモジュールがすべてロードされることになります。

上の例で `forte` ドライバーがあったとすると、`snd-fm801` の他にそれもロードされてしまいます。これは古いものでありロードされて欲しくないものです。不要なドライバーのロードを防ぐ方法については後述しているので参照してください。

カーネルは、ネットワークプロトコル、ファイルシステム、NLS サポートといった各種モジュールも、要求に応じてロードすることもできます。

9.3.2.4. ホットプラグ可能な/ダイナミックなデバイスの扱い

USB (Universal Serial Bus) で MP3 プレイヤーを接続しているような場合、カーネルは現在そのデバイスが接続されているということを認識しており、`uevent` が生成済の状態にあります。その `uevent` は上で述べたように `udevd` が取り扱うことになります。

9.3.3. モジュールロードとデバイス生成の問題

自動的にデバイスが生成される際には、いくつか問題が発生します。

9.3.3.1. カーネルモジュールが自動的にロードされない問題

`udev` がモジュールをロードできるためには、バス固有のエイリアスがあって、バスドライバーが `sysfs` に対して適切なエイリアスを提供していることが必要です。 そうでない場合は、別の手段を通じてモジュールのロードを仕組まなければなりません。 Linux-5.19.2 においての `udev` は、INPUT、IDE、PCI、USB、SCSI、SERIO、FireWire の各デバイスに対するドライバーをロードします。 それらのデバイスドライバーが適切に構築されているからです。

目的のデバイスドライバーが `udev` に対応しているかどうかは、`modinfo` コマンドに引数としてモジュール名を与えて実行します。 `/sys/bus` ディレクトリ配下にあるそのデバイス用のディレクトリを見つけ出して、`modalias` ファイルが存在しているかどうかを見るなどで分かります。

`sysfs` に `modalias` ファイルが存在しているなら、そのドライバーはデバイスをサポートし、デバイスとの直接のやり取りが可能であることを表します。 ただしエイリアスを持っていなければ、それはドライバーのバグです。 その場合は `udev` に頼ることなくドライバーをロードするしかありません。 そしてそのバグが解消されるのを待つしかありません。

`/sys/bus` ディレクトリ配下の対応するディレクトリ内に `modalias` ファイルがなかったら、これはカーネル開発者がそのバス形式に対する `modalias` のサポートをまだ行っていないことを意味します。 Linux-5.19.2 では ISA バスがこれに該当します。 最新のカーネルにて解消されることを願うしかありません。

`Udev` は `snd-pcm-oss` のような「ラッパー (wrapper)」ドライバーや `loop` のような、現実のハードウェアに対するものではないドライバーは、ロードすることができません。

9.3.3.2. カーネルモジュールが自動的にロードされず `udev` もロードしようとしない問題

「ラッパー (wrapper)」モジュールが単に他のモジュールの機能を拡張するだけのものであるなら（例えば `snd-pcm-oss` は `snd-pcm` の機能拡張を行うもので、OSS アプリケーションに対してサウンドカードを利用可能なものにするだけのものであるため）`modprobe` の設定によってラッパーモジュールを先にロードし、その後でラップされるモジュールがロードされるようにします。 これは以下のように、対応する `/etc/modprobe.d/<filename>.conf` ファイル内にて「`softdep`」の記述行を加えることで実現します。

```
softdep snd-pcm post: snd-pcm-oss
```

「`softdep`」コマンドは `pre:` を付与することもでき、あるいは `pre:` と `post:` の双方を付与することもできます。 その記述方法や機能に関する詳細は `man` ページ `modprobe.d(5)` を参照してください。

問題のモジュールがラッパーモジュールではなく、単独で利用できるものであれば、`modules` ブートスクリプトを編集して、システム起動時にこのモジュールがロードされるようにします。 これは `/etc/sysconfig/modules` ファイルにて、そのモジュール名を単独の行に記述することで実現します。 この方法はラッパーモジュールに対しても動作しますが、この場合は次善策となります。

9.3.3.3. Udev が不必要的モジュールをロードする問題

不必要的モジュールはこれをビルドしないことにするか、あるいは `/etc/modprobe.d/blacklist.conf` ファイルにブラックリスト (blacklist) として登録してください。 例えば `forte` モジュールをブラックリストに登録するには以下のようになります。

```
blacklist forte
```

ブラックリストに登録されたモジュールは `modprobe` コマンドを使えば手動でロードすることもできます。

9.3.3.4. Udev が不正なデバイスを生成する、または誤ったシンボリックリンクを生成する問題

デバイス生成規則が意図したデバイスに合致していないと、この状況が往々にして起こります。 例えば生成規則の記述が不十分であった場合、SCSI ディスク（本来望んでいるデバイス）と、それに対応づいたものとしてベンダーが提供する SCSI ジェネリックデバイス（これは誤ったデバイス）の両方に生成規則が合致してしまいます。 記述されている生成規則を探し出して正確に記述してください。 その際には `udevadm info` コマンドを使って情報を確認してください。

9.3.3.5. Udev 規則が不審な動きをする問題

この問題は、一つ前に示したもののが別の症状となって現れたものかもしれません。 そのような理由でなく、生成規則が正しく `sysfs` の属性を利用しているのであれば、それはカーネルの処理タイミングに関わる問題であって、カーネルを修正すべきものです。 今の時点では、該当する `sysfs` の属性の利用を待ち受けるような生成規則を生成し、`/etc/`

`udev/rules.d/10-wait_for_sysfs.rules` ファイルにそれを追加することで対処できます。 (`/etc/udev/rules.d/10-wait_for_sysfs.rules` ファイルがなければ新規に生成します。) もしこれを実施してうまくいった場合は LFS 開発メーリングリストにお知らせください。

9.3.3.6. Udev がデバイスを生成しない問題

ここでは以下のことを前提としています。 まずドライバーがカーネル内に静的に組み入れられて構築されているか、あるいは既にモジュールとしてロードされていること。 そして udev が異なった名前のデバイスを生成していないことです。

Udev がデバイスノード生成のために必要となる情報を知るためには、カーネルドライバーが `sysfs` に対して属性データを提供していかなければなりません。 これはカーネルツリーの外に配置されるサードパーティ製のドライバーであれば当たり前のことです。 したがって `/usr/lib/udev/devices` において、適切なメジャー、マイナ番号を用いた静的なデバイスノードを生成してください。 (カーネルのドキュメント `devices.txt` またはサードパーティベンダーが提供するドキュメントを参照してください。) この静的デバイスノードは、udev によって `/dev` にコピーされます。

9.3.3.7. 再起動後にデバイスの命名順がランダムに変わってしまう問題

これは udev の設計仕様に従って発生するもので、uevent の扱いとモジュールのロードが平行して行われるためです。このために命名順が予期できないものになります。 これを「固定的に」することはできません。 ですからカーネルがデバイス名を固定的に定めるようなことを求めるのではなく、シンボリックリンクを用いた独自の生成規則を作り出して、そのデバイスの固定的な属性を用いた固定的な名前を用いる方法を取ります。 固定的な属性とは例えば、udev によってインストールされるさまざま `*_id` という名のユーティリティが output するシリアル番号などです。 設定例については「デバイスの管理」や「全般的なネットワークの設定」を参照してください。

9.3.4. 参考情報

さらに参考になるドキュメントが以下のサイトにあります：

- `devfs` のユーザー空間での実装方法 http://www.kroah.com/linux/talks/ols_2003_udev_paper/Reprint-Kroah-Hartman-OLS2003.pdf
- `sysfs` ファイルシステム <http://www.kernel.org/pub/linux/kernel/people/mochel/doc/papers/ols-2005/mochel.pdf>

9.4. デバイスの管理

9.4.1. 重複するデバイスの取り扱い方

「デバイスとモジュールの扱いについて」で説明したように、`/dev` 内に同一機能を有するデバイスがあったとすると、その検出順は本質的にランダムです。 例えば USB 接続のウェブカメラと TV チューナーがあったとして、`/dev/video0` がウェブカメラを、また `/dev/video1` がチューナーをそれぞれ参照していたとしても、システム起動後はその順が変わることがあります。 サウンドカードやネットワークカードを除いた他のハードウェアであれば、udev ルールを適切に記述することで、固定的なシンボリックリンクを作り出すことができます。 ネットワークカードについては、別途「全般的なネットワークの設定」にて説明しています。 またサウンドカードの設定方法は BLFS にて説明しています。

利用しているデバイスに上の問題の可能性がある場合（お使いの Linux ディストリビューションではそのような問題がなかったとしても）`/sys/class` ディレクトリや `/sys/block` ディレクトリ配下にある対応ディレクトリを探してください。 ビデオデバイスであれば `/sys/class/video4linux/video0` といったディレクトリです。 そしてそのデバイスを一意に特定する識別情報を確認してください。（通常はベンダー名、プロダクトID、シリアル番号などです。）

```
udevadm info -a -p /sys/class/video4linux/video0
```

シンボリックリンクを生成するルールを作ります。

```
cat > /etc/udev/rules.d/83-duplicate_devs.rules << "EOF"

# Persistent symlinks for webcam and tuner
KERNEL=="video*", ATTRS{idProduct}=="1910", ATTRS{idVendor}=="0d81", SYMLINK+="webcam"
KERNEL=="video*", ATTRS{device}=="0x036f", ATTRS{vendor}=="0x109e", SYMLINK+="tvtuner"

EOF
```

こうしたとしても `/dev/video0` と `/dev/video1` はチューナーとウェブカメラのいずれかをランダムに指示する可能性があります。（したがって直接このデバイス名を使ってはなりません。）しかしシンボリックリンク `/dev/tvtuner` と `/dev/webcam` は常に正しいデバイスを指示するようになります。

9.5. システムクロックの設定

本節ではシステムサービス `systemd-timedated` の設定方法について示します。このサービスはシステムクロックとタイムゾーンの設定を行うものです。

ハードウェアクロックが UTC に設定されているかどうか忘れた場合は `hwclock --localtime --show` を実行すれば確認できます。このコマンドにより、ハードウェアクロックに基づいた現在時刻が表示されます。その時刻が手元の時計と同じ時刻であれば、ローカル時刻として設定されているわけです。一方それがローカル時刻でなかった場合は、おそらくは UTC に設定されているからでしょう。`hwclock` によって示された時刻からタイムゾーンに応じた一定時間を加減してみてください。例えばタイムゾーンが MST であった場合、これは GMT -0700 なので、7時間加えればローカル時刻となります。

`systemd-timedated` コマンドは `/etc/adjtime` ファイルを読み込みます。そしてこのファイルの設定内容に応じて、システムクロックを UTC あるいはローカル時刻に設定します。

ハードウェアクロックをローカル時刻に設定する場合は、以下の内容により `/etc/adjtime` ファイルを生成します。

```
cat > /etc/adjtime << "EOF"
0.0 0 0.0
0
LOCAL
EOF
```

起動時に `/etc/adjtime` ファイルが存在しなかった場合、ハードウェアクロックは UTC に設定されているものとして `systemd-timedated` が判断し、このファイルを調整します。

`timedatectl` ユーティリティーを用いる方法もあります。これを使って `systemd-timedated` に対し、ハードウェアクロックが UTC かローカル時刻かを設定することができます。

```
timedatectl set-local-rtc 1
```

`timedatectl` コマンドを用いれば、システム時刻やタイムゾーンを変更することもできます。

システム時刻を変更するには以下を実行します。

```
timedatectl set-time YYYY-MM-DD HH:MM:SS
```

ハードウェアクロックも同様に設定することができます。

タイムゾーンを変更するには以下を実行します。

```
timedatectl set-timezone TIMEZONE
```

利用可能なタイムゾーンの一覧は以下を実行して確認できます。

```
timedatectl list-timezones
```



注記

`timedatectl` コマンドは chroot 環境内では動作しない点に注意してください。 `systemd` を使って LFS システムを起動したときになって、初めて利用できるものです。

9.5.1. ネットワークによる時刻同期

`systemd` のバージョン 213 からは `systemd-timesyncd` というデーモンが提供されています。これはシステム時刻とリモートの NTP サーバーの時刻同期を行うものです。

このデーモンは、NTP デーモンとして充実したものではありません。NTP デーモンに代わるものと位置づけられるものではなく、SNTP プロトコルのクライアントのみの実装であり、簡単なタスクの処理やリソースが限られているシステム上にて用いられます。

systemd のバージョン 216 からはデフォルトで systemd-timesyncd デーモンが用いられます。これを無効にしたい場合は以下を実行します。

```
sudo systemctl disable systemd-timesyncd
```

systemd-timesyncd が利用する NTP サーバーを変更するには `/etc/systemd/timesyncd.conf` ファイルを用います。

システムクロックがローカル時刻に設定されている場合、systemd-timesyncd はハードウェアクロックを更新しない点に注意してください。

9.6. Linux コンソールの設定

この節ではシステムサービス `systemd-vconsole-setup` の設定方法について説明します。このサービスは仮想コンソールフォントとコンソールキーマップを設定します。

`systemd-vconsole-setup` サービスは、`/etc/vconsole.conf` ファイルにて示される設定情報を読み込みます。キーマップやスクリーンフォントには何を用いるのかを定めてください。各言語に対する HOWTO も確認してください。
<http://www.tldp.org/HOWTO/HOWTO-INDEX/other-lang.html> が参考になるでしょう。 `localectl list-keymaps` を実行すると、設定可能なコンソールキーマップを確認できます。また `/usr/share/consolefonts` ディレクトリを見れば、設定可能なスクリーンフォントを確認できます。

`/etc/vconsole.conf` ファイルの各行は `VARIABLE="value"` といった書式により構成されます。VARIABLE には以下の変数を利用します。

KEYMAP

この変数はキーボードに対するキーマッピングテーブルを指定します。これが定められていない場合はデフォルトで `us` が設定されます。

KEYMAP_TOGGLE

この変数は二番目のトグルキーマップを設定します。デフォルトでは本変数は設定されません。

FONT

この変数は仮想コンソールにて用いられるフォントを指定します。

FONT_MAP

この変数はコンソールマップを指定します。

FONT_UNIMAP

この変数は Unicode フォントマップを指定します。

ドイツのキーボードおよびコンソールの設定例は以下です。

```
cat > /etc/vconsole.conf << "EOF"
KEYMAP=de-latin1
FONT=Lat2-Terminus16
EOF
```

`localectl` ユーティリティーを用いれば、システム稼動中に KEYMAP 変数を変更することができます。

```
localectl set-keymap MAP
```



注記

`localectl` コマンドは `chroot` 環境内では動作しない点に注意してください。systemd を使って LFS システムを起動したときになって、初めて利用できるものです。

`localectl` ユーティリティーはまた、X11 キーボードレイアウト、モデル、ヴァリアント、オプションをそれぞれ対応する変数により設定することができます。

```
localectl set-x11-keymap LAYOUT [MODEL] [VARIANT] [OPTIONS]
```

`localectl set-x11-keymap` に対して設定可能な値の一覧は、以下の変数を使って `localectl` を実行して得ることができます。

```
list-x11-keymap-models
X11 キーボードマッピングモデルを表示します。
list-x11-keymap-layouts
X11 キーボードマッピングレイアウトを表示します。
list-x11-keymap-variants
X11 キーボードマッピングヴァリアントを表示します。
list-x11-keymap-options
X11 キーボードマッピングオプションを表示します。
```



注記

上に示す変数を利用するにあたっては BLFS ブックに説明する XKeyboard-Config パッケージが必要です。

9.7. システムロケールの設定

以降に示す `/etc/locale.conf` ファイルは言語を設定するために必要となる環境変数を定義します。これを設定することによって以下の内容が定められます。

- ・ プログラムの出力結果を指定した言語で得ることができます。
- ・ キャラクターを英字、数字、その他のクラスに分類します。この設定は、英語以外のロケールにおいて、コマンドラインに非アスキー文字が入力された場合に `bash` が正しく入力を受け付けるために必要となります。
- ・ 各国ごとに正しくアルファベット順が並ぶようにします。
- ・ 適切なデフォルト用紙サイズを設定します。
- ・ 通貨、日付、時刻を正しい書式で出力するように設定します。

以下において `<11>` と示しているものは、言語を表す2文字の英字（例えば「en」）に、また `<CC>` は、国を表す2文字の英字（例えば「GB」）にそれぞれ置き換えてください。`<charmap>` は、選択したロケールに対応したキャラクターマップ（charmap）に置き換えてください。オプションの修飾子として「@euro」といった記述もあります。

以下のコマンドを実行すれば Glibc が取り扱うロケールを一覧で見ることができます。

```
locale -a
```

キャラクターマップにはエイリアスがいくつもあります。例えば「ISO-8859-1」は「iso8859-1」や「iso88591」として記述することもできます。ただしアプリケーションによってはエイリアスを正しく取り扱うことができないものがあります。（「UTF-8」の場合、「UTF-8」と書かなければならず、これを「utf8」としてはならない場合があります。）そこでロケールに対する正規の名称を選ぶのが最も無難です。正規の名称は以下のコマンドを実行すれば分かれます。ここで `<locale name>` は `locale -a` コマンドの出力から得られたロケールを指定します。（本書の例では「en_GB.iso88591」としています。）

```
LC_ALL=<locale name> locale charmap
```

「en_GB.iso88591」ロケールの場合、上のコマンドの出力は以下となります。

```
ISO-8859-1
```

出力された結果が「en_GB.ISO-8859-1」に対するロケール設定として用いるべきものです。こうして探し出したロケールは動作確認しておくことが重要です。Bash の起動ファイルに記述するのはその後です。

```
LC_ALL=<locale name> locale language
LC_ALL=<locale name> locale charmap
LC_ALL=<locale name> locale int_curr_symbol
LC_ALL=<locale name> locale int_prefix
```

上のコマンドを実行すると、言語名やロケールに応じたキャラクターエンコーディングが表示されます。また通貨や各國ごとの国際電話番号プレフィックスも表示されます。コマンドを実行した際に以下のメッセージが表示されたら、第8章にてロケールをインストールしていないか、あるいはそのロケールが Glibc のデフォルトのインストールではサポートされていないかのいずれかです。

```
locale: Cannot set LC_* to default locale: No such file or directory
```

このエラーが発生したら `localedef` コマンドを使って、目的とするロケールをインストールするか、別のロケールを選ぶ必要があります。これ以降の説明では Glibc がこのようなエラーを生成していないことを前提に話を進めます。

LFS には含まれない他のパッケージにて、指定したロケールをサポートしていないものがあります。例えば X ライブラリ (X ウィンドウシステムの一部) では、内部ファイルに指定されたキャラクターマップ名に合致しないロケールを利用した場合に、以下のようなメッセージを出力します。

```
Warning: locale not supported by Xlib, locale set to C
```

Xlib ではキャラクターマップはたいてい、英大文字とダッシュ記号を用いて表現されます。例えば "iso88591" ではなく "ISO-8859-1" となります。ロケール設定におけるキャラクターマップ部分を取り除いてみれば、適切なロケール設定を見出すことができます。これはまた `locale charmap` コマンドを使って、設定を変えてみてロケールを指定してみれば確認できます。例えば "de_DE.ISO-8859-15@euro" という設定を "de_DE@euro" に変えてみて Xlib がそのロケールを認識するかどうか確認してみてください。

これ以外のパッケージでも、パッケージが求めるものとは異なるロケール設定がなされた場合に、適切に処理されないケースがあります。（そして必ずしもエラーメッセージが表示されない場合もあります。）そういう場合は、利用している Linux ディストリビューションがどのようにロケール設定をサポートしているかを調べてみると、有用な情報が得られるかもしれません。

適切なロケール設定が決まつたら `/etc/locale.conf` ファイルを生成します。

```
cat > /etc/locale.conf << "EOF"
LANG=<ll>_<CC>.<charmap><@modifiers>
EOF
```

`/etc/locale.conf` ファイルは `systemd` のユーティリティープログラム `localectl` を使って定めることもできます。例えば上と同じ設定を行うには以下を実行します。

```
localectl set-locale LANG="<ll>_<CC>.<charmap><@modifiers>"
```

言語に関する環境変数、例えば `LANG`, `LC_CTYPE`, `LC_NUMERIC` などや、`locale` が出力する環境変数を指定することもできます。その場合は各設定をスペースにより区切れます。例として `LANG` を `en_US.UTF-8` とし `LC_CTYPE` を単に `en_US` とする場合は以下のようにします。

```
localectl set-locale LANG="en_US.UTF-8" LC_CTYPE="en_US"
```



注記

`localectl` コマンドは `chroot` 環境内では動作しない点に注意してください。`systemd` を使って LFS システムを起動したときになって、初めて利用できるものです。

ロケール設定の「C」（デフォルト）と「en_US」（米国の英語利用ユーザーに推奨）は異なります。「C」は US-ASCII 7 ビットキャラクターセットを用います。もし最上位ビットがセットされたキャラクターがあれば不適当なものとして取り扱います。例えば `ls` コマンドにおいてクエスチョン記号が表示されることがあるのはこのためです。また Mutt や Pine などにより電子メールが送信される際に、そういう文字は RFC には適合しないメールとして送信されます。送信された文字は「不明な 8ビット (unknown 8-bit)」として示されます。そこで 8ビット文字を必要としないことが明らかな場合には「C」ロケールを指定してください。

9.8. `/etc/inputrc` ファイルの生成

`inputrc` ファイルは `readline` ライブラリに対する設定ファイルです。この `Readline` ライブラリは、ユーザーが端末から文字列入力を行う際の編集機能を提供するものです。キーボード入力内容は所定の処理動作に変換され解釈されます。`readline` ライブラリは `bash` をはじめとする各種シェルや他の多くのアプリケーションにおいて利用されています。

ユーザー固有の機能を必要となるのはまれなので、以下の `/etc/inputrc` ファイルによって、ログインユーザーすべてに共通するグローバルな定義を生成します。各ユーザーごとにこのデフォルト定義を上書きする必要が出てきた場合は、ユーザーのホームディレクトリに `.inputrc` ファイルを生成して、修正マップを定義することもできます。

`inputrc` ファイルの設定方法については `info bash` により表示される `Readline Init File` の節に詳しい説明があります。`info readline` にも有用な情報があります。

以下はグローバルな `inputrc` ファイルの一般的な定義例です。コメントをつけて各オプションを説明しています。コメントはコマンドと同一行に記述することはできません。以下のコマンドを実行してこのファイルを生成します。

```
cat > /etc/inputrc << "EOF"
# Begin /etc/inputrc
# Modified by Chris Lynn <roryo@roryo.dynup.net>

# Allow the command prompt to wrap to the next line
set horizontal-scroll-mode Off

# Enable 8-bit input
set meta-flag On
set input-meta On

# Turns off 8th bit stripping
set convert-meta Off

# Keep the 8th bit for display
set output-meta On

# none, visible or audible
set bell-style none

# All of the following map the escape sequence of the value
# contained in the 1st argument to the readline specific functions
"\eOd": backward-word
"\eOc": forward-word

# for linux console
"\e[1~": beginning-of-line
"\e[4~": end-of-line
"\e[5~": beginning-of-history
"\e[6~": end-of-history
"\e[3~": delete-char
"\e[2~": quoted-insert

# for xterm
"\eOH": beginning-of-line
"\eOF": end-of-line

# for Konsole
"\e[H": beginning-of-line
"\e[F": end-of-line

# End /etc/inputrc
EOF
```

9.9. /etc/shells ファイルの生成

`shells` ファイルには、システム上でのログインシェルを記述します。各アプリケーションはこのファイルを参照して、シェルが適切であるかどうかを判別します。各シェルの指定は1行でを行い、そのシェルのパスを記述します。パスはルートディレクトリ (/) を基準として記述します。

例えば一般ユーザーが自身のアカウントに対するログインシェルを `chsh` にしようとした場合、`chsh` が `shells` ファイルを参照します。シェルコマンド名が記述されていなければ、その一般ユーザーはシェルの変更ができません。

例えば GDM は /etc/shells ファイルが参照できない時には対話インターフェースの設定が出来ません。また FTP デーモンなどは、このファイルに記述されていないシェルを用いてのユーザーアクセスを拒否するのが通常です。こういったアプリケーションのためにこのファイルが必要となります。

```
cat > /etc/shells << "EOF"
# Begin /etc/shells

/bin/sh
/bin/bash

# End /etc/shells
EOF
```

9.10. Systemd の利用と設定

9.10.1. 基本的な設定

/etc/systemd/system.conf ファイルには、基本的な systemd 動作を制御するための設定オプション項目があります。デフォルトのファイルは、各項目のデフォルト値が示された上でそれがコメントアウトされています。このファイルでは基本的なジャーナル設定やログレベルを設定する必要があります。各オプションの詳細については man ページ `systemd-system.conf(5)` を参照してください。

9.10.2. ブート時の画面クリアの防止

通常 systemd はブート処理の最後に画面をクリアします。必要ならばこの動きを以下のようにして変更することができます。

```
mkdir -pv /etc/systemd/system/getty@tty1.service.d

cat > /etc/systemd/system/getty@tty1.service.d/noclear.conf << EOF
[Service]
TTYVTDisallocate=no
EOF
```

ブートメッセージは、root ユーザーになってコマンド `journalctl -b` を実行することで、常に表示しておくことができます。

9.10.3. /tmp の tmpfs としての生成抑止

デフォルトでは /tmp は tmpfs として生成されます。これが適当ではないならば、以下のコマンドによりオーバーライドすることができます。

```
ln -sfv /dev/null /etc/systemd/system/tmp.mount
```

それとは別に /tmp を別パーティションとする場合は、/etc/fstab にそのパーティションを指定します。

警告

/tmp を別パーティションとした場合、このパーティションに対してシンボリックリンクを作成することは避けてください。これを行ってしまうと、ルートファイルシステム (/) を r/w として再マウントすることができなくなり、システムを再起動すると利用できなくなります。

9.10.4. 自動的なファイル生成、削除の設定

ファイルやディレクトリを生成、削除するサービスがいくつかあります。

- `systemd-tmpfiles-clean.service`
- `systemd-tmpfiles-setup-dev.service`
- `systemd-tmpfiles-setup.service`

システム用設定ファイルは `/usr/lib/tmpfiles.d/*.conf` です。ローカル用設定ファイルは `/etc/tmpfiles.d/*.conf` に置きます。/etc/tmpfiles.d にあるファイルは /usr/lib/tmpfiles.d にある同名ファイルをオーバーライドします。ファイル書式の詳細については man ページ `tmpfiles.d(5)` を参照してください。

`/usr/lib/tmpfiles.d/*.conf` ファイルの文法はやっかいなものです。 例えば `/tmp` ディレクトリ内のファイルを消去するためのデフォルト設定は `/usr/lib/tmpfiles.d/tmp.conf` ファイルに以下のように記述されます。

```
q /tmp 1777 root root 10d
```

型を表わす `q` はクオータを用いたサブボリュームを生成するものとして説明されています。 ただこれが適用できるのは `btrfs` ファイルシステムのみです。 この型は `v` を参照し、次に `d` (ディレクトリ) を参照します。 指定されたディレクトリが存在しない場合はそれが生成されて、パーミッションと所有者が指定されたものに設定されます。 時間指定が行われた場合、そのディレクトリ内のファイルは、それに応じて削除されます。

デフォルトパラメーターを必要としない場合は、設定ファイルを `/etc/tmpfiles.d` にコピーして必要な設定を行っておきます。 例えば以下です。

```
mkdir -p /etc/tmpfiles.d
cp /usr/lib/tmpfiles.d/tmp.conf /etc/tmpfiles.d
```

9.10.5. デフォルトのサービス動作のオーバーライド

ユニットパラメーターをオーバーライドするには `/etc/systemd/system` ディレクトリを生成して設定ファイルを作成します。 例えば以下のとおりです。

```
mkdir -pv /etc/systemd/system/foobar.service.d
cat > /etc/systemd/system/foobar.service.d/foobar.conf << EOF
[Service]
Restart=always
RestartSec=30
EOF
```

詳しくは `man` ページ `systemd.unit(5)` を参照してください。 設定ファイルを作成したら `systemctl daemon-reload` と `systemctl restart foobar` を実行します。 これによりサービスの設定内容が反映されます。

9.10.6. ブートシーケンスのデバッグ

SysVinit や BSD スタイルの起動システムにおいては単純なシェルスクリプトが用いられていますが、`systemd` ではさまざまな形式の起動ファイル（あるいはユニット）を統一化するフォーマットが用いられています。`systemctl` コマンドがユニットファイルの有効/無効、状態制御/参照を行います。 以下に示すものがよく用いられます。

- `systemctl list-units -t <service> [--all]`: サービスタイプのユニットファイルをロードします。
- `systemctl list-units -t <target> [--all]`: ターゲットタイプのユニットファイルをロードします。
- `systemctl show -p Wants <multi-user.target>`: マルチユーザーターゲットに依存するユニットをすべて表示します。 ターゲットは特別なユニットファイルであり、SysVinit におけるランレベルに相当します。
- `systemctl status <servicename.service>`: `servicename` で示されるサービスの状態を表示します。 拡張子 `.service` は、他に同名のサービスがない限り、例えば `.socket` ファイルであるような場合は省略することができます。 (`.socket` ファイルは `inetd/xinetd` と同様の機能を提供するソケットを生成します。)

9.10.7. Systemd ジャーナル関連の操作

`systemd` により起動したシステムのシステムログは、従来の `unix syslog` デーモンとは異なり、デフォルトで `systemd-journald` により扱われます。 必要に応じて標準的な `syslog` デーモンを追加することも可能で、両者を併用することもできます。 `systemd-journald` プログラムはジャーナル項目を保存しますが、それはテキストログファイルではなく、バイナリフォーマットファイルです。 そのファイル内容を確認するために `journalctl` コマンドが提供されています。 以下に示すものがよく用いられます。

- `journalctl -r`: ジャーナル項目すべてを日付の昇順により表示します。
- `journalctl -u UNIT`: 指定された `UNIT` ファイルに関連したジャーナル項目を表示します。
- `journalctl -b[=ID] -r`: 直近の起動成功から（あるいはブート ID から）のジャーナル項目を、日付の昇順により表示します。
- `journalctl -f`: `tail -f` と同様の機能を提供します。

9.10.8. コアダンプ関連の操作

クラッシュしたプログラムをデバッグするのに、コアダンプというものが重宝します。特にデーモンプロセスがクラッシュした場合です。systemdによるブートシステムにおいて、コアダンプはsystemd-coredumpが取り扱います。このプログラムはジャーナル内にコアダンプのログを出力し、コアダンプそのものは/var/lib/systemd/coredumpに保存します。コアダンプを取り出して処理するためにcoredumpctlというツールが提供されています。よく利用されるコマンド例を以下に示します。

- coredumpctl -r: すべてのコアダンプを新しい順に一覧表示します。
- coredumpctl -l info: 最新のコアダンプの情報を表示します。
- coredumpctl -l debug: 最新のコアダンプをGDBにロードします。

コアダンプはディスク容量を大量に消費することがあります。/etc/systemd/coredump.conf.dに設定ファイルを生成して、コアダンプに利用するディスク容量の最大を制御することができます。たとえば以下のとおりです。

```
mkdir -pv /etc/systemd/coredump.conf.d
cat > /etc/systemd/coredump.conf.d/maxuse.conf << EOF
[Coredump]
MaxUse=5G
EOF
```

詳細はsystemd-coredump(8), coredumpctl(1), coredump.conf.d(5)の各manページを参照してください。

9.10.9. 稼動し続けるプロセス

systemd-230より取り入れられた機能として、ユーザープロセスは、たとえnohupが用いられたり、あるいはdaemon()やsetsid()が利用されたプロセスであっても、ユーザーセッションが終了するとともに終了します。この機能変更は、従来からの柔軟な実装を厳格なものとする意図で行われたものです。したがって稼動し続けるプロセスが利用されていると（例えばscreenやtmuxなど）、この機能変更が問題を引き起こすことになるかもしれません。つまりユーザーセッションが終了した後にもプロセスをアクティブにしておくことが必要になります。ユーザーセッション終了後にプロセスを継続させる方法として、以下の三つの方法があります。

- 指定ユーザーのプロセスを継続させる方法: 標準的なユーザーは自身のユーザー権限においてコマンドloginctl enable-lingerを実行して、プロセスを継続させることができます。システム管理者はuser引数を利用して、そのユーザーに対して同一のコマンドを実行可能です。そしてそのユーザーはsystemd-runコマンドを実行することでプロセスを継続的に稼動させます。例えばsystemd-run --scope --user /usr/bin/screenなどとします。特定ユーザーに対してのプロセス継続を行った場合、ログインセッションがすべて終了してもuser@.serviceが残ります。そしてこれはシステム起動時にも自動実行されます。つまりユーザーセッションが終了した後にもプロセスの有効無効の制御が明示的に行えるものであり、nohupやdeamon()を利用するユーティリティーなどの下位互換性をなくすものです。
- システムワイドなプロセスを継続させる方法: /etc/systemd/logind.confファイル内にKillUserProcesses=noを指定すれば、全ユーザーに対してグローバルにプロセスを継続起動させることができます。これは明示的に制御する方法を無用とし、従来どおり全ユーザーに対しての方式を残すメリットがあります。
- 機能変更をビルド時に無効化する方法: プロセス継続をデフォルトとするためにsystemdのビルド時にmesonコマンドにおいて-Ddefault-kill-user-processes=falseスイッチを指定する方法があります。この方法をとれば、systemdがセッション終了時にユーザープロセスを終了させてしまう機能を完全に無効化することができます。

第10章 LFS システムのブート設定

10.1. はじめに

ここからは LFS システムをブート可能にしていきます。この章では /etc/fstab ファイルを作成し、LFS システムのカーネルを構築します。また GRUB のブートローダーをインストールして LFS システムの起動時にブートローダーを選択できるようにします。

10.2. /etc/fstab ファイルの生成

/etc/fstab ファイルは、種々のプログラムがファイルシステムのマウント状況を確認するために利用するファイルです。ファイルシステムがデフォルトでどこにマウントされ、それがどういう順序であるか、マウント前に（整合性エラーなどの）チェックを行うかどうか、という設定が行われます。新しいファイルシステムに対する設定は以下のようにして生成します。

```
cat > /etc/fstab << "EOF"
# Begin /etc/fstab

# file system  mount-point  type      options          dump   fsck
#                                         order

/dev/<xxx>      /           <fff>    defaults        1      1
/dev/<yyy>       swap        swap     pri=1          0      0

# End /etc/fstab
EOF
```

<xxx>、<yyy>、<fff> の部分はシステムに合わせて正しい記述に書き換えてください。例えば sda2、sda5、ext4 といったものです。上記各行の6項目の記述内容については man 5 fstab により確認してください。

MS-DOS や Windows において利用されるファイルシステム（つまり vfat、ntfs、smbfs、cifs、iso9660、udfなど）では、ファイル名称内に用いられた非アスキー文字を正しく認識させるために、特別なマウントオプション「utf8」の指定が必要になります。UTF-8 以外のロケールの場合 iocharset オプションには、文字ロケールと同じ値を設定することが必要であり、カーネルが理解できる形でなければなりません。またこれを動作させるために、対応するキャラクターセット定義（File systems ->Native Language Support にあります）をカーネルに組み入れるか、モジュールとしてビルドすることが必要です。ただし iocharset=utf8 というオプション指定によって文字ロケールを UTF-8 とした場合、ファイルシステムの英大文字小文字は区別されるようになります。これを避けるのであれば、iocharset=utf8 ではなく特別なオプション utf8 を指定します。vfat や smbfs ファイルシステムを用いるなら、さらに「codepage」オプションも必要です。このオプションには、国情報に基づいて MS-DOS にて用いられるコードページ番号をセットします。例えば USB フラッシュドライブをマウントし ru_RU.K0I8-R をセットするユーザーであれば /etc/fstab ファイルの設定は以下のようになります。

```
noauto,user,quiet,showexec,codepage=866,iocharset=koi8r
```

ru_RU.UTF-8 をセットするなら以下のように変わります。

```
noauto,user,quiet,showexec,codepage=866,utf8
```

iocharset オプションは iso8859-1 に対してのデフォルト設定です。（その場合、ファイルシステムの英大文字小文字は区別されません。）utf8 オプションは、ファイル名称が UTF-8 ロケール内にて正しく認識されるように、カーネルが UTF-8 ロケールに変換して取り扱うことを指示するものです。

ファイルシステムによっては codepage と iocharset のデフォルト値をカーネルにおいて設定することができます。カーネルにおいて対応する設定は「Default NLS Option」(CONFIG_NLS_DEFAULT)、「Default Remote NLS Option」(CONFIG_SMB_NLS_DEFAULT)、「Default codepage for FAT」(CONFIG_FAT_DEFAULT_CODEPAGE)、「Default iocharset for FAT」(CONFIG_FAT_DEFAULT_IOCHARSET) です。なお ntfs ファイルシステムに対しては、カーネルのコンパイル時に設定する項目はありません。

特定のハードディスクにおいて ext3 ファイルシステムでの電源供給不足時の信頼性を向上させることができます。これは /etc/fstab での定義においてマウントオプション barrier=1 を指定します。ハードディスクがこのオプションをサポートしているかどうかは hdparm を実行することで確認できます。例えば以下のコマンドを実行します。

```
hdparm -I /dev/sda | grep NCQ
```

何かが出力されたら、このオプションがサポートされていることを意味します。

論理ボリュームマネージャー (Logical Volume Management; LVM) に基づいたパーティションでは `barrier` オプションは利用できません。

10.3. Linux-5.19.2

Linux パッケージは Linux カーネルを提供します。

概算ビルト時間:	1.5 - 130.0 SBU (一般的には 12 SBU 程度)
必要ディスク容量:	1200 - 8800 MB (一般的には 1700 MB 程度)

10.3.1. カーネル のインストール

カーネルの構築は、カーネルの設定、コンパイル、インストールの順に行っていきます。 本書が行っているカーネル設定の方法以外については、カーネルソースツリー内にある `README` ファイルを参照してください。

コンパイルするための準備として以下のコマンドを実行します。

```
make mrproper
```

これによりカーネルソースが完全にクリーンなものになります。 カーネル開発チームは、カーネルコンパイルするなら、そのたびにこれを実行することを推奨しています。 `tar` コマンドにより伸張しただけのソースではクリーンなものにはなりません。

カーネルオプションの設定方法にはいくつかあります。 通常は以下に示すように、メニュー形式のインターフェースを通じて行います。

```
make menuconfig
```

追加する `make` 環境変数の意味:

`LANG=<host_LANG_value> LC_ALL=`

これはホストのロケール設定を指示するものです。 この設定は UTF-8 での表示設定がされたテキストコンソールにて `menuconfig` の `ncurses` による行表示を適切に行うために必要となります。

`<host_LANG_value>` の部分は、ホストの `$LANG` 変数の値に置き換えてください。 `$LC_ALL` あるいは `$LC_CTYPE` の値を設定することもできます。

`make menuconfig`

これは `ncurses` によるメニュー形式のインターフェースを起動します。 これ以外の（グラフィカルな）インターフェースについては `make help` を入力して確認してください。

カーネルの設定方法に関する一般的な情報が <https://www.linuxfromscratch.org/hints/downloads/files/kernel-configuration.txt> にあるので参照してください。 BLFS では LFS が取り扱わない各種パッケージに対して、必要なカーネル設定項目を説明しています。 <https://www.linuxfromscratch.org/blfs/view/stable-systemd/longindex.html#kernel-config-index> を参照してください。 さらに詳しくカーネルの構築や設定を説明している <http://www.kroah.com/lkn/> もあります。

注記

カーネル設定を行うにあたって、分かりやすいやり方として `make defconfig` を実行する方法があります。これを実行することで基本的な設定がなされ、現在のシステム構成が考慮された、より良い設定が得られるかもしれません。

以下の機能項目についての有効、無効、設定状況を確認してください。不適切である場合にはシステムが正常動作しなかったり起動できなかったりするかもしれません。

```
General setup -->
  [ ] Compile the kernel with warnings as errors [CONFIG_WERROR]
  [ ] Auditing Support [CONFIG_AUDIT]
  CPU/Task time and stats accounting --->
    [*] Pressure stall information tracking [CONFIG_PSI]
  < > Enable kernel headers through /sys/kernel/kheaders.tar.xz [CONFIG_IKHEADERS]
  [*] Control Group support [CONFIG_CGROUPS] --->
    [*] Memory controller [CONFIG_MEMCG]
  [ ] Enable deprecated sysfs features to support old userspace tools [CONFIG_SYSFS_DEPRECATED]
  [*] Configure standard kernel features (expert users) [CONFIG_EXPERT] --->
    [*] open by fhandle syscalls [CONFIG_FHANDLE]
General architecture-dependent options --->
  [*] Enable seccomp to safely compute untrusted bytecode [CONFIG_SECCOMP]
Networking support --->
  Networking options --->
    <*> The IPv6 protocol [CONFIG_IPV6]
Device Drivers --->
  Generic Driver Options --->
    [ ] Support for uevent helper [CONFIG_UEVENT_HELPER]
    [*] Maintain a devtmpfs filesystem to mount at /dev [CONFIG_DEV TMPFS]
    [*] Automount devtmpfs at /dev, after the kernel mounted the rootfs [CONFIG_DEV TMPFS_MOUNTED]
  Firmware Loader --->
    [ ] Enable the firmware sysfs fallback mechanism [CONFIG_FW LOADER USER HELPER]
  Firmware Drivers --->
    [*] Export DMI identification via sysfs to userspace [CONFIG_DMIID]
  Graphics support --->
    Frame buffer Devices --->
      <*> Support for frame buffer devices --->
File systems --->
  [*] Inotify support for userspace [CONFIG_INOTIFY_USER]
  Pseudo filesystems --->
    [*] Tmpfs POSIX Access Control Lists [CONFIG_TMPFS_POSIX_ACL]
```

64 ビットシステムの構築時は、追加機能をいかに有効にしてください。`menuconfig` を利用している場合、初めに `CONFIG_PCI_MSI` を有効にして、その後に `CONFIG_IRQ_REMAP`、`CONFIG_X86_X2APIC` を有効にします。こうするのは、依存するオプションが選択されていないと、特定のオプションが現れてこないからです。

```
Processor type and features --->
  [*] Support x2apic [CONFIG_X86_X2APIC]
Memory Management options --->
  [ ] Enable userfaultfd() system call [CONFIG_USERFAULTFD]
Device Drivers --->
  [*] PCI Support ---> [CONFIG_PCI]
    [*] Message Signaled Interrupts (MSI and MSI-X) [CONFIG_PCI_MSI]
  [*] IOMMU Hardware Support ---> [CONFIG_IOMMU_SUPPORT]
    [*] Support for Interrupt Remapping [CONFIG_IRQ_REMAP]
```

注記

”The IPv6 Protocol”については厳密には不要としても良いのですが、システム開発者は強く推奨しているものです。



注記

ホストが UEFI を利用していて、これを使って LFS システムのブートを行いたい場合は、 BLFS ページに従って、カーネル設定を調整する必要があります。

上の設定項目の説明

Compile the kernel with warnings as errors

これを設定すると、カーネル開発者が採用するコンパイラーや設定と異なる場合に、カーネルビルドエラーとなる場合があります。

Enable kernel headers through /sys/kernel/kheaders.tar.xz

これは、カーネルビルドにあたって cpio を必要とします。 cpio は LFS ではインストールしません。

Support for uevent helper

本項目を有効にすることで、デバイス管理を Udev/Eudev により行ないます。

Maintain a devtmpfs

本項目は、カーネルにより事前登録される自動化デバイスノードを生成します。 これは Udev が動作していなくても行われます。 Udev はその上で起動し、パーミッション管理やシンボリックリンクの追加を行います。 Udev/Eudev を利用する場合には本項目を有効にすることが必要です。

Automount devtmpfs at /dev

これは、カーネルから見たデバイス情報を /dev 上にマウントするものです。 init が起動される直前にルートファイルシステムに切り替えられます。

Support x2apic

64 ビット x86 プロセッサーの x2APIC モードでのインタラプトコントローラーの実行をサポートします。 64 ビット x86 システムにおいてはファームウェアが x2APIC を有効にすることができます。 ファームウェアによって x2APIC が有効である場合、カーネルにおいてこのオプションが無効であると、起動時にパニックを起こします。 本オプションには効果がありません。 またファームウェアによって x2APIC が無効であった場合、このオプションは影響を及ぼしません。

Enable userfaultfd() system call

このオプションを有効にすると、Linux-5.19.2において解決されていないセキュリティ脆弱性が悪用される危険があります。 脆弱性を避けるために、このオプションは無効にしてください。 このシステムコールは LFS や BLFS のどこからも利用しません。

上のコマンドではなく、状況によっては make oldconfig を実行することが適当な場合もあります。 詳細についてはカーネルソース内の README ファイルを参照してください。

カーネル設定は行わずに、ホストシステムにあるカーネル設定ファイル .config をコピーして利用することもできます。 そのファイルが存在すればの話です。 その場合は linux-5.19.2 ディレクトリにそのファイルをコピーしてください。 もっともこのやり方はお勧めしません。 設定項目をメニューから探し出して、カーネル設定を一から行っていくことが望ましいことです。

カーネルイメージとモジュールをコンパイルします。

make

カーネルモジュールを利用する場合 /etc/modprobe.d ディレクトリ内の設定を必要とします。 モジュールやカーネル設定に関する情報は「デバイスとモジュールの扱いについて」や linux-5.19.2/Documentation ディレクトリにあるカーネルドキュメントを参照してください。 また modprobe.d(5) も有用です。

カーネル設定においてモジュールの利用を無効にしているのでなければ、ここでモジュールをインストールします。

make modules_install

カーネルのコンパイルが終わったら、インストールの完了に向けてあと少し作業を行います。 /boot ディレクトリにいくつかのファイルをコピーします。



注意

ホストシステムが独立した /boot パーティションを用いている場合はファイルをそこにコピーします。 これを簡単に使うために、作業前に (chroot 前の) /boot をホストの /mnt/lfs/boot にバインドしておく方法があります。 ホストシステムの root ユーザーとなって以下を実行します。

```
mount --bind /boot /mnt/lfs/boot
```

カーネルイメージへのパスは、利用しているプラットフォームによってさまざまです。そのファイル名は、好みにより自由に変更して構いません。ただし `vmlinuz` という語は必ず含めてください。これにより、次節で説明するブートプロセスを自動的に設定するために必要なことです。以下のコマンドは x86 アーキテクチャーの場合の例です。

```
cp -iv arch/x86/boot/bzImage /boot/vmlinuz-5.19.2-lfs-11.2-systemd
```

`System.map` はカーネルに対するシンボルファイルです。このファイルはカーネル API の各関数のエントリポイントをマッピングしています。同様に実行中のカーネルのデータ構成のアドレスを保持します。このファイルは、カーネルに問題があった場合にその状況を調べる手段として利用できます。マップファイルをインストールするには以下を実行します。

```
cp -iv System.map /boot/System.map-5.19.2
```

カーネル設定ファイル `.config` は、上で実行した `make menuconfig` によって生成されます。このファイル内には、今コンパイルしたカーネルの設定項目の情報がすべて保持されています。将来このファイルを参照する必要が出てくるかもしれませんため、このファイルを保存しておきます。

```
cp -iv .config /boot/config-5.19.2
```

Linux カーネルのドキュメントをインストールします。

```
install -d /usr/share/doc/linux-5.19.2
cp -r Documentation/* /usr/share/doc/linux-5.19.2
```

カーネルのソースディレクトリは所有者が `root` ユーザーになっていません。我々は `chroot` 環境内の `root` ユーザーとなってパッケージを開発していましたが、展開されたファイル類はパッケージ開発者が用いていたユーザー ID、グループ ID が適用されています。このことは普通はあまり問題になりません。というのもパッケージをインストールした後のソースファイルは、たいてい削除するからです。一方 Linux のソースファイルは、削除せずに保持しておくことがよく行われます。このことがあるため開発者の用いたユーザーIDが、インストールしたマシン内の誰かの ID に割り当たった状態となります。その人はカーネルソースを自由に書き換える権限を持つことになるわけです。



注記

カーネルの設定は、BLFS をインストールしていくにつれて、設定を更新していくなければならないことがあります。一般にパッケージのソースは削除することが通常ですが、カーネルのソースに関しては、カーネルをもう一度新たにインストールするなら、削除しなくて構いません。

カーネルのソースファイルを保持しておくつもりなら `linux-5.19.2` ディレクトリにおいて `chown -R 0:0` を実行してください。これによりそのディレクトリの所有者は `root` ユーザーとなります。



警告

カーネルを説明する書の中には、カーネルのソースディレクトリに対してシンボリックリンク `/usr/src/linux` の生成を勧めているものがあります。これはカーネル 2.6 系以前におけるものであり LFS システム上では生成してはなりません。ベースとなる LFS システムを構築し、そこに新たなパッケージを追加していくとした際に、そのことが問題となるからです。



警告

さらに `include` ディレクトリ (`/usr/include`) にあるヘッダーファイルは、必ず Glibc のコンパイル時ものでなければなりません。つまり 「Linux-5.19.2 API ヘッダー」 によってインストールされた、健全化 (sanitizing) したものです。したがって生のカーネルヘッダーや他のカーネルにて健全化されたヘッダーによって上書きされてしまうのは避けなければなりません。

10.3.2. Linux モジュールのロード順の設定

たいていの場合 Linux モジュールは自動的にロードされます。しかし中には特定の指示を必要とするものもあります。モジュールをロードするプログラム、`modprobe` または `insmod` は、そのような指示を行う目的で `/etc/modprobe.d/usb.conf` を利用します。USB ドライバー (`ehci_hcd`, `ohci_hcd`, `uhci_hcd`) がモジュールとしてビルドされていた場合には、それらを正しい順でロードしなければならず、そのため `/etc/modprobe.d/usb.conf` ファイルが必要となります。`ehci_hcd` は `ohci_hcd` や `uhci_hcd` よりも先にロードしなければなりません。これを行わないとブート時に警告メッセージが出力されます。

以下のコマンドを実行して `/etc/modprobe.d/usb.conf` ファイルを生成します。

```
install -v -m755 -d /etc/modprobe.d
cat > /etc/modprobe.d/usb.conf << "EOF"
# Begin /etc/modprobe.d/usb.conf

install ohci_hcd /sbin/modprobe ehci_hcd ; /sbin/modprobe -i ohci_hcd ; true
install uhci_hcd /sbin/modprobe ehci_hcd ; /sbin/modprobe -i uhci_hcd ; true

# End /etc/modprobe.d/usb.conf
EOF
```

10.3.3. Linux の構成

インストールファイル: config-5.19.2, vmlinuz-5.19.2-lfs-11.2-systemd, and System.map-5.19.2
 インストールディレクトリ: /lib/modules, /usr/share/doc/linux-5.19.2

概略説明

config-5.19.2	カーネルの設定をすべて含みます。
vmlinuz-5.19.2-lfs-11.2-systemd	Linux システムのエンジンです。コンピューターを起動した際には、オペレーティングシステム内にて最初にロードされるものです。カーネルはコンピューターのハードウェアを構成するあらゆるコンポーネントを検知して初期化します。そしてそれらのコンポーネントをツリー階層のファイルとして、ソフトウェアが利用できるようにします。ただひとつの CPU からマルチタスクを処理するマシンとして、あたかも多数のプログラムが同時稼動しているように仕向けています。
System.map-5.19.2	アドレスとシンボルのリストです。カーネル内のすべての関数とデータ構成のエントリポイントおよびアドレスを示します。

10.4. GRUB を用いたブートプロセスの設定



注記

UEFI サポートが有効なシステムにおいて UEFI を使って LFS をブートしたい場合は、本ページは読み飛ばしてください。そして BLFS ページに示されている手順に従って、UEFI に対応するように GRUB 設定を行ってください。

10.4.1. はじめに



警告

GRUB の設定を誤ってしまうと、CD-ROM や USB 起動ドライブのような他のデバイスからもブートできなくなりてしまいます。読者の LFS システムをブート可能とするためには、本節の内容は必ずしも必要ではありません。読者が利用している現在のブートローダー、例えば Grub-Legacy, GRUB2, LILO などの設定を修正することが必要かもしれません。

コンピューターが利用不能に（ブート不能に）なってしまうこともあります。そんな事態に備えてコンピューターを「復旧（rescue）」するブートディスクの生成を必ず行ってください。ブートデバイスを用意していない場合は作成してください。以降に示す手順を実施するために、必要に応じて BLFS ブックを参照し `libisoburn` にある `xorriso` をインストールしてください。

```
cd /tmp
grub-mkrescue --output=grub-img.iso
xorriso -as cdrecord -v dev=/dev/cdrw blank=as_needed grub-img.iso
```

10.4.2. GRUB の命名規則

GRUB ではドライブやパーティションに対して (hdn, m) といった書式の命名法を採用しています。n はハードドライブ番号、m はパーティション番号を表します。ハードドライブ番号はゼロから数え始めます。一方パーティション番号は、基本パーティションであれば 1 から、拡張パーティションであれば 5 から数え始めます。かつてのバージョンでは共にゼロから数え始めましたが、今はそうではないので注意してください。例えば `sda1` は GRUB では (hd0, 1) と表記され、`sdb3` は (hd1, 3) と表記されます。Linux システムでの取り扱いとは違って GRUB では CD-ROM ドライブをハードドライブとして扱いません。例えば CD が `hdb` であり、2 番目のハードドライブが `hdc` であった場合、2 番目のハードドライブは (hd1) と表記されます。

10.4.3. 設定作業

GRUB は、ハードディスク上の最初の物理トラックにデータを書き出します。この領域は、どのファイルシステムにも属していません。ここに配置されているプログラムは、ブートパーティションにある GRUB モジュールにアクセスします。モジュールのデフォルト位置は `/boot/grub/` です。

ブートパーティションをどこにするかは各人に委ねられていて、それによって設定方法が変わります。推奨される1つの手順としては、ブートパーティションとして独立した小さな（200MB 程度のサイズの）パーティションを設けることです。こうしておくと、この後に LFS であろうが商用ディストリビューションであろうが、システム導入する際に同一のブートファイルを利用することができます。つまりどのようなブートシステムからでもアクセスが可能となります。この方法をとるなら、新たなパーティションをマウントした上で、現在 `/boot` ディレクトリにある全ファイルを（前節にてビルドした Linux カーネルも）新しいパーティションに移動させる必要があります。そしていったんパーティションをアンマウントし、再度 `/boot` としてマウントしなおすことになります。これを行った後は `/etc/fstab` を適切に書き換えてください。

現時点での LFS パーティションでも問題なく動作します。ただし複数システムを取り扱うための設定は、より複雑になります。

ここまで情報に基づいて、ルートパーティションの名称を（あるいはブートパーティションを別パーティションとするならそれも含めて）決定します。以下では例として、ルートパーティション（あるいは別立てのブートパーティション）が `sda2` であるとします。

以下を実行して GRUB ファイル類を `/boot/grub` にインストールし、ブートトラックを構築します。

警告

以下に示すコマンドを実行すると、現在のブートローダーを上書きします。上書きするのが不適当であるならコマンドを実行しないでください。例えばマスターブートレコード (Master Boot Record; MBR) を管理するサードパーティ製のブートマネージャーソフトウェアを利用している場合などがこれに該当します。

```
grub-install /dev/sda
```

注記

システムが UEFI を通じて起動されている時、grub-install は x86_64-efi ターゲットに対するファイルをインストールしようとします。しかしそのようなファイルは 第 8 章 にてインストールしていません。その場合は上のコマンドに対して --target i386-pc を追加してください。

10.4.4. GRUB 設定ファイルの生成

/boot/grub/grub.cfg ファイルを生成します。

```
cat > /boot/grub/grub.cfg << "EOF"
# Begin /boot/grub/grub.cfg
set default=0
set timeout=5

insmod ext2
set root=(hd0,2)

menuentry "GNU/Linux, Linux 5.19.2-lfs-11.2-systemd" {
    linux    /boot/vmlinuz-5.19.2-lfs-11.2-systemd root=/dev/sda2 ro
}
EOF
```

注記

GRUB にとってカーネルファイル群は、配置されるパーティションからの相対位置となります。したがって /boot パーティションを別に作成している場合は、上記の linux の行から /boot の記述を取り除いてください。また set root 行でのブートパーティションの指定も、正しく設定する必要があります。

注記

GRUB のパーティション指示子は、(USB サムデバイスといったリムーバルディスクを含め) ディスクの加除によって変わることがあります。その加除が原因で起動に失敗することがあります、それは grub.cfg において「古い」指示子を用いているからです。こういった問題を避けようとおもつたら、パーティション指定にあたって GRUB 指定子を用いずに、パーティションやファイルシステムの UUID を用いることが考えられます。lsblk -o UUID,PARTUUID,PATH,MOUNTPOINT を実行してください。ファイルシステムの UUID が UUID 列に示されます。またパーティションは PARTUUID 列に示されます。そうしたら set root=(hdx,y) の記述を search --set=root --fs-uuid <カーネルがインストールされているファイルシステムの UUID> に書き換え、同様に root=/dev/sda2 を root=PARTUUID=<UUID> がビルトされたパーティションの UUID> に書き換えます。

パーティションの UUID と、そのパーティション内のファイルシステムの UUID は全く異なります。オンラインから得られる情報において、root=PARTUUID=<パーティション UUID> ではなく root=UUID=<ファイルシステム UUID> を用いるように説明している場合があります。これを行うには initramfs が必要であり、これは LFS の範囲を超えるものです。

/dev 内のパーティションに対するデバイスノード名も変わります (GRUB 指定子が変更される可能性よりは低いです)。/etc/fstab において記述するデバイスノードへのパスは、たとえば /dev/sda1 を PARTUUID=<パーティション UUID> に置き換えることができます。これによりデバイスノード名が変更になった場合の、潜在的な起動エラーを回避することができます。

GRUB は大変強力なプログラムであり、ブート処理に際しての非常に多くのオプションを提供しています。これにより、各種デバイス、オペレーティングシステム、パーティションタイプに幅広く対応しています。さらにカスタマイズのためのオプションも多く提供されていて、グラフィカルなsplash画面、サウンド、マウス入力などについてカスタマイズが可能です。オプションの細かな説明は、ここでの手順説明の範囲を超えるため割愛します。



注意

`grub-mkconfig` というコマンドは、設定ファイルを自動的に生成するものです。このコマンドは `/etc/grub.d/` にある一連のスクリプトを利用しておらず、それまでに設定していた内容は失われることになります。

その一連のスクリプトは、ソースコードを提供しない Linux ディストリビューションにて用いられるのが主であるため、LFS では推奨されません。商用 Linux ディストリビューションをインストールする場合には、それらのスクリプトを実行する、ちょうど良い機会となるはずです。こういった状況ですから、`grub.cfg` のバックアップは忘れずに行うようにしてください。

第11章 作業終了

11.1. 作業終了

できました！ LFS システムのインストール終了です。あなたの輝かしいカスタムメイドの Linux システムが完成したことでしょう。

`/etc/lfs-release` というファイルをここで作成することにします。このファイルを作つておけば、どのバージョンの LFS をインストールしたのか、すぐに判別できます。（もしあなたが質問を投げた時には、我々もすぐに判別できることがあります。）以下のコマンドによりこのファイルを生成します。

```
echo 11.2-systemd > /etc/lfs-release
```

インストールシステムの情報を表わした 2 つのファイルがあれば、これからシステムにインストールするパッケージにおいて利用していくことができます。パッケージはバイナリ形式であっても、ビルドするものであってもかまいません。

1 つめのファイルは Linux Standards Base (LSB) の観点で、あなたのシステムがどのような状況にあるかを示すものです。これを作成するために以下のコマンドを実行します。

```
cat > /etc/lsb-release << "EOF"
DISTRIB_ID="Linux From Scratch"
DISTRIB_RELEASE="11.2-systemd"
DISTRIB_CODENAME=""
DISTRIB_DESCRIPTION="Linux From Scratch"
EOF
```

2 つめのファイルは、だいたい同じ情報を含むのですが、systemd やグラフィカルデスクトップ環境がこれを利用します。これを作成するために以下のコマンドを実行します。

```
cat > /etc/os-release << "EOF"
NAME="Linux From Scratch"
VERSION="11.2-systemd"
ID=lfs
PRETTY_NAME="Linux From Scratch 11.2-systemd"
VERSION_CODENAME=""
EOF
```

'DISTRIB_CODENAME' と 'VERSION_CODENAME' の両項目に対しては、あなたのシステムを特定できるように適切に設定してください。

11.2. ユーザー登録

これにより本書の作業は終了です。LFS ユーザー登録を行つてカウンターを取得しますか？以下のページ <https://www.linuxfromscratch.org/cgi-bin/lfscounter.php> にて、初めて構築した LFS のバージョンと氏名を登録して下さい。

それではシステムの再起動を行ないましょう。

11.3. システムの再起動

ソフトウェアのインストールがすべて完了しました。ここでコンピューターを再起動しますが、いくつか注意しておいて下さい。本書を通じて構築したシステムは最小限のものです。これ以降にさまざまなことを繰り広げていくには、機能が不足しているはずです。もうしばらくは今までと同じように chroot 環境を利用して BLFS ブックからいくつかのパッケージをインストールしていきましょう。その後のリブートにより新しい LFS システムを起動すれば、より一層、満足できる環境を得ることになるはずです。以下はその際の構築例です。

- Lynx のようなテキストブラウザをインストールしておけば、仮想端末からでも BLFS ブックを簡単に参照しながらパッケージビルド作業を進めることができます。
- make-ca パッケージをインストールしていると、ローカルにおいて信頼されるアンカー証明書を構築できます。そうすればリモートサーバー（たとえば HTTPS を用いたウェブサイト）が提供する SSL 証明書をシステムが検証できます。
- GPM パッケージをインストールすれば、仮想端末内にてコピーペースト操作を行うことができます。
- sudo をインストールすれば、root ユーザー以外であっても、パッケージビルドとインストールを容易に行うことができます。

- 利用しやすい GUI 操作を通じてリモート接続を行いたい場合は openssh をインストールします。
- インターネット経由により簡単にファイル取得を行うために wget をインストールします。
- ワイアレスのネットワークアクセスポイントに接続する場合は、wpa_supplicant をインストールしてください。
- 利用するハードウェア用のカーネルドライバーが、それを適切に動作させるために何か別のファームウェアを利用している場合は、firmwares をインストールしてください。
- 最後に、以下に示す種々の設定ファイルが適切であるかどうかを確認します。
 - /etc/bashrc
 - /etc/dircolors
 - /etc/fstab
 - /etc/hosts
 - /etc/inputrc
 - /etc/profile
 - /etc/resolv.conf
 - /etc/vimrc
 - /root/.bash_profile
 - /root/.bashrc

さあよろしいですか。 新しくインストールした LFS システムの再起動を行いましょう。 まずは chroot 環境から抜けます。

logout

仮想ファイルシステムをアンマウントします。

```
umount -v $LFS/dev/pts
umount -v $LFS/dev
umount -v $LFS/run
umount -v $LFS/proc
umount -v $LFS/sys
```

複数のパーティションを生成していた場合は、メインのパーティションをアンマウントする前に、個々のパーティションをアンマウントします。

```
umount -v $LFS/usr
umount -v $LFS/home
umount -v $LFS
```

LFS ファイルシステムそのものをアンマウントします。

```
umount -v $LFS
```

以下のようにしてシステムを再起動します。

```
shutdown -r now
```

これまでの作業にて GRUB ブートローダーが設定されているはずです。 そのメニューには LFS 11.2-systemd を起動するためのメニュー項目があるはずです。

再起動が無事行われ LFS システムを使うことができます。 必要に応じてさらなるソフトウェアをインストールしていってください。

11.4. 今度は何?

本書をお読み頂き、ありがとうございます。 本書が皆さんにとって有用なものとなり、システムの構築方法について十分に学んで頂けたものと思います。

LFS システムをインストールしたら「次は何を?」とお考えになるかもしれません。 その質問に答えるために以下に各種の情報をまとめます。

- 保守

あらゆるソフトウェアにおいて、バグやセキュリティの情報は日々報告されています。 LFS システムはソースコードからコンパイルしていますので、そのような報告を見逃さずにおくことは皆さんの仕事となります。 そのような報告をオンラインで提供する情報の場がありますので、いくつかを以下に示しましょう。

- CERT (Computer Emergency Response Team)

CERT にはメーリングリストがあり、数々のオペレーティングシステムやアプリケーションにおけるセキュリティ警告を公開しています。 購読に関する情報は <http://www.us-cert.gov/cas/signup.html> を参照してください。

- バグトラック (Bugtraq)

バグトラックは、完全公開のコンピューターセキュリティに関するメーリングリストです。 これは新たに発見されたセキュリティに関する問題を公開しています。 また時には、その問題を解消するフィックス情報も提供してくれます。 購読に関する情報は <http://www.securityfocus.com/archive> を参照してください。

- Beyond Linux From Scratch

Beyond Linux From Scratch ブックは、LFS ブックが取り扱うソフトウェアの範囲を超えて、数多くのソフトウェアをインストールする手順を示しています。 BLFS プロジェクトは以下にあります。 <https://www.linuxfromscratch.org/blfs/view/stable-systemd/>

- LFS ヒント (LFS Hints)

LFS ヒントは有用なドキュメントを集めたものです。 LFS コミュニティのボランティアによって投稿されたものです。 それらのヒントは <https://www.linuxfromscratch.org/hints/downloads/files/> にて参照することができます。

- メーリングリスト

皆さんにも参加して頂ける LFS メーリングリストがあります。 何かの助けが必要になったり、最新の開発を行ったかったり、あるいはプロジェクトに貢献したいといった場合に、参加して頂くことができます。 詳しくは 第 1 章 - メーリングリストを参照してください。

- Linux ドキュメントプロジェクト (The Linux Documentation Project; TLDp)

Linux ドキュメントプロジェクトの目指すことは Linux のドキュメントに関わる問題を共同で取り組むことです。 TLDp ではハウツー (HOWTO)、ガイド、man ページを数多く提供しています。 以下のサイトにあります。 <http://www.tldp.org/>

第V部 付録

付録A 略語と用語



日本語訳情報

本節における日本語訳は、訳語が一般的に普及していると思われるものは、その訳語とカッコ書き内に原語を示します。逆に訳語に適当なものがないと思われるものは、無理に訳出せず原語だけを示すことにします。この判断はあくまで訳者によるものであるため、不適切・不十分な個所についてはご指摘ください。

ABI	アプリケーション バイナリ インターフェース (Application Binary Interface)
ALFS	Automated Linux From Scratch
API	アプリケーション プログラミング インターフェース (Application Programming Interface)
ASCII	American Standard Code for Information Interchange
BIOS	ベーシック インプット/アウトプット システム; バイオス (Basic Input/Output System)
BLFS	Beyond Linux From Scratch
BSD	Berkeley Software Distribution
chroot	ルートのチェンジ (change root)
CMOS	シーモス (Complementary Metal Oxide Semiconductor)
COS	Class Of Service
CPU	中央演算処理装置 (Central Processing Unit)
CRC	巡回冗長検査 (Cyclic Redundancy Check)
CVS	Concurrent Versions System
DHCP	ダイナミック ホスト コンフィギュレーション プロトコル (Dynamic Host Configuration Protocol)
DNS	ドメインネームサービス (Domain Name Service)
EGA	Enhanced Graphics Adapter
ELF	Executable and Linkable Format
EOF	ファイルの終端 (End of File)
EQN	式 (equation)
ext2	second extended file system
ext3	third extended file system
ext4	fourth extended file system
FAQ	よく尋ねられる質問 (Frequently Asked Questions)
FHS	ファイルシステム階層標準 (Filesystem Hierarchy Standard)
FIFO	ファーストイント、ファーストアウト (First-In, First Out)
FQDN	完全修飾ドメイン名 (Fully Qualified Domain Name)
FTP	ファイル転送プロトコル (File Transfer Protocol)
GB	ギガバイト (gigabytes)
GCC	GNU コンパイラーコレクション (GNU Compiler Collection)
GID	グループ識別子 (Group Identifier)
GMT	グリニッジ標準時 (Greenwich Mean Time)
HTML	ハイパーテキスト マークアップ 言語 (Hypertext Markup Language)
IDE	Integrated Drive Electronics
IEEE	Institute of Electrical and Electronic Engineers
IO	入出力 (Input/Output)
IP	インターネット プロトコル (Internet Protocol)
IPC	プロセス間通信 (Inter-Process Communication)
IRC	インターネット リレー チャット (Internet Relay Chat)
ISO	国際標準化機構 (International Organization for Standardization)

ISP	インターネット サービス プロバイダー (Internet Service Provider)
KB	キロバイト (kilobytes)
LED	発光ダイオード (Light Emitting Diode)
LFS	Linux From Scratch
LSB	Linux Standard Base
MB	メガバイト (megabytes)
MBR	マスター ブート レコード (Master Boot Record)
MD5	Message Digest 5
NIC	ネットワーク インターフェース カード (Network Interface Card)
NLS	Native Language Support
NNTP	Network News Transport Protocol
NPTL	Native POSIX Threading Library
OSS	Open Sound System
PCH	プリコンパイル済みヘッダー (Pre-Compiled Headers)
PCRE	Perl Compatible Regular Expression
PID	プロセス識別子 (Process Identifier)
PTY	仮想端末 (pseudo terminal)
QOS	クオリティ オブ サービス (Quality Of Service)
RAM	ランダム アクセス メモリ (Random Access Memory)
RPC	リモート プロシージャ コール (Remote Procedure Call)
RTC	リアルタイムクロック (Real Time Clock)
SBU	標準ビルド時間 (Standard Build Unit)
SCO	サンタ クルズ オペレーション社 (The Santa Cruz Operation)
SHA1	Secure-Hash Algorithm 1
TLDP	The Linux Documentation Project
TFTP	Trivial File Transfer Protocol
TLS	スレッド ローカル ストレージ (Thread-Local Storage)
UID	ユーザー識別子 (User Identifier)
umask	user file-creation mask
USB	ユニバーサル シリアル バス (Universal Serial Bus)
UTC	協定世界時 (Coordinated Universal Time)
UUID	汎用一意識別子 (Universally Unique Identifier)
VC	仮想コンソール (Virtual Console)
VGA	ビデオ グラフィックス アレー (Video Graphics Array)
VT	仮想端末 (Virtual Terminal)

付録B 謝辞

Linux From Scratch プロジェクトへ貢献して下さった以下の方々および組織団体に感謝致します。

- Gerard Beekmans <gerard@linuxfromscratch.org> - LFS 構築者
- Bruce Dubbs <bdubbs@linuxfromscratch.org> - LFS 編集管理者
- Jim Gifford <jim@linuxfromscratch.org> - CLFS プロジェクト共同リーダー
- Pierre Labastie <pierre@linuxfromscratch.org> - BLFS 編集者、ALFS リーダー
- DJ Lucas <dj@linuxfromscratch.org> - LFS、BLFS 編集者
- Ken Moffat <ken@linuxfromscratch.org> - BLFS 編集者
- この他に数多くの方々にも協力頂きました。 皆さまには LFS や BLFS などのメーリングリストにて、提案、ブック内容のテスト、バグ報告、作業指示、パッケージインストールの経験談などを通じて、本ブック製作にご協力頂きました。

翻訳者

- Manuel Canales Esparcia <macana@macana-es.com> - スペインの LFS 翻訳プロジェクト
- Johan Lenglet <johan@linuxfromscratch.org> - フランスの LFS 翻訳プロジェクト；2008年まで
- Jean-Philippe Mengual <jmengual@linuxfromscratch.org> - フランスの LFS 翻訳プロジェクト；2008年～2016年まで
- Julien Lepiller <jlepiller@linuxfromscratch.org> - フランスの LFS 翻訳プロジェクト；2017年から現在まで
- Anderson Lizardo <lizardo@linuxfromscratch.org> - ポルトガルの LFS 翻訳プロジェクト
- Thomas Reitelbach <tr@erdfunkstelle.de> - ドイツの LFS 翻訳プロジェクト

ミラー管理者

北米のミラー

- Scott Kveton <scott@osuosl.org> - lfs.oregonstate.edu ミラー
- William Astle <lost@l-w.net> - ca.linuxfromscratch.org ミラー
- Eujon Sellers <jpolen@rackspace.com> - lfs.introspeed.com ミラー
- Justin Knierim <tim@idge.net> - lfs-matrix.net ミラー

南米のミラー

- Manuel Canales Esparcia <manuel@linuxfromscratch.org> - lfsmirror.lfs-es.info ミラー
- Luis Falcon <Luis Falcon> - torredehanoi.org ミラー

ヨーロッパのミラー

- Guido Passet <guido@primrelay.net> - nl.linuxfromscratch.org ミラー
- Bastiaan Jacques <baafie@planet.nl> - lfs.pagefault.net ミラー
- Sven Cranshoff <sven.cranshoff@lineo.be> - lfs.lineo.be ミラー
- Scarlet Belgium - lfs.scarlet.be ミラー
- Sebastian Faulborn <info@aliensoft.org> - lfs.aliensoft.org ミラー
- Stuart Fox <stuart@dontuse.ms> - lfs.dontuse.ms ミラー
- Ralf Uhlemann <admin@realhost.de> - lfs.oss-mirror.org ミラー
- Antonin Sprinzl <Antonin.Sprinzl@tuwien.ac.at> - at.linuxfromscratch.org ミラー
- Fredrik Danerklint <fredan-lfs@fredan.org> - se.linuxfromscratch.org ミラー
- Franck <franck@linuxpourtous.com> - lfs.linuxpourtous.com ミラー
- Philippe Baque <baque@cict.fr> - lfs.cict.fr ミラー
- Vitaly Chekasin <gyouja@pilgrims.ru> - lfs.pilgrims.ru ミラー
- Benjamin Heil <kontakt@wankoo.org> - lfs.wankoo.org ミラー

- Anton Maisak <info@linuxfromscratch.org.ru> - linuxfromscratch.org.ru ミラー

アジアのミラー

- Satit Phermsawang <satit@wbac.ac.th> - lfs.phayoune.org ミラー
- Shizunet Co.,Ltd. <info@shizu-net.jp> - lfs.mirror.shizu-net.jp ミラー
- Init World <<http://www.initworld.com/>> - lfs.initworld.com ミラー

オーストラリアのミラー

- Jason Andrade <jason@dstc.edu.au> - au.linuxfromscratch.org ミラー

以前のプロジェクトチームメンバー

- Christine Barczak <theladyskye@linuxfromscratch.org> - LFS ブック編集者
- Archaic <archaic@linuxfromscratch.org> - LFS テクニカルライター/編集者、HLFS プロジェクトリーダー、BLFS 編集者、ヒントプロジェクトとパッチプロジェクトの管理者
- Matthew Burgess <matthew@linuxfromscratch.org> - LFS プロジェクトリーダー、LFS テクニカルライター/編集者
- Nathan Coulson <nathan@linuxfromscratch.org> - LFS-ポートスクリプトの管理者
- Timothy Bauscher
- Robert Briggs
- Ian Chilton
- Jeroen Coumans <jeroen@linuxfromscratch.org> - ウェブサイト開発者、FAQ 管理者
- Manuel Canales Esparcia <manuel@linuxfromscratch.org> - LFS/BLFS/HLFS の XML と XSL の管理者
- Alex Groenewoud - LFS テクニカルライター
- Marc Heerdink
- Jeremy Huntwork <jhuntwork@linuxfromscratch.org> - LFS テクニカルライター、LFS LiveCD 管理者
- Bryan Kadzban <bryan@linuxfromscratch.org> - LFS テクニカルライター
- Mark Hymers
- Seth W. Klein - FAQ 管理者
- Nicholas Leippe <nicholas@linuxfromscratch.org> - Wiki 管理者
- Anderson Lizardo <lizardo@linuxfromscratch.org> - ウェブサイトのバックエンドスクリプトの管理者
- Randy McMurphy <randy@linuxfromscratch.org> - BLFS プロジェクトリーダー、LFS 編集者
- Dan Nicholson <dnicholson@linuxfromscratch.org> - LFS/BLFS 編集者
- Alexander E. Patrakov <alexander@linuxfromscratch.org> - LFS テクニカルライター、LFS 国際化に関する編集者、LFS Live CD 管理者
- Simon Perreault
- Scot Mc Pherson <scot@linuxfromscratch.org> - LFS NNTP ゲートウェイ管理者
- Douglas R. Reno <renodr@linuxfromscratch.org> - Systemd 編集者
- Ryan Oliver <ryan@linuxfromscratch.org> - CLFS プロジェクト共同リーダー
- Greg Schafer <gschafer@zip.com.au> - LFS テクニカルライター、次世代 64 ビット機での構築手法の開発者
- Jesse Tie-Ten-Quee - LFS テクニカルライター
- James Robertson <jwrober@linuxfromscratch.org> - Bugzilla 管理者
- Tushar Teredesai <tushar@linuxfromscratch.org> - BLFS ブック編集者、ヒントプロジェクト・パッチプロジェクトのリーダー
- Jeremy Utley <jeremy@linuxfromscratch.org> - LFS テクニカルライター、Bugzilla 管理者、LFS-ポートスクリプト管理者
- Zack Winkles <zwinkles@gmail.com> - LFS テクニカルライター

付録C パッケージの依存関係

LFS にて構築するパッケージはすべて、他のいくつかのパッケージに依存していて、それらがあつて初めて適切にインストールができます。 パッケージの中には互いに依存し合っているものもあります。 つまり一つめのパッケージが二つめのパッケージに依存しており、二つめが実は一つめのパッケージにも依存しているような例です。 こういった依存関係があることから LFS においてパッケージを構築する順番は非常に重要なものです。 本節は LFS にて構築する各パッケージの依存関係を示すものです。

ビルドするパッケージの個々には、3種類あるいは、最大で5種類の依存関係を示しています。 1つめは、対象パッケージをコンパイルしてビルドするために必要となるパッケージです。 2つめは、対象パッケージのプログラムやライブラリが、実行時にその利用を必要とするパッケージです。 3つめは、1つめのものに加えて、テストスイートを実行するために必要となるパッケージです。 4つめ以降は、対象パッケージをビルドし、最終的にインストールするために必要となるパッケージです。 たいていの場合、それらのパッケージに含まれているスクリプトが、実行モジュールへのパスを固定的に取り扱っています。 所定の順番どおりにパッケージのビルドを行わないと、最終的にインストールされるシステムにおいて、スクリプトの中に /tools/bin/[実行モジュール] といったパスが含まれてしまうことになります。 これは明らかに不適切なことです。

依存関係として4つめに示すのは任意のパッケージであり LFS では説明していないものです。 しかし皆さんにとっては有用なパッケージであるはずです。 それらのパッケージは、さらに別のパッケージを必要としていたり、互いに依存し合っていることがあります。 そういう依存関係があるため、それらをインストールする場合には、LFS をすべて仕上げた後に再度 LFS 内のパッケージを再構築する方法をお勧めします。 再インストールに関しては、たいていは BLFS にて説明しています。

Acl

インストール依存パッケージ:	Attr, Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Gettext, Grep, M4, Make, Perl, Sed, Texinfo
実行時依存パッケージ:	Attr, Glibc
テストスイート依存パッケージ:	Automake, Diffutils, Findutils, Libtool
事前インストールパッケージ:	Coreutils, Sed, Tar, Vim
任意依存パッケージ:	なし

Attr

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Gettext, Glibc, Grep, M4, Make, Perl, Sed, Texinfo
実行時依存パッケージ:	Glibc
テストスイート依存パッケージ:	Automake, Diffutils, Findutils, Libtool
事前インストールパッケージ:	Acl, Libcap
任意依存パッケージ:	なし

Autoconf

インストール依存パッケージ:	Bash, Coreutils, Grep, M4, Make, Perl, Sed, Texinfo
実行時依存パッケージ:	Bash, Coreutils, Grep, M4, Make, Sed, Texinfo
テストスイート依存パッケージ:	Automake, Diffutils, Findutils, GCC, Libtool
事前インストールパッケージ:	Automake
任意依存パッケージ:	Emacs

Automake

インストール依存パッケージ:	Autoconf, Bash, Coreutils, Gettext, Grep, M4, Make, Perl, Sed, Texinfo
実行時依存パッケージ:	Bash, Coreutils, Grep, M4, Sed, Texinfo
テストスイート依存パッケージ:	Binutils, Bison, Bzip2, DejaGNU, Diffutils, Expect, Findutils, Flex, GCC, Gettext, Gzip, Libtool, Tar
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	なし

Bash

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Bison, Coreutils, Diffutils, Gawk, GCC, Glibc, Grep, Make, Ncurses, Patch, Readline, Sed, Texinfo
実行時依存パッケージ:	Glibc, Ncurses, Readline
テストスイート依存パッケージ:	Expect, Shadow
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	Xorg

Bc

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Glibc, Grep, Make, Readline
実行時依存パッケージ:	Glibc, Ncurses, Readline
テストスイート依存パッケージ:	Gawk
事前インストールパッケージ:	Linux
任意依存パッケージ:	なし

Binutils

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, File, Flex, Gawk, GCC, Glibc, Grep, Make, Perl, Sed, Texinfo, Zlib
実行時依存パッケージ:	Glibc, Zlib
テストスイート依存パッケージ:	DejaGNU, Expect
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	Elfutils

Bison

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Gettext, Glibc, Grep, M4, Make, Perl, Sed
実行時依存パッケージ:	Glibc
テストスイート依存パッケージ:	Diffutils, Findutils, Flex
事前インストールパッケージ:	Kbd, Tar
任意依存パッケージ:	Doxygen

Bzip2

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, GCC, Glibc, Make, Patch
実行時依存パッケージ:	Glibc
テストスイート依存パッケージ:	なし
事前インストールパッケージ:	File
任意依存パッケージ:	なし

Check

インストール依存パッケージ:	Gawk, GCC, Grep, Make, Sed, Texinfo
実行時依存パッケージ:	Bash, Gawk
テストスイート依存パッケージ:	なし
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	なし

Coreutils

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Gettext, Glibc, GMP, Grep, Libcap, Make, OpenSSL, Patch, Perl, Sed, Texinfo
実行時依存パッケージ:	Glibc
テストスイート依存パッケージ:	Diffutils, E2fsprogs, Findutils, Shadow, Util-linux
事前インストールパッケージ:	Bash, Diffutils, Eudev, Findutils, Man-DB
任意依存パッケージ:	Expect.pm, IO::Tty

DejaGNU

インストール依存パッケージ:	Bash, Coreutils, Diffutils, Expect, GCC, Grep, Make, Sed, Texinfo
実行時依存パッケージ:	Expect, Bash
テストスイート依存パッケージ:	なし
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	なし

Diffutils

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Gawk, GCC, Gettext, Glibc, Grep, Make, Sed, Texinfo
実行時依存パッケージ:	Glibc
テストスイート依存パッケージ:	Perl
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	なし

E2fsprogs

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, Gawk, GCC, Glibc, Grep, Gzip, Make, Sed, Texinfo, Util-linux
実行時依存パッケージ:	Glibc, Util-linux
テストスイート依存パッケージ:	Procps-ng, Psmisc
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	なし

Eudev

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Gawk, GCC, Glibc, Grep, Gperf, Make, Sed, Util-linux
実行時依存パッケージ:	Glibc, Kmod, Xz, Util-linux, Zlib
テストスイート依存パッケージ:	なし
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	なし

Expat

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Gawk, GCC, Glibc, Grep, Make, Sed
実行時依存パッケージ:	Glibc
テストスイート依存パッケージ:	なし
事前インストールパッケージ:	Python, XML::Parser
任意依存パッケージ:	なし

Expect

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, GCC, Glibc, Grep, Make, Patch, Sed, Tcl
実行時依存パッケージ:	Glibc, Tcl
テストスイート依存パッケージ:	なし
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	Tk

File

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Bzip2, Coreutils, Diffutils, Gawk, GCC, Glibc, Grep, Make, Sed, Xz, Zlib
実行時依存パッケージ:	Glibc, Bzip2, Xz, Zlib
テストスイート依存パッケージ:	なし
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	libseccomp

Findutils

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Gettext, Glibc, Grep, Make, Sed, Texinfo
実行時依存パッケージ:	Bash, Glibc
テストスイート依存パッケージ:	DejaGNU, Diffutils, Expect
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	なし

Flex

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Gettext, Glibc, Grep, M4, Make, Patch, Sed, Texinfo
実行時依存パッケージ:	Bash, Glibc, M4
テストスイート依存パッケージ:	Bison, Gawk
事前インストールパッケージ:	Binutils, IProute2, Kbd, Kmod, Man-DB
任意依存パッケージ:	なし

Gawk

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Gettext, Glibc, GMP, Grep, Make, MPFR, Patch, Readline, Sed, Texinfo
実行時依存パッケージ:	Bash, Glibc, Mpfr
テストスイート依存パッケージ:	Diffutils
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	libsigsegv

GCC

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, Findutils, Gawk, GCC, Gettext, Glibc, GMP, Grep, M4, Make, MPC, MPFR, Patch, Perl, Sed, Tar, Texinfo, Zstd
実行時依存パッケージ:	Bash, Binutils, Glibc, Mpc, Python
テストスイート依存パッケージ:	DejaGNU, Expect, Shadow
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	GNAT, ISL

GDBM

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, GCC, Grep, Make, Sed
実行時依存パッケージ:	Bash, Glibc, Readline
テストスイート依存パッケージ:	なし
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	なし

Gettext

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Gawk, GCC, Glibc, Grep, Make, Ncurses, Sed, Texinfo
実行時依存パッケージ:	Acl, Bash, Gcc, Glibc
テストスイート依存パッケージ:	Diffutils, Perl, Tcl
事前インストールパッケージ:	Automake, Bison
任意依存パッケージ:	なし

Glibc

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Bison, Coreutils, Diffutils, Gawk, GCC, Gettext, Grep, Gzip, Linux API ヘッダー, Make, Perl, Python, Sed, Texinfo
実行時依存パッケージ:	なし
テストスイート依存パッケージ:	File
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	なし

GMP

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, Gawk, GCC, Glibc, Grep, M4, Make, Sed, Texinfo
実行時依存パッケージ:	GCC, Glibc
テストスイート依存パッケージ:	なし
事前インストールパッケージ:	MPFR, GCC
任意依存パッケージ:	なし

Gperf

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Glibc, Make
実行時依存パッケージ:	GCC, Glibc
テストスイート依存パッケージ:	Diffutils, Expect
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	なし

Grep

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, GCC, Gettext, Glibc, Grep, Make, Patch, Sed, Texinfo
実行時依存パッケージ:	Glibc
テストスイート依存パッケージ:	Gawk
事前インストールパッケージ:	Man-DB
任意依存パッケージ:	PCRE, libsigsegv

Groff

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Bison, Coreutils, Gawk, GCC, Glibc, Grep, Make, Patch, Sed, Texinfo
実行時依存パッケージ:	GCC, Glibc, Perl
テストスイート依存パッケージ:	テストスイートはありません
事前インストールパッケージ:	Man-DB, Perl
任意依存パッケージ:	ghostscript, Uchardet

GRUB

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Bison, Coreutils, Diffutils, GCC, Gettext, Glibc, Grep, Make, Ncurses, Sed, Texinfo, Xz
実行時依存パッケージ:	Bash, GCC, Gettext, Glibc, Xz, Sed
テストスイート依存パッケージ:	なし
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	なし

Gzip

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Glibc, Grep, Make, Sed, Texinfo
実行時依存パッケージ:	Bash, Glibc
テストスイート依存パッケージ:	Diffutils, Less
事前インストールパッケージ:	Man-DB
任意依存パッケージ:	なし

Iana-Etc

インストール依存パッケージ:	Coreutils
実行時依存パッケージ:	なし
テストスイート依存パッケージ:	テストスイートはありません
事前インストールパッケージ:	Perl
任意依存パッケージ:	なし

Inetutils

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Glibc, Grep, Make, Ncurses, Patch, Sed, Texinfo, Zlib
実行時依存パッケージ:	GCC, Glibc, Ncurses, Readline
テストスイート依存パッケージ:	なし
事前インストールパッケージ:	Tar
任意依存パッケージ:	なし

Intltool

インストール依存パッケージ:	Bash, Gawk, Glibc, Make, Perl, Sed, XML::Parser
実行時依存パッケージ:	Autoconf, Automake, Bash, Glibc, Grep, Perl, Sed
テストスイート依存パッケージ:	Perl
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	なし

IProute2

インストール依存パッケージ:	Bash, Bison, Coreutils, Flex, GCC, Glibc, Make, Libcap, Libelf, Linux API ヘッダー, Zlib
実行時依存パッケージ:	Bash, Coreutils, Glibc, Libcap, Libelf, Zlib
テストスイート依存パッケージ:	テストスイートはありません
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	Berkeley DB, iptables

Jinja2

インストール依存パッケージ:	MarkupSafe, Python
実行時依存パッケージ:	MarkupSafe, Python
テストスイート依存パッケージ:	テストスイートはありません
事前インストールパッケージ:	Systemd
任意依存パッケージ:	なし

Kbd

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Bison, Check, Coreutils, Flex, GCC, Gettext, Glibc, Gzip, Make, Patch, Sed
実行時依存パッケージ:	Bash, Coreutils, Glibc
テストスイート依存パッケージ:	なし
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	なし

Kmod

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Bison, Coreutils, Flex, GCC, Gettext, Glibc, Gzip, Make, OpenSSL, Pkg-config, Sed, Xz, Zlib
実行時依存パッケージ:	Glibc, Xz, Zlib
テストスイート依存パッケージ:	テストスイートはありません
事前インストールパッケージ:	Eudev
任意依存パッケージ:	なし

Less

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, GCC, Glibc, Grep, Make, Ncurses, Sed
実行時依存パッケージ:	Glibc, Ncurses
テストスイート依存パッケージ:	テストスイートはありません
事前インストールパッケージ:	Gzip
任意依存パッケージ:	PCRE

Libcap

インストール依存パッケージ:	Attr, Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Glibc, Perl, Make, Sed
実行時依存パッケージ:	Glibc
テストスイート依存パッケージ:	なし
事前インストールパッケージ:	IProute2, Shadow
任意依存パッケージ:	Linux-PAM

Libelf

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Glibc, Make
実行時依存パッケージ:	Glibc, Zlib
テストスイート依存パッケージ:	なし
事前インストールパッケージ:	IProute2, Linux
任意依存パッケージ:	なし

Libffi

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Glibc, Make, Sed
実行時依存パッケージ:	Glibc
テストスイート依存パッケージ:	DejaGnu
事前インストールパッケージ:	Python
任意依存パッケージ:	なし

Libpipeline

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, Gawk, GCC, Glibc, Grep, Make, Sed, Texinfo
実行時依存パッケージ:	Glibc
テストスイート依存パッケージ:	Check
事前インストールパッケージ:	Man-DB
任意依存パッケージ:	なし

Libtool

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, Gawk, GCC, Glibc, Grep, Make, Sed, Texinfo
実行時依存パッケージ:	Autoconf, Automake, Bash, Binutils, Coreutils, File, GCC, Glibc, Grep, Make, Sed
テストスイート依存パッケージ:	Autoconf, Automake, Findutils
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	なし

Linux

インストール依存パッケージ:	Bash, Bc, Binutils, Coreutils, Diffutils, Findutils, GCC, Glibc, Grep, Gzip, Kmod, Libelf, Make, Ncurses, OpenSSL, Perl, Sed
実行時依存パッケージ:	なし
テストスイート依存パッケージ:	テストスイートはありません
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	cpio

Linux API Headers

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Findutils, GCC, Glibc, Grep, Gzip, Make, Perl, Sed
実行時依存パッケージ:	なし
テストスイート依存パッケージ:	テストスイートはありません
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	なし

M4

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Glibc, Grep, Make, Sed, Texinfo
実行時依存パッケージ:	Bash, Glibc
テストスイート依存パッケージ:	Diffutils
事前インストールパッケージ:	Autoconf, Bison
任意依存パッケージ:	libsigsegv

Make

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Gettext, Glibc, Grep, Make, Sed, Texinfo
実行時依存パッケージ:	Glibc
テストスイート依存パッケージ:	Perl, Procps-ng
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	Guile

Man-DB

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Bzip2, Coreutils, Flex, GCC, GDBM, Gettext, Glibc, Grep, Groff, Gzip, Less, Libpipeline, Make, Sed, Xz
実行時依存パッケージ:	Bash, GDBM, Groff, Glibc, Gzip, Less, Libpipeline, Zlib
テストスイート依存パッケージ:	Util-linux
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	libseccomp

Man-Pages

インストール依存パッケージ:	Bash, Coreutils, Make
実行時依存パッケージ:	なし
テストスイート依存パッケージ:	テストスイートはありません
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	なし

MarkupSafe

インストール依存パッケージ:	Python
実行時依存パッケージ:	Python
テストスイート依存パッケージ:	テストスイートはありません
事前インストールパッケージ:	Jinja2
任意依存パッケージ:	なし

Meson

インストール依存パッケージ:	Ninja, Python
実行時依存パッケージ:	Python
テストスイート依存パッケージ:	テストスイートはありません
事前インストールパッケージ:	Systemd
任意依存パッケージ:	なし

MPC

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, Gawk, GCC, Glibc, Grep, GMP, Make, MPFR, Sed, Texinfo
実行時依存パッケージ:	Glibc, GMP, MPFR
テストスイート依存パッケージ:	なし
事前インストールパッケージ:	GCC
任意依存パッケージ:	なし

MPFR

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, Gawk, GCC, Glibc, Grep, GMP, Make, Sed, Texinfo
実行時依存パッケージ:	Glibc, GMP
テストスイート依存パッケージ:	なし
事前インストールパッケージ:	Gawk, GCC
任意依存パッケージ:	なし

Ncurses

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, Gawk, GCC, Glibc, Grep, Make, Patch, Sed
実行時依存パッケージ:	Glibc
テストスイート依存パッケージ:	テストスイートはありません
事前インストールパッケージ:	Bash, GRUB, Inetutils, Less, Procps-ng, Psmisc, Readline, Texinfo, Util-linux, Vim
任意依存パッケージ:	なし

Ninja

インストール依存パッケージ:	Binutils, Coreutils, GCC, Python
実行時依存パッケージ:	GCC, Glibc
テストスイート依存パッケージ:	なし
事前インストールパッケージ:	Meson
任意依存パッケージ:	Asciidoc, Doxygen, Emacs, re2c

OpenSSL

インストール依存パッケージ:	Binutils, Coreutils, GCC, Make, Perl
実行時依存パッケージ:	Glibc, Perl
テストスイート依存パッケージ:	なし
事前インストールパッケージ:	Coreutils, Kmod, Linux
任意依存パッケージ:	なし

Patch

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Glibc, Grep, Make, Sed
実行時依存パッケージ:	Glibc, Patch
テストスイート依存パッケージ:	Diffutils
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	Ed

Perl

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Gawk, GCC, GDBM, Glibc, Grep, Groff, Make, Sed, Zlib
実行時依存パッケージ:	GDBM, Glibc
テストスイート依存パッケージ:	Iana-Etc, Less, Procps-ng
事前インストールパッケージ:	Autoconf
任意依存パッケージ:	Berkeley DB

Pkg-config

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Gawk, GCC, Glibc, Grep, Make, Popt, Sed
実行時依存パッケージ:	Glibc
テストスイート依存パッケージ:	なし
事前インストールパッケージ:	Kmod
任意依存パッケージ:	Glib2

Procs-**ng**

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Glibc, Make, Ncurses
実行時依存パッケージ:	Glibc
テストスイート依存パッケージ:	DejaGNU
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	なし

Psmisc

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Gettext, Glibc, Grep, Make, Ncurses, Sed
実行時依存パッケージ:	Glibc, Ncurses
テストスイート依存パッケージ:	テストスイートはありません
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	なし

Python

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Expat, GCC, Gdbm, Gettext, Glibc, Grep, Libffi, Make, Ncurses, OpenSSL, Sed, Util-linux
実行時依存パッケージ:	Bzip2, Expat, Gdbm, Glibc, Libffi, Ncurses, OpenSSL, Zlib
テストスイート依存パッケージ:	GDB, Valgrind
事前インストールパッケージ:	Ninja
任意依存パッケージ:	Berkeley DB, libnsl, SQLite, and Tk

Readline

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Gawk, GCC, Glibc, Grep, Make, Ncurses, Patch, Sed, Texinfo
実行時依存パッケージ:	Glibc, Ncurses
テストスイート依存パッケージ:	テストスイートはありません
事前インストールパッケージ:	Bash, Bc, Gawk
任意依存パッケージ:	なし

Sed

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Gettext, Glibc, Grep, Make, Sed, Texinfo
実行時依存パッケージ:	Acl, Attr, Glibc
テストスイート依存パッケージ:	Diffutils, Gawk
事前インストールパッケージ:	E2fsprogs, File, Libtool, Shadow
任意依存パッケージ:	なし

Shadow

インストール依存パッケージ:	Acl, Attr, Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, Findutils, Gawk, GCC, Gettext, Glibc, Grep, Libcap, Make, Sed
実行時依存パッケージ:	Glibc
テストスイート依存パッケージ:	テストスイートはありません
事前インストールパッケージ:	Coreutils
任意依存パッケージ:	CrackLib, Linux-PAM

Sysklogd

インストール依存パッケージ:	Binutils, Coreutils, GCC, Glibc, Make, Patch
実行時依存パッケージ:	Glibc
テストスイート依存パッケージ:	テストスイートはありません
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	なし

Systemd

インストール依存パッケージ:	Acl, Attr, Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, Expat, Gawk, GCC, Glibc, Gperf, Grep, Ninja2, Libcap, Meson, Sed, Util-linux, Zstd
実行時依存パッケージ:	
テストスイート依存パッケージ:	なし
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	btrfs-progs, curl, cryptsetup, docbook-xml, docbook-xsl-nons, elfutils, Git, gnu-efi, GnuTLS, iptables, kexec-tools, libfido2, libgcrypt, libidn2, Libmicrohttpd, libpwquality, libseccomp, libxkbcommon, libxslt, Linux-PAM, lz4, make-ca, pl1-kit, PCRE2, Polkit, qemu, qrencode, quota-tools, rsync, Sphinx, tpm2-tss, Valgrind, zsh

Sysvinit

インストール依存パッケージ:	Binutils, Coreutils, GCC, Glibc, Make, and Sed
実行時依存パッケージ:	Glibc
テストスイート依存パッケージ:	テストスイートはありません
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	なし

Tar

インストール依存パッケージ:	Acl, Attr, Bash, Binutils, Bison, Coreutils, GCC, Gettext, Glibc, Grep, Inetutils, Make, Sed, Texinfo
実行時依存パッケージ:	Acl, Attr, Bzip2, Glibc, Gzip, Xz
テストスイート依存パッケージ:	Autoconf, Diffutils, Findutils, Gawk, Gzip
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	なし

Tcl

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, GCC, Glibc, Grep, Make, Sed
実行時依存パッケージ:	Glibc, Zlib
テストスイート依存パッケージ:	なし
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	なし

Texinfo

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Gettext, Glibc, Grep, Make, Ncurses, Patch, Sed
実行時依存パッケージ:	Glibc, Ncurses
テストスイート依存パッケージ:	なし
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	なし

Util-linux

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, Eudev, Findutils, Gawk, GCC, Gettext, Glibc, Grep, Libcap, Make, Ncurses, Sed, Zlib
実行時依存パッケージ:	Glibc, Libcap, Ncurses, Readline, Zlib
テストスイート依存パッケージ:	なし
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	Linux-PAM, smartmontools

Vim

インストール依存パッケージ:	Acl, Attr, Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, GCC, Glibc, Grep, Make, Ncurses, Sed
実行時依存パッケージ:	Acl, Attr, Glibc, Python, Ncurses, Tcl
テストスイート依存パッケージ:	なし
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	Xorg, GTK+2, LessTif, Ruby, GPM

wheel

インストール依存パッケージ:	Python
実行時依存パッケージ:	Python
テストスイート依存パッケージ:	テストスイートはありません
事前インストールパッケージ:	Jinja2
任意依存パッケージ:	なし

XML::Parser

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Expat, GCC, Glibc, Make, Perl
実行時依存パッケージ:	Expat, Glibc, Perl
テストスイート依存パッケージ:	Perl
事前インストールパッケージ:	Intltool
任意依存パッケージ:	なし

Xz

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, GCC, Glibc, Make
実行時依存パッケージ:	Glibc
テストスイート依存パッケージ:	なし
事前インストールパッケージ:	Eudev, File, GRUB, Kmod, Man-DB
任意依存パッケージ:	なし

Zlib

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Glibc, Make, Sed
実行時依存パッケージ:	Glibc
テストスイート依存パッケージ:	なし
事前インストールパッケージ:	File, Kmod, Perl, Util-linux
任意依存パッケージ:	なし

Zstd

インストール依存パッケージ:	Binutils, Coreutils, GCC, Glibc, Gzip, Make, Xz
実行時依存パッケージ:	Glibc
テストスイート依存パッケージ:	なし
事前インストールパッケージ:	GCC, Systemd
任意依存パッケージ:	LZ4

付録D LFS ライセンス

本ブックはクリエイティブコモンズ (Creative Commons) の 表示-非営利-継承 (Attribution-NonCommercial-ShareAlike) 2.0ライセンスに従います。

本書のインストール手順のコマンドを抜き出したものは MIT ライセンスに従ってください。

D.1. クリエイティブコモンズライセンス



日本語訳情報

以下は日本語へ訳出することなく、原文のライセンス条項をそのまま示します。

Creative Commons Legal Code

Attribution-NonCommercial-ShareAlike 2.0



重要

CREATIVE COMMONS CORPORATION IS NOT A LAW FIRM AND DOES NOT PROVIDE LEGAL SERVICES. DISTRIBUTION OF THIS LICENSE DOES NOT CREATE AN ATTORNEY-CLIENT RELATIONSHIP. CREATIVE COMMONS PROVIDES THIS INFORMATION ON AN "AS-IS" BASIS. CREATIVE COMMONS MAKES NO WARRANTIES REGARDING THE INFORMATION PROVIDED, AND DISCLAIMS LIABILITY FOR DAMAGES RESULTING FROM ITS USE.

License

THE WORK (AS DEFINED BELOW) IS PROVIDED UNDER THE TERMS OF THIS CREATIVE COMMONS PUBLIC LICENSE ("CCPL" OR "LICENSE"). THE WORK IS PROTECTED BY COPYRIGHT AND/OR OTHER APPLICABLE LAW. ANY USE OF THE WORK OTHER THAN AS AUTHORIZED UNDER THIS LICENSE OR COPYRIGHT LAW IS PROHIBITED.

BY EXERCISING ANY RIGHTS TO THE WORK PROVIDED HERE, YOU ACCEPT AND AGREE TO BE BOUND BY THE TERMS OF THIS LICENSE. THE LICENSOR GRANTS YOU THE RIGHTS CONTAINED HERE IN CONSIDERATION OF YOUR ACCEPTANCE OF SUCH TERMS AND CONDITIONS.

1. Definitions

- a. "Collective Work" means a work, such as a periodical issue, anthology or encyclopedia, in which the Work in its entirety in unmodified form, along with a number of other contributions, constituting separate and independent works in themselves, are assembled into a collective whole. A work that constitutes a Collective Work will not be considered a Derivative Work (as defined below) for the purposes of this License.
 - b. "Derivative Work" means a work based upon the Work or upon the Work and other pre-existing works, such as a translation, musical arrangement, dramatization, fictionalization, motion picture version, sound recording, art reproduction, abridgment, condensation, or any other form in which the Work may be recast, transformed, or adapted, except that a work that constitutes a Collective Work will not be considered a Derivative Work for the purpose of this License. For the avoidance of doubt, where the Work is a musical composition or sound recording, the synchronization of the Work in timed-relation with a moving image ("synching") will be considered a Derivative Work for the purpose of this License.
 - c. "Licensor" means the individual or entity that offers the Work under the terms of this License.
 - d. "Original Author" means the individual or entity who created the Work.
 - e. "Work" means the copyrightable work of authorship offered under the terms of this License.
 - f. "You" means an individual or entity exercising rights under this License who has not previously violated the terms of this License with respect to the Work, or who has received express permission from the Licensor to exercise rights under this License despite a previous violation.
 - g. "License Elements" means the following high-level license attributes as selected by Licensor and indicated in the title of this License: Attribution, Noncommercial, ShareAlike.
2. Fair Use Rights. Nothing in this license is intended to reduce, limit, or restrict any rights arising from fair use, first sale or other limitations on the exclusive rights of the copyright owner under copyright law or other applicable laws.
3. License Grant. Subject to the terms and conditions of this License, Licensor hereby grants You a worldwide, royalty-free, non-exclusive, perpetual (for the duration of the applicable copyright) license to exercise the rights in the Work as stated below:

- a. to reproduce the Work, to incorporate the Work into one or more Collective Works, and to reproduce the Work as incorporated in the Collective Works;
- b. to create and reproduce Derivative Works;
- c. to distribute copies or phonorecords of, display publicly, perform publicly, and publicly digitally perform by means of a digital audio transmission the Work including as incorporated in Collective Works;
- d. to distribute copies or phonorecords of, display publicly, perform publicly, and publicly digitally perform by means of a digital audio transmission Derivative Works;

The above rights may be exercised in all media and formats whether now known or hereafter devised. The above rights include the right to make such modifications as are technically necessary to exercise the rights in other media and formats. All rights not expressly granted by Licensor are hereby reserved, including but not limited to the rights set forth in Sections 4(e) and 4(f).

4. Restrictions. The license granted in Section 3 above is expressly made subject to and limited by the following restrictions:

- a. You may distribute, publicly display, publicly perform, or publicly digitally perform the Work only under the terms of this License, and You must include a copy of, or the Uniform Resource Identifier for, this License with every copy or phonorecord of the Work You distribute, publicly display, publicly perform, or publicly digitally perform. You may not offer or impose any terms on the Work that alter or restrict the terms of this License or the recipients' exercise of the rights granted hereunder. You may not sublicense the Work. You must keep intact all notices that refer to this License and to the disclaimer of warranties. You may not distribute, publicly display, publicly perform, or publicly digitally perform the Work with any technological measures that control access or use of the Work in a manner inconsistent with the terms of this License Agreement. The above applies to the Work as incorporated in a Collective Work, but this does not require the Collective Work apart from the Work itself to be made subject to the terms of this License. If You create a Collective Work, upon notice from any Licensor You must, to the extent practicable, remove from the Collective Work any reference to such Licensor or the Original Author, as requested. If You create a Derivative Work, upon notice from any Licensor You must, to the extent practicable, remove from the Derivative Work any reference to such Licensor or the Original Author, as requested.
- b. You may distribute, publicly display, publicly perform, or publicly digitally perform a Derivative Work only under the terms of this License, a later version of this License with the same License Elements as this License, or a Creative Commons iCommons license that contains the same License Elements as this License (e.g. Attribution-NonCommercial-ShareAlike 2.0 Japan). You must include a copy of, or the Uniform Resource Identifier for, this License or other license specified in the previous sentence with every copy or phonorecord of each Derivative Work You distribute, publicly display, publicly perform, or publicly digitally perform. You may not offer or impose any terms on the Derivative Works that alter or restrict the terms of this License or the recipients' exercise of the rights granted hereunder, and You must keep intact all notices that refer to this License and to the disclaimer of warranties. You may not distribute, publicly display, publicly perform, or publicly digitally perform the Derivative Work with any technological measures that control access or use of the Work in a manner inconsistent with the terms of this License Agreement. The above applies to the Derivative Work as incorporated in a Collective Work, but this does not require the Collective Work apart from the Derivative Work itself to be made subject to the terms of this License.
- c. You may not exercise any of the rights granted to You in Section 3 above in any manner that is primarily intended for or directed toward commercial advantage or private monetary compensation. The exchange of the Work for other copyrighted works by means of digital file-sharing or otherwise shall not be considered to be intended for or directed toward commercial advantage or private monetary compensation, provided there is no payment of any monetary compensation in connection with the exchange of copyrighted works.
- d. If you distribute, publicly display, publicly perform, or publicly digitally perform the Work or any Derivative Works or Collective Works, You must keep intact all copyright notices for the Work and give the Original Author credit reasonable to the medium or means You are utilizing by conveying the name (or pseudonym if applicable) of the Original Author if supplied; the title of the Work if supplied; to the extent reasonably practicable, the Uniform Resource Identifier, if any, that Licensor specifies to be associated with the Work, unless such URI does not refer to the copyright notice or licensing information for the Work; and in the case of a Derivative Work, a credit identifying the use of the Work in the Derivative Work (e.g., "French translation of the Work by Original Author," or "Screenplay based on original Work by Original Author"). Such credit may be implemented in any reasonable manner;

provided, however, that in the case of a Derivative Work or Collective Work, at a minimum such credit will appear where any other comparable authorship credit appears and in a manner at least as prominent as such other comparable authorship credit.

e. For the avoidance of doubt, where the Work is a musical composition:

- i. Performance Royalties Under Blanket Licenses. Licensor reserves the exclusive right to collect, whether individually or via a performance rights society (e.g. ASCAP, BMI, SESAC), royalties for the public performance or public digital performance (e.g. webcast) of the Work if that performance is primarily intended for or directed toward commercial advantage or private monetary compensation.
 - ii. Mechanical Rights and Statutory Royalties. Licensor reserves the exclusive right to collect, whether individually or via a music rights agency or designated agent (e.g. Harry Fox Agency), royalties for any phonorecord You create from the Work ("cover version") and distribute, subject to the compulsory license created by 17 USC Section 115 of the US Copyright Act (or the equivalent in other jurisdictions), if Your distribution of such cover version is primarily intended for or directed toward commercial advantage or private monetary compensation.
6. Webcasting Rights and Statutory Royalties. For the avoidance of doubt, where the Work is a sound recording, Licensor reserves the exclusive right to collect, whether individually or via a performance-rights society (e.g. SoundExchange), royalties for the public digital performance (e.g. webcast) of the Work, subject to the compulsory license created by 17 USC Section 114 of the US Copyright Act (or the equivalent in other jurisdictions), if Your public digital performance is primarily intended for or directed toward commercial advantage or private monetary compensation.

5. Representations, Warranties and Disclaimer

UNLESS OTHERWISE MUTUALLY AGREED TO BY THE PARTIES IN WRITING, LICENSOR OFFERS THE WORK AS-IS AND MAKES NO REPRESENTATIONS OR WARRANTIES OF ANY KIND CONCERNING THE WORK, EXPRESS, IMPLIED, STATUTORY OR OTHERWISE, INCLUDING, WITHOUT LIMITATION, WARRANTIES OF TITLE, MERCHANTABILITY, FITNESS FOR A PARTICULAR PURPOSE, NONINFRINGEMENT, OR THE ABSENCE OF LATENT OR OTHER DEFECTS, ACCURACY, OR THE PRESENCE OF ABSENCE OF ERRORS, WHETHER OR NOT DISCOVERABLE. SOME JURISDICTIONS DO NOT ALLOW THE EXCLUSION OF IMPLIED WARRANTIES, SO SUCH EXCLUSION MAY NOT APPLY TO YOU.

6. Limitation on Liability. EXCEPT TO THE EXTENT REQUIRED BY APPLICABLE LAW, IN NO EVENT WILL LICENSOR BE LIABLE TO YOU ON ANY LEGAL THEORY FOR ANY SPECIAL, INCIDENTAL, CONSEQUENTIAL, PUNITIVE OR EXEMPLARY DAMAGES ARISING OUT OF THIS LICENSE OR THE USE OF THE WORK, EVEN IF LICENSOR HAS BEEN ADVISED OF THE POSSIBILITY OF SUCH DAMAGES.

7. Termination

- a. This License and the rights granted hereunder will terminate automatically upon any breach by You of the terms of this License. Individuals or entities who have received Derivative Works or Collective Works from You under this License, however, will not have their licenses terminated provided such individuals or entities remain in full compliance with those licenses. Sections 1, 2, 5, 6, 7, and 8 will survive any termination of this License.
- b. Subject to the above terms and conditions, the license granted here is perpetual (for the duration of the applicable copyright in the Work). Notwithstanding the above, Licensor reserves the right to release the Work under different license terms or to stop distributing the Work at any time; provided, however that any such election will not serve to withdraw this License (or any other license that has been, or is required to be, granted under the terms of this License), and this License will continue in full force and effect unless terminated as stated above.

8. Miscellaneous

- a. Each time You distribute or publicly digitally perform the Work or a Collective Work, the Licensor offers to the recipient a license to the Work on the same terms and conditions as the license granted to You under this License.
- b. Each time You distribute or publicly digitally perform a Derivative Work, Licensor offers to the recipient a license to the original Work on the same terms and conditions as the license granted to You under this License.

- c. If any provision of this License is invalid or unenforceable under applicable law, it shall not affect the validity or enforceability of the remainder of the terms of this License, and without further action by the parties to this agreement, such provision shall be reformed to the minimum extent necessary to make such provision valid and enforceable.
- d. No term or provision of this License shall be deemed waived and no breach consented to unless such waiver or consent shall be in writing and signed by the party to be charged with such waiver or consent.
- e. This License constitutes the entire agreement between the parties with respect to the Work licensed here. There are no understandings, agreements or representations with respect to the Work not specified here. Licensor shall not be bound by any additional provisions that may appear in any communication from You. This License may not be modified without the mutual written agreement of the Licensor and You.



重要

Creative Commons is not a party to this License, and makes no warranty whatsoever in connection with the Work. Creative Commons will not be liable to You or any party on any legal theory for any damages whatsoever, including without limitation any general, special, incidental or consequential damages arising in connection to this license. Notwithstanding the foregoing two (2) sentences, if Creative Commons has expressly identified itself as the Licensor hereunder, it shall have all rights and obligations of Licensor.

Except for the limited purpose of indicating to the public that the Work is licensed under the CCPL, neither party will use the trademark "Creative Commons" or any related trademark or logo of Creative Commons without the prior written consent of Creative Commons. Any permitted use will be in compliance with Creative Commons' then-current trademark usage guidelines, as may be published on its website or otherwise made available upon request from time to time.

Creative Commons may be contacted at <http://creativecommons.org/>.

D.2. MIT ライセンス (The MIT License)



日本語訳情報

以下は日本語へ訳出することなく、原文のライセンス条項をそのまま示します。

Copyright © 1999–2022 Gerard Beekmans

Permission is hereby granted, free of charge, to any person obtaining a copy of this software and associated documentation files (the "Software"), to deal in the Software without restriction, including without limitation the rights to use, copy, modify, merge, publish, distribute, sublicense, and/or sell copies of the Software, and to permit persons to whom the Software is furnished to do so, subject to the following conditions:

The above copyright notice and this permission notice shall be included in all copies or substantial portions of the Software.

THE SOFTWARE IS PROVIDED "AS IS", WITHOUT WARRANTY OF ANY KIND, EXPRESS OR IMPLIED, INCLUDING BUT NOT LIMITED TO THE WARRANTIES OF MERCHANTABILITY, FITNESS FOR A PARTICULAR PURPOSE AND NONINFRINGEMENT. IN NO EVENT SHALL THE AUTHORS OR COPYRIGHT HOLDERS BE LIABLE FOR ANY CLAIM, DAMAGES OR OTHER LIABILITY, WHETHER IN AN ACTION OF CONTRACT, TORT OR OTHERWISE, ARISING FROM, OUT OF OR IN CONNECTION WITH THE SOFTWARE OR THE USE OR OTHER DEALINGS IN THE SOFTWARE.

項目別もくじ

パッケージ

Acl: 120
Attr: 119
Autoconf: 152
Automake: 153
Bash: 140
 ツール: 53
Bash: 140
 ツール: 53
Bc: 106
Binutils: 112
 ツール, 1回め: 40
 ツール, 2回め: 66
Binutils: 112
 ツール, 1回め: 40
 ツール, 2回め: 66
Binutils: 112
 ツール, 1回め: 40
 ツール, 2回め: 66
Bison: 138
 ツール: 75
Bison: 138
 ツール: 75
Bzip2: 98
Check: 169
Coreutils: 165
 ツール: 54
Coreutils: 165
 ツール: 54
D-Bus: 197
DejaGNU: 111
Diffutils: 170
 ツール: 55
Diffutils: 170
 ツール: 55
E2fsprogs: 208
Expat: 144
Expect: 110
File: 103
 ツール: 56
File: 103
 ツール: 56
Findutils: 172
 ツール: 57
Findutils: 172
 ツール: 57
Flex: 107
Gawk: 171
 ツール: 58
Gawk: 171
 ツール: 58
GCC: 126
 ツール, 1回め: 42
 ツール, 2回め: 67
 ツール, libstdc++ 1 回め: 48
GCC: 126
 ツール, 1回め: 42
 ツール, 2回め: 67
 ツール, libstdc++ 1 回め: 48
GCC: 126
 ツール, 1回め: 42
 ツール, 2回め: 67
 ツール, libstdc++ 1 回め: 48
GDBM: 142
Gettext: 136
 ツール: 74
Gettext: 136
 ツール: 74
Glibc: 90
 ツール: 45
Glibc: 90
 ツール: 45
GMP: 115
Gperf: 143
Grep: 139
 ツール: 59
Grep: 139
 ツール: 59
Groff: 173
GRUB: 175
Gzip: 177
 ツール: 60
Gzip: 177
 ツール: 60
Iana-Etc: 89
Inetutils: 145
Intltool: 151
IPRoute2: 178
Jinja2: 192
Kbd: 180
Kmod: 156
Less: 147
Libcap: 121
Libelf: 158
libffi: 159
Libpipeline: 182
Libtool: 141
Linux: 231
 ツール, API ヘッダー: 44
Linux: 231
 ツール, API ヘッダー: 44
M4: 105
 ツール: 50
M4: 105
 ツール: 50
Man-DB: 199
Man-pages: 88
MarkupSafe: 191
Meson: 164

MPC: 118
 MPFR: 117
 Ncurses: 131
 ツール: 51
 Ncurses: 131
 ツール: 51
 Ninja: 163
 OpenSSL: 154
 Patch: 184
 ツール: 62
 Patch: 184
 ツール: 62
 Perl: 148
 ツール: 76
 Perl: 148
 ツール: 76
 Pkgconfig: 130
 Procps-ng: 201
 Psmisc: 135
 Python: 160
 一時的: 77
 Python: 160
 一時的: 77
 Readline: 104
 Sed: 134
 ツール: 63
 Sed: 134
 ツール: 63
 Shadow: 122
 設定: 123
 Shadow: 122
 設定: 123
 systemd: 193
 Tar: 185
 ツール: 64
 Tar: 185
 ツール: 64
 Tcl: 108
 Texinfo: 186
 一時的: 78
 Texinfo: 186
 一時的: 78
 Udev
 利用方法: 217
 Util-linux: 203
 ツール: 79
 Util-linux: 203
 ツール: 79
 Vim: 188
 wheel: 162
 XML::Parser: 150
 Xz: 100
 ツール: 65
 Xz: 100
 ツール: 65
 Zlib: 97
 zstd: 102

2to3: 160
 accessdb: 199, 200
 aclocal: 153, 153
 aclocal-1.16: 153, 153
 addftinfo: 173, 173
 addpart: 203, 204
 addr2line: 112, 113
 afmtodit: 173, 173
 getty: 203, 204
 apropos: 199, 200
 ar: 112, 113
 as: 112, 113
 attr: 119, 119
 autoconf: 152, 152
 autoheader: 152, 152
 autom4te: 152, 152
 automake: 153, 153
 automake-1.16: 153, 153
 autopoint: 136, 136
 autoreconf: 152, 152
 autoscan: 152, 152
 autoupdate: 152, 152
 awk: 171, 171
 b2sum: 165, 166
 badblocks: 208, 209
 base64: 165, 166, 165, 166
 base64: 165, 166, 165, 166
 basename: 165, 166
 basenc: 165, 166
 bash: 140, 140
 bashbug: 140, 140
 bc: 106, 106
 bison: 138, 138
 blkdiscard: 203, 204
 blkid: 203, 204
 blkzone: 203, 204
 blockdev: 203, 204
 bridge: 178, 178
 bunzip2: 98, 99
 busctl: 193, 194
 bzcat: 98, 99
 bzcmp: 98, 99
 bzdiff: 98, 99
 bzegrep: 98, 99
 bzfgrep: 98, 99
 bzgrep: 98, 99
 bzip2: 98, 99
 bzip2recover: 98, 99
 bzless: 98, 99
 bzmore: 98, 99
 c++: 126, 129
 c++filt: 112, 113
 cal: 203, 204
 capsh: 121, 121
 captoinfo: 131, 132
 cat: 165, 166
 catman: 199, 200
 cc: 126, 129
 cfdisk: 203, 204
 chacl: 120, 120
 chage: 122, 124

プログラム

[: 165, 166]

chattr: 208, 209
 chcon: 165, 166
 chcpu: 203, 204
 checkmk: 169, 169
 chem: 173, 173
 chfn: 122, 124
 chgpasswd: 122, 124
 chgrp: 165, 166
 chmem: 203, 204
 chmod: 165, 166
 choom: 203, 204
 chown: 165, 166
 chpasswd: 122, 124
 chroot: 165, 166
 chrt: 203, 204
 chsh: 122, 124
 chvt: 180, 181
 cksum: 165, 166
 clear: 131, 132
 cmp: 170, 170
 col: 203, 204
 colcrt: 203, 204
 colrm: 203, 204
 column: 203, 204
 comm: 165, 166
 compile_et: 208, 209
 coredumpctl: 193, 195
 corelist: 148, 149
 cp: 165, 166
 cpan: 148, 149
 cpp: 126, 129
 csplit: 165, 166
 ctrlaltdel: 203, 204
 ctstat: 178, 178
 cut: 165, 166
 c_rehash: 154, 154
 date: 165, 166
 dbus-cleanup-sockets: 197, 197
 dbus-daemon: 197, 197
 dbus-launch: 197, 197
 dbus-monitor: 197, 197
 dbus-run-session: 197, 198
 dbus-send: 197, 198
 dbus-test-tool: 197, 198
 dbus-update-activation-environment: 197, 198
 dbus-uuidgen: 197, 198
 dc: 106, 106
 dd: 165, 166
 deallocvt: 180, 181
 debugfs: 208, 209
 dejagnu: 111, 111
 delpart: 203, 204
 depmod: 156, 156
 df: 165, 166
 diff: 170, 170
 diff3: 170, 170
 dir: 165, 166
 dircolors: 165, 167
 dirname: 165, 167
 dmesg: 203, 204
 dnsdomainname: 145, 145
 du: 165, 167
 dumpe2fs: 208, 209
 dumpkeys: 180, 181
 e2freefrag: 208, 209
 e2fsck: 208, 209
 e2image: 208, 209
 e2label: 208, 209
 e2mmpstatus: 208, 209
 e2scrub: 208, 209
 e2scrub_all: 208, 209
 e2undo: 208, 209
 e4crypt: 208, 209
 e4defrag: 208, 209
 echo: 165, 167
 egrep: 139, 139
 eject: 203, 204
 elfedit: 112, 113
 enc2xs: 148, 149
 encguess: 148, 149
 env: 165, 167
 envsubst: 136, 136
 eqn: 173, 173
 eqn2graph: 173, 173
 ex: 188, 189
 expand: 165, 167
 expect: 110, 110
 expiry: 122, 124
 expr: 165, 167
 factor: 165, 167
 faillog: 122, 124
 falllocate: 203, 204
 false: 165, 167
 fdisk: 203, 204
 fgconsole: 180, 181
 fgrep: 139, 139
 file: 103, 103
 filefrag: 208, 209
 fincore: 203, 204
 find: 172, 172
 findfs: 203, 204
 findmnt: 203, 204
 flex: 107, 107
 flex++: 107, 107
 flock: 203, 204
 fmt: 165, 167
 fold: 165, 167
 free: 201, 201
 fsck: 203, 204
 fsck.cramfs: 203, 205
 fsck.ext2: 208, 209
 fsck.ext3: 208, 209
 fsck.ext4: 208, 209
 fsck.minix: 203, 205
 fsfreeze: 203, 205
 fstrim: 203, 205
 ftp: 145, 146
 fuser: 135, 135
 g++: 126, 129
 gawk: 171, 171
 gawk-5.1.1: 171, 171
 gcc: 126, 129

gc-ar: 126, 129
 gc-nm: 126, 129
 gc-ranlib: 126, 129
 gcov: 126, 129
 gcov-dump: 126, 129
 gcov-tool: 126, 129
 gdbmtool: 142, 142
 gdbm_dump: 142, 142
 gdbm_load: 142, 142
 gdiffmk: 173, 173
 gencat: 90, 94
 genl: 178, 178
 getcap: 121, 121
 getconf: 90, 95
 getent: 90, 95
 getfacl: 120, 120
 getfattr: 119, 119
 getkeycodes: 180, 181
 getopt: 203, 205
 getpcaps: 121, 121
 getsubids: 122, 124
 gettext: 136, 136
 gettext.sh: 136, 136
 gettextize: 136, 136
 glilypond: 173, 173
 gpasswd: 122, 124
 gperf: 143, 143
 gperl: 173, 173
 gpinyin: 173, 173
 gprof: 112, 113
 gprofng: 112, 113
 grap2graph: 173, 173
 grep: 139, 139
 grn: 173, 173
 grodvi: 173, 173
 groff: 173, 173
 groffer: 173, 173
 grog: 173, 173
 grolbp: 173, 174
 grolj4: 173, 174
 gropdf: 173, 174
 grops: 173, 174
 grotty: 173, 174
 groupadd: 122, 124
 groupdel: 122, 124
 groupmems: 122, 124
 groupmod: 122, 124
 groups: 165, 167
 grpck: 122, 124
 grpconv: 122, 124
 grpunconv: 122, 124
 grub-bios-setup: 175, 175
 grub-editenv: 175, 175
 grub-file: 175, 175
 grub-fstest: 175, 175
 grub-glue-efi: 175, 175
 grub-install: 175, 175
 grub-kbdcomp: 175, 176
 grub-macbless: 175, 176
 grub-menulst2cfg: 175, 176
 grub-mkconfig: 175, 176
 grub-mkimage: 175, 176
 grub-mklayout: 175, 176
 grub-mknodir: 175, 176
 grub-mkpasswd-pbkdf2: 175, 176
 grub-mkrelpath: 175, 176
 grub-mkrescue: 175, 176
 grub-mkstandalone: 175, 176
 grub-of pathname: 175, 176
 grub-probe: 175, 176
 grub-reboot: 175, 176
 grub-render-label: 175, 176
 grub-script-check: 175, 176
 grub-set-default: 175, 176
 grub-setup: 175, 176
 grub-syslinux2cfg: 175, 176
 gunzip: 177, 177
 gzexe: 177, 177
 gzip: 177, 177
 h2ph: 148, 149
 h2xs: 148, 149
 halt: 193, 195
 head: 165, 167
 hexdump: 203, 205
 hostid: 165, 167
 hostname: 145, 146
 hostnamectl: 193, 195
 hpftodit: 173, 174
 hwclock: 203, 205
 i386: 203, 205
 iconv: 90, 95
 iconvconfig: 90, 95
 id: 165, 167
 idle3: 160
 ifcfg: 178, 178
 ifconfig: 145, 146
 ifnames: 152, 152
 ifstat: 178, 178
 indxbib: 173, 174
 info: 186, 186
 infocmp: 131, 132
 infotocap: 131, 132
 init: 193, 195
 insmod: 156, 156
 install: 165, 167
 install-info: 186, 186
 instmodsh: 148, 149
 intltool-extract: 151, 151
 intltool-merge: 151, 151
 intltool-prepare: 151, 151
 intltool-update: 151, 151
 intltoolize: 151, 151
 ionice: 203, 205
 ip: 178, 178
 ipcmk: 203, 205
 ipcrm: 203, 205
 ipcs: 203, 205
 irqtop: 203, 205
 isosize: 203, 205
 join: 165, 167
 journalctl: 193, 195
 json_pp: 148, 149

kbdinfo: 180, 181
 kbdrate: 180, 181
 kbd_mode: 180, 181
 kernel-install: 193, 195
 kill: 203, 205
 killall: 135, 135
 kmod: 156, 156
 last: 203, 205
 lastb: 203, 205
 lastlog: 122, 124
 ld: 112, 113
 ld.bfd: 112, 113
 ld.gold: 112, 113
 ldattach: 203, 205
 ldconfig: 90, 95
 ldd: 90, 95
 lddlibc4: 90, 95
 less: 147, 147
 lessecho: 147, 147
 lesskey: 147, 147
 lex: 107, 107
 lexgrog: 199, 200
 lfskernel-5.19.2: 231, 235
 libasan: 126, 129
 libatomic: 126, 129
 libccl: 126, 129
 libnetcfg: 148, 149
 libtool: 141, 141
 libtoolize: 141, 141
 link: 165, 167
 linux32: 203, 205
 linux64: 203, 205
 lkbib: 173, 174
 ln: 165, 167
 lnstat: 178, 178
 loadkeys: 180, 181
 loadunimap: 180, 181
 locale: 90, 95
 localectl: 193, 195
 localedef: 90, 95
 locate: 172, 172
 logger: 203, 205
 login: 122, 124
 logectl: 193, 195
 logname: 165, 167
 logoutd: 122, 124
 logsave: 208, 209
 look: 203, 205
 lookbib: 173, 174
 losetup: 203, 205
 ls: 165, 167
 lsattr: 208, 209
 lsblk: 203, 205
 lscpu: 203, 205
 lsipc: 203, 205
 lsirq: 203, 205
 lslocks: 203, 205
 lslogins: 203, 205
 lsmem: 203, 205
 lsmod: 156, 156
 lsns: 203, 205

lto-dump: 126, 129
 lzcat: 100, 100
 lzcmp: 100, 100
 lzdiff: 100, 100
 lzegrep: 100, 100
 lzfgrep: 100, 100
 lzgrep: 100, 100
 lzless: 100, 100
 lzma: 100, 100
 lzmadec: 100, 100
 lzmainfo: 100, 100
 lzmore: 100, 100
 m4: 105, 105
 machinectl: 193, 195
 make: 183, 183
 makedb: 90, 95
 makeinfo: 186, 186
 man: 199, 200
 man-recode: 199, 200
 mandb: 199, 200
 manpath: 199, 200
 mapscrn: 180, 181
 mcookie: 203, 205
 md5sum: 165, 167
 mesg: 203, 205
 meson: 164, 164
 mkdir: 165, 167
 mke2fs: 208, 209
 mkfifo: 165, 167
 mkfs: 203, 205
 mkfs.bfs: 203, 205
 mkfs.cramfs: 203, 205
 mkfs.ext2: 208, 209
 mkfs.ext3: 208, 209
 mkfs.ext4: 208, 209
 mkfs.minix: 203, 205
 mklost+found: 208, 209
 mknod: 165, 167
 mkswap: 203, 205
 mktemp: 165, 167
 mk_cmds: 208, 209
 mmroff: 173, 174
 modinfo: 156, 156
 modprobe: 156, 156
 more: 203, 205
 mount: 203, 205
 mountpoint: 203, 206
 msgattrib: 136, 136
 msgcat: 136, 136
 msgcmp: 136, 136
 msgcomm: 136, 136
 msgconv: 136, 136
 msggen: 136, 136
 msgexec: 136, 136
 msgfilter: 136, 136
 msgfmt: 136, 136
 msggrep: 136, 137
 msginit: 136, 137
 msgmerge: 136, 137
 msgunfmt: 136, 137
 msguniq: 136, 137

mtrace: 90, 95
 mv: 165, 167
 namei: 203, 206
 ncursesw6-config: 131, 132
 neqn: 173, 174
 networkctl: 193, 195
 newgidmap: 122, 124
 newgrp: 122, 124
 newuidmap: 122, 124
 newusers: 122, 124
 nggettext: 136, 137
 nice: 165, 167
 ninja: 163, 163
 nl: 165, 167
 nm: 112, 113
 nohup: 165, 167
 nologin: 122, 124
 nproc: 165, 167
 nroff: 173, 174
 nscd: 90, 95
 nsenter: 203, 206
 nstat: 178, 179
 numfmt: 165, 167
 objcopy: 112, 113
 objdump: 112, 113
 od: 165, 167
 oomctl: 193, 195
 openssl: 154, 155
 openvt: 180, 181
 partx: 203, 206
 passwd: 122, 124
 paste: 165, 167
 patch: 184, 184
 pathchk: 165, 167
 pcpfiledump: 90, 95
 pdfmom: 173, 174
 pdfroff: 173, 174
 pdftexi2dvi: 186, 186
 peekfd: 135, 135
 perl: 148, 149
 perl5.36.0: 148, 149
 perlbug: 148, 149
 perldoc: 148, 149
 perlvp: 148, 149
 perlthanks: 148, 149
 pfbtops: 173, 174
 pgrep: 201, 201
 pic: 173, 174
 pic2graph: 173, 174
 piconv: 148, 149
 pidof: 201, 201
 ping: 145, 146
 ping6: 145, 146
 pinky: 165, 167
 pip3: 160
 pivot_root: 203, 206
 pkg-config: 130, 130
 pkill: 201, 201
 pl2pm: 148, 149
 pldd: 90, 95
 pmap: 201, 201
 pod2html: 148, 149
 pod2man: 148, 149
 pod2texi: 186, 187
 pod2text: 148, 149
 pod2usage: 148, 149
 podchecker: 148, 149
 podselect: 148, 149
 portablectl: 193, 195
 post-grohtml: 173, 174
 poweroff: 193, 195
 pr: 165, 167
 pre-grohtml: 173, 174
 preconv: 173, 174
 printenv: 165, 167
 printf: 165, 167
 prlimit: 203, 206
 prove: 148, 149
 prtstat: 135, 135
 ps: 201, 201
 psfaddtable: 180, 181
 psfgettable: 180, 181
 psfstriptable: 180, 181
 psfxtable: 180, 181
 pslog: 135, 135
 pstree: 135, 135
 pstree.x11: 135, 135
 ptar: 148, 149
 ptardiff: 148, 149
 ptargrep: 148, 149
 ptx: 165, 167
 pwait: 201, 201
 pwck: 122, 124
 pwconv: 122, 124
 pwd: 165, 167
 pwdx: 201, 201
 pwunconv: 122, 124
 pydoc3: 160
 python3: 160
 ranlib: 112, 113
 readelf: 112, 113
 readlink: 165, 168
 readprofile: 203, 206
 realpath: 165, 168
 reboot: 193, 195
 recode-sr-latin: 136, 137
 refer: 173, 174
 rename: 203, 206
 renice: 203, 206
 reset: 131, 132
 resize2fs: 208, 209
 resizepart: 203, 206
 resolvconf: 193, 195
 resolvectl: 193, 195
 rev: 203, 206
 rkfill: 203, 206
 rm: 165, 168
 rmdir: 165, 168
 rmmod: 156, 156
 roff2dvi: 173, 174
 roff2html: 173, 174
 roff2pdf: 173, 174

roff2ps: 173, 174
 roff2text: 173, 174
 roff2x: 173, 174
 routef: 178, 179
 routel: 178, 179
 rtacct: 178, 179
 rtcwake: 203, 206
 rtmon: 178, 179
 rtpr: 178, 179
 rtstat: 178, 179
 runcon: 165, 168
 runlevel: 193, 195
 runtest: 111, 111
 rview: 188, 190
 rvim: 188, 190
 script: 203, 206
 scriptlive: 203, 206
 scriptreplay: 203, 206
 sdiff: 170, 170
 sed: 134, 134
 seq: 165, 168
 setarch: 203, 206
 setcap: 121, 121
 setfacl: 120, 120
 setfattr: 119, 119
 setfont: 180, 181
 setkeycodes: 180, 181
 setleds: 180, 181
 setmetamode: 180, 181
 setsid: 203, 206
 setterm: 203, 206
 setvtrgb: 180, 181
 sdfdisk: 203, 206
 sg: 122, 124
 sh: 140, 140
 shalsum: 165, 168
 sha224sum: 165, 168
 sha256sum: 165, 168
 sha384sum: 165, 168
 sha512sum: 165, 168
 shasum: 148, 149
 showconsolefont: 180, 181
 showkey: 180, 181
 shred: 165, 168
 shuf: 165, 168
 shutdown: 193, 195
 size: 112, 113
 slabtop: 201, 201
 sleep: 165, 168
 sln: 90, 95
 soelim: 173, 174
 sort: 165, 168
 sotruss: 90, 95
 splain: 148, 149
 split: 165, 168
 sprof: 90, 95
 ss: 178, 179
 stat: 165, 168
 stdbuf: 165, 168
 strings: 112, 113
 strip: 112, 114
 stty: 165, 168
 su: 122, 124
 sulogin: 203, 206
 sum: 165, 168
 swaplabel: 203, 206
 swapoff: 203, 206
 swapon: 203, 206
 switch_root: 203, 206
 sync: 165, 168
 systemctl: 201, 201
 systemctl: 193, 195
 systemd-analyze: 193, 195
 systemd-ask-password: 193, 195
 systemd-cat: 193, 195
 systemd-cgls: 193, 195
 systemd-cgtop: 193, 195
 systemd-creds: 193, 195
 systemd-delta: 193, 195
 systemd-detect-virt: 193, 195
 systemd-dissect: 193, 195
 systemd-escape: 193, 195
 systemd-hwdb: 193, 195
 systemd-id128: 193, 195
 systemd-inhibit: 193, 196
 systemd-machine-id-setup: 193, 196
 systemd-mount: 193, 196
 systemd-notify: 193, 196
 systemd-nspawn: 193, 196
 systemd-path: 193, 196
 systemd-repart: 193, 196
 systemd-resolve: 193, 196
 systemd-run: 193, 196
 systemd-socket-activate: 193, 196
 systemd-sysext: 193, 196
 systemd-tmpfiles: 193, 196
 systemd-tty-ask-password-agent: 193, 196
 systemd-umount: 193, 196
 tabs: 131, 132
 tac: 165, 168
 tail: 165, 168
 talk: 145, 146
 tar: 185, 185
 taskset: 203, 206
 tbl: 173, 174
 tc: 178, 179
 tclsh: 108, 109
 tclsh8.6: 108, 109
 tee: 165, 168
 telinit: 193, 196
 telnet: 145, 146
 test: 165, 168
 texi2dvi: 186, 187
 texi2pdf: 186, 187
 texi2any: 186, 187
 texindex: 186, 187
 tfmtodit: 173, 174
 tftp: 145, 146
 tic: 131, 132
 timedatectl: 193, 196
 timeout: 165, 168
 tload: 201, 201

toe: 131, 133
 top: 201, 201
 touch: 165, 168
 tput: 131, 133
 tr: 165, 168
 traceroute: 145, 146
 troff: 173, 174
 true: 165, 168
 truncate: 165, 168
 tset: 131, 133
 tsort: 165, 168
 tty: 165, 168
 tune2fs: 208, 209
 tzselect: 90, 95
 uclampset: 203, 206
 udevadm: 193, 196
 ul: 203, 206
 umount: 203, 206
 uname: 165, 168
 uname26: 203, 206
 uncompress: 177, 177
 unexpand: 165, 168
 unicode_start: 180, 181
 unicode_stop: 180, 181
 uniq: 165, 168
 unlink: 165, 168
 unlzma: 100, 100
 unshare: 203, 206
 unxz: 100, 100
 updatedb: 172, 172
 uptime: 201, 201
 useradd: 122, 124
 userdel: 122, 124
 usermod: 122, 124
 users: 165, 168
 utmpdump: 203, 206
 uuidd: 203, 206
 uuidgen: 203, 206
 uuidparse: 203, 206
 vdir: 165, 168
 vi: 188, 190
 view: 188, 190
 vigr: 122, 124
 vim: 188, 190
 vimdiff: 188, 190
 vimtutor: 188, 190
 vipw: 122, 125
 vmstat: 201, 202
 w: 201, 202
 wall: 203, 206
 watch: 201, 202
 wc: 165, 168
 wdctl: 203, 206
 whatis: 199, 200
 wheel: 162
 whereis: 203, 206
 who: 165, 168
 whoami: 165, 168
 wipefs: 203, 206
 x86_64: 203, 206
 xargs: 172, 172

xgettext: 136, 137
 xmlwf: 144, 144
 xsubpp: 148, 149
 xtrace: 90, 95
 xxd: 188, 190
 xz: 100, 100
 xzcat: 100, 100
 xzcmp: 100, 100
 xzdec: 100, 100
 xzdiff: 100, 101
 xzegrep: 100, 101
 xzfgrep: 100, 101
 xzgrep: 100, 101
 xzless: 100, 101
 xzmore: 100, 101
 yacc: 138, 138
 yes: 165, 168
 zcat: 177, 177
 zcmp: 177, 177
 zdiff: 177, 177
 zdump: 90, 95
 zegrep: 177, 177
 zfgrep: 177, 177
 zforce: 177, 177
 zgrep: 177, 177
 zic: 90, 95
 zipdetails: 148, 149
 zless: 177, 177
 zmore: 177, 177
 znew: 177, 177
 zramctl: 203, 206
 zstd: 102, 102
 zstdgrep: 102, 102
 zstdless: 102, 102

ライブラリ

Expat: 150, 150
 ld-2.36.so: 90, 95
 libacl: 120, 120
 libanl: 90, 95
 libasprintf: 136, 137
 libattr: 119, 119
 libbfd: 112, 114
 libblkid: 203, 207
 libBrokenLocale: 90, 95
 libbz2: 98, 99
 libc: 90, 95
 libcap: 121, 121
 libcheck: 169, 169
 libcom_err: 208, 209
 libcrypt: 90, 95
 libcrypto.so: 154, 155
 libctf: 112, 114
 libctf-nobfd: 112, 114
 libcursesw: 131, 133
 lib_malloc_debug: 90, 95
 libdbus-1: 197, 198
 libdl: 90, 95
 libe2p: 208, 210
 libelf: 158, 158

libexpat: 144, 144
 libexpect-5.45.4: 110, 110
 libext2fs: 208, 210
 libfdisk: 203, 207
 libffi: 159
 libfl: 107, 107
 libfmw: 131, 133
 libg: 90, 95
 libgcc: 126, 129
 libgcov: 126, 129
 libgdbm: 142, 142
 libgdbm_compat: 142, 142
 libgettextlib: 136, 137
 libgettextpo: 136, 137
 libgettextsrc: 136, 137
 libgmp: 115, 116
 libgmpxx: 115, 116
 libgomp: 126, 129
 libhistory: 104, 104
 libitm: 126, 129
 libkmod: 156
 liblsan: 126, 129
 libltdl: 141, 141
 liblttng- plugin: 126, 129
 liblzma: 100, 101
 libm: 90, 95
 libmagic: 103, 103
 libman: 199, 200
 libmandb: 199, 200
 libmcheck: 90, 95
 libmemusage: 90, 95
 libmenuw: 131, 133
 libmount: 203, 207
 libmpc: 118, 118
 libmpfr: 117, 117
 libmvec: 90, 95
 libncursesw: 131, 133
 libnsl: 90, 95
 libnss_*: 90, 95
 libopcodes: 112, 114
 libpanelw: 131, 133
 libpcprofile: 90, 95
 libpipeline: 182
 libproc-2: 201, 202
 libpsx: 121, 121
 libpthread: 90, 95
 libquadmath: 126, 129
 libreadline: 104, 104
 libresolv: 90, 96
 librt: 90, 96
 libsmartcols: 203, 207
 libss: 208, 210
 libssl.so: 154, 155
 libssp: 126, 129
 libstdbuf: 165, 168
 libstdc++: 126, 129
 libstdc++fs: 126, 129
 libsubid: 122, 125
 libsupc++: 126, 129
 libsystemd: 193, 196
 libtcl8.6.so: 108, 109

libtclstub8.6.a: 108, 109
 libtextstyle: 136, 137
 libthread_db: 90, 96
 libtsan: 126, 129
 libubsan: 126, 129
 libudev: 193, 196
 libutil: 90, 96
 libuuid: 203, 207
 liby: 138, 138
 libz: 97, 97
 libzstd: 102, 102
 preloadable_libintl: 136, 137

スクリプト

clock
 設定: 221
 console
 設定: 222
 hostname
 設定: 216
 localnet
 /etc/hosts: 217
 network
 /etc/hosts: 217
 設定: 214
 network
 /etc/hosts: 217
 設定: 214
 dwp: 112, 113

その他

/boot/config-5.19.2: 231, 235
 /boot/System.map-5.19.2: 231, 235
 /dev/*: 69
 /etc/fstab: 229
 /etc/group: 71
 /etc/hosts: 217
 /etc/inputrc: 224
 /etc/ld.so.conf: 94
 /etc/lfs-release: 239
 /etc/localtime: 93
 /etc/lsb-release: 239
 /etc/modprobe.d/usb.conf: 234
 /etc/nsswitch.conf: 93
 /etc/os-release: 239
 /etc/passwd: 71
 /etc/protocols: 89
 /etc/resolv.conf: 216
 /etc/services: 89
 /etc/vimrc: 189
 /run/utmp: 71
 /usr/include/asm-generic/*.h: 44, 44
 /usr/include/asm/*.h: 44, 44
 /usr/include/drm/*.h: 44, 44
 /usr/include/linux/*.h: 44, 44
 /usr/include/misc/*.h: 44, 44
 /usr/include/mtd/*.h: 44, 44
 /usr/include/rdma/*.h: 44, 44
 /usr/include/scsi/*.h: 44, 44

/usr/include/sound/*.h: 44, 44
/usr/include/video/*.h: 44, 44
/usr/include/xen/*.h: 44, 44
/var/log/btmp: 71
/var/log/lastlog: 71
/var/log/wtmp: 71
/etc/locale.conf: 223
/etc/shells: 225
man ページ: 88, 88
Systemd のカスタマイズ: 226